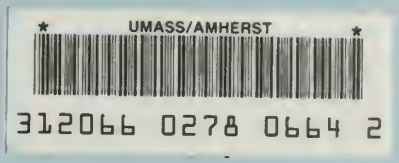
MASS. MA 32.2:M38/17/995-2



Massachusetts Clippings

RECEIVED
DOCUMENTS

Japan

October - December 1995

Massachusetts Office of Travel and Tourism

International Marketing

Mary Jane McKenna, Executive Director
William H. MacDougall, Director of International Marketing

100 Cambridge Street, 13th Floor
Boston, MA 02202
(617) 727-3201

OFFICE OF TRAVEL & TOURISM
The Commonwealth of Massachusetts

JAPAN

1. Asahi Shimbun — Circulation: 8,200,000

7 November 1995	1 page	17 December 1995	1 page
		18	1/2 page

2. Attention — Circulation: 200,000

No. 97	4 pages
No. 98	1 page

3. Be-Pal — Circulation: 550,000

December 1995	3 pages

4. Dancyu — Circulation: 250,000

December 1995	5 pages

5. Field & Stream — Circulation: 220,000

December 1995	12 pages

6. Field Gear — Circulation: 160,000

December 1995	8 pages

7. Fugi Evening News — Circulation: 500,000

6 October 1995	1 page	1 December 1995	4 pages
10 November 1995	1/2 page		
17	1/2 page		

8. Goods Press — Circulation: 330,000

December 1995	6 pages

100 Cambridge Street, 13th Floor, Boston, MA 02202 617-727-3201 FAX 617-727-6525

9. GQ — Circulation: 90,000

December 1995	4 pages

10. Hotel — Circulation: 160,000

December 1995	1 page

11. Kateigaho — Circulation: 400,000

October 1995	10 pages

12. Lightning — Circulation: 300,000

December 1995	26 pages

13. Mainichi Shimbun — Circulation: 4,180,000

9 October 1995	1/2 page	27 December 1995	1/2 page
23	1/4 page		
27	1/4 page		

14. Newsweek — Circulation: 1,200,000

11 November 1995	4 pages

15. Nihon Keizai Shimbun — Circulation: 2,970,000

13 December 1995	1/8 page	23 December	1/4 page
19	1/8 page	26	1/4 page
22	1/4 page		

16. Nikkei Sangyo Shimbun — Circulation: 268,800

27 October 1995	1/4 page	13 December 1995	1/2 page

17. Oggi — Circulation: 350,000

October 1995	6 pages

100 Cambridge Street 13th Floor, Boston, MA 02202 617 727-3201 FAX 617 727-6525

18. Penthouse — Circulation: 400,000
December 1995 5 pages

19. Seven Seas — Circulation: 700,000
December 1995 8 pages

20. Spa — Circulation: 400,000
11 October 1995 3 pages

21. Tepee — Circulation: 200,000
10 October 1995 6 pages

22. Travel Management — Circulation: 12,000
9 October 1995 1/2 page

23. Travel Journal — Circulation: 10,000
30 October 1995 6 pages
27 November 1995 4 1/2 pages

24. Vacation — Circulation: 700,000
October 1995 1 1/2 pages
December 1995 4 pages
19 1/4 page
21 1/2 page

25. Winds' Eye — Circulation: 320,000
December 1995 1 page

26. Yomiuri Shimbun — Circulation: 9,870,000
30 November 1995 1/8 page
18 December 1/4 page

Digitized by the Internet Archive
in 2014

https://archive.org/details/massachusettscli00mass_0

CLIPPING VOUCHER

Medium: Oggi Date: Ocotober, 1995

Subject: Resort island of Bostonian - Martha's Vineyard and Nantucket Ref. Press Release No.:

(p.137)
Martha's Vineyard and Nantucket are summer resort islands of the executives. Jacquliene Onasis Kennedy had a summer house in Martha's Vineyard. Presidnet Clinton spent his vacation there. Princess Diana visited Nantucket.

Martha's Vineyard
(pp.138-139)
There are no signals and fast food restaurants on Martha's Vineyard. It is an ultimate resort island only with beautiful beaches.
* Sweet fudge of Murdick's Fudge is delicious.
* You can see many signs of whales as Martha's Vineyard used to be a whaling base. Tourists can enjoy whale watch.
* There are many bike rental shops on the island.
* Menemsha is an only fishing village in Martha's Vineyard. There are many fishing tools in 200-year old small huts.
* There are small houses called "Gingerbread House".

Nantucket
(p.140)
Nantucket baskets were used for carrying foods by farmers and housewives before. They are also called Lightman ship baskets as seamen made them during a long voyage. Nantucket baskets were derived from native Americans baskets around 1820. Nantucket baskets can be used for a lifetime by having repaired. Nantucukt basket is a status for peopele of Nantucket. Helen, who lives in Nantucket, has one woven by her husband.
(p.141)
Nantucket appeared in "Moby Dick" of Melbil. It was a whaling base from 18th to the end of 19th century. There are more than 800 mansions built by millionaires who made a fortune by dealing with whale oil, which gives an elegant atmosphere.
* Mr. Micheal Kane is a carftsman of Nantucket baskets. He does all works to make a basket from weaving to drawing on the plate on the top of the basket.
* Houses called "Grey Ladies" are nostalgic.
* There are plates of pineapples or eagles on the entrace of captains' houses. Those plates were hanged to let their freinds know it is OK to visit captains houses.
* There are ships from the Carib and Mexico at Nantucket harbor.
* Tourists first see a white light house when they arrive Nantucket by ferry.

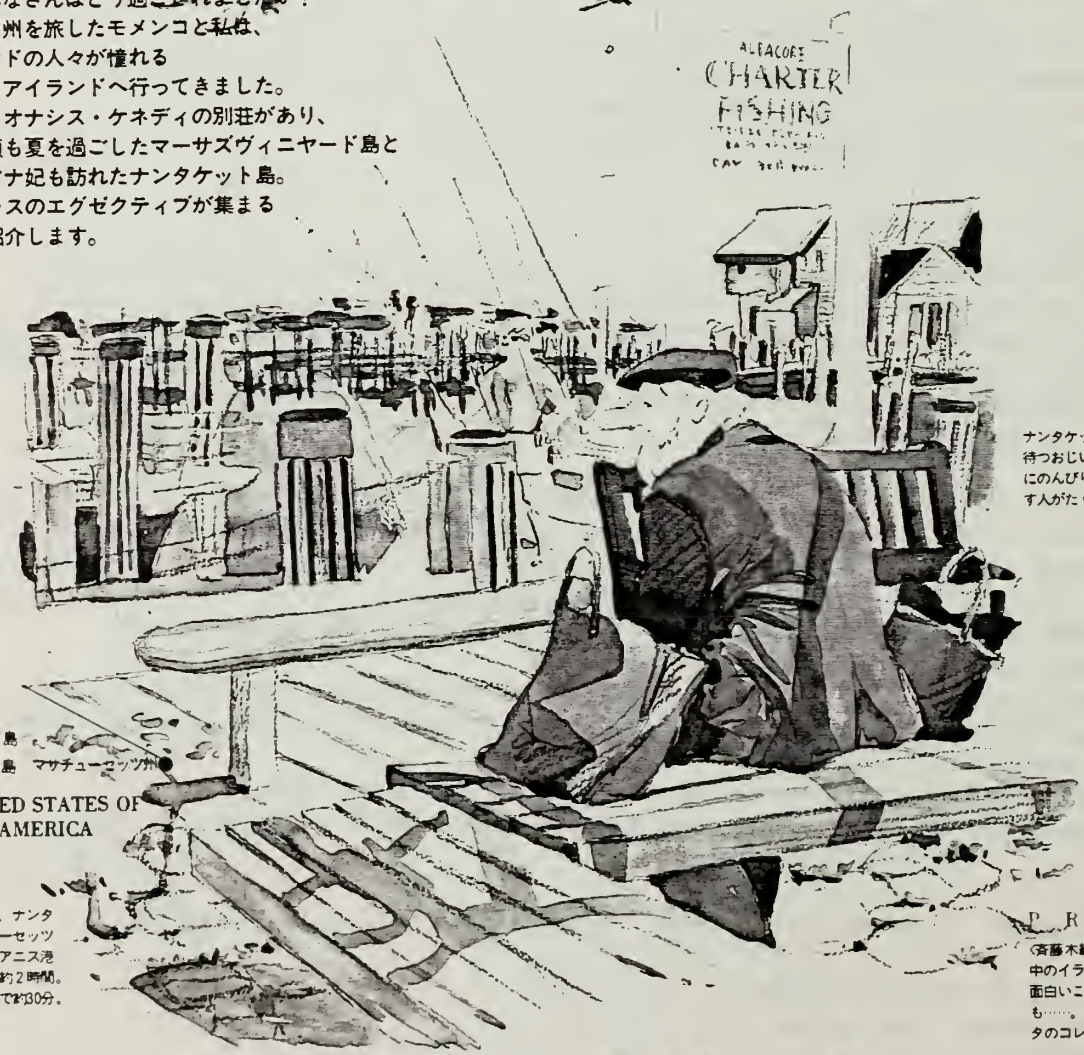
(p.142)
New England is famous for seafoods. Clam chowder is a typical dish there.

* How to eat boiled lobster.
* How to cook clam chowder.

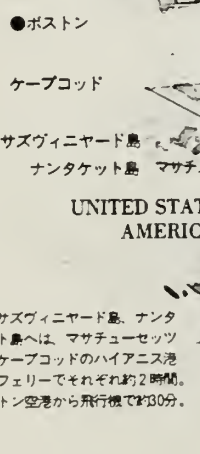
ニューイングランドに浮かぶ島は、

ボストニアンの憧れの避暑地

今年の夏休み、みなさんはどう過ごされましたか？
マサチューセッツ州を旅したモメンコと私は、
ニューイングランドの人々が憧れる
ふたつのリゾートアイランドへ行ってきました。
故ジャクリーン・オナシス・ケネディの別荘があり、
クリントン大統領も夏を過ごしたマーサズヴィニヤード島と
イギリスのダイアナ妃も訪れたナンタケット島。
世界のトップクラスのエグゼクティブが集まる
避暑地の素顔を紹介します。



ナンタケット島の港でフェリーを待つおじいさん。島には彼のようにのんびり、ひとりで週末を過ごす人がたくさんいました。

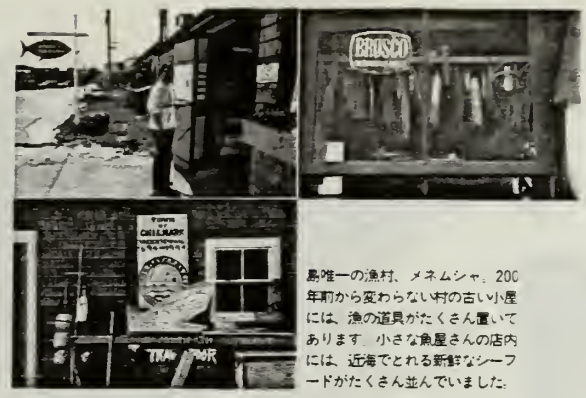


マーサズヴィニヤード島、ナンタケット島へは、マサチューセッツ州のケープコッドのハイアニス港からフェリーでそれぞれ約2時間。ボストン空港から飛行機で約30分。

PROFILE

〈斉藤木綿子〉雑誌、広告などで活躍中のイラストレーター。好奇心旺盛で、面白いことがあったら、地の果てまでも……。世界各国のオモチャ、ガラクタのコレクターとしても有名（!?）。

イラスト・写真／斉藤木綿子　レイアウト／豊田セツデザイン事務所　構成・写真／女賀亜弥子（HATSU）
取材協力／ノースウエスト航空、マサチューセッツ州政府観光局



島唯一の漁村、メネムシャ。200年前から変わらない村の古い小屋には、漁の道具がたくさん置いてあります。小さな魚屋さんの店内には、近海でとれる新鮮なシーフードがたくさん並んでいました。

島でいちばん古い街、エドガータウンのスイートショップの看板。甘〜いファッジが爆発！

昔、捕鯨基地として栄えたマーサズヴィニヤード島では、あちこちにクジラのマークが使われていました。島から出ているホエールウォッチングのクルーザーで海に出れば本物のクジラと出会えます。

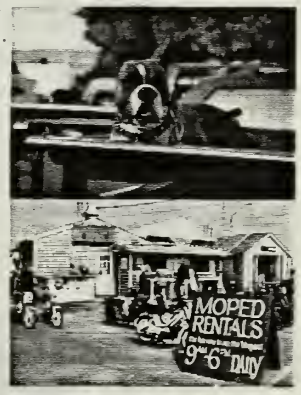
ジャッキーも愛したスノッブなリゾートアイランドで優雅な夏休みを過ごしたい

だれでも夏休みが近づくと、どこに行こうかと考えて、気はそぞろになるもの。私たちがボストンで出会った、ハーバード大学の超エリート学生たちも"毎年、夏休みは、マーサズヴィニヤード島に行くんだ"とか、"ナンタケット島にサマーハウスがあるの"と、マサチューセッツ州の東南の海に浮かぶリゾートアイランドへ行く計画を得意げに自慢し合っていました。

聞けば、このふたつの島は、ボストニアンをはじめ、アメリカ人の憧れの"究極の"避暑地だそう。そう聞いて、モメンコと私の心が動かないわけがありません。エリートたちの休暇を少しでも体験しようと、さっそく、フェリーに乗り込みました。

マーサズヴィニヤード島のフェリー港に下り立ち、私たちはモペットをレンタルして、島を巡ることにしました。故ジャクリーン・オナシス・ケネディの別荘があり、クリントン大統領が去年の夏休みを過ごした島というので、どんなにゴージャスなリゾート地かと期待していたのですが、のんびり（50ccのモペットでは、そんなにスピードが出ないのです……）海岸沿いの道を走って、気がついたのは、ここには信号機もファーストフード店も大きなホテルもない！ということ。なるほど、

写真上／リゾートには、愛犬のお供を連れて。ご主人の帰りを待つ、フォトジェニックなボクサー。
写真下／あちこちに、モペットレンタルの看板が。自転車やクラシックカーのレンタルもあります。



トップシーズンに入る前のビーチは人気もまばら。のんびり読書をしたり、日光浴を楽しんだり、優雅な午後を過ごすには最高です。

魔法使いのようなおばあさんは、呼さえあれば、ボストンからひとりで車に乗ってやってくるそう。

都会で超多忙な日々を過ごすエリートたちにとっては、この美しい海と砂浜以外になんにもない島こそ、究極のリゾートなのです。

古い漁港でみつけた小さな魚屋さんで私たちはロブスターサラダとフランスパンを調達。水遊びを楽しむ家族連れや読書しながら日光浴をしている人たちを横目で見ながら、ビーチでサンドイッチをつくり、ピクニックランチを満喫しました。

お腹もいっぱいになって、潮風を頬に受けながら、モペットに乗っていくと、うわあ！　お菓子の家のようなパステルカラーの家々を発見しました。島の人々はここを『ジンジャーブレッド・コテージ』と呼んでいるそう。

クリームイエロー、ピンク、水色などの派手な色で塗られたコテージは、なんと100軒以上もあり、仕事をリタイアした老夫婦や島でペンションを営む家族などが住んでいるそうです。

「孫たちが遊びにくる前に、きれいにしておかなきゃ」と、ペンキを塗っていたおばさん。白とブルーの涼しげな配色が自慢なのです。

カラフルな装飾の『ジンジャーブレッド・コテージ』。かわいらしく感じるか、悪趣味と感じるか…。島の人の意見はさまざま。『ジンジャーブレッド』とは、安ピカ装飾の、という意味もあるんです。

ノースイーストの小さな島でつくられた誇り高き〝ナンタケット・バスケット〟

ナンタケットで生まれ育ったヘレンおばさんは、ご主人が結婚記念日に（1年もかけて）つくってくれたというカゴが自慢。どこへ行くのにもいつも一緒だそう。

マーサズヴィニヤード島からフェリーで2時間のところにある、ナンタケット島。ひとつの町しかない、この小さな島をモメンコと私がどうしても訪れたかったのには大きなわけがありました。それは、この島でつくられる〝ナンタケット・バスケット〟をどうしても手に取ってみたかったから。

籐やカシで細かく編まれた丸いカゴは、その昔、農夫がとれた作物を市場に持っていったり、狩人が狩猟用のデコイを運んだり、また、島の奥さんたちが買いものカゴとして卵やイチゴを運ぶのに使われていたそう。

また、捕鯨船の目印として、ひと晩中海に出ていなければならない灯台船の船乗りが、長い夜の暇つぶしのために編んでいたことから、〝灯台船バスケット〟とも呼ばれています。

「あなたたちがバスケットを見にきたお嬢さん方？」

私たちを船置き場まで迎えにきてくれていたヘレンおばさんの片手には、使い古されて、アメ色になったバスケットがありました。

「これは主人がつくってくれたものなの。ひとつを編み上げるのに素人だと1年くらいかかってしまうから、よほど根気がある人じゃないとつくれないのよ」

編むのに結構、力がいる作業なので、女の人よりも男の人が日曜大工感覚でつくることが多いとか。

触らせてもらうと、しっかり目が詰まっていて、思ったよりも重さがあります。このバスケットは、ナンタケット人たるステイタスとおばさんは言います。素朴だけれど、本当にナンタケットを愛する人しか持てない気高さがちょっとくやしい……。

円形や楕円形がナンタケット・バスケットの一般的な形。1820年ごろ、先住民だったネイティブ・アメリカンのバスケットが基本だそう。

丈夫なバスケットは、何度もリペアして、一生使うことが可能。私たちが訪れた工房でも多くのバスケットが修理を待っていました。

美しいビーチだけではない
歴史と文学情緒あふれる
島の魅力に引かれて

杉の葉木でつくられた家の壁の色から〝グレー・レディ〟の愛称をもつナンタケット。古い家は潮風で色褪せ、ノスタルジック。

メルヴィルの小説『白鯨』にも登場するここ、ナンタケット島は18世紀から19世紀の後半まで、捕鯨の中心地でした。当時、ヨーロッパのランプに使う鯨油の産業によって、莫大な富を得た船長や大富豪が建てた邸宅が800軒以上残っており、古い町並みなのにどこか優雅な雰囲気です。

「あっ、エイハブ船長！」

石畳のメインストリートを歩いていると、突然、モメンコが『白鯨』に登場する船長の名前を言いました。見ると、船長や海賊の格好をした子供たちのパレードが私たちのほうへやってきます。どうやら、ナンタケットの夏のお祭り〝ハーバー・フェスタ〟が始まったようです。

夏の始まりを告げるこのお祭りが終わると、島は世界中から有名人が自家用飛行機やクルーザーで乗りつけ、たくさんの観光客で町中があふれる、最も活気づく季節を迎えます。

夏のハーバー・フェスタのほか、春の水仙まつり、秋のクランベリー収穫祭などナンタケット人は美しい季節の到来を祝うお祭りを楽しみにしています。

島の中で最も古いホテルのひとつ。プライベートビーチがあるホテルはなかなか予約が取れません。

昔の船長の家の玄関にはワシやパイナップルのマークがあります。長い航海から帰ったら、まず、家族だけの時間を過ごしたいもの。パイナップルを玄関に飾ったら、友人たちの訪問をOKするという合図だったとか。

写真上左／ナンタケットのハーバーには遠くカリブやメキシコから来た船も見られます。
写真上右／落ち着いたメインストリート。石畳の石はイギリスから運ばれたものなんですって。
写真下／フェリーで港に入ると白い灯台が出迎えてくれます。

バスケット職人のマイケル・ケイン氏。編むことからふたの絵付けまで、丁寧につくられるカゴはまさに芸術品。

ハマグリ、ホタテ、ロブスター……
ニューイングランドの料理はシーフード三昧！

ニューイングランドを代表する料理といえば、新鮮なシーフード。オイスタークラッカーと一緒に食べるクラムチャウダーは、各家庭で具が違うので、この地方の典型的なおふくろ料理として知られています。

クラム（ハマグリ）だけでなく、白身の魚や豚肉を入れたり、ポテトを裏ごしして、ポタージュのようにしたりと、とってもバラエティ豊かです。

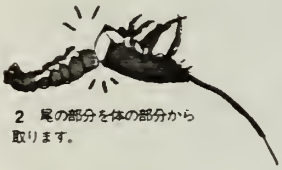
マーサズヴィニヤード風のつくり方を紹介するので、ぜひご賞味あれ！

ニューイングランドに来たからにはロブスターを食べずには帰れません。大きなハサミに詰まったやわらかい身がたまらなくおいしい

マーサズヴィニヤードの漁村、メネムシャで見つけたロブスタートラップ。漁のハイシーズンは冬。

ボイルド・ロブスターの上手な食べ方

1 ハサミを取り、クラッカーで壊して身を出します。



2 尾の部分を体の部分から取ります。

3 尾の部分からヒレを取ります。

4 フォークをヒレがあった所に入れ、身を押し出します。

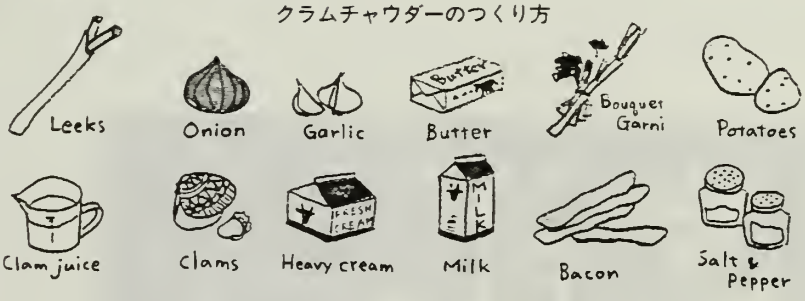
5 甲羅を体の部分から取り外します。

6 体の部分を半分に割って身を探します。

7 バターやレモンをつけて召し上がれ！

今回訪れたふたつの島にもたくさんシーフードレストランがありました。目印はロブスターをはじめ、シーフードの看板です！

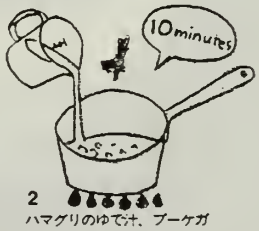
クラムチャウダーのつくり方



［材料］ 4～5人分

白ネギ（みじん切り）	$\frac{1}{2}$束
玉ネギ（みじん切り）	$\frac{1}{2}$個
ニンニク（すりおろす）	小さじ$\frac{1}{2}$
バター	大さじ1
ハマグリのゆで汁	2カップ
ブーケガルニ	1束
ジャガイモ（さいの目切り）	1カップ
ハマグリのむき身	1カップ
生クリーム	$\frac{1}{2}$カップ
牛乳	2カップ
ベーコン（カリカリに炒める）	3枚
塩・コショウ	少々

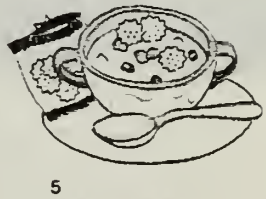
1
白ネギ、玉ネギ、ニンニクをバターで炒めます。



2
ハマグリのゆで汁、ブーケガルニを加えて、10分間弱火で煮ます。

3
ジャガイモを加えやわらかく、煮崩れてくるまで煮込みます。

4
ハマグリ、牛乳、生クリーム、ベーコンを加え、塩・コショウで味を調えます。



5
器によそえばできあがり。

ニューイングランドとナイアガラの滝
若草物語 7日間

〈東京発着・大人おひとり様 ¥198,000～¥328,000〉

話題の映画「若草物語」ゆかりの地を存分に巡るほか、ニューイングランド地方をあなたのセンスで思い思いにお過ごしいただける つのチョイス・プランをご用意。文学に触れるもよし、話題のホエールウォッチングを体験するもよし。ボストンの魅力を感じとってください。

主催 クラブ21
日新航空サービス株式会社
（運輸大臣登録一般旅行業第463号）
本社：〒105 東京都港区西新橋1-1-15
物産ビル別館3F（社）日本旅行業協会正会員

詳しいお問い合わせ、パンフレットのご請求は下記まで
日新航空サービス（株）日比谷支店
☎03・3595・1044

協力
ノースウエスト航空、マサチューセッツ州政府観光局

CLIPPING VOUCHER

Medium: Vacation Date: October, 1995

Subject: The Breakers (Newport Mansions) Ref. Press Release No.: 90054

The Breakers is one of Newport Mansions built during 18th to 20th century in Rhode Island. The Breakers, built by Cornelius Vanderbilt II in 1895, is the largest of Newport's Gilded Age Mansions. Modeled after a 16th century Italian Reneaissance palace, this "summer cottage" was recently designated a National Historic Landmark.

In celebration of The Breakers Centennial, there is a tour program which offers an unique perspective on the role of the Vanderbilts in America's Gilded Age, and admission to Newport Mansions and Newport Museum.

American history is still short, but it must be an interesting trip to know 19th-century American culture.

ロード・アイランドの宮殿

ブレーカーズ

アメリカ、ロード・アイランド州にあるブレーカーズは、十八世紀から二十世紀の初頭にかけて億万長者によって建てられたニューポート・マンションと呼ばれる大邸宅のひとつ。

この邸宅はコーネリア・ヴァンダービルト二世によって一八九五年に建てられた。大好況時代最大の建物であり、十六世紀のイタリア・ルネサンスの宮殿をモデルにしたサマー・コテージは、国の歴史的建造物にも指定されている。

今年は、このブレーカースの百周年にあたり、アメリカの大好況時代におけるヴァンダービルト家の役割を振り返るツアープログラムが十月一日まで行なわれている。ツアーの内容は、数々の芸術的建造物であるニューポート・マンションやニューポート美術館を訪ねるなど文化的な内容を中心としたツ

イタリア・ルネサンスの宮殿を彷彿させる、優雅な佇まいのブレーカース。

TSURU ENTERPRISE Co.,LTD.

CLIPPING VOUCHER

Medium: Vacation Date: October, 1995

Subject: Seven Weeks in Providence/Edward Suzuki Ref. Press Release No.:

Mr. Edward Suzuki, a graduate of Harvard, is an architect living in Japan. He was invited by Rhode Island School of Design (RISD) as a visiting scholor this summer. RISD is in Providence, an hour driving south from Boston. There are a couple of colleges, but no main industry. It is a good place to study. RISD is a prestigious art school where students from all over the world come to study. He taught 6&1/2 hours twice a week. He took his students to cafe during class. He played basketball with students of Brown University when he had no class.

He enjoyed staying at the Ritz Carlton in Boston. He spent his time meeting his friends, visiting Museum of Fine Arts, and having beer and whisky with freshoyster at oyster bar. He felt happy by doing such travial things. Walking in Harvard University was pleasant. Also, he drove down to Cape Cod and enjoy the atmosphere of resort in earcly season. He wished there were a sophisticated summer resort like Cape Cod in Japan.

On his arrival, his students came to Boston to see him off. They had a dinner at China Town. After that, they had a good time at discotique and karaoke bar.

プロビデンスの洗練されている町並。

プロビデンスでの七週間

文・鈴木エドワード

この夏、米国・ロードアイランド州にあるRHODE ISLAND SCHOOL OF DESIGN（RISD）から客員教授として招かれ七週間すごしました。毎日あわただしくすごしていた東京から、エアポケットに入ったようなプロビデンスの静かな生活はあたかも人生の中休みをプレゼントされたようでした。

最初に客員教授の依頼を受けたとき、正直言って迷いました。朝から夜まで忙しく仕事に追われているのに、実際一カ月近く東京を留守にすることができるだろうか、多少の心配を残して東京を発ってから七週間、大きな問題もなく仕事はコンピュータ、FAXと電話でこなし、今更ながらに文明の利器の恩恵を実感したものです。

二十二年前、私はボストンのハーバード大学・大学院に通っていました。学生時代をすごした懐かしいボストンから近かったこともここに来させた力だったかもしれません。

プロビデンスは小さな大学街として、アメリカでは有名なところです。ボストンから南に一時間ほど車で走ったところで、大学がいくつかある他は大きな産業があるわけでもなく、穏やかな場所なと町中探しても ありません。勉強するのに非常に適しているということは確かです。

RISD（リスディ）は芸術の名門大学です。規模は小さいものの世界中からここを目指して多くの学生がやってきています。最初に私が驚いたことは、アジア系学生の多さでした。アジア系アメリカ人というところではなく、日本はもちろん東南アジア、香港からの留学生です。アジアの経済力のすごさはこんなところにもあらわれています。

週二日、九時三〇分～十一時三〇分／一時～五時三〇時の六時間半のクラスを受け持ちました。クラスは十三人、それぞれが製図台をもち、作品を制作しながら授業を進めるという形式です。クラス全員ひきつれてカフェテラスで授業というのも楽しいことでした。ほとんどのところはウォーキングディスタンスで、授業がない日は、隣のブラウン大学（IVYリーグで有名）の学生とバスケットボールをしたり（東京では毎日曜日バスケットボールをしています）ブラウン大学の科学図書館で好きな物理の文献をあさったりと、実際二十年前の学生時代にもどったような生活です。おかげで日本にいるときからとりかかっていた物理の論文二つが完成できました。

東京からの友人とひさしぶりにボストンで、のんびりすごした数日間も楽しかった思い出です。リッツ・カールトンに宿泊し、休日はボストン美術館でゆったりした時をすごしたり、東京ではまだまだ充実したCD-ROMをさがして歩いたり……。オイスターバーでむきたてのオイスターをつまみにビールやウイスキーを早い時間から飲んでほろ酔い気分で散歩をしたり……と、何でもないことが休暇というだけでこんなに楽しく、豊かな気持ちになるものかと幸せでした。ケンブリッジのハーバード大学構内も散歩にはもってこいの気持ちよい空間です。レンタカーでケープコッドにトライブして、夏の前の静かな避暑地も味わいました。上品なサマーハウスが落ち着いた家並をつくり、日本にもこんな海辺の洗練された避暑地があればと、残念な気がします。

長かった七週間の授業も終わり、いよいよ帰国の日、クラス全員がホストンまで送ってきてくれました。エアポートタウンでの食事のあとはギィとエラナとで夜間はまで盛り上がり、ほとんど寝ずに飛行機に乗り込みました。

関西新空港に到着したその足で名古屋での講演先に直行。

人生の中休みは終了しました。

●すずき　エドワード
1947年、埼玉県生まれ。建築家。75年ハーバード大学院、アーバンデザイン建築学修士。76年、丹下健三都市建築設計事務所勤務。77年鈴木エドワード建築設計事務所設立。その後、米国、ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン客員教授も兼任。また、建築士会住宅賞（碑文谷ガーデンズ、通産省）グッドデザイン賞（JR東日本 赤沢駅）など数多く受賞　現在、建設省・点字図書館、東京高田馬場を建設中。

CLIPPING VOUCHER

Medium: Kateigaho Date: October, 1995

Subject: Visit country inns in New England in fall foliage season Ref. Press Release No.:

(p.315)
Fall foliage of Massachusetts is beautiful in Ocotber.
* Muffins and cranberry juice is a typeical breakfast in Massachusetts (The Orchaards)
* A view of Montesque Village looking over the Connecticut River

(p.316)
Fall foliage in Massachusetts begins from Berkshire in the beginning of Ocotber. Fall foliage season of Central Massachusetts is mid-October, and in the end of the month in Boston area.
Fall foliage along Mohawk trail is extraordinary beautiful.

The Orchards
(p.316)
Berkshire is famous for fall foliage. It has attracted many artists as summer resort. Williamstown, located in the north of Berkshire, is a campus town of Williams College. Thus, there are many cultural institutions such as museums and theatres. The Orchards is an excellent hotel in Williamstown. It was opened by Mr. Saleb, who had been in hotel business for long time, to realize ideal hotel.
* Bath amenities using herbs

(p.317)
* A romantic bed with soft feather quilt and pillows
* All the flowers in the hotel are arranged by Mrs. Saleb
* The Orchards was opened in 1985. There is a beautiful garden.

(p.318)
* Silver tea pot is an antique. Guests can enjoy home made cookies, cakes and tea.

(p.319)
Mr. Saleb says he wanted to open an inn where guests forget their busy life and relax. Williamstown is an appropriate place which has a beautiful natural environment and cultural atmosphere. The interior of the inn is British. Every room is decorated in different color. All the furniture are antiques selected by Mrs. Saleb. Guests can enjoy afternoon tea at 4 o'clock in the lobby. Home made cookies and cakes are served with plenty of fruits. It is a pleasant time having tea in front of a fire place after enjoying fall foliage.

(p.319)
Tanglewood
Tanglewood is famous for summer concert of BSO, jazz and pops. Seiji Ozawa Hall was completed in 1994. The interior of the hall is all made of woods.

TSURU ENTERPRISE Co.,LTD.

Sterling and Francine Clark Art Institute

Clark Art Institute belongs to Williams College. There are paintings of Renoir, Monet, Degas and so on. Silver collections are excellent.

Norman Rockwell Museum

Norman Rockwell spent his last years in Stockbridge. There are many of his paintings in the gallery and his studio in the site.

Deerfield Inn

(p.320)

Deerfield Village has a long history back to the 18th century. It was the border of the colony. Many people from Boston moved in here at that time. Historical buildings and atmosphere are preserved by conservation society of Deerfield. Deerfield Inn is an only inn in the village on the one-mile main street. The inn keeper, is proud of its restaurant. The foods are new American cuisine using fresh local vegetables, lamb, deer, fresh water fishes. Having dinner in the dining room of Deerfield Inn looking over fall foliage of 18th century village is exceptionally good.

* October is a season of Halloween.
* Original cranberry ketchup is popular.
* Every room is decorated with a different taste.

(p.321)

* Tender lamb barbecue and a grilled trout. Menus are changed every season. Wine lists are well-prepared.

(p.320)

Historic Deerfield

14 Buildings in the colonial age are preserved in Historic Deerfield. They are open to the public. Visitors can take a look at people's life in those days from a 18th-century poor house with only one room or a 19th-century mansion in Victorian style.

* Musuem shop has an nostalgic appearance.
* There is no electric cord in Deerfield.
* There is a church in the center of the village.

(p.322)

Colonial Inn

Concord was a battle field of the American Revolutionary War. It is also a beautiful town with abundant nature, loved by famous authors. It was built in 1716. At that time, it was a grocery shop dealing with arms and foods. After the society become stable, it was turned to be a residence. Thoreau spent his childhood there. "Colonial Inn" was opened in the late 19th century. The interior of the building is an Early American style.

There are 47 rooms in 3 buildings. The decoration is romantic and reminds of "Little Women". It is a walking distance to Old North Bridge and Old Manse. It takes 10 minutes to Walden Pond by car.

(p.322 Bottom)
Orchard House
Old North Bridge

(p.323)
Old Manse in foliage. It is seen from Old North Bridge. Nathaniel Howthorne lived there. It was built in 1770's.
(p.324)
Boston was a center in the colonial age. It was a field of the American Revolutionary War. First-time visitors should try Freedom Trail. Walking in Beacon Hill, which is a classical residential area is also good. October is the most beautiful season for Boston.

* Beacon Hill is one of the most famous places in Boston.
* Gold dorm of State House is impressive.
* The Charles Hotel provides modern facilities and homely services. There is a Jazz bar and restaurants.
* There is a statue of Paul Revea in front of Old North Church, the oldest church in Boston.
* Cambridge in the evening. There are reggatas on the Charles River.

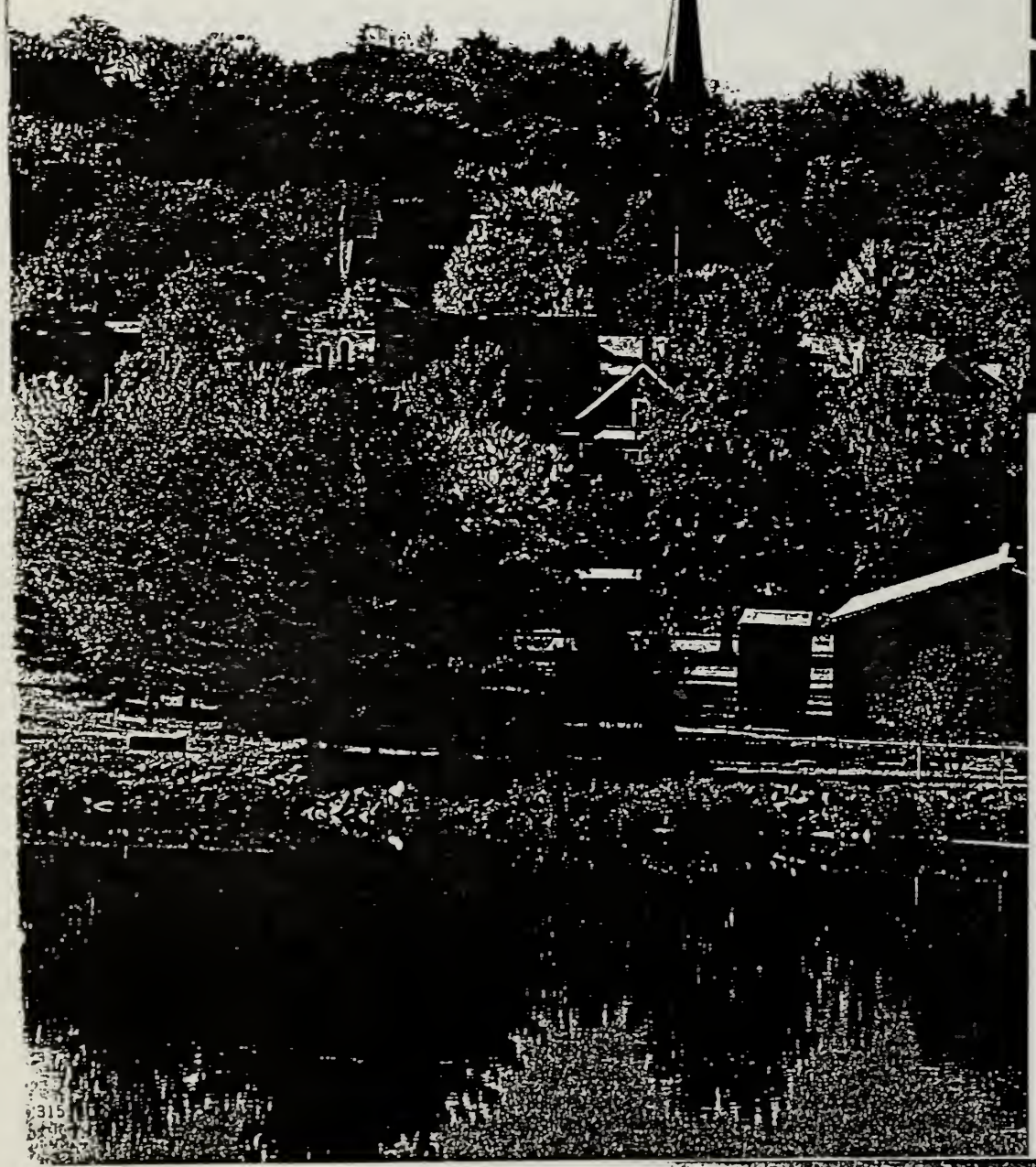
マサチューセッツ。

アメリカ東海岸・カントリーインを巡る旅

黄葉街道を行く

マサチューセッツの山が、街が、秋の色に染まる10月。メープルの黄葉、紅葉に彩られて、ひときわ鮮やかな季節です。歴史と伝統あるアメリカ東部の晩秋を、情緒たっぷりのカントリーインとともにご紹介します。

撮影＝本庄・成瀬友康　取材・文＝霧木朋子　協力＝マサチューセッツ州政府観光局　マサチューセッツ州港湾局



上・焼きたてのマフィンに新鮮なクランベリージュース、これぞマサチューセッツ風の朝ご飯（ウィリアムスタウン・ジ・オーチャードにて）。
下・ドアにも訪れた実りの秋
左・マサチューセッツの西を縦断するコネチカット川から、モンテスキュー村を望む。澄とした空気に色とりどりの黄葉が映える

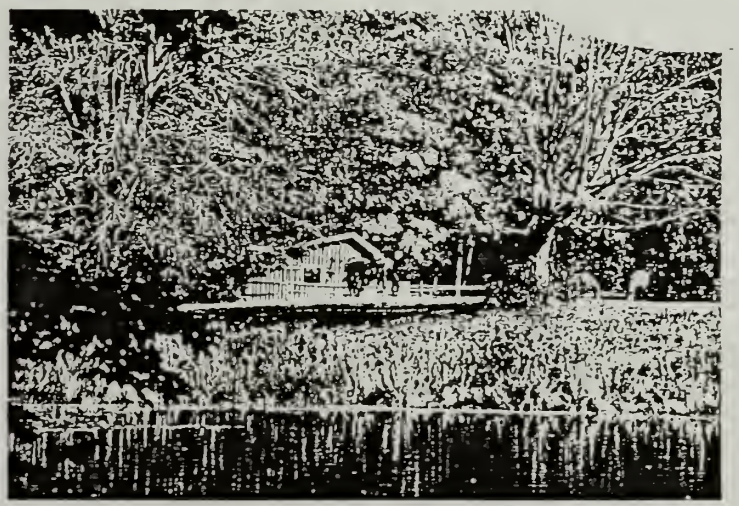
古き良き大学街で過ごす 優雅な休日

Williamstown

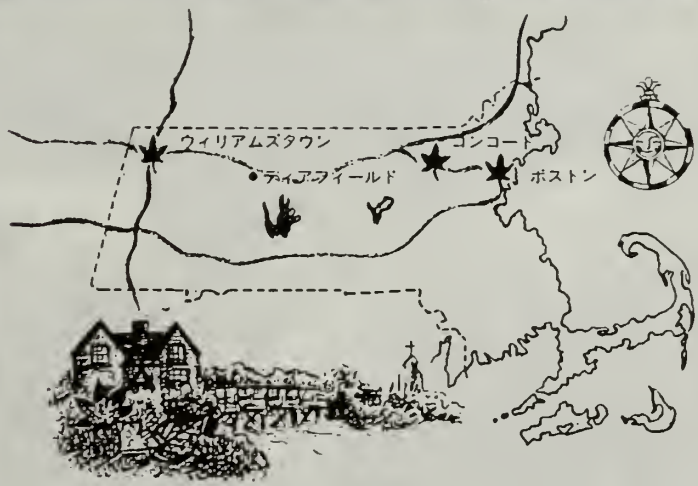
ジ・オーチャード（ウィリアムズタウン）

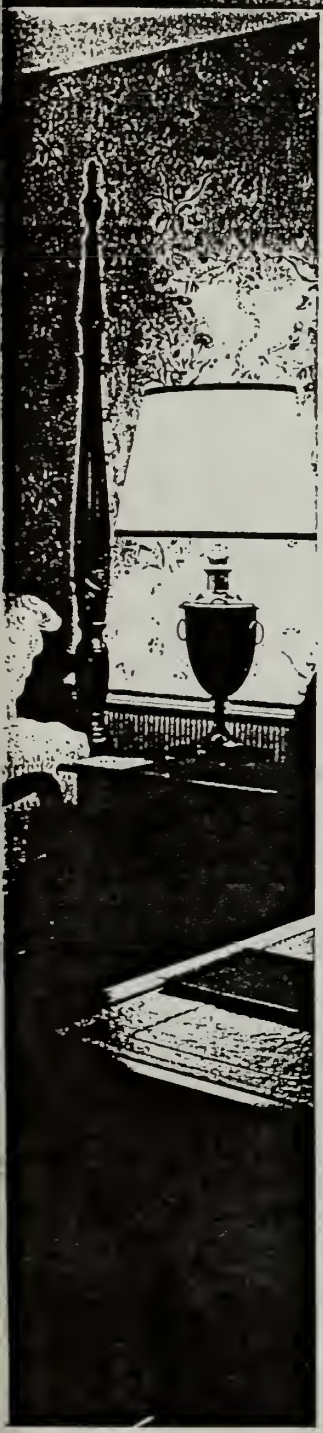
ボストンから西へ車で三時間弱。バークシャー高原地方は、とりわけ鮮やかな黄葉で名高い一帯です。海や山、さまざまな自然に恵まれたマサチューセッツ州の中でも、標高の高いこの地方は、昔から避暑地として、またアーチストの活躍する場所として人気を集めてきました。北部にあるウィリアムズタウンは、古くからの大学街。創立二〇〇年余を誇るウィリアムズ・カレッジを中心に、美術館や劇場などが点在し、小さいながらも、独自の文化を築き上げています。きりりと澄んだ秋の空気の中、黄葉でひときわ魅力の増すカレッジタウンを訪れるのなら、州内でも屈指のサービスが好評のイン「ジ・オーチャード」でくつろぎたいもの。長年、ホテル業に携わっていたオーナーのS・サレーさんが、「自分自身のテイストが素直に反映される、理想のホテル」を目指してオープンさせた、家庭的ながら優雅でゴージャスなインです。

オーナー・サレー夫妻の笑顔に、心安らぐ。



街中が秋色に染まる10月。山あいの静かな街、ウィリアムスタウンの一番美しい季節だ。





ハーフたっぷりのバスクッスも嬉しい。

マサチューセッツ州の黄葉前線は、10月初旬に西部のバークシャー高原地方から始まる。中部の見頃が中旬、ボストンや北部は10月後半が黄葉シーズンだ。ボストンからバークシャーまでは南を走るマサチューセッツ・ターンパイクで3時間、北のR2で4時間ほど。黄葉、紅葉の最大の見どころは、ウィリアムスタウン東からスタートするモーホーク・トレイル。雄大な秋景色には思わず息をのむ。地図＝前嶋恭子

● The Orchards 222 Adams Road Williamstown, Massachusetts 01267 ☎413(458)9611
宿泊料金＝$145～195（5月末～11月中旬） 室内のみ、部屋のタイプによって若干の変更あり

4柱付きのロマンチックなベットには、ふわふわの羽毛布団と枕。素敵な夢を見たあとは、小鳥の声で目が覚める。こんな優雅な休日が永遠に続けばいいのに。

果樹園の建物を改築し、1985年にオープン。美しい庭も楽しみの一つ。

館内の花はすべて、オーナー夫人の手によるアレンジメント。

私のティーポットは、二日酔コンティーク　焼き上げられたばかりのクッキーやケーキと、たっぷりのお紅茶をどうぞ。宿泊客なら誰でも楽しめるサービスだ。

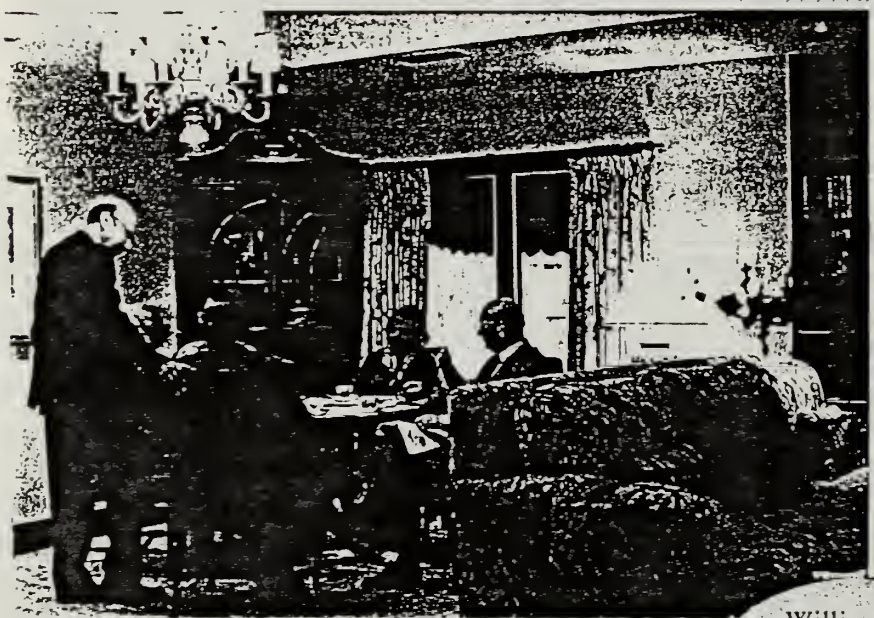
ホスピタリティあふれるInnで午後のお茶を

トンプソン・メモリアル・チャーチの壁も秋の装い。

「ロビーに一歩入ったときから、自分の家にいるような安らぎを覚える、そんなインにしたかったんです。そして都会でせわしない毎日を送っている人が、人生の全く別な部分を経験できる空間にも」

とオーナーのサレーさん。山に囲まれた美しい環境に加え、文化的な雰囲気を持つこの街は、理想のインを造り上げるには最適な場所だったとか。ゆったりとした館内は、温かみのある英国調。部屋はそれぞれ、バーガンディー、ターコイズブルーといったテーマカラーに基づいてコーディネートされています。支柱付きのベッドやソファなど、家具はすべて、オーナー夫人マギーさんセレクトによる英国のアンティーク。バスルームの小物に至るまで、こまやかな心配りが感じられます。そしておもてなしの極めつきは、毎日のアフタヌーン・ティー。午後四時、自家製のクッキーやケーキ、フルーツがたっぷり並んだテーブルが、ロビーに登場します。談笑を楽しんだあと、ばちばちとはぜる暖炉の前で、紅茶片手にくつろぐ——世界中を探しても、この幸福な時間はなかなか見つかるものではありません。

下・ベッドサイドの自家製チョコチップクッキーは、スイートなナイトキャップ。



昼下がりのアフタヌーン・ティーは、お客さまとの会話も弾ませる、サレー氏の大好きな時間。

Williamstown
THE ORCHARDS

ノーマン・ロックウェル美術館

晩年は、ストックブリッジで活動していたという、N.ロックウェルを記念して、1993年にリニューアルオープン。広大な敷地の中に、彼の再現スタジオやお馴染みの作品が並ぶギャラリーが点在している。

● The Norman Rockwell Museum
Route 183 Stockbridge, MA 01262
年中無休（但しスタジオは5月～10月のみ開館）ウィリアムズタウンより車で1時間

クラーク美術館

創立者のR.S.クラーク氏のコレクションを展示したこの美術館は、ウィリアムズ・カレッジの一部。好んで集めたというルノアール、モネ、ドガなど印象派の絵画が圧巻だ。銀器のコレクションも美しい。一日かけて、ゆっくりと鑑賞したい。

● Sterling and Francine Clark Art Institute
225 South Street Williamstown, MA 01267
月曜休館 10時～17時

タングルウッド

毎年、夏に開かれる音楽祭で名高いタングルウッド。ボストン交響楽団をはじめとして、ジャズやポップスの演奏も行われる。1994年には、館内がすべて木で造られたセイジ・オザワ・ホールも完成。さまざまなコンサートも企画されている。

●コンサートの詳細は、マサチューセッツ観光情報センター（324ページ参照）へ。
ウイリアムズタウンから車で約50分

一八世紀の面影を残す村で見つけた クラシカル・イン

ディアフィールド・イン（ディアフィールド）

Deerfield

ディアフィールド村の歴史は古く、アメリカ独立以前の一八世紀前半まで溯ります。当時、ここは植民地の境界線。コネチカット川とディアフィールド川に囲まれた肥沃な土地に、牧畜や農業が営まれ、ボストンからも多くの人々が入植しました。そんな伝統ある村の面影は、ディアフィールド歴史保存協会によって、今も残されています。歴史を感じさせる一マイル足らずの短いメインストリート、中央にはこの村唯一のイン「ディアフィールド・イン」が。一九世紀に建てられた部屋ももちろんですが、このインの最大の魅力はレストランにある、と自負しています」とご主人のK・サボさん。フレッシュな野菜、羊や鹿などのジビエ、ますをはじめとした川魚と、地元産の素材がたっぷりと使われたお料理は、すっきりとしたニューアメリカンキュイジーヌです。窓の外は、時の流れを忘れたような一八世紀の村。冷たい晩秋の風に舞う黄葉を眺めながら、趣ある静かなダイニングでいただくディナーも、また格別です。

自家製クランベリーケチャップなども人気。

ロビーのインテリアは、すべて違うとか。自分の部屋のドアを開ける、楽しみな一瞬。

[illegible] された家を改装し、ディアフィールド・インのこと。それは1884年、以来 Bed & Breakfast [illegible] ようなイン [illegible] 現在は、ディアフィールド歴史保存協会のゲスト [illegible] 古きよきアメリカを伝える生き証人として、小さな村に溶け込んでほしい。

field Inn The Street Deerfield MA 01342 ☎(413)774-5587

室＝$110～145 全室のみ

ヒストリック・ディアフィールド

ディアフィールドの村では、植民地時代に建てられた家など、歴史ある建物一四軒の内部をそれぞれ見学することができる。食事をする場所も眠る場所も同じ、すべて一間だった一八世紀初めの貧しい家から、ビクトリア朝の影響を受け、美しい内装が施される一九世紀の邸宅まで、伸びゆくアメリカの歴史、ニューイングランドの歴史が、人々の生活を通して感じられる。

ミュージアム・ショップも、こんな風情ある佇まい。

とろけそうにまろかい仔羊のバーベキューと香り高いますのクリル。季節に合わせてメニューも替わる　おすすめのワイングリストもたのしめる。

豊かな自然の中でアーリー・アメリカンの真髄に触れる

――コロニアル・イン

Concord

ボストンから北へ三〇キロ。今では郊外の静かな佳まいを見せるコンコードの街には、二つの表情があります。一つはアメリカ独立戦争の舞台として、そしてもう一つは「ニューイングランドの華」と称された、文学者に愛された豊かな自然の街として。中心部に建つ「コロニアル・イン」は、そんなコンコードの歴史をずっと見守ってきました。創立は一七一六年にまで溯ります。独立戦争の頃は、武器や食料を扱う店でしたが、世情が安定してからは、お屋敷に〝森の生活〟で名高い自然文学者ソローも、少年期をここで過ごしたそうです。インとして開業したのは、一九世紀末。以来一〇〇年余、歴史の地を訪れる人々に愛されてきました。どっしりとした木の家具、手作りのキルトが使われた館内は、今もアーリー・アメリカンの雰囲気でいっぱい。古きよきアメリカを実感できる、素敵な空間です。

エッグベネディクトにワッフル、ボリュームたっぷりの朝ご飯

インの歴史は町のそしてアメリカの歴史。

● The Colonial Inn 48 Monument Square Concord MA 01742 ☎508・369・9200 宿泊料金＝$95～150（4月～10月）、$75～125（11月～3月）。全室のみ

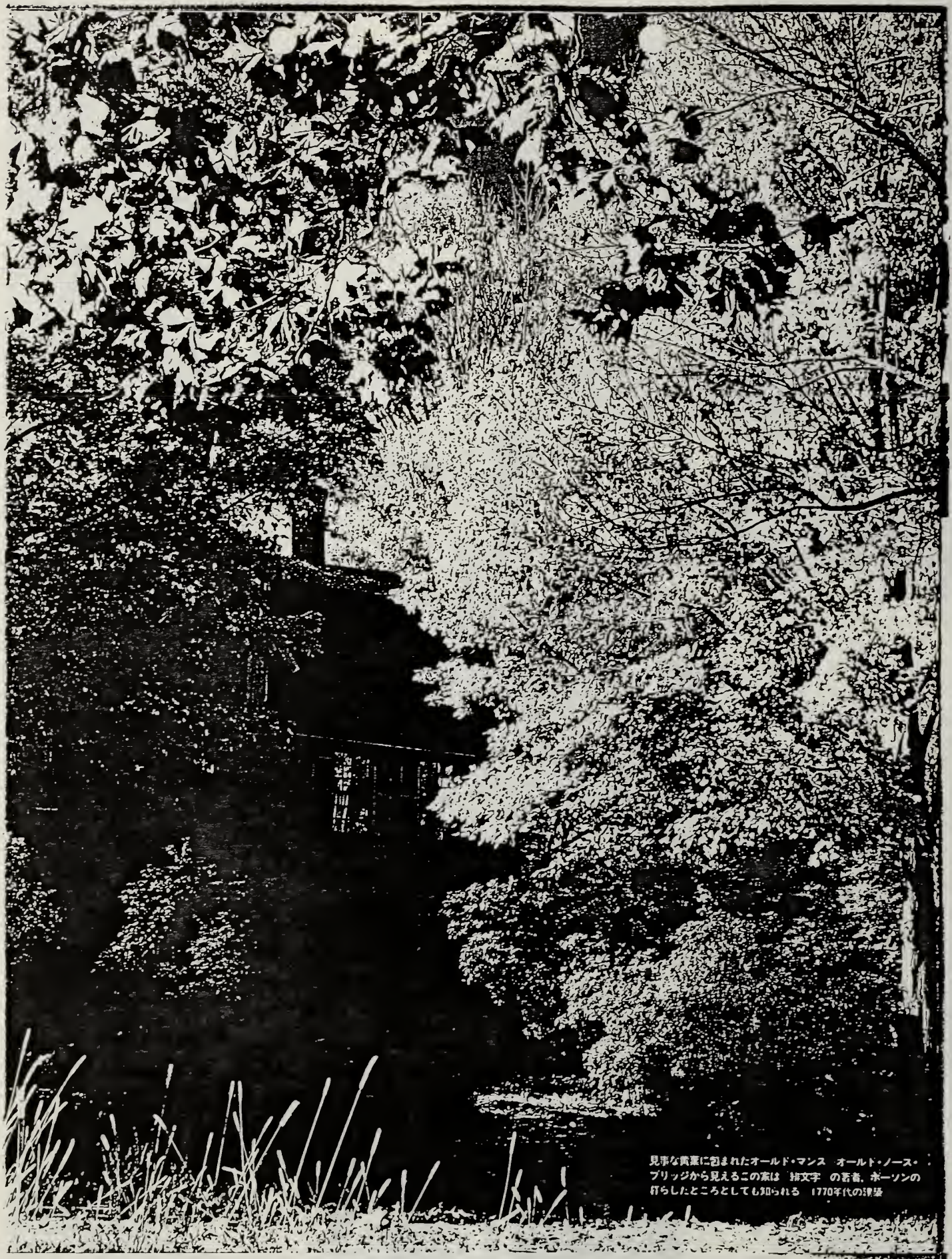
オーチャード・ハウス

「若草物語」の作者、L・M・オルコットの家はまた「若草物語」の舞台でもある。一階には、教育者、哲学者として活動した父の書斎や、食堂、居間。ここは、物語の中で姉妹が劇を上演したとされる場所でもある。二階にはオルコットの執筆した部屋をはじめ、個性豊かな姉妹の部屋が並ぶ。物語の「マーチ家」に遊びにきた、そんな気にさせられる。

● Orchard House 399 Lexington Road Concord MA 01742
一月一日～十五日休館

オールド・ノース・ブリッジ

一七七五年四月、「銃声が世界にこだました」（エマソン）。ここ、ノース・ブリッジでアメリカ愛国者が、イギリス軍に対して戦いを挑んだことから、アメリカ独立戦争は一気に広がっていく。いわばアメリカ建国の第一歩が記されたこの橋は、今もアメリカ全土から観光客が訪れる。近くにはミニットマン国立記念公園も。



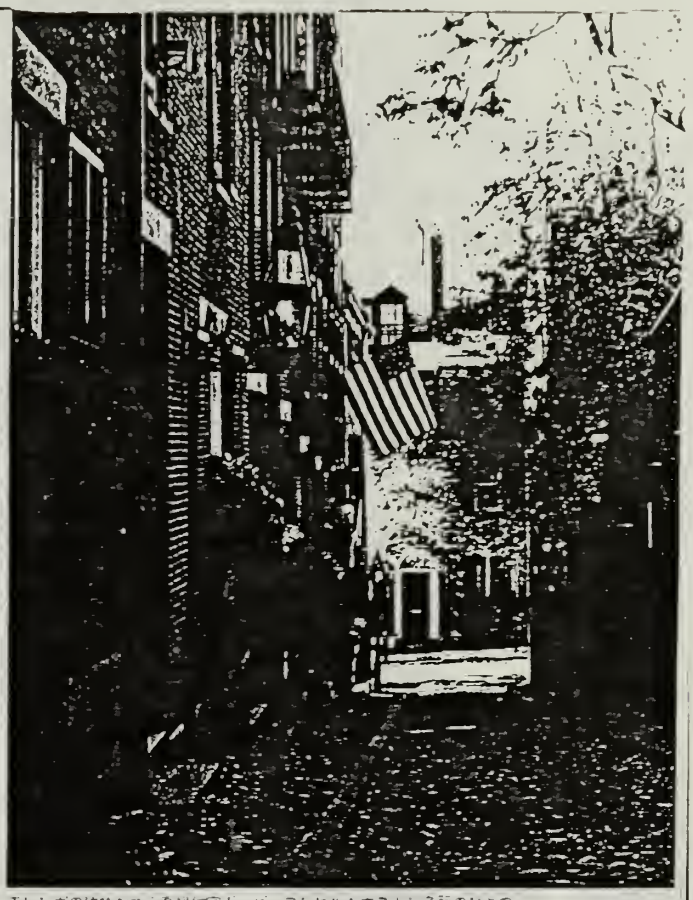
見事な紅葉に包まれたオールド・マンス　オールド・ノース・ブリッジから見えるこの家は　緋文字　の著者、ホーソンの仮らしたところとしても知られる　1770年代の建築

ノースウエスト航空で訪ねる
アメリカ建国の地
ボストン・マサチューセッツ

全色のトームが印象的なマサチューセッツ州行吉

ホテルのすぐ西、ケンブリッジのチャールスホテルは、近代的なsenseと洗練されたサービスが自慢。今話題のホテルだ。レストラン、バー・バーも充実している。

● The charles Hotel One Bennett St Cambridge MA 02138
☎617 864 1200 シングル $169~219 ダブル $189~239



赤レンガの建物が並ぶ高級住宅街、ビーコンヒルもボストン名所のひとつ。

アメリカ独立戦争の英雄の一人、ポール・リビア ボストン最古の教会、オールドノース教会の前に胸像が残る。

植民地時代の中心地であり、独立戦争の舞台ともなったボストン。史跡と現代建築が共生し、独特の雰囲気を作り出しています。初めてのかたはぜひ、赤レンガの敷かれたフリーダム・トレイルへ。独立戦争の頃の一六の史跡を巡る、おすすめの観光ルートです。クラシカルな高級住宅街、ビーコンヒルの散策もまた素敵。街が黄金色に輝くボストンの一月は、一年中でもっとも素晴らしい季節です。

夕暮れのケンブリッジ。静かに流れるチャールズ川には、レガッタの姿が行き交う。

● 今回登場したインのお問い合わせは
マサチューセッツ観光情報センター
(観光エンターフライズ) ☎03(3770)6851

Quest クエスト

深まる秋 ニューイングランド

ニューイングランド カントリーイン満喫の旅 249,000円~294,000円

- 9月19日~12月24日の毎週日曜日出発
- 利用ホテル：ボストン／トレモント、ウィリアムズタウン ジ・オーチャート、ストックブリッジ レッドライオンイン スターブリッジ バブリック・ハウス
- 最少催行人員2名 ●食事：朝食4回、夕食3回
- 日本からは同行しませんが、現地係員がお世話いたします。

■日程
①ボストン泊 ②ハンコック・シェーカービレッジ、ノーマン・ロックウェル美術館見学、ストックブリッジ泊 ③ウィリアムスタウン観光、泊 ④スターブリッジ観光、泊 ⑤スターフリッジ、ウースター・アウトレットでショッピング、ボストンへ ボストン泊 ⑥機中泊 ⑦成田着

お問い合せ・お申込み
主催(株)ワールドツアーズ
〒141 東京都品川区大崎1-5-2 ノエストツアープラザ3階
クエストインフォメーションセンター 03-5487-0865

WORLD TOURS CORPORATION

成田発のボストン便(シカゴ経由)をはじめ、ノースウエスト航空なら、シアトルからも、デトロイトからも、ボストン・ニューイングランドへ快適アクセス。3つのルートで、アメリカ建国の地へ、より速く、より快適なフライトをお約束します。

NORTHWEST AIRLINES

黒船が生きる街

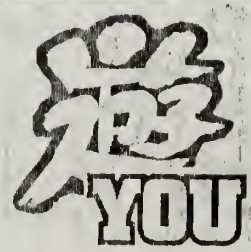
アメリカ・ニューポート

家族連れらでにぎわうニューポートの街並み

ペリー提督の生まれ故郷

アメリカ東部のニューポートに行った。ジャズや、ヨットのアメリカズカップの開催地として知られるが、じつは日本とも深い関係にある。幕末に開国をもたらした黒船のペリー提督の生まれた土地だ。毎年7月には「ニューポート黒船祭」が開かれている。

（山科百合子）



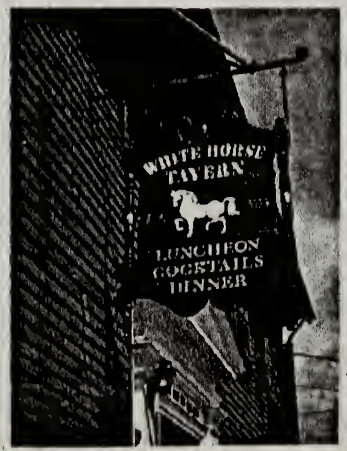
ニューポートは、ロードアイランド州のナガランセット湾に浮かぶミナト町で、人口は5万人。18世紀から20世紀にかけて、鉄道王などの億万長者が競ってこの地に大邸宅を建て、現在もリゾート地として人気を集めている。

それらの大邸宅は「マンション」と呼ばれ、70室もある寝室、ウエッジウッドの陶器を配した天井など、超豪華な調度品がそろっている。現在は歴史的建造物として州によって保護されており、有料で見学もできる。

なかでも人気は、1902年に建てられた「ローズクリフ」。ヴェルサイユ宮殿を模した建物で、映画『華麗なるギャツビー』のロケにも使われた。

わたしが訪れたのは、ケネディ元大統領とジャクリーヌ夫人が夏の別荘にしていた「ハマースミスファーム」。もともとはジャッ一一族の別荘だったが、妻はここで結婚披露宴を行った。大統領任期中の1961年～63年には、サマーホワイトハウスとしても使われた。

海岸べりに建つ素朴な



アメリカでも最古のバー「ザ

伊豆・下田とは姉妹都市で交流

幕末に開国をもたらしたペリー提督の生まれ故郷。そんな縁で、12年前から毎年、「ニューポート黒船祭」が開催され、下田などから日本人関係者も多く訪れるようになった。

この祭は、山田祐子さんという日本人女性と、黒船の乗組員の子孫という日系人女性2人の熱意によっ

Fuji Evening News (Newport)
10/6

10/6
Fuji Eve News.

『華麗なるギャツビー』の舞台の大邸宅

70の寝室、超豪華な調度品

ケネディ、ジャクリーヌ夫妻の夏別荘。全米各地から見学者が訪れる

園風の建物で、入るとプーンと潮の香りが鼻をうつ。見学に訪れる人が引きも切らず、ケネディが今もアメリカ人にとってヒーローであることを改めて思い知らされた。

暖炉とピアノがあるリビングルーム、ファミリーが食事を楽しんだ大きなテーブル、ジャッキーのドレスルームやケネディ・ジュニアのベッドルームなど、当時のままの姿で残されている。

そんな上流階級のリゾート地とばかり思っていたニューポートと、日本の伊豆・下田とが姉妹都市だとは知らなかった。

ニューポートは、てスタート。相撲☆会、タコあげ大会、太鼓パフォーマンス、書道・華道などの教室、さらにカラテ、柔道までさまざまな日本文化を紹介するイベントが催されている。

昨年は日米和親条約から140年ということもあり、下田に加えて、函館、沖縄、小笠原、浦賀の各都市の代表

おしゃれなホテル「ニューポート・マリオット」

ーの古き米、名物のこと

めしい歴史の初めのパーティーがテントとかまえている。でも、私が日本人だと

知ると、バーの歴史を書いた日本語のパンフレットをおってきてくれた。

泊まったホテルは、いちばんおしゃれな「ニューポート・マリオット」。植民地時代の調度品を飾っているだけで泊まりたい。

今もスマートなレストランやバーとして人気を得ており、カウンターにはいかにも歴史を感じさせる調度品を飾っている。

いわれるバー「ザ・ホワイト・タバーン」。1673年、ウイリアム・メイスという歴史に残る海賊の父親が買い取り、1698年に酒屋として開業した。

ニューヨーク市

ロードアイランド州

ニューポート

ボストン

コネティカット州

ニューヨーク市

ンポジウムを開いた。

そのせいか、ニューポートの人たちを「ニューポート・マリオット」の日本語で話しかけてきたりする。

この街でもう一つの名物は、アメリカで最も古いとされるユダヤ教会。1763年に建てられたもので、ジョージ・ワシントンも訪れたことがあるという。

◆アクセス　「ニューポート・マリオット」の問い合わせは☎0120・142536

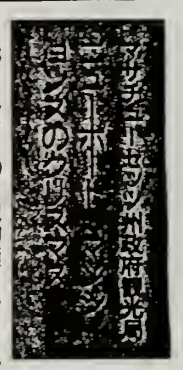
CLIPPING VOUCHER

Medium: Travel Management Date: October 9, 1995.

Subject: Christmas decoration of Newport Mansions for its 50th anniversary Ref. Press Release No.:

Newport Mansions are historic and artistic summer houses built by billionaires from 18th to early in 20th century. Presently, nine of them are preserved and open to the public by the The Preservation Society of Newport County and this year is its 50th anniversary.

The association is planning to decorate three of the mansions in different ways during the Christmas season (Dec.2- Jan.1) "The Breakers", an Italian Renessance style mansion is going to be titled "Vandervildt Christmas". "The Elms", which was modelled after a 18th century Chateau in Paris will be named "Noel" and "Chateau-Sur-Mer" is going to be titled "Victorian Christmas at Home". They will serve tea and some sweets to the visitors and open the gift shops for christmas gifts. They open everyday during this period from 10:00 a.m. - 4:00 p.m. except Dec 24th and 25th.



18世紀から20世紀初頭にかけて、億万長者が夏の別荘として建てた歴史的、芸術的建造物を「ニューポート・マンションズ」と呼ぶ。現在ではシャトー・シュル・メール、ブレーカーズなど9つが保存され、一般公開されているが、これらの保存を目的に作られた「ニューポート・マンションズ保存協会」は今年で設立50周年を迎える。

同協会では今年12月2日から96年1月1日のクリスマスシーズンに、3つのニューポート・マンションをそれぞれ違ったテーマで装飾するイベントを計画している。

イタリアン・ルネッサンス・スタイルの宮殿、ブレーカーズのテーマは「ヴァンダービルト・クリスマス」、18世紀のパリの城をモデルに作られたエルムスは「ノエル」、そしてシャトー・シュル・メールは「ヴィクトリアン・クリスマス・アット・ホーム」となっている。ビジターにはツアーの後に、茶と菓子が用意されており、またギフト・ショップが各マンションにあり、クリスマス・ギフトを取り揃えている。

期間中は12月24日と25日を除く毎日午前10時から午後4時まで公開している。

CLIPPING VOUCHER

Medium: Mainichi Shimbun　　Date: October 9, 1995

Subject: Clinton played Golf in Massachusetts　　Ref. Press Release No.:

Clinton, Playing Golf in the Rain
October 7, 1997 in Massachusetts.

"内政大統領"の変身

挙選控え クリントン外交、積極化

共和党も一目

【ワシントン8日高畑昭男】旧ユーゴ、中東、アジアなどでクリントン米政権による外交攻勢が目立っている。とくに今夏以降は対中関係改善、ボスニア和平工作、中東和平進展など矢継ぎ早に成果を誇示、来年の大統領選へ向けて国民的アピールを狙っているようだ。共和党も、最近の積極外交に一目置かざるを得ず、守勢に回らされている。

米外交は、対ベトナム関係正常化とアジア戦略練り直し（七月）、ボスニア空爆強化と和平新提案（七―八月）、イスラエル・パレスチナ解放機構の自治拡大調印（九月）とワシントンを舞台に派手な展開が続いた。また、NATO拡大とボスニア和平が交錯する米露関係、台湾問題で揺れた米中関係は、今月末、ニューヨークで相次ぐ首脳会談で危機を乗り越え、改善をめざす見通しだ。

7日、米マサチューセッツ州で、雨の中でゴルフをするクリントン大統領（右）＝ロイター

クリントン大統領は就任当初「内政大統領」と呼ばれ、内政重視に傾斜。旧ユーゴ紛争、対露・欧州関係では、西欧に「実情も歴史も知らない」と批判され、対中・台湾政策でも共和党から「優柔不断」と攻撃されていた。

政府高官によると、同大統領が外交に本腰を入れる覚悟を決めたのは今年初めから。政権発足来の外交批判材料だったボスニア問題では、北大西洋条約機構（NATO）を通じた強大な軍事力を背景に外交主導権を確立。従来の「ボスニア和平は西欧の責任」という傍観者的対応からめざましい変身を遂げた。世界は中東、ボスニア和平、NATO拡大など、軍事・外交両面で米国が中心的役割を負わざるを得ない時期にきていたといえるかもしれない。

CLIPPING VOUCHER

Medium: Tepee Date: October 10, 1995

Subject: "The Light and the Blue of Homer" (P144-147) Visiting his hometown with Subaru Legacy. Ref. Press Release No.:

Winslow Homer is the most important artist when we talk about the nature in New England. He always left himself to the nature and seeked for the themes of his work in it. The end of this summer, we visited New England seeking the landscapes in his works. Homer's paintings atract us not because he pikced up fishing or hunting as motifs, but we are impressed deeply and truly by what he expressed nature and humanbeings in his works. It's impossible to do that kind of works without harmonizing with the nature and without his gifted eyes. Thinking of the enourmously long time he spent in the nature, we feel veryclose to him exceeding the disparities in time and places.

First, we visited Sterling and Francine Clark Art Institute in Williamstown, Berkshire County where exhibits the collections of Mr.and Mrs.Clark who were Homer's mentors, Berkshire is the western part of Massachusetts and known as a mountain resort area in a comparison of Cape Cod as a beach resort. Many of the tourists visit this place for the summer and fall foliage. Tanglewood, famous of it's summer music festival is placed in the centre of Berkshire. The institute keeps more than 30 Renoir's works, remarkable American paintings such as Sergent and many marvelous private collections. It has fifty Homer's paintings and drowings including precious works in his last years. When we look through the Homer's painting books, we are amazed that the way he painted water and sky so deeply using various colors. Especially, the variety of blue colors. The deep blue in the sky and blue in the stormy ocean always fascinate people. One more thing we can not forget about Homer's work is the light. Sometimes strong and somtimes pale, Homer's paintings show us the reasons for the existance of blue and light. When we appreciate the originals, the blue and the light fascinate us strongly.

Standing in front of "Saco Bay", we were fascinated how deeply he appreciated the nature. Homer's painting at Clark Institute expressing real nature and life in New England. Mr.Karn, a curator at Clark Institute says, " We can never talk about New England without Homer's paintings. Homer and New England is just like Monet and Giverni. Homer is very special to us New Englander. Homer spent most of the summer days in New England even through he lived in New York for 25 years. In 1884, he moved to Prout's Neck, Main and stayed until he died in 1910. Monet was also found of light and wind in the country and moved to Giverni and continued to paint nature in his daily life. He worked out his own sytle painting in the landscape."

"I always think that the pictures should be composed and painted outside. Nothing should be done without understanding. All works at the studio now should be done under the sky. If the painter do not work outside, the pictures will lose its freshness and something very little but important."- Winslow Homer

Homer expreessed his real experiences in the windy, rainy, damp filed in his works. That gives us strong impression. Homer represented our joyful sentimental feeling toward the landscapes in New England. That light and blue should be a proof.

Next day, we moved to Prout's Neck. Little peninsula shapes northern part of Saco Bay and most of the villages are bird sanctuary now. An old lady, one of Homer's relatives now lives in Homer's Studio. Mr. Karn gave us her telephone number to visit the studio. But it was the Labor day, which is called last summer day by New Englander, we skipped visiting studio and went to his real open air studio. One of our photographers found exactly the same rock he saw in Homer's picture at the museum and it reminded us one of Homer's friend's comments we found at the museum. " Mr. Homer came to Saco Bay and painted pictures on thick papers. then he observed the sunset. " Walking more than 10 km from Ferry Beach to Prout's Neck everyday was just an ordinary matter for the outdoor artist. He was facing to the Atlantic Ocean for more than 26 years after he chosed Prout's Neck as his very last place.

At the Clark Institute, a gentleman said about Homer's paintings as follows. "We New Englander are very proud of Homer. He loved and painted nature in New England and we also love this nature and his paintings."

Henry D. Thoreau (P148)
The other man who loved nature in New England .

Henry D. Thoreau, a writer of " Walden- Life in Wood" was very closed to the nature in New England. As we have a lot of repeated readers of Thoreau's books in Japan. Americans also highly re-grated Thoreau's work lon time before. Not only his ecological view but also his ideas that a person should be indipendent from a nation and individual conscientiousness makes a person valuable. His philosophy still exists in New England.

Concord is his hometown. He was born there and grew up in the same community as Emmerson and Alcott. Walden pond is very popular in summer but fortunately there are no accomodations around it. Fairheaven, appears in "Journal" frequently, is not so far from Concord. We followed his guidance to the beautiful nature and were suprised of its charm with birds and flowers. Thoreau's "Walden" showed his natural observation and his thoughts, on the other hand "Woods in Main " and "Cape Cod" are about travel memory. Thoreau expressed his emotion he got from the nature strongly and that dynamism makes us excited. But then, we can't help admiring his quick perception. For example, he commented on Cape Cod about 140 years ago as follows. "Someday, many New Englanders who seek the real Beach will find Cape Cod as it. Now these beaches are not popular and they would not even enjoy this palce. People who love wine than sea water will be disapointed with this place, I think."

Island for Ocean lovers (P149)
Martha's Vineyard & Black Dog

Right opposite to Cape Cod, Martha's Vineyard is placed in a line of Nantucket Island. Though Martha's Vineyard is one of the leading Marine Resort Island is no high-rise hotels. There are only small sized hotels or B&B and no snobbish restaurants around. Only real ocean lovers come to visit this island.

Black Dog stores-
A casual restaurant, bakery and boutique are most symboric shops among the people.

EMS- Eastern Mountain Sports.
A leading out outdoor sports shop in East Coast. EMS has been showing strong improvement since the excellent marketing person joined this shop from Landsend. They mainly sell almost any items of backpacking goods in resonable prices. They also have good guidebook for each New England states. You'd better go straight to the ocean or mountain from EMS if you have time and money for shopping in Freeport.

(AD of Legacy Grand Wagon follows)

CLIPPING VOUCHER

Medium: SPA Date: October 11, 1995

Subject: A great pleasure of the outdoors Ref. Press Release No.:

Now we have more than 10 million outdoor lovers in Japan. However, most of them just go out of town packing ostentatious camping equipment back in the station wagon. How do people enjoy the outdoors in U.S.? We visited New England, the original place for outdoors. There are many outdoors-relatled places such as L.L. Beans store and Mt.Washington State Forest. We can find a "real American outdoor style" there. Visiting some camping places, we hardly could find campers in the Japanese style. They were enjoying and relaxing naturally.

P.128

* The pictures above describe the people enjoy outdoors such as mountain-bike, yacht and rollerbraid

* The pictures below describe the shops in Freeport such as L.L.Bean, Patagonia and Aqua Diving.

P.129

Mt. Washington State Forest
You can enjoy any kinds of outdoor-sports such as rock-climbing, canoe and mountain-bike. Not only tourists but also couples visit Mt. Washington State Forest because there are many spots for outdoors. The mountains are gentle as mountains in Japan. The outdoor shops around the Forest keep variety of outdoor items especially for rock-climbing.

* The pictures introduce the people in the Mt. Washington State Forest and shops such as IMS, EMS and GME.

(AD of Legacy Grand Wagon follows)

SPA!
P127

A Great Pleasure of the Outdoors

It is said that there are 10 million people enjoy aut-camping in Japan. But what most of them do is to drive around carrying lots of stuff. Then as soon as they arrive at the camping spot, they start fixing supper. It seems the same as moving to "the outdoors." These people do not need station wagons. They need trucks.

It seems that this kind of out-camping is considered as "Cool American Camping," but do people in America really do camping in this way? To find out the answer, we visited New England in America. In New England, there are L.L.Bean, Free port, MTB and Mt. Washington National Park. We were sure we could find real American style camping in New England.

P128

In America, people and the outdoors exist together

Fist we will introduce beautiful camping places. There is luxus camping places which has everything; water system, electricity system, and a beautiful parking space. In this kind of camping place, we did not see any young people. All of them were old retired people. Younger people do not usually use this kind of expensive place. They go to reasonable camping places with only a few stuff: a tent, sleeping bags, and lanterns.

Unlike Japanese camping place, there was no person who had many useless stuffs. In Japan, you see many families in camping places, but in America, most of people in camping place were couples. We suggest Japanese young couple to enjoy aut-camping like young Americans do.

Boston: City of mixture of old and new culture

Boston is the entrance of New England, the city with many universities and colleges, and the nation's most old harbor. In Charles liver, people enjoy regatta and sailing. In public park, people enjoy roller blading and cycling.

Prtland & Freeport: The Center of North New England

Portland is the biggest city of the state of Main. You can enjoy fishing and diving, and also there are many factory outlet shops including the famous L.L Bean.

Mt. Washington National Park: Spectacular View of Nature

Mt.Washington National Park attracts not only sightseeing visitors, but also people who enjoy outdoor sports. Many people enjoy rock climbing and mountain biking. Unlike mountains in Japan, Mt. Washington is not rough.

Legacy Grand Wagon: Introducing new Legacy

Legacy, one of the most popular wagons in Japan, introduces new line, Legacy Grand Wagon. This new Legacy Grand Wagon is the best car for people enjoy American style aut camping.

A Great Pleasure of 東海岸版 the Outdoors

アウトドアデートスタイル

オートキャンプ人口1000万人とも言われるアウトドア大国？　に成長した日本。でも、なんだか寂しい気がするのはSPA！だけか？　だって「趣味はアウトドアです！」と公言してはばからない男たちの大半は、クルマに積みきれないほどの道具を満載して北へ南へと高速道路を疾走する。キャンプ場へ着くやいなやテーブルにチェアでリビング、シンクキッチンをしつらえて、食事の用意にアタフタしてる。アータ、それじゃあ、アウトドアに引っ越ししてるのと同じじゃないの？　それにクルマだってかわいそう。だってそれじゃあただの荷車だもの。クルマがライフスタイルの象徴とするなら、立派なステーションワゴンやCCVが泣いてるぜ。と、小言の一つも言いたくなる今日この頃なのであった。

どうやら、この手のスタイルは、アメリカンテイスト溢れるカッチョイイものとして流行ったきらいがある。が、本当にアメリカ辺りでは、こうなんでしょうか？　と素朴な疑問。で、グランドワゴンがお手本にしたアウトドアの本家、アメリカは東海岸ニューイングランド地方を取材してみた。ニューイングランドといえば、アウトド

世間はもはや秋の気配濃厚。しかも、世は空前のアウトドアブーム。とくれば、彼女とのデートはキャンプでもするっきゃないんじゃない？　でもね。混み混みキャンプ場に静けさを期待してもどだい無理な話。いくらブームとはいえ、コレってやっぱなんかヘン。そこでオートランドは本場のアウトドア・フィールドに乗り込んできたぞ

アウトドアとクルマの〈OVER〉な関係

本場の大自然の中にこそ、グランドワゴンはよく似合う

ニューイングランドの最大の名物がこのロブスターだ

自然とクルマが不思議と調和して見えてくる。ボストンはそんな雰囲気を持った街だ

アブランドの雄、L.L.Beanのお膝元、メイン州フリーポートやMITBのメッカ、Mt.ワシントン森林国立公園があるところ。ここでなら、本物のアメリカン・アウトドア・スタイルを発見できるはずだ。

アウトドアと人間との共存が本場アメリカ流

まずはキャンプ場。きれいな芝生がフカフカでキャンピングカーが横付けできて、水道、排水設備、電源、電話が各サイトに完備されている豪華なキャンプ場もそこにはあった。でもね、なぜか老人ばかりなのよ。その景観たるやあたかも野外老人ホーム。リタイアしちゃったジーちゃんバーちゃんたちの豊かな余生の場なのだよね。では、普通のキャンプ場はどうかといえば、若者はいるものの、とっても質素。テント、寝袋、小さなランタンなんて簡単なキャンプ道具と小さなクルマ、傍らにMTBというのが一般的なパターン。日本で見かける引っ越しスタイルのアメリカン・キャンパーには、ただの一人も出会わなかった。まあ、日本で売られているキャンプ用品の大半はUSメイドだもの。全く存在しないとは言わない。しかし、あくまで

もクルマもナチュラルな姿勢がカッコイイ

ボストン

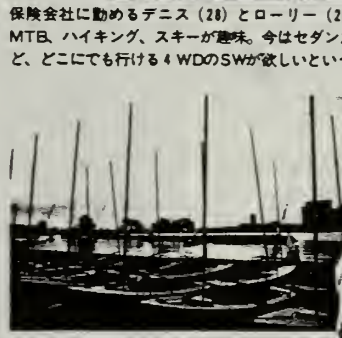
カルチャーと若者と自然が融合する伝統の街

ニューイングランドの玄関口。ハーバード、ボストンなど、有名無名60の大学がひしめく学生の街。アメリカでもっとも早くから開かれた貿易港・ボストンに注ぐチャールズ川では、レガッタ、カヌー、ヨットを楽しむ人々が引きも切らず、公園ではMTBやローラーブレードに興じる人々が数多く見受けられる。改造車はほとんどなく普段の足感覚

大学院生のジュリアン（28）とキングスレイ（28）は、ローラーブレードとウインドサーフィン。インテリジェンスなイメージのコンパクトなクルマが好きだという

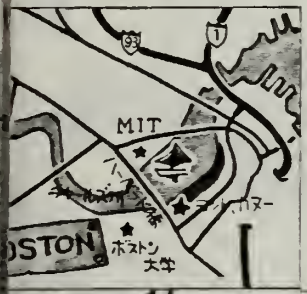
保険会社に勤めるデニス（28）とローリー（26）。MTB、ハイキング、スキーが趣味。今はセダンだけど、どこにでも行ける4WDのSWが欲しいという

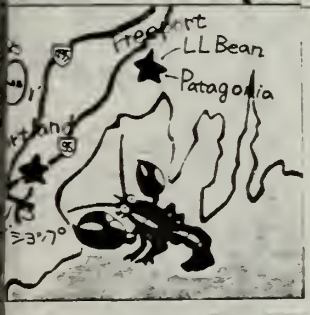
ポップな色調で彩られたバスは、ボストンの街のトラディショナルなクルマたちの中では目立つ存在だった



ヨットに夢中だという学生のスティーブ（22）とリサ（19）。遊び道具が何でも載って、広いアメリカを長期間故障の心配せずに走れる日本のクルマを今物色中だという

信頼性があって遊び道具が積めるクルマがいいね





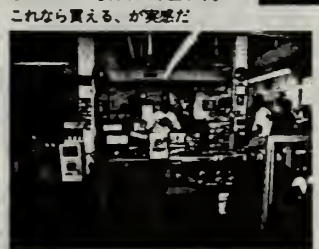
ダイビングショップの品揃えも充実。潮の流れが速いので特に岬は注意が必要だという

ポートランド&フリーポート

自然豊かな北ニューイングランドの中心地

ポートランドは、メイン州最大の街。海辺の街らしく釣り、ダイビング、シーカヤッキングと活動派のフィールドには事欠かない。フリーポートは24時間営業のL.L.Beanが本拠を置く他、Patagoniaなどのアウトレットが目白押し。ゆったりと自然を楽しむ老人が多かった

日本でも超有名になったL.L.Bean本店は24時間営業。品揃えも豊富でカタログにない商品も……



フライフィッシャー垂涎の釣となるORVISも日本の半値以下。これなら買える、が実感だ

Patagoniaのアウトレットは、大抵の商品が30%OFF。中には70%OFFなんてのも

取材・文／堀内吾郎　撮影／高仲康次　イラスト／西村雅則

気になるこの1台　レガシィ・グランドワゴン

レガシィ・ファン待望のレガシィの登場だ

レガシィといえば、ドレッシーな大人のワゴンとして絶大な人気を誇る日本のワゴンの代名詞的存在。そのレガシィにグランドワゴンが加わった。

外見上は、スポイラーと内蔵型フォグランプが目立つ程度。しかし、最大のポイントは、200㎜に引き上げられた最低地上高とリミッテッドスリップデフだ。このお陰でワゴンの走りに踏破性が加わって、グンと行動範囲が広がった。カンガルーバーなど、見せかけのドレスアップでオフロード性能を誇示する風潮の中、実質的な走りの性能を向上させるこのアプローチは評価に値する。今回の取材期間を通して、グランドワゴンのアメリカバージョンであるアウトバックを使ったが、トルクを重視した2.5ℓエンジン、非常にスムーズにつながる4速ATの相性のよさは特筆もの。

ニューイングランドを背景に流れるCMのキャッチコピーは、グランドワゴンスタイル。このクルマがバッチリ売れるぐらい日本のアウトドア・スタイルも成熟してくれているといいのだが……。売れ行きに期待したい！

細かい気配り！

大人のワゴンだけに細かいところに気が利いている。なんとラゲッジルームには、排気ファンが装備されているので、魚満載のクーラーボックスを積んでも臭くない。さらに電源コンセントも装備。これはありがたい。

差をつける！

レガシィは、おしゃれなワゴンとして人気があるだけに、「欲しいけど人と同じじゃね」というユーザーもいなくはなかった。しかし、よりOFF志向を強めたグランドワゴンなら、隣のレガシィとキッチリ差がつく。

MTBもこんなに無造作に積まれてしまうのが大らかでなんともアメリカンな雰囲気

も少数派というのが実感だ。

しかも、ファミリーが大多数の日本と違い、なぜかカップルの姿が目立つ。それもブームだから来ちゃいました的な日本のカップルと違って、ムリしてない。何気なく道具をクルマに積んで出かけ、気楽に大らかにカヌーやMTBを楽しんでいる。アウトドアと恋人たちとクルマの共存、それが東海岸ニューイングランド・スタイルであった。日本型オートキャンプ道を邁進しているキミ。こんなスタイルっていかがです？

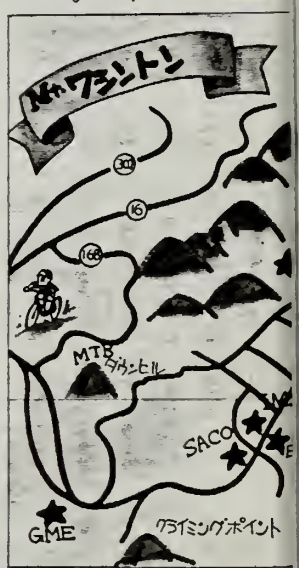
アウトドアの本場で！

Mtワシントン森林国立公園

ロッククライミングにカヌー、MTBも楽しめる豊かな自然に呆然

Mtワシントン森林国立公園周辺は、観光客も多いが、アウトドアスポーツならなんでもこいの魅力的なスポットが点在するだけにアウトドアカップルの姿も多い。日本の山々に近く荒々しい雰囲気はあまりない。ショップもクライミング関係が主流で品揃えも豊富だ

週に2～3回は、クライミングに訪れるドリュウ（28）とナンシー（24）は大学院生。「デカいクルマは格好悪い。インテリジェンスが感じられるハッチバックがここには合ってる」とドリュウ



EMSは、今年から日本に輸入されたブランド。他ブランドも充実

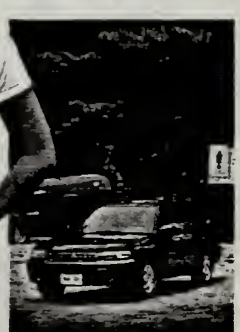
より本格的な山用品を揃えるならIMS。日本では高価なグレゴリー、マーモットも激安

レガッタも好きというアレックス（25）とリーン（26）は会計士。「遊び道具が積めないクルマは使えない」とはアレックスの弁。コンパクトなクルマが好きだそうだ

L.L.Beanのアウトレットも見逃せない。品揃えに偏りはあるが、サイズさえ合えば50%OFFもある

クルマはやっぱり、コンパクトでインテリジェンスがなくっちゃね

バックパッカー御用達！　といった雰囲気のGME。どの店もアドバイスは的確だ



CLIPPING VOUCHER

Medium: Mainichi-Shimbun Date: October 23, 1995

Subject: Japanese travel expenditure is No.1. Ref. Press Release No.:

The research by World Tourism Organization announced the overseas travel tendency in 1994 as follows. The total number of the times that Germans travel is more than 77 million and the total amount of money that Japanese traveller spend at a trip to overseas is averaging $2,261. The most popular destination for travel is France and over 6000 people from all over the world have visited there. USA earned the most by 60 billion dollars and France was the second by 24 billion dollars.

やっぱり 金遣い荒いのは日本人

――世界観光機関が調査――

海外旅行1回で22万円

【カイロ22日AFP時事】世界で最もよく外国旅行に出掛けるのはドイツ人で、金遣いが最も荒いのは日本人―。世界観光機関が二十二日当地で発表した一九九四年の海外旅行に関する調査結果で、このような実態が明らかになった。

それによると、外国旅行の回数ではドイツ人が延べ七千七百万回以上で世界第一位。以下、米国人の四千四百三十万回、英国人の三千八百八十万回と続く。

一方、外国旅行一回当たりの平均出費では日本人が二千二百六十一㌦（約二十二万六千円）でトップ。オーストラリア人が千八百四十三㌦で二位、ノルウェー人と韓国人が約千六百六十㌦でこれに続いている。一番の倹約家はスペイン人で三百五十㌦。

旅行先ではフランスが最も多く、世界から六千万人が訪問。観光収入の稼ぎ頭は米国で六百億㌦。フランスは二百四十億㌦だった。

CLIPPING VOUCHER

Medium: Mainichi Shimbun Date: October 27, 1995

Subject: Music delivery service to junior high school students. Ref. Press Release No.:

"Boston Camerata", an ensemble group of songs and musical instruments, presented classic music to the students at Jyujo Public Junior High School in Kita Ward, Tokyo. This group was established in 1954 and has been performing actively all over the world. It has also been highly applaused by reproducing early baroque music instruments. It visited Japan for International Music Festival in Oji. Eleven members played a love song in medieval times and introduced wooden flute to the students. The students sung their school song in return.

古楽器演奏と歌
中学校に〝宅配〟
北区立十条中で

トップレベルの音楽を学校に宅配――。北区立十条中学校（十条台一）の体育館で二十六日、米国の歌と器楽のアンサンブルグループ「ボストン・カメラータ」が、全校生徒にクラシック音楽をプレゼントした。

同グループは一九五四年の設立。ボストンを拠点に世界各国で活躍。初期のバロック音楽などで使われた古楽器の音を忠実に再現、高い評価を受けている。北とぴあ（王子一）で開かれている国際音楽祭のため来日した。

北区立十条中で行われた「ボストン・カメラータ」の演奏

十一人のメンバーが、中世の恋物語「トリスタンとイズー」を歌と器楽で披露。フルートの原形とされる木製の笛などを、音を出しながら生徒に紹介した。生徒は校歌などを斉唱して返礼した。

CLIPPING VOUCHER

Medium: Nikkei Sangyo Shimbun Date: October 27, 1995

Subject: Universities in Kochi Prefecture offer exchange programs with MIT. Ref. Press Release No.:

Kochi Women's College is looking for the possibility of the students and professors exchange between MIT. Kochi Institute of Technology will be opening in 1997 as the first university for technology in Kochi Prefecture and has already affiliated with MIT. Kochi Prefecture is suffering from the business depression of manufucturing industry and started its promotion having cooperation with MIT. They invited Professor Miyakawa from MIT and held the seminar titled "Friction of Information between U.S. and Japan" and "The necessity of studying Japanese as a foreign language". Kochi Prefecture arranged a joint contribution with MIT by opening Japanese courses and signed the agreement on exchange program including the cooperation between Kochi Institute of Technology and MIT. Professor Miyakawa will also give a lecture at Kochi Women's Colloge.

米ＭＩＴとの交流
高知女子大も検討
県、産業・技術振興狙う

【高知】高知女子大学は、米マサチューセッツ工科大学（ＭＩＴ）と交流を検討する。九七年に開校予定の高知県初の工科大学、高知工科大学がすでにＭＩＴと姉妹校関係を結んでおり、同女子大も教授、学生の交流など幅広い提携を模索する。県は、製造業出荷額が長期低迷しており、ＭＩＴと県内大学の相次ぐ交流を産業・技術振興の起爆剤にしたい考えだ。

交流実現に向け、ＭＩＴ人文学部の宮川繁教授を招き、同女子大二〇三大講義室で、「日米情報摩擦と外国語としての日本語の必要性」と題した特別講演会を三十日、実施する。同女子大学生、教授、一般参加希望者約二百五十人が参加する見込み。これを機に、定期的な提携関係の締結を探る。

高知県は五月、ＭＩＴと県の出資による日本語講座の開設を決めるとともに、ＭＩＴと高知工科大学の姉妹校提携などを中心とした交流に関する合意文書の調印をした。交流締結の中心となった宮川教授の講演会を同女子大で開催、今度は同女子大との交流への発展を目指す。

CLIPPING VOUCHER

Medium: Travel Journal Date: October 30, 1995

Subject: World Travel Destination Ranking 1994 Ref. Press Release No.:

The number of Japanese tourists to America in 1994 was 4,625,898. It was 30% of the total and the largest share. However, according to the statistics by CSTTA, 42% of them traveled to Hawaii and 14% of them traveled to Guam. These two islands are inexpensive and easy to to beach resorts for the Japanese. Korea gained the second largest Japanese travel bs in 1994. The number of them was 1,552,094, 11% of the total.

The country which shows the largest growth of Japanese tourists was Peru by 151.4% growth. Indochina, especially Vietnam, Cambodia and Myanmer, increased the tourists from Japan. In Europe, Hungary and Italy increased the tourists from Japan. In north Europe, Norway and Finland increased the tourists from Japan.

Mordiv was in the first place in offline destinations ranking. Norway and Portugal follows. Jamaica was in the sixth place. The number of women who travel abroad has continued to increase. In 1974 it was only 25% of the total, but it is now 44.4%. In terms of destinations by sex, Asia, North America and South America are popular among men. On the other hand, Europe, Oceanea and Africa are popular among women. Especially women in their teens, 20s, 30s, 50s and 60s traveled to Europe more than men in the same age group. The number of women in 20s who traveled to Europe was 341,869 in 1994 while that of men was less than a half of women in 20s. Even Asia gained more female than male Japan ese travelers in their teens and 20s. The statistics shows that female in 20s is the most frequent travelers in any destinations. However, in 30s the number of travelers of men and women are same and over 35 years old men travel more frequently than women.

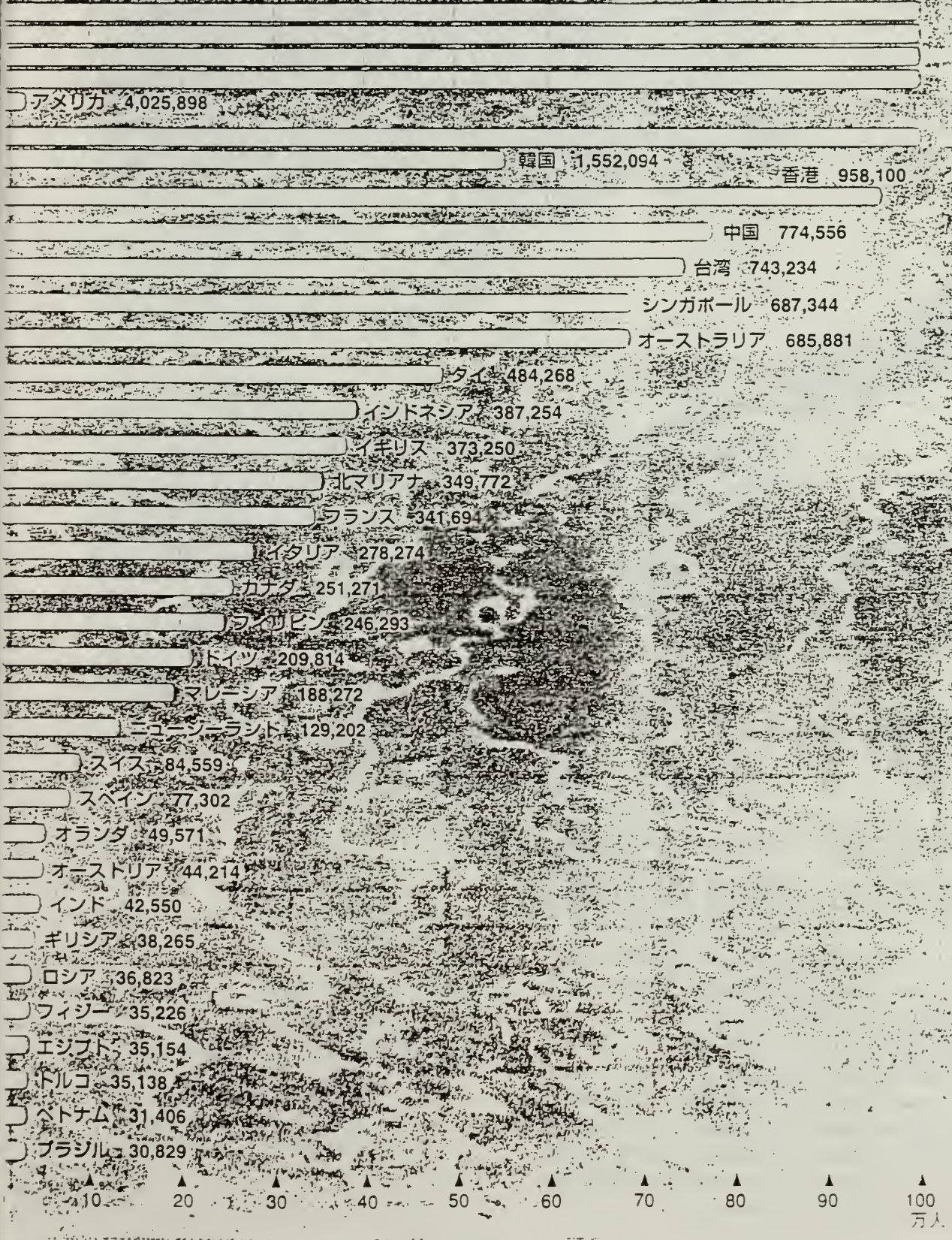
In the analysis of popular destinations by sex, America and Korea are both popular among men and women while England and France are more popular among women than men. Philippine, Thailand and Taiwan are more popular among men. It is possible to increase the number of touirts to those countries by attracting more female travelers. Moreover, women in the latter half of 30s travel less frequent than men in the same age group. Women in 20s are expected to continue to lead travel trends when they reach each age group. Travel market for family seems to grow in future.

The number of Japanese overseas travelers was 13,578,934, which is 13.8% increase from the year before. JNTO(Japan Travel Organization) says it will reach 15 million in 1995.

TSURU ENTERPRISE Co.,LTD.

WORLD-DESTINATIONS

■総合渡航人数のベスト30



RANKING 1994

ハワイ&グアム・パワーで米国がトップを堅持

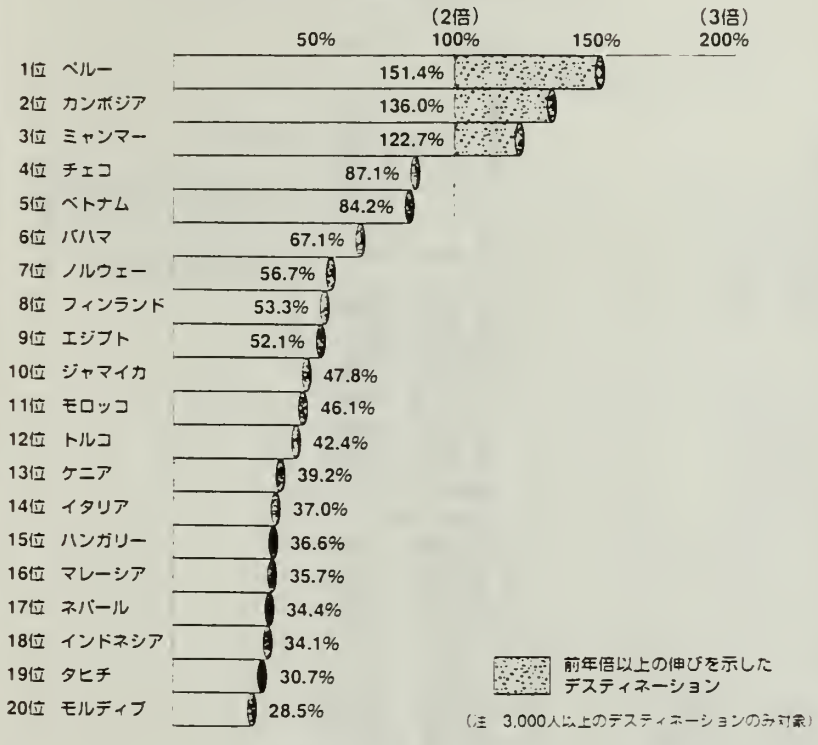
インドシナ，中欧圏，ペルーが急激な伸び 女性旅行者のシェア増は20年連続

デスティネーションの人気ランキングは各種あるものの，日本人旅行者の実際の動きはどうなっているのだろう。法務省がまとめた1994年(1～12月)の出国者数データを元に，昨今の傾向を探ってみた。

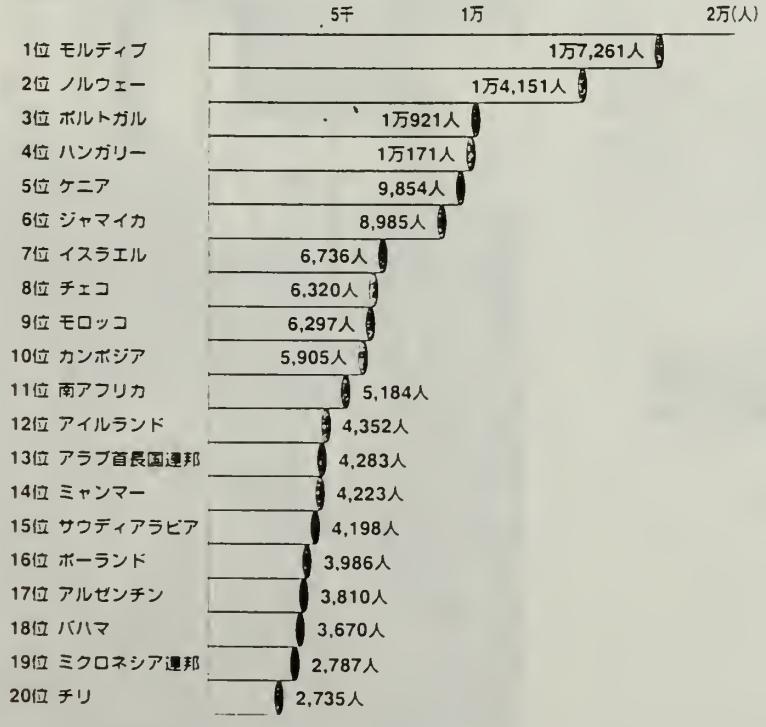
渡航先別では相変らず強いのがアメリカ，次いで韓国。特にアメリカは10代から60代までの各世代別でも圧倒的多数を獲得している。ただしその半分以上はハワイとグアムが占めている。また女性出国者数は1974年以来，94年までわずかずつではあるものの確実にシェアを伸ばし，今や全旅行市場の半分弱を占めるまでに成長した。旅行以外の分野でも注目を集める南米のペルーやインドシナ，ミャンマーは前年に比べて100%以上の増加率を示し，絶対数はまだ小さいものの，注目度の高さを反映した。

法務省統計で見る
デスティネーション・ランキング 1994

前年（1993年）比で見る増加率ベスト20



オフライン・デスティネーションのベスト20



日本人旅行者の3割が「アメリカ」へ

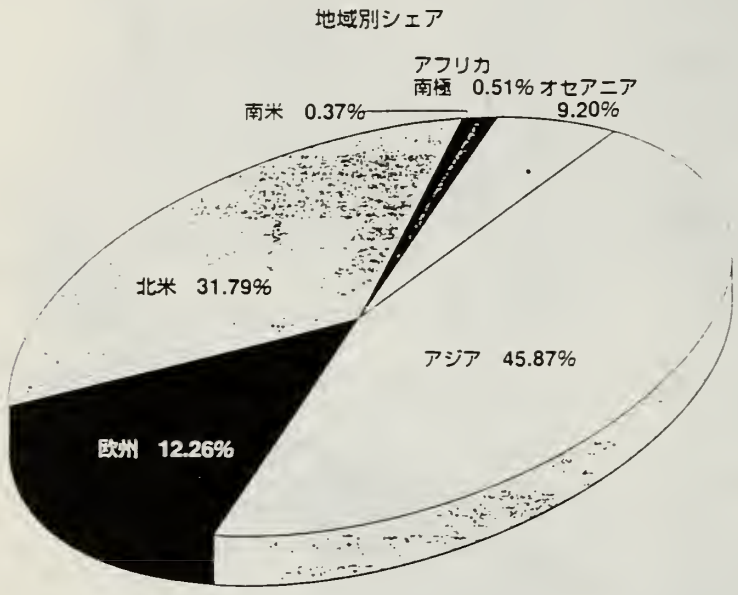
1994年の日本人出国者数を渡航先別に見ると，アメリカが全出国者の約30%を占める402万5898人で1位となった．たたし周知の通り，この半数以上はグアムとハワイが占めると推測される。法務省統計では渡航先（国・地域）単位でしか捉えられないが，米国商務省観光局（USTTA）の統計を参考にするなら，94年の日本人訪問者数（USTTA統計では406万5023人）のうち，42%がハワイへの訪問者，14%がグアムへの訪問者ということになる。

海外旅行自由化以来の元祖ビーチリゾートである太平洋の2大デスティネーションは，米国とは別にカウントしたとしても恐らくハワイが1位か2位，グアムもベスト10に入る。東京，大阪をはじめ日本各地に乗り入れた航空路線網による利便性と，時間的・価格的にも近く，心理的にも気楽に出かけられることが圧倒的支持の理由だろう。その一方で「日本人だらけだった」の声も多く聞かれるデスティネーションだ。

2位の韓国は155万2094人，全出国者の約11%を占めた。日本への韓国人訪問者数も94年は114万372人と過去最高を記録，双方向の交流がバランスよく伸びている。この点でアメリカはインバウンドが前年比0.2%減・54万8265人となっており，日本発アウトバウンドの伸びと比べ，少々寂しいところ。そのほか，ベスト10まではアジア・太平洋地区の各国・地域が占めており，欧州勢では唯一，イギリスが10位に顔を出している．

前年比ではインドシナ，ミャンマーに注目

前年比の伸びでは外務省の渡航自粛が解かれたペルーが151.4%増，前年の2.5倍と大きく伸びて1位となった．同様に治安面での足カセが取れつつあるインドシナが，アジアでは最も勢いがある．今夏，とうとうアセアン入りしたベトナムは総合順位でも29位と急成長中．だがそれを上回る勢いを見せているのが前年比136.0%増のカンボジア，同122.7%増のミャンマーだ．ヨーロッパからは中欧圏のハンガリーも36.6%増（15位）と，絶対数では及ばないものの人気のイタリア（14位・37.0%増）と同レベルの成長を示した．北欧ではノルウェーとフィンランドが大きく伸びて

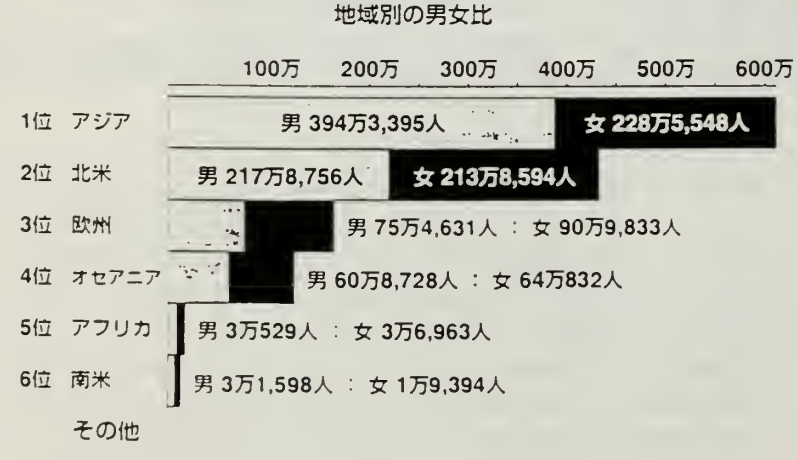


いるものの，これはリレハンメル五輪の影響も大きかったと思われる。その他，トルコ，モロッコ，エジプトなどの異国情緒が色濃く漂うデスティネーション，ビーチリゾートではカリブ海方面やバリ島を抱えるインドネシア，タヒチ，モルディフなどがベスト20に入った。

これらのデスティネーションは絶対数では上位各国にはるか及ばないものの，観光・ビジネスなど各分野における注目度の高さを表したと言えよう。一方，直行便の就航が待たれるオフライン・デスティネーションだけを対象にしたランキングでは，インド洋のリゾート，モルディブ（1万7261人）が1位。リレハンメルで賑わったノルウェーが2位（1万4151人），ポルトガルが3位（1万921人）などとなっている。

20代女性パワーくっきり

地域別の訪問者数では，アジアが半分近い45.87%，次いで北米（31.79%）となった。同統計によれば，欧州は，日本発海外旅行に占めるシェアが北米の3分の1強，オセアニアはさらに欧州の4分の3ということになる。前年に比べシェアを増やしたのはアジア（0.43ポイント増），欧州（0.31ポイント増・

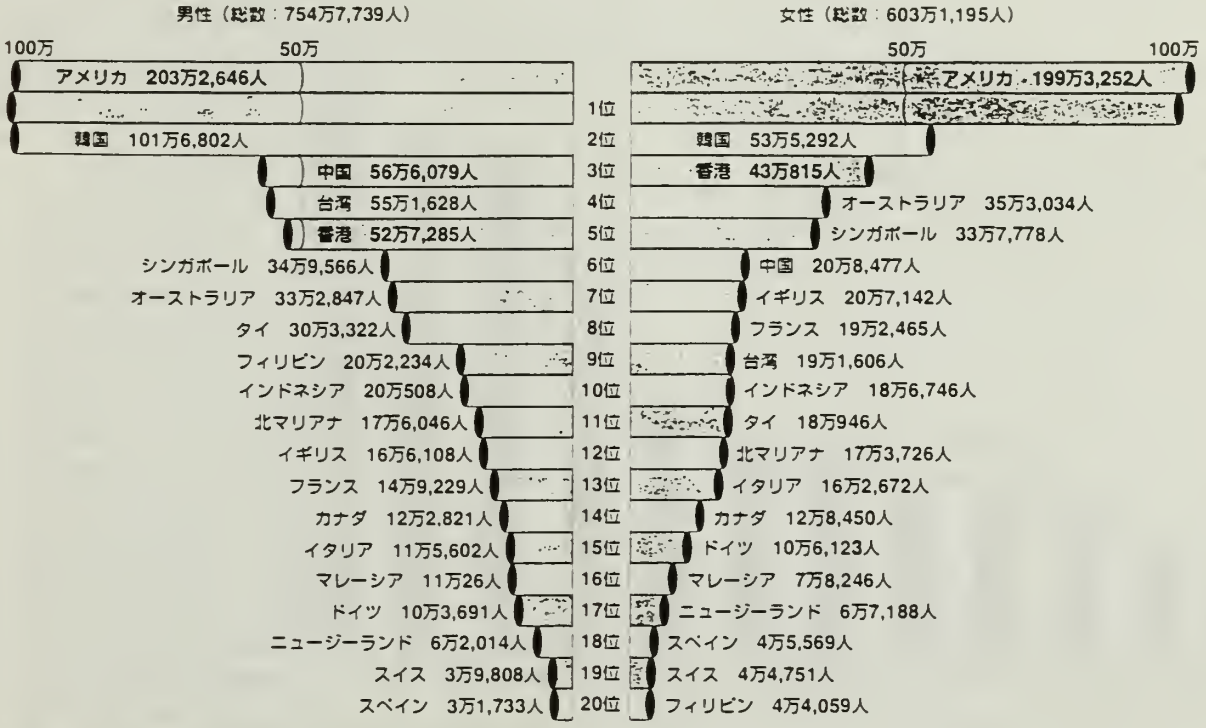


全国都道府県の出国率

全国平均：10.9%

北海道：	5.2%
青　森：	3.5%
岩　手：	4.2%
宮　城：	6.7%
秋　田：	3.7%
山　形：	5.4%
福　島：	5.8%
茨　城：	8.7%
栃　木：	8.4%
群　馬：	8.4%
埼　玉：	12.2%
千　葉：	15.0%
東　京：	22.4%
神奈川：	17.3%
新　潟：	9.0%
富　山：	4.6%
石　川：	7.7%
福　井：	8.0%
山　梨：	9.7%
長　野：	8.6%
岐　阜：	10.0%
静　岡：	9.0%
愛　知：	11.7%
三　重：	8.2%
滋　賀：	9.4%
京　都：	11.8%
大　阪：	12.1%
兵　庫：	11.4%
奈　良：	12.0%
和歌山：	6.1%
鳥　取：	5.9%
島　根：	4.5%
岡　山：	6.6%
広　島：	8.3%
山　口：	5.8%
徳　島：	5.5%
香　川：	6.9%
愛　媛：	5.1%
高　知：	4.2%
福　岡：	10.0%
佐　賀：	6.5%
長　崎：	5.1%
熊　本：	6.3%
大　分：	5.8%
宮　崎：	3.9%
鹿児島：	4.0%
沖　縄：	5.0%

男女別の出国者数ベスト20



12.26%）。一方，オセアニアは数年ぶりに0.61ポイントのシェアを落とした。

昨今の海外旅行マーケットにおける女性パワーは周知の通りだが，女性旅行者数はこの20年間，確実にシェアを伸ばし続けている。法務省が男女別に出国者の統計をまとめ始めた71年以降の変遷を追ってみると，74年から94年まで女性旅行者数が占めるシェアは，毎年わずかずつではあるが増え続け，74年当時は全体の4分の1ほどだった女性のシェアが今や44.4%。この傾向が続くなら，男女比が逆転する日も遠くはなさそうだ。

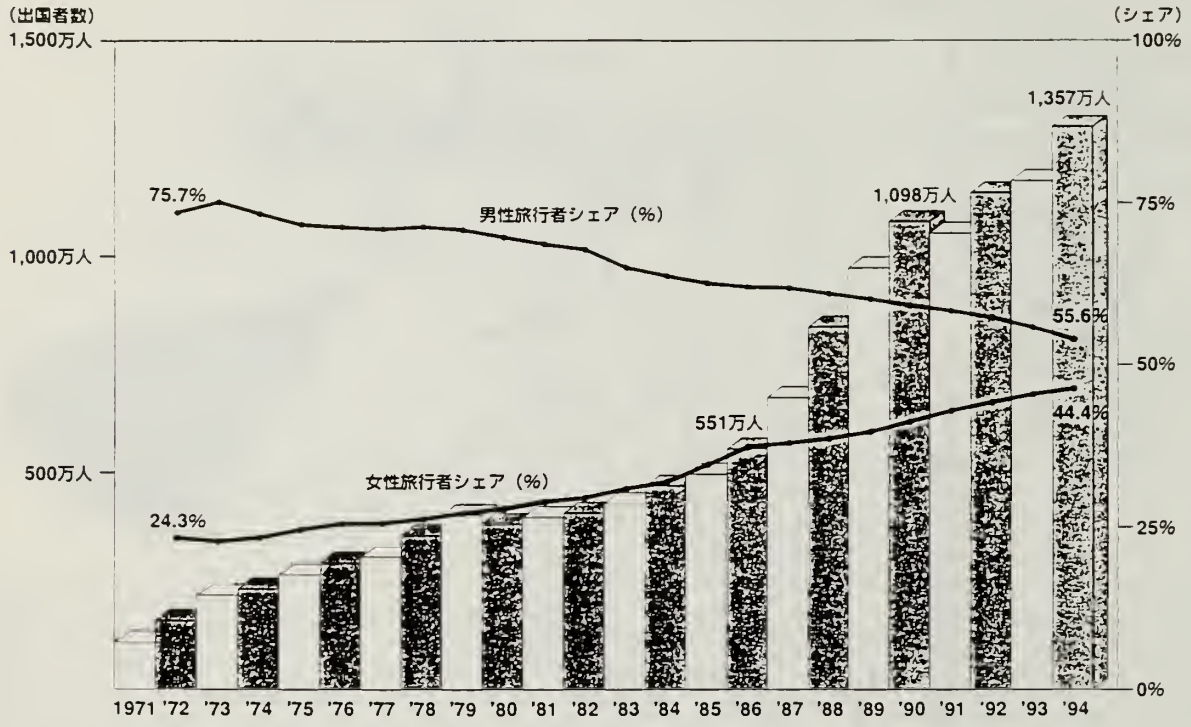
男女別の旅行先を見ると，アジア，北米，南米地域では男性旅行者が多く，一方，欧州，オセアニア，アフリカでは女性旅行者の比率が男性を上回った。これをさらに年代別に追ってみると，ヨーロッパでは10代から30代半ば，50代から60代半ばで女性の数が多く，男性は「35〜49歳」，「65歳以上」で女性を上回るにすぎない。ヨーロッパの場合，特に20代では女性の34万1869人に対し男性13万6207人と，女性が圧倒的だ。また全体では男性の多いアジアも10〜20代では女性の方が多い。だが30代以上では男性が上回り，ヨーロッパのように熟年世代になって再び女性層を下回ることもない。

20代における女性優勢は，北米，南米，オセアニアでもほぼ同じ傾向だが，30代に入ると男女ほぼ同数となり，35歳以上では逆に男性が圧倒的となっていく。

期待かかる世代間の需要平準化

男女別に訪問者の多かった順にデスティネーションを並べてみてもアメリカ，韓国の強さが際立つが，イギリス（女性では7位，男性では12位），フランス（女性8位，

総出国者数と男女別シェアの推移



男性13位）と欧州勢は女性の支持の強さが改めて分かる。一方，男性訪問者が圧倒的に多いのは，フィリピンの男性20万人に対し女性4万人，タイの男性30万人・女性18万人，台湾が男性55万人・女性19万人など　女性旅行者の総数が拡大基調にあるなか，こうした男性層に偏重気味のデスティネーションには，女性マーケット拡大の余地がまだ大きく残されていると言えよう

また，女性マーケットと一口に言っても，20代の旅行熱が冷めるかのように，30代から熟年世代に入るまでの層は，またまだ男性訪問者が主流となっている。こうした「空白」の年齢層の掘り起こしも海外旅行マーケット全体の課題だが，ここ数年マーケットを引っ張ってきた20代女性層は（彼女らが年を経るごとに）今後も各世代における先導役として頼もしい存在と言える。家族旅行市場の伸びる余地もまだまだ大きそうだ。

1994年の日本人出国者総数は，前年比13.8%増・1357万8934人と過去最高を記録したが，95年についても，既に国際観光振興会（JNTO）では「1～8月の成長率（前年比11.7%増）を維持できれば，95年は1500万人達成が確実」との予測を発表している。

（統計データの詳細は，46～53ページに掲載）

注）　法務省によると，統計データは出国時に旅行者が記入したEDカードから渡航先名を集計しており，1回の渡航当たりの渡航先は1カ国（地域）に限定される（2つ以上の渡航先が記入されている場合は，1つ目の渡航先のみがカウントされる）。このため数カ国（地域）を周遊する場合，あるいは直行便のないデスティネーションについては，受け入れ側の観光局統計などとの間で誤差が生じることになる。

CLIPPING VOUCHER

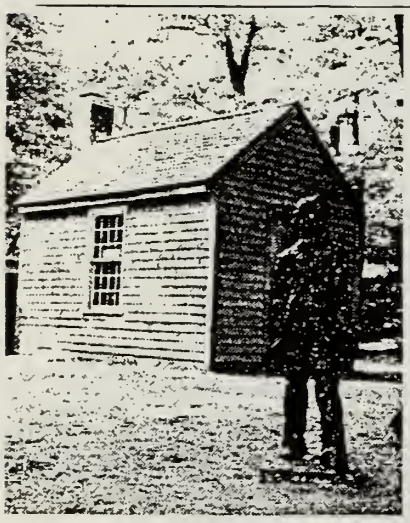
Medium: Asahi Shimbun Date: November 7, 1995

Subject: Henry D. Thoreau still has great appeal to the people in mordern Japan. Ref. Press Release No.:

A great writer of 19th century American literature, Henry D. Thoreau is getting popular recently in Japan. This boom is probably caused by a reaction of bubble economy. His simple life style in the nature impress all kinds of people. He was born in 1817 in Concord, Massachuesetts. He moved by the Walden Pond right before his 28th birthday. He built a house by himself and started self-sufficient life. Then he wrote "Walden - Life in a wood" and it was published in 1854. Thoreau became popular during Meiji era in Japan. Kanzo Uchimura extoled him as a remarkable poet in nature. According to Minoru Iida, a professor of Shinsyu University, they started to translate Thoreau's stories in 1911 and there are twelve kinds of translations in total and there are four kinds of translations of "Life in a Wood". It's been 30 years since Mr. Higashiyama, former professor of Kansai Gakuin University established "Japan Thoreau Society" and there was a memorial reception held in Kyoto in this October. The member of the society is 150 in total. Although it is a society of researchers in English literatiure, there are a lot of members who are interested in Buddhism. In addit ion, female members are increasing recently. Thoreau's work was reevaluated during the second war. Thoreau was critical of U.S. government because of it's slave system and Mexico War and refused to pay tax and was put into jail. Thoreau became popular again in 60's among conscription evaders, ecologists and hippies because of his interests to Asian philosophy. In 80's," Nature Writing" was estabilised as one of the fields of literature, This new style of literature became popular in Japan and many of the books were translated and published in Japanese. "In this kind of environment, people started to evaluate Thoreau as father of "Nature Writing" and more of his books were translated. In 1992, "Literature and Environment Institute" was established in U.S.A . Last year, same institute was estabilised in Japan by Kenichi Noda, assistant professor of Kanagawa University. In addition, five publishing companies which are making efforts of this boom established "Nature Writing Association" and are trying to get more readers considering this mountain climbing boom among old and middle aged people. However, recent Thoreau boom is not only caused to people's interested in environment . Thoreau was devout christian but was interested in Indian and Chinese thoughts because of Emarson.Thoreau's stories include religion and philosophy, therefore readers never get bored" says Mr.Noboru Mukawa, a professorof Nagano National Institute of Technology.Thoreau's stories remind us "Ideas ofhonest poverty" shich was written by a philosopher Koji Nakano. " Zen and American philosophy" by Van Aims in 1962 was also translated in this September. It is obvious that Thoreau did not know about Zen however he was introduced as an American Taoist in this book. Yuji Nakata, a translater of this book and a professor of Kounan Women's College says that this boom could tell a movement to the next generation, bubbly society to inteligent society. A big hit of" Sophie's World" and popularity of Thoreau are probably due to the same reason.

森の詩人ソロー、衰えぬ人気

翻訳相次ぎ、日本の学会も30周年



十九世紀アメリカ文学のヘンリー・D・ソロー（写真下）の翻訳や研究の出版が続いている。自然の中で暮らした質素な生き方が、バブル時代への反動もあってか、年齢や性別をこえて共感を呼んでいるよう。十月には、日本ソロー学会の三十周年記念大会が開かれたばかりだ。

一八一七年、マサチューセッツ州コンコードに生まれたソローは、二十八歳になる直前、村から遠いウォールデン湖畔に移った。自ら建てた小屋で自給自足、晴耕雨読の二年余りを過ごしたが、その思索の記録である『ウォールデン・森の生活』は一八五四年に発行され、世界の自然愛好派に読み継がれた。

日本のソロー研究は明治時代に始まり、内村鑑三は「非凡の天然詩人」と絶賛した。一九一一年の水島耕一郎訳から始まって、今年九月に出た岩波文庫新版まで、その翻訳にあたった飯田実・信州大学教授によると、これまでに十二種類の邦訳が出ている。佐渡谷重信訳の講談社学術文庫版など、現在も四種の『森の生活』が手に入る。

故・東山正芳関西学院大学教授らが育てた日本ソロー学会（会長・徳座晃子東京経済大学教授）は創立三十年を迎え、十月に京都で記念大会を開いた。会員は約百五十人。英米文学研究者の集まりにしては、仏教に関心のある学者も多い。最近は女性の発表がふえている。

知的な生き方求めて

二十世紀の米国では、第二次世界大戦直後に再評価された。奴隷制度やメキシコ戦争で政府を批判、税金支払いを拒否して投獄もされたソローに進歩的な人々が共感したのだ。六〇年代には、ベトナム戦争の良心的徴兵拒否者の「先輩」として、また環境保護への関心から読まれるようになる。東洋哲学への傾斜が、ヒッピーに注目された。

八〇年代には、自然を題材にした「ネイチャーライティング」が文学ジャンルとして確立された。環境問題や自然を女性の目でとらえ直す作品もふえた。

その流れは日本にも伝わり、レーチェル・カーソンだけでなく、ジョン・ミューア、エドワード・アビー、テリー・テンペスト・ウィリアムスら、自然を考える著作が相次いで訳された。ソローの遺稿『森を読む』を訳した伊藤詔子・広島大学教授は「そうした中で『元祖ソローをもっと読みたい』との空気が強まり、出版がふえたのでしょう」と分析する。

米国では「文学・環境研究会」（ASLE）が九二年に設立された。日本でも同じ組織が昨年、野田研一金沢大学助教授を代表に発足した。この分野に力を入れる出版五社が「ネイチャーライティングの会」を作り、読者をふやそうともしている。中高年の登山ブームなど、社会的条件は整っているらしい。

しかし、最近のソローの読まれ方は、環境への関心だけでもないようだ。キリスト教の精神を大切にした人だが、エマソンの影響もあって、インドや中国の思想に関心が高い。六川信・国立長野工業高専教授は「宗教や哲学があってこそ飽きない」と指摘する。簡素で知的な生活は、九二年にベストセラーになった作家・中野孝次氏の『清貧の思想』も思い起こさせる。

米国の哲学者バン・エイムズが六二年に発表した名著『禅とアメリカ思想』の翻訳も、この九月に旺史社から初めて出版された。ソローは禅を知らなかったはずだが、あえて「アメリカの道教徒」として一章をさき、鈴木大拙のソロー観などを紹介している。

訳者の中田裕二甲南女子大学教授は「浮ついた社会から、知的な生き方を求める時代に移っている感じです。『ソフィーの世界』が売れているのも、ソローの根強い人気も、同じ背景かもしれません」という。

そのヨースタイン・ゴルデルの『ソフィーの世界』にも、北欧の森に囲まれた湖畔で、一人で暮らす哲学者が登場していた。

（菅原　伸郎）

ウォールデン湖近くに、ソローの小屋が復元されている。「最近、銅像も建った

Fuji Evening News
11/10

世界の街角から

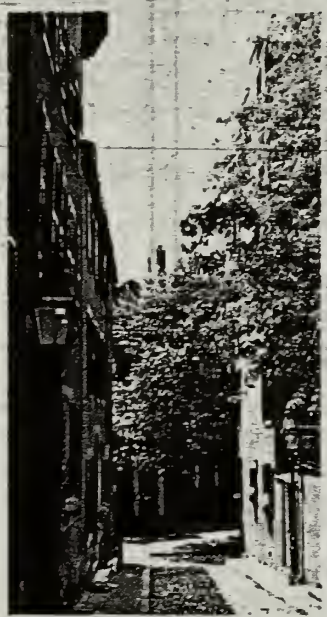
ボストン編

ここはアメリカ人の原点だ

自由と平等の国、そして移民の国でもあるアメリカ。その歴史の1頁を飾ったのがボストンのあるマサチューセッツ州である。

1620年12月16日、ボストンから南東約60㌔にあるプリマスという港町に「メイフラワー号」が着き、アメリカ大陸で最初の植民地を開いた。つまり、マサチューセッツ州はアメリカ人の原点、サンクチュアリ（聖域）でもある。

そのマサチューセッツ州の中心がボストン。街には独立革命の史跡が豊富に残っており、道路に描かれた赤いラインのフリーダム・トレイル（自由の足跡）に沿って歩けば、市内の史跡ポイントを巡ることができる。



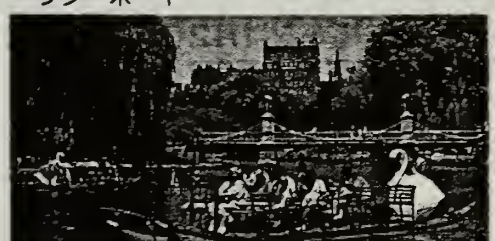
ボストンで最も古いエイコは、かつてはストリート。馬車道だった

独立戦争の史跡たっぷり

そのスタート地点が、ダウンタウンの真ん中にひろがる「ボストン・コモン」と呼ばれるアメリカ最古の公園だ。すぐ横には市民の憩いの場所、パブリック・ガーデン（植物園）がある。花や緑にあふれ、恋人たちの格好のデート。ボート。ガーデン中央にある池をのんびりと行き交う白鳥の形をしたボートで、ボストンの風物詩となっている。乗船料も一人約150円と格安だ。

ボストンは地下鉄もバスも充実しているから、気軽に史跡を訪ねることができる。でも、初めての人はフリーダム・トレイルの史跡やダウンタウンの観光名所をガイド付きで巡るトロリー・ツアーがお勧め。1周すると約1時間。料金は1500円ほどだ。

「ボストン・コモン」の池に浮かぶスワン・ボート



ここの名物は、スワン・トコースとなっている。

このツアーでは、ボストンの新しい顔ウオーター・フロントにも立ち寄るが、ここで覗いてみたいのが「ニューイングランド水族館」。大阪の「海遊館」のモデルともなった世界的に有名な水族館だ。

食事をするなら、やはりロブスターや生ガキなどのシーフード。「リーガル・シーフード」と書かれたレストランは街の中のいたるところにあるから、見つけたら立ち寄ってみよう。

名物のクラム（あさり）チャウダー（約400円）と、ロブスター（1匹約1800円）は、ぜひ試してほしい。

（山科百合子）

Fuji Evening News

11/17

世界の街角から

ボストン編

世界の頭脳集合

約100カ国から1万6000人

ボストンには「アメリカ最古」といわれるものが多い。1636年に建設されたハーバード大学も、そのひとつで、ボストンとはチャールズ川を隔てた学園都市ケンブリッジにある。

この地域には、マサチューセッツ工科大学（MIT）など約60近い大学が集まっている。ボストン生まれのエリート、ケネディも学んだハーバード大学には学生や職員を含めて約100カ国、約1万6000人の人々がいる。

知的雰囲気を味わいたい方は、ぜひキャンパスに入ってみよう。といっても、そこにいる学生たちは一見すると、どこにでも見られる若者たち。

それでも、時おり書物を抱え、ステッキを突きながら歩いている教授陣を見ると、アインシュタインのような風情と味わいがある。さすが、世界の頭脳を集めた大学と思い知らされた。

キャンパスに入ったら、「フォッグ美術館」をのぞいてみよう。世界4大美術館のボストン美術館ほど有名ではないが、ルノワールやモネ、マネ、ドガ、ピカソ、セザンヌなどの絵画作品が揃っており、〝穴場〟的な美術館だ。月、祝日を除く毎日10時から午後5時まで開いている。

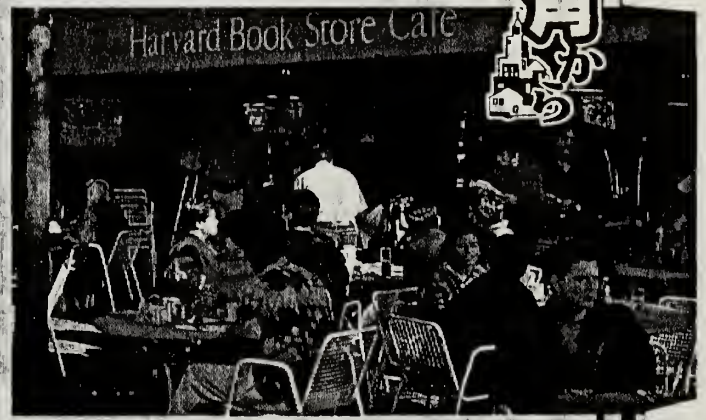
もうひとつのおすすめは「ハーバード大学自然史博物館」。植物学、比較動物学、地質学、考古学など、地球上のあらゆる生物についての研究が展示、紹介されている。

キャンパスには、おしゃれなレストランやカフェ、ブックストア、プティックなどが並ぶハーバード・スクエアがあり、いつも学生グループなどのパフォーマンスで賑わっている。

青空の下につくられたカフェでカプチーノなどを飲みながら、分厚い学術書を読んでいる学生、カップル、観光客…。ここにいると、学生時代にトリップしたような気持ちになる。

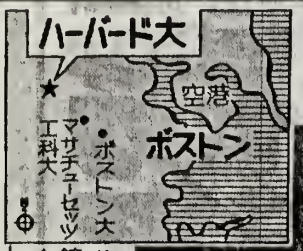
スクエア内にあるファストフードの店「オー・ボン・パン」は焼き立てのフランスパンや、おいしいコーヒーなどが飲めるボストンの人気を持つパン屋さんチェーン。フレッシュオレンジの搾り立てジュースと、ローストビーフのサンドイッチ（これがとても美味）、コーヒーを注文して、なんと500円。

いちど食べたら病み付きになる。ボストン市内にもあるから、ぜひ立ち寄ってみよう！（山科　百合子）



ハーバード・スクエアの書籍店やカフェが並ぶ

ハーバード大学の図書館。この図書館も「アメリカ最古」だ



CLIPPING VOUCHER

Medium: NEWSWEEK Date: November 11, 1995

Subject: Legacy of Freedom Ref. Press Release No.:

If you walk in the city of Boston, you will notice the red line on the road. It is Freedom Trail. It connects the historical building related to American Revolutionary War.
Boston is well known as the high technology city but at the same time, it is the city of history. The newest and the old things live together in this city.
Same as President Kennedy, there are many poeple from Ireland here.
It locates in the north east on USA and weather or landscapes are similar to those in Ireland. The nature in winter is very severe, but it is rich.
Lobster, oyster, clam, cod, tuna, Boston Harbour is rich with its seafoods.
Boston is the city where town people live and enjoy its life.
Pat O'Neil is CPA. He lives in the suburb of Boston and his wife is PR person of Boston Globe. They are both busy in weekdays, but in the weekend, they enjoy their life with their children.
One of the weekends in September, he and his family went out for the short trip with his Legacy.
If it is not so cold, the best place to go is the beach side. You can dip the small hole in the beach. Stones will be put inside the hole. Make the fire for one or two hours. When the stones are heated enough, sea weeds will be put there and then lobsters and clams. It is the typical New England picnic dish, Clambake.
Next morning, they took the ferry to Matha's Vineyard. They were invited by Mr. Arny Bock, the dealer of the car, a frind of Mr. O'Neil.

(In the last page, B & B s near the sea are introduced. Also L.L. Bean shop, Legacy in Beacon Street are shown by photos.)

Legacy of Freedom

アメリカの原点ニューイングランド地方。
自然の厳しさと自然の恵みをあわせもつこの地を
レガシィという名の車が行く

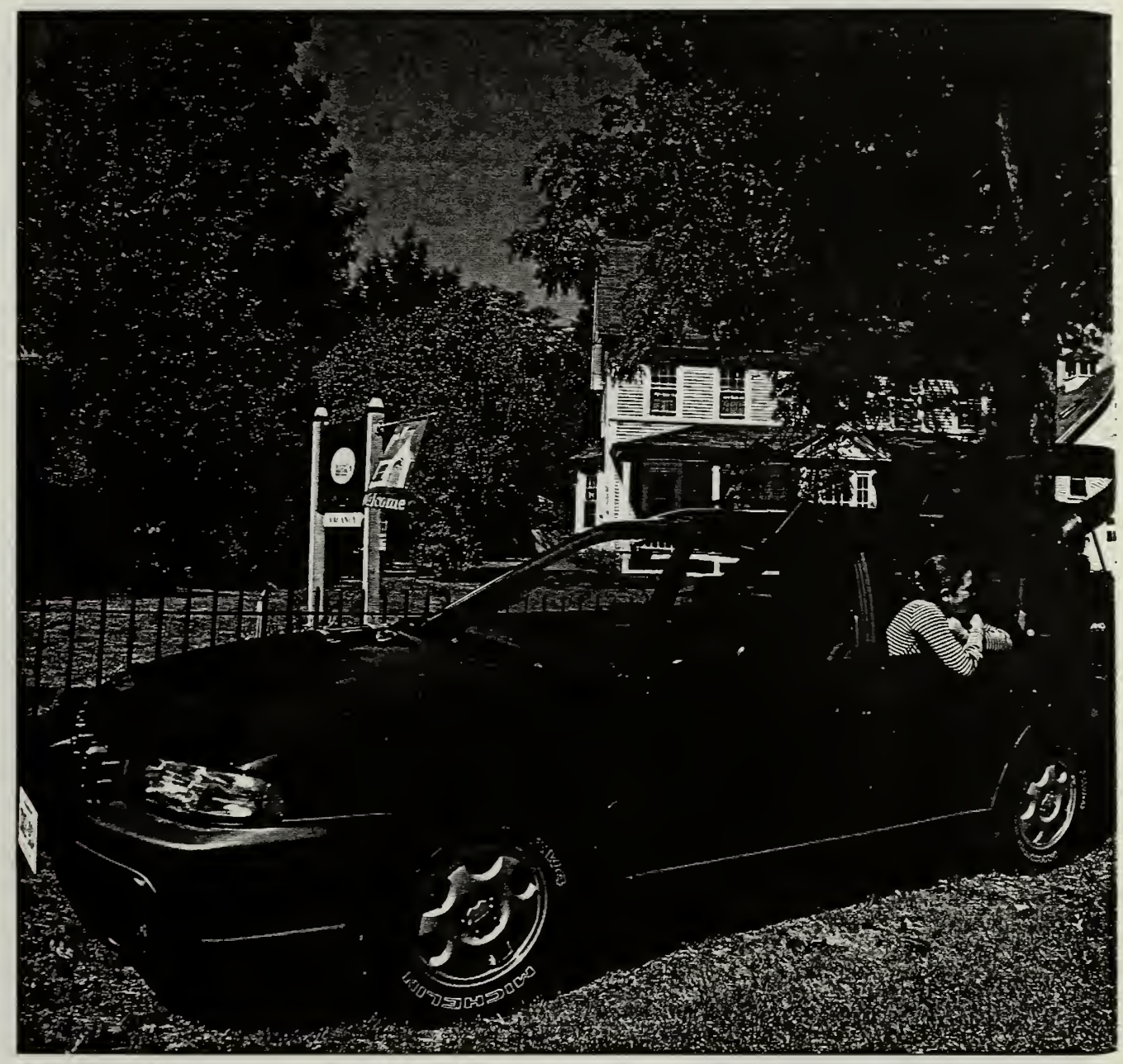
独立戦争時代の建物が数多く残る伝統と、西のシリコンバレーに負けないハイテク産業と。古さと新しさの共存するボストンは、90年代のライフスタイルを模索するアメリカの「今」を最も強烈に感じさせる街。そこに生きるある家族の週末を追った。

ボストンの旧市街を歩くと、一部の歩道に赤いラインが引いてあるのに気づく。フリーダム・トレイル、「自由の道」だ。踏まれて一部かすれた赤い線は、独立戦争時代の由緒ある建物をつなぐ歴史散策コース。アメリカ人なら一度は、フリーダム・トレイルをたどって往時に思いを馳せたいと思う。ボストンは西のシリコンバレーと並び称されるハイテク産業の集積地だが、そこは同時に歴史の街でもある。時代の先端と、歴史のレガシィ（遺産）が共存する街と言えばいいか。

故ケネディ大統領もそうだったが、このあたりにはアイルランド移民の血を引く人たちが多い。アメリカ合衆国の北東部に位置し、海に接する風土や気候が、アイルランドのそれと似ているからかもしれない。冬の自然は厳しいが、そのかわり自然の恵みもたっぷりある。ロブスターに始まって、カキやハマグリ、タラ、あるいはツナ。ボストン湾は海の幸の宝庫だ。

荒々しい自然と洗練されたヨーロッパ的な市街が隣り合うボストンは、ゆとりを楽しむことを知っている都会人の住む場所だ。バット・オニール（42）は公認会計士。郊外住宅地から市内の事務所へ車で通っている。妻は地元の名門新聞ボストン・グローブの広報担当。

二人とも仕事は忙しいが、週末はできるだけ子どもたちと一緒に過ご



週末の家族旅行には気さくで飾らないB＆Bがいい (courtesy The Kendall Tavern B&B; 213 Main St., Freeport Tel. 207-865-1338)

す。九月半ばのある週末、オニール一家は愛車レガシィのグランドワゴン（現地名・アウトバック）にバーベキュー・セットを積んで1泊の小旅行に出た。

気さくな宿に荷物を降ろす

そう寒くない季節なら、週末は浜辺に出るに限る。朝、食事抜きで出かけて、まず砂地に穴を掘る。五、六人なら直径五〇センチ、深さは一メートルくらいでいい。掘った穴の内側は、メロン大の石で固める。この作業だけで、秋でもけっこう汗をかける。それから穴の底で火を起こす。石が真っ赤に焼けるまで、一時間か二時間はかかる。

頃合いを見て火種を取り出し、波打ち際から集めてきた海藻を放り込む。強烈な水蒸気が上がるけれど、めげてはいけない。ここへ、布袋に入れたロブスターやハマグリをぶち込むのだ。その上にまた海藻を乗せ、さらに皮つきのポテトやトウモロコシ、ぶつ切りのタマネギなどを、これも袋に入れて放り込む。仕上げに海藻で蓋をして、防水布をかけて石で重しをする。熱い水蒸気が逃げないよう、手早くやるのがコツだ。あとは待つのみ。ポテトに串が通るようになれば、磯の香りをたっぷり含んだ蒸し焼きの出来上がりだ。

これがニューイングランド地方伝統のピクニック料理「クラムベイク」。その昔、嵐の晩の翌朝には海

「自分がいいと思う車だけを売りたい」というアーニー・ボック氏。マーサズ・ビンヤード島の別邸で。自称68歳のボック氏が率いるスバル・オブ・ニューイングランドは、全米に7つあるスバル販社中、最大規模。大の車好きで、傘下に50を越すスバル車専売ディーラーを抱えている。

PHOTOS BY KASHO KUMAGAI

辺の家の軒下にロブスターが山をなしていたと言われる土地柄だけに、なんとも豪快。パットも幼いころ、浜辺で穴を掘った記憶がある。

さすがに今は穴は掘らない。それでもパットは浜辺のバーベキューにこだわる。この地方にしかない伝統の味を、なんとか子どもたちに伝えたいと思うからだ。

伝統といえば、家族旅行で泊まるのもイギリス流のB&B（ベッド・アンド・ブレックファスト）だ。家庭の延長のような雰囲気の宿で、宿泊客にだけ朝食をサービスするのがB&B。ホテルより肩がこらないし、経済的でもある。夜は、宿の気さくな主人と釣り談義で時間のたつのを忘れるのもいい。

運転する楽しみの極致

日曜日。朝食を済ませたオニール一家は車を走らせ、フェリーで高級保養地のマーサズ・ビンヤード島に渡った。島に別邸を構えるアーニー・ボック氏から、遊びに来ないかと誘われていたからだ（昨年まではクリントン大統領一家も、この島で夏休みを過ごしていた）。

アーニー・ボック氏はニューイングランド地方で五三のディーラーを統括するディストリビューター。パットは会計士の仕事の関係で、もう一〇年来のつき合い。いま乗っているレガシィ・グランドワゴンも、つい最近、彼の店から買った。

ボック氏、このあたりではちょっとした名士である。アメリカの場合はディーラーが複数メーカーの車を扱うのが常識だが、彼の率いる店は大半がスバル車の専売店。スバル車との出会いは二〇年以上も前で、四輪駆動の走りに"fun to drive"（運転する楽しみ）の真髄を見たという。専売店が多いのは「自分がいいと思う車だけ扱いたいから」だ。

*

西のカリフォルニアによく似合うのが大型のトレーラー・ハウスだとすれば、ボストンを中心とするニューイングランド地方には、遊び心を内に隠したグランドワゴンがよく似合う。夏休み以来の家族旅行でリフレッシュしたパットは月曜の朝、いつもより早めに家を出て、ビーコン・ストリートにあるオフィスへ向かった。バーベキューのセットは、後ろに積んだままだ。

海辺に近いB&B

ふだん着のまま、車でさっと乗りつけて、疲れた体をやすめ、翌朝はアットホームな朝食を。ボストンから車で行けるB&Bを、いくつか紹介しよう。

BATH地区（ミッドコースト）

1024 Washington B&B
1024 Washington St. (443-5202)
Bath B&B
944 Middle St. (443-4477)
Captain Drummond House B&B
Parker Head Rd., Phippsburg Ctr. (389-1394)

BRUNSWICK 地区（ミッドコースト）

Bethel Point B&B
Bethel Point Rd. 2387 (725-1115)
Coastal Lifestyle
88 Harpswell St. (725-2670)
Dove B&B
16 Douglas St. (729-6827)

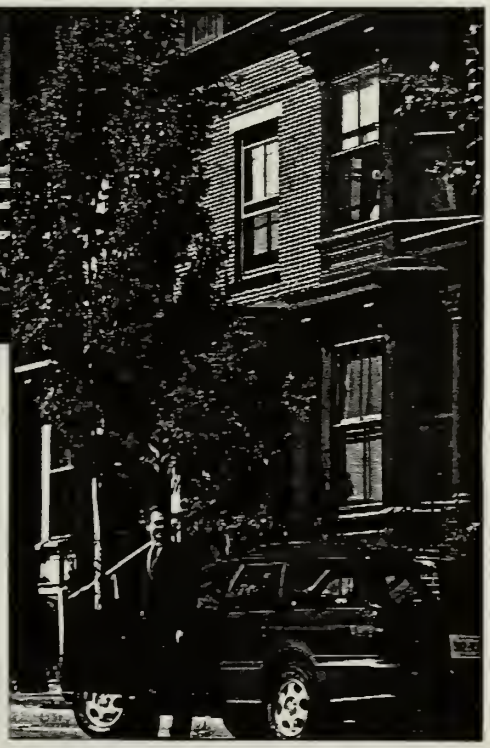
FREEPORT地区（サウスコースト）

Atlantic Seal Cruises B&B
25 Main St., S.Freeport (865-6112)
Country at Heart B&B
37 Bow St. (865-0512)
Freeport Inn
335 U.S. Route 1 (865-3106)

PORTLAND地区（サウスコースト）

Andrews Lodging B&B
417 Auburn St. (797-9157)
Cushing Homestead B&B
Beach Ave., Long Island (766-2846)
Quaker Tavern Farm B&B
377 Gray Rd., Rt.26-100 (797-5540)

ボストン湾は魚介類の宝庫。とりわけ有名なのがロブスター。海辺の家だと、昔は嵐の晩の翌朝に外へ出ると、軒先に打ち上げられたロブスターが山をなしていたという。



〔上〕途中で立ち寄ったLL.BEANの店。通信販売で有名なLL.BEANが店を出しているのはここだけだ。〔右〕ボストン市内のビーコン・ストリートで。洗練されたスタイルのレガシィ・グランドワゴンは、こんなエレガントな街並みにもしっくりくる。

GRAND WAGON STYLE

SUBARU.

CLIPPING VOUCHER

Medium: Weekly Travel Journal Date: November 27, 1995

Subject: A technical tour in Boston Ref. Press Release No.:

I have met many people through my work up to now. One of them is a planning director with a famouse department store in Japan. He is a perfect Japanese businessman and is willing to learn new things and acts soon after he gets something interesting. One day, somebody mentioned about world-famouse lobsters in Maine, USA. He planned to transport the lobsters by air and compare with Japanese lobster. We loved the lobsters from Main and discussed about new business importing them.

One of his assistants did marketing reserch regarding the lobster and found a restaurant named "Pier 4" in Boston. We made a plan to go to Boston and gave the tour an ostentatious name,"Technical Visit tour of American and Canadian marketing system and restaurant business". We finally reached to Pier 4 which located on the bridge toward the Boston Harbor. Thousands of wine battles were stored on the walls of the restaurants. We had 2-pound boiled lobsters with salt,pepperand lemon. The owner showed up and started to tell us about his hardships to reach his success now and he seemed like he did not understand the intensions of our visit. However, we had fun drinking good wine and enjoying lovely lobsters and left the restaurant with hope to open same kind of restaurant in Japan.

After the tour, the businessman tried so hard to open the restaurant, however could not realize his dream due to many problems. I was very disappointed about it because I wanted share the good time to achieve our goal with my friends from the technical tour.

CLIPPING VOUCHER

Medium: Travel Journal Date: November 27, 1995

Subject: White House Conference on Travel & Tourism Ref Press Release No.:

US tourism industry generated $21 billion of revenue in 1994. However, tourism industry has gained very low recognition as an important industry in US economy. Thus, the purpose of White House Conference is to plan long term strategies to sustain the growth of tourism industry which is crucial in US economy.

Nine committees (Research, Technology, Infrastructure, Product Development, Promotion, Removal of barriers, Security & Safety, Concern for environment, Education) were organized to discuss about problems of US travel & tourism industry. At the same time, fifty states and five territories discuss about nine themes and problems as follows.

Four Goals

1. Demonstrate the economic powers of the travel & tourism industry
2. Ensure an American Travel Experience that is second to none
3. Promote and facilitate travel to the United States as the international destination of choice
4. Create a structural framework to implement the national tourism strategy

Ten Subjects

1. Demonstrate the significance of travel & tourism industry in US economy
2. Execute reliable data on economic analysis
3. Facilitate people's recognition that tourism industry generates enourmous employee opportunities
   Increase and improve educational opportunities and its quality
4. Preserve natural, cultural and historical resources
5. Efforts to reduce anxiety of tourists about security & safety
6. Use advanced technology effectively in order to enrich tourist's experience
7. Secure transportation system and infrastructure
8. Reduce barriers in immigration and smooth the access to other local cities from gateway in US
   1) Prepetuate the action to exempt visa to enter US
   2) Accelerate the custom procedure and simplify immigration by impliciting "Impass"
   3) Promote the improved "Accessibility" following ADA Act implemented in 1990.
      Remove barriers of disabled tourists
9. Establish "Visit USA Inc." to replace USTTA
10. Create and establish the partnership between public and private the sector in tourism industry

President Clinton stated in his speech that travel and tourism industry has been influential in US economy. He stressed it is important to attract international tourists to US, and mentioned about the project to double the number of tourists between US and Japan.

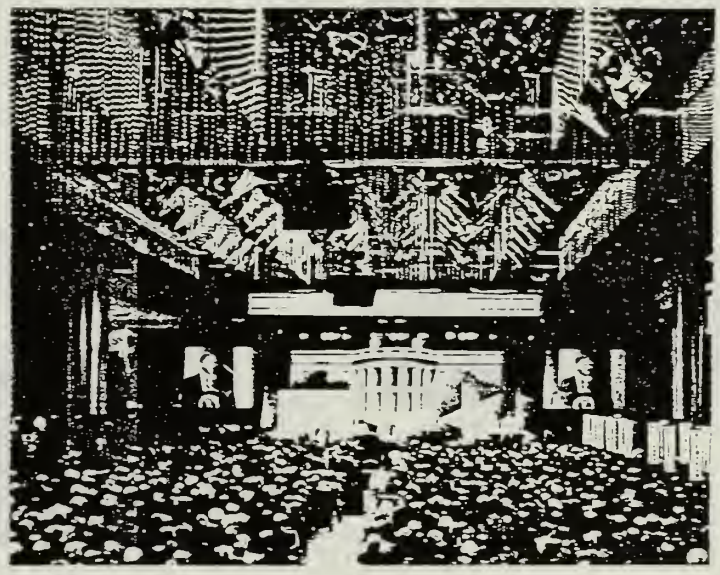
The main purpose of the conference was to choose working plans with the priority to be implemented by vote. Primary countermeasure are as follows.

1. State tourist bureaus and local visitors bureaus obtain the common recognition toward economic effects of tourism industry and the significance of tourism industry by communicating closely each other.
2. The Depertment of Commerce of the United States leads to establish the common code in travel and tourism industry within three years.
3. TIA (Travel Industry Association) takes an initiative to develop curriculum for middle and high level educational institutes regarding tourism.
4. The Committee of state tourist bureaus continue to hold local summit on preservation of natural and cultural resources till 1988 in order to plan management policies and operational strategy which meet local needs.
5. TIA takes an initiative to expand toll free services including emergency assistant services in foreign languages and visitor information services in cooperation with telecommunication company.
6. The Federal Government of US takes an initiative to promote the usage of technology to help tourist acitivities in US.
7. The Congress offers financial support for the development of transportation system and infrastructure.
8. Perpetuate the pilot program to exempt visa perpetually.
9. Establish "Visit USA Inc." to make organized frameworks to reserve budget and work on the congress for the legal admission.

緊急レポート

ホワイトハウス・コンファレンス（全米旅行・観光会議）開催される

脇役から主役へ――アメリカの“目覚め”の時がきた



10月30，31日の2日間，全米各州の官民代表1700人がワシントンに参集し，史上初めての“White House Conference on Travel and Tourism（全米旅行・観光ホワイトハウス会議）”が開催された。

この会議では，今までその形態・業務があまりにも多岐にわたり社会的認知度も低かった旅行観光関連産業を，大きな“一つの産業”として結集し，さらには将来への課題解決に向けて官民の力を結集することによって業界全体のより大きな成長・発展を目指す，ことが決議された。

初日にクリントン大統領，2日目にはゴア副大統領がそれぞれ熱心に旅行・観光産業への支持と期待を表明。これによって会議は大いに盛り上がり，ホワイトハウス・コンファレンスは，まさにアメリカンドリームとチャレンジ精神をダイナミックに表現する歴史的なイベントとなった。

この会議には，世界各国から50人の代表が招かれた。日本からは，郡司亮一・JATA（日本旅行業協会）会長，小竹直隆・JTBアメリカス会長，PATA（太平洋アジア観光協会）代表として菅原清美・ジェットツアー社長，そして主催者側としてサンドラT.蒲生・米国商務省観光局（USTTA）日本アジア地区支局長が参加した。同会議開催に至るまでの背景と当日の模様を，以下に速報する。

（本誌特派員・野澤浩子）

1. 背景

米国観光産業は，1994年に210億ドルの“貿易外”国際収支黒字，雇用機会供与は全産業中第2位という実績を上げながら，国際旅行市場では3年連続でシェアを落としてきた。ここで観光産業が米国の経済・社会に与えるインパクトを徹底的に再認識し，“21世紀産業”として観光産業の成長を支えるべく，長期的戦略を立てよう……これが，米国観光産業史上初めて大統領名で招集されたホワイトハウス・コンファレンスの主目的である。

この会議が開催されるまでには，18カ月の長い準備期間があった。会議開催決定後，まず9つの委員会（リサーチ，テクノロジー，インフラ整備，商品開発，プロモーション，障壁の排除，安全と治安，環境への配慮，教育）がホワイトハウス・コンファレンス委員会によって編成され，おのおのの9つのテーマについて米国観光産業が抱える課題や問題点などを検証，ご取り上げた。

これと並行して，全米50州と5つのテリトリーでもそれぞれ独自の立場からこの9つのテーマへの取り組みが開始され，官民を挙げた議論を積み上げてきた。これら9つの委員会と各州の協議の結果を受けて“Proposed National Tourism Strategy（米国観光戦略への提案）”としてまとめられ，これがコンファレンスの[illegible]

2. 4つの目標と10の課題

これらの提案を受けて[illegible]は下記の4つの目標を掲げた。

- 目標1 観光旅行産業が持つ巨大な経済的パワーを実証する
- 目標2 訪問者の米国での旅行経験が最高のものになることを確約する
- 目標3 国際旅行者がデスティネーションとしてアメリカを選択するよう尽力し，外客誘致を促進する
- 目標4 以上を実現するために，戦略的な目標と問題提起の枠組みを作る

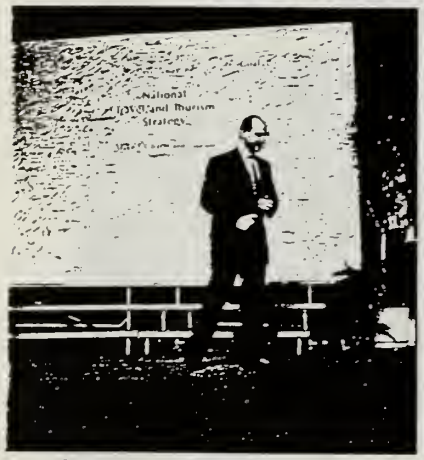
そして，この目標に向[illegible]産業が抱えている課題[illegible]わたってご取り上げ，これ[illegible]ように取り組むこととなった。

●新しい産業としての観光[illegible]の認識を広める
●[illegible]産業の育成
●安全で快適な旅行を提供するための教育
●[illegible]
●[illegible]
●[illegible]
●USTTA，[illegible]

[illegible]

3. クリントン大統領の演説

[illegible]



あふれた産業として国を動かす原動力になりつつある」と明言。国際観光交流倍増計画にも触れた。そのほか、旅行・観光促進のためにも、テロリズムの撲滅、治安の改良が急務であること、連邦政府のみならず観光産業界と地方自治体の官民協力態勢"Partnership"の重要性を強調した。

最後に、このコンファレンスの重大な意義は「連邦政府が業界の声を聞くこと」にあるとし、来年のアトランタオリンピックを機に世界の注目を集めるアメリカ観光産業の今後の発展を、熱意を込めて激励した。スピーチ後、クリントン大統領が壇上に掲示された「4つの目標」にサインをすると、万雷の拍手が数分間鳴りやまなかった。

2日目のゴア副大統領のスピーチは、クリントン大統領の言う"Partnership"の重要性を再度強調した上で、米国観光産業振興のために施行された、来年以降本格導入されるビザ免除措置、および、"Inpass"導入による出入国手続きの簡素化、オープンスカイ政策の推進による航空総量の拡大と低運賃化の促進、などの具体例を挙げた。

コンファレンスの使命は、別掲の10項

4. ホワイトハウス・コンファレンスの意義

ホワイトハウス・コンファレンスの意義は多岐にわたる。

まず、「国家をささえる重要な産業として」観光産業の[illegible]を官民ともに再確認

「4つの目標」達成に向けての10の課題

1. **観光産業の経済的意義の明示**――観光業が、①1994年実績で2100億ドルの"貿易外"黒字、②雇用機会創出では全米産業中第2位、③小売ベースでは全米第3位の産業である、ことなどを具体的に明示し、観光産業の持つ大きなポテンシャルをクローズアップさせる
2. **大きな"一つの産業"としてインフラの充実を図るための、信頼できる経済分析、調査統計などのデータの作成**――①毎年に3470億ドルに上る観光産業に関する基本データを収集・分析を行う ②米国内での業界共通コードの設定や、国際的水準を設定する
3. **観光産業が生み出す巨大な雇用機会の認識と雇用増大の推進、ならびに、観光に関する教育機会の拡大と質の向上の推進、中・高等学校、職業専門学校、大学に至るまでの一貫した職業・教育訓練**――①米国が過去3年連続して[illegible]、17万7000人もの雇用機会[illegible]、観光産業は、未産業の中で雇用機会伸び率第[illegible]位であるというインパクトを再認識し、将来の発展に[illegible]教育・訓練の質の向上を図る
4. **自然・文化・歴史的資源の保全**――①世界に先駆け国立公園[illegible]の環境保全と観光開発の調和に対[illegible]する ②自然環境のみならず、多様[illegible]性を重要な観光資源として保全[illegible]
5. **旅行者が米国に対して持つ、安全・治安問題への懸念を軽減させるための努力**――[illegible]「犯罪大国」のイメージを払拭[illegible]旅行者が安心して旅行できるよう措置を講ずる ②米国内における防犯対策は、旅行の妨害にならないよう配慮しながら安全を確保する
6. **訪問者の旅行経験をより豊かにし、スムーズに旅行が行えるようにするための最先端テクノロジーの導入と有効利用**――①旅行産業界の進歩的テクノロジー開発を、訪問者の旅行経験の質の向上につなげるために積極的に活用する ②官民共に先駆けたテクノロジー導入を心がける
7. **米国内の交通システムおよびインフラ整備の促進**――増加し続けるデマンドに対して適切なかつ[illegible]投資を行う ②時代遅れの空港施設の改修を行うとともに、ノウハウを蓄積・普及する
8. **米国出入国の障壁削減と国内各デスティネーションへのアクセス改良**――①[illegible]ビザ免除プログラム[illegible]の恒久化を図る ②"Inpass"[illegible]による出入国手続きのスピードアップを実現化する ③[illegible]ADAなどの改正に際しては、[illegible]アクセス[illegible]なる推進 ④[illegible]障害者のための[illegible]
9. **USTTAに代わる新組織"Visit USA Inc."の設立実現**――①USTTA[illegible]新組織[illegible]の情勢のもとにおける[illegible]として"Visit[illegible]をかける
10. **観光産業における官民パートナーシップの創造と確立**――上記の課題[illegible]する一つの[illegible]

から長原副会長、ヒトツアー社長、ブラウンWTTC会長、竹田JTB会長、ルカス会長

したこと。その一方で、①米国観光産業が国際観光においてマーケットシェアを失っていることへの危機感を共有したこと。②それへの対応策について全米官民を挙げて取り組むことを決定した点。そして、③観光産業は、旅行、交通、宿泊、飲食など、様々な産業セクターから成る『アンブレラ・インダストリー』だという既念があったにもかかわらず、それぞれが固有の利害にとらわれて孤立しがちな現状を認めた点。④その現状から脱却し、業種を超えた"一つの産業"として活性化を促進し発展させていこうという意欲を共有したこと、が挙げられる。

そして何より、⑤観光産業の経済波及効果の拡大と社会的地位の向上に向け、官民一体となって、その実現に向けて立ち上がろうという「ナショナル・コンセンサス」を作り上げたこと、が、このコンファレンスの最大の意義だったと言えよう。

本会議での成果を、ファーマー商務省観光担当次官は"Just a beginning"（始まったばかりだ）と表現したように、このコンファレンスの歴史的評価がなされるのはまさにこれからだと言えよう。それに向かって進む上で新しい方向に踏み出されたことは一回も否定できないコンファレンスの開催がなければ、旅行観光産業はいまだ通り過ぎの中にあり、"wake-up call（目覚めの時）"は訪れなかったかもしれないのだ。

5. 日本へのインパクト

このコンファレンスが取り上げた現状分析と将来への問題提起・展望は、そのまま日本に当てはまるテーマと言っても過言ではない。したがって、このコンファレンス

ミカエル・ファーマー商務省観光担当次官補、アラン長崎副会長、ファーマー観光担当次官

の成果とそれに対する今後の動きを追っていくことは、日本の旅行・観光業界にも重要な参考になるばかりでなく、官民の様々な分野に多面的なインパクトをもたらすものと考えられる。

閉会後、日本代表として参加した副島JATA会長は「このコンファレンスのエネルギーに触れた、業種・官民挙げて、これだけ幅広い分野の関係者が、真剣に取り組もうとしている様子を肌で感じ、大変感激した。同コンファレンスに参加したことは、転換期にある日本の旅行・観光産業を見直すいい機会であり、期待以上の成果だった」として、「帰国後、直ちにこのコンファレンスについての報道や成果を報告し、日本でも同様の会議をできるだけ早い時期に開催し得るよう、環境を整える努力をしたい」と強い意欲を示した。

全員投票により決定した10項目への「最優先対応策」

1. 来年度から、州政府観光局と地域のコンベンション・ビジターズ・ビューローがパートナーとなって密にコミュニケーションを交わし、観光産業が生み出す経済効果についての具体例や観光産業の意義について共通した認識を持つこと
2. 向こう3年間で、米国商務省が音頭を取り、旅行・観光産業に含まれるすべての業種毎の個別コードを設定すること
3. TIA（米国旅行業協会）が中心となり、観光学教育に関する、中・高等教育機関のカリキュラムを、長期的展望を持って開発すること
4. それぞれの地域特有のニーズに合った管理方策や運営戦略を立てるために、全米観光局長委員会は自然環境や文化遺産の保全に関して地域レベルのナチュラル&カルチュラル・ツーリズム・サミットを1998年まで定期的に（シリーズで）開催すること
5. 97年1月までにTIAが中心となり、テレコミュニケーション業界の協力・指導のもと、緊急アシスタントサービスを含む他国語ヘルプライン、無料ビジター・インフォメーション・サービスを全米に普及するよう努力すること
6. 連邦政府機関が中心となり、米国内の旅行者動向がよりスムーズに行われるためのチェックポイントの強化を、来年1月から強化すること
7. 来年9月までに、議会が今後の交通政策面でのニーズに対して適切な資金援助を、インフラ整備を推進すること
8. 来年9月までに、現行の「ビザ免除プログラム」を恒久的に実施すること
9. 来年9月を目標に、新組織「Visit USA Inc.」設立実現へのきちんとした枠組みと、[illegible]議会が最終的認可を下すよう働きかけること

CLIPPING VOUCHER

Medium: Weekly Travel Journal Date: November 27, 1995

Subject: A technical tour in Boston Ref. Press Release No.

I have met many people through my work up to now. One of them is a planning director with a famouse department store in Japan. He is a perfect Japanese businessman and is willing to learn new things and acts soon after he gets something interesting. One day, somebody mentioned about world-famouse lobsters in Maine, USA. He planned to transport the lobsters by air and compare with Japanese lobster. We loved the lobsters from Main and discussed about new business importing them.

One of his assistants did marketing reserch regarding the lobster and found a restaurant named "Pier 4" in Boston. We made a plan to go to Boston and gave the tour an ostentatious name, "Technical Visit tour of American and Canadian marketing system and restaurant business". We finally reached to Pier 4 which located on the bridge toward the Boston Harbor. Thousands of wine battles were stored on the walls of the restaurants. We had 2-pound boiled lobsters with salt, pepperand lemon. The owner showed up and started to tell us about his hardships to reach his success now and he seemed like he did not understand the intensions of our visit. However, we had fun drinking good wine and enjoying lovely lobsters and left the restaurant with hope to open same kind of restaurant in Japan.

After the tour, the businessman tried so hard to open the restaurant, however could not realize his dream due to many problems. I was very disappointed about it because I wanted share the good time to achieve our goal with my friends from the technical tour.

旅行業外野席 第3回 豪勢なテクニカルツアー

オマールエビ対伊勢エビ

皆さんもそうであるように，私も会社人生の中で数多くの友人を得た。

その中の一人に，有名百貨店の企画部長さんがおられる――今は役員になっておられるが――。この方は，さすが一流企業の幹部だけあって，頭はシャープ。身だしなみは立派。それでいて感心するほどの気配りと，サラリーマンとしては満点の人物である。

私ごときがとても相手にしていただける方ではなかったが，たまたま空港問題でともに勉強する機会があり，紅い灯，青い灯の道頓堀でも楽しく遊ぶ仲となった。

部長さんは，何事につけても好奇心旺盛，また，きわめて積極的，行動的でもあった。

もう10年も前のことであるが，カナダに近いアメリカ東部のメーン州から，世界の美味と名高いオマールエビを生きたまま空輸したらという話が出た。

当社は――私は既に退職しているが当社と言わせてもらう――航空貨物の代理店もやっているので，「そりゃできますよ」と安請け合いした。

部長さんはすぐに活動開始である。

「そのオマールエビを30匹ほど空輸して，日本の伊勢エビと食べ比べてみましょうや」

「そりゃええですなあ。どこでやりまんのや」

「当社の関連会社のレストランのシェフに料理してもらいましょう。生きたエビやから，まずお刺身，次にボイル，最後の一皿はシェフにまかせましょう。あなたとこは，オマールエビを提供して下さい。私の方は，伊勢エビと，料理と，会場を引き受けましょう。うまく行けば，ええ商売になるかも知れませんよ」

当社担当のオマールエビの空輸は，いろいろ検討の結果，エビの大きな鉄にコムバントをはめて，暴れないようにし，十四すの濡れた新聞紙にくるんで保冷用のコンテナに詰めて送るのが一番簡単で確実という。

ただし，30時間以内には到着してほしいとのことで，担当者は，最も早く大阪に到着する航空便を探して空輸したが，果たして無事元気で「おエビ様」となるかどうかと前夜はよく眠れなかった由。

大阪で通関の時，長旅でお疲れ気味ではあったが生きた「おエビ様」に面会し，高速道路を一目散，難波のレストランに無事到着した時は，思わず万歳を叫んだそうな。

さて，この記念すべき日，両社からは，こんなお祭り騒ぎが大好きという10人くらいが集って，日本の伊勢エビと，アメリカのオマールエビの食べ比べ会が始まった。

まず刺身，これは日本の伊勢エビの圧勝かと思ったが，オマール君もなかなか美味，10人の中で，2～3人はオマールが「うまい」という者がいたくらいである。

ボイルしたエビを豪快に食べる，勝負なし。最後は溶かしバターで炒め，白ワインで煮込んだシェフ自慢の一皿，これも勝負なし。結論として，世界の美味と言われるメーン州のオマールエビは素晴らしい。これを上手に輸入すれば立派な商売になるということで万々歳の試食会であった。

新ビジネス夢見た楽しい旅

ところで，標題の「豪勢なテクニカルツアー」の物語はここから始まる。

部長さんの部下の調査マンが調べたところ，ボストン郊外の「ピア・チ」というレストランこそが，世界最高のオマールエビを食べさせるレストランだそうだ。

ひとつ，それを食べに行こうではないかいやまてよ，今度は何か仕掛けが必要だ。また，これを商売にということで，ついに，「アメリカ・カナダの流通とレストラン事業調査団」という立派な名前のツアーを催行することとした。流通事業の調査はよくあるか，ここにレストランを入れて，行く先々での有名レストラン――特に関西中堅会社を念頭において，海に面したレストランを食べ歩こうというのがこのツアーの目玉である。

幸いにして，予定通りのメンバーも集まり，意気揚々と，ロサンゼルス，ニューヨーク，そして問題のボストン，さらにトロント，サンフランシスコの豪勢な旅に出発した。

[illegible]は，両者に別の出し[illegible]

にあるシャレたレストランである。部屋の壁には，ワインが何千本と収納されていた。

お目当てのオマールエビは，2ポンドぐらい。このあたりが一番美味しいとのこと。

料理はシンプルそのもの，ゆで上げて真っ赤になったオマールエビを大きな皿に，どんと一匹載せて出てきた。

後は，塩，コショウ，レモンで好きに味をつけ，豪快に食べるというものである。世界一の美味オマールエビを，そのまましっかり味わって下さいということだろう。

さて，オーナーのお出ましである。年齢は60歳くらいか，あらかじめ訪問の目的を手紙でお願いしていたにかかわらず，自分が靴磨きから大変な苦労をして，このレストランを開くに到った自慢話をとうとうとしゃべり出し，「日本に進出しませんか。共同でどうです」というお誘いも耳に入っているのやら，いないのやら，しゃべりづめにしゃべって「それでは皆さん，良い旅を」と姿を消してしまったのにはちょっと驚いた。

まあ，それならばそれでええわ。「エビ」をちゃんと輸入できて，シャレたレストランを作れば，この商売はできるてと，ワインの乾杯，乾杯を重ね，ご機嫌でレストランを後にした。

その後，部長さんは，オマールエビを中心としたレストランを開設すべく奔走され，今一歩のところまで行ったが，いろいろな事情から実現しなかった。

もし実現していたら，試食会やテクニカルツアーに参加した当社ならびに小生も，苦労はしたであろうが，きっと貴重な体験と，またその過程で真き友を得たであろうと，ちょっぴり残念に思っている。

（赤とんぼ）

CLIPPING VOUCHER

Medium: Yomiuri Shimbun Date: November 30, 1995

Subject: The first prize of the 100th Boston Marathon. Ref. Press Release No.:

On November 28, Boston Athletic Association announced that the amount of the first prize for the 100th Boston Marathon will be 100,000 U.S. dollars for each male and female winner. This was raised 25,000 U.S.dollars from the previous year. The total amount of the prizes for this marathon will be 600,000 dollars.

◇ボストンマラソンの優勝賞金10万ドルに　ボストン陸上協会は28日、第100回を迎える来年のボストンマラソン（4月15日）の男女優勝賞金を10万ドル（約1000万円）にすると発表した。今年の賞金額から2万5千ドル（約252万円）のアップ。賞金総額は、世界最高記録のボーナスなどを含めて60万ドル（約6060万円）となる。（時事）

CLIPPING VOUCHER

Medium: FIELD & STREAM Date: DECEMBER 1995

Subject: NEW ENGLAND STYLE Ref. Press Release No.:

There are many different sceneray in America.
New England is quite different from Califorania or Miami. If you want to have the image of New England, the movie "The Bridge in Madison County" will be suitable. The rivers and woods described in the movie will be similar to those in New England. There are many covered bridges in Maine, Vermont and New Hampshire. These three states plus Massachusetts, Connecticut and Rhode Island is so called New England.

This are used to be the center of America at its first years, and still has the good and old European atmosphere. It is the home of American spirit. It has been kept since 1620, when Pilgrim Fathers came to Plymouth in Massachusetts.

Until now, the outdoor life in USA has been mainly talked in California. But the outdoor life is not only in west coast. It is also in New England. We picked up Matha's Vineyard to introduce the sea outdoor life of New England. As the mountain outdoor life, we will introduce the Berkshires. Both of them are the resorts which Bostonian love.

It takes about 15 hours to Boston via Chicago. New England has the gentle slopes of hills, lots of ponds and lakes, winding rivers. These make New England as the very large area. We used Legacy Outback to see New England.

Cape Cod, which locates in the south of Boston, the ferry to Matha's Vineyard leaves from its town, Woods Hole. The island is very small with the triangle shape. It looks flat from the sea. But when the boat come closer to the island, we are impressed by the beautiful scene of its green trees and fine houses.

Matha's Vineyard is the resort island for Bostonians and New Yorkers. The summer houses owned by the famous people can been seen here. President Clinton spent his first summer vacation as the president in this island. White-wall hosues in Edgartown, colourful ginger bread houses in Oak Bluffs make the island beautiful. Light house can be seen in many places in the island. Sun rise and sunset makes the beautiful silhouetts of these light houses.

We visisted Mr. J. W. More who lives in this beautiful island. He organize the tours or lessons for sea kayak. We thought he might live close to the beach. But his house was in the heart of the woods. In the small shed next to his house, we could see three bicycles, kayak equipments and other outdoor gear. Also he has three cars which he uses at each occasion.

We went to the lake with him. There are many places they can enjoy the outdoor life easily.

Mr. Barry Simon, whom we met at Oak Bluffs, loaded 2 sets of windsurfing equipment, roller blades and underwater glass in his Japanese car. He enjoy wind surfing, or snokeling depending on the weather condition.

Mr. Marc Boddewny is New Yorker who comes to Martha's Vineyard four or five times a year. He enjoy the fising in the island.

(The article explains the detail of Matha's Vineyard. Ginger bread house in Oak Bluffs, Biplane Ride, water sports in the island, Capt Porky's Bait & Tackle shop in Edgartown, Colonial Inn in Edgartown especially about seafoods in the restaurant, and Ship's Store in Vineyard Haven.)

Matha's Vineyard was named after the Captain's daughter in 1602.
This island was used for the movie "Joes", Jacky Onasis had her house here, and John Bersi stared at "Blues Borhters" sleeps here.
There is no traffic signal, nor the fast foods store in the island.

The Berkshires
We took route 495 south from the Vineyard, and then Mass Pike to go to the Berkshires. It will be about 3 hours from Boston, 240 km drive. The toll for the express way is only 600yen. If you think of it in Japan, it will be about ¥5000, much cheaper.

The Berkshire is also the resort for Bostonians and New Yorkers. But is the mountain resort.
We visited Mr. Steve Zigler in Lenox. His office is the white, 2 story house. In the weekend, he will go to the lake to enjoy the canoe riding. He is also the typical New Englander. In the back of his Japanese car, there was the blanket which can not be missed for his outdoor life.

We met Mr. Bruce Jansen in the Berkshires. He came from Connecticut. His cargo space was filled with camping goods and trekking shoes. He loves travel and whenever there is the mountain, he climbs it. And if he can find the road suitable for bicycling, he rides it. Thus he enjoys his life.

In Deerfield, we met the couple from Canada who like to do kayaking. Their car was renovated to be fittable for the kayaking equipment.

(In the Berkshires, it introduces Tanglewood Music Festival, fall foliage, Norman Rockwell Museum in Stockbridge, Clark Institute in Williamstown.)

Also Mt. Greylock Visitors Center, Mr. Greylock, The Orchards in Williamstown, Fishing, Lake Makeenach, Zoar were explained witht he photos.

Last 3 pages are used to write about the car with outdoor goods and Legacy Outback. How Legacy is suitable and confortable to drive through New England places.

文=川野直哉
TEXT:NAOYA KAWANO
写真=中村慎治
PHOTO:SHINJI NAKAMURA

NEW ENGLAND style

アウトドアイクイップメントとしてのクルマ考

アウトドアのフィールドに欠かせないクルマ。もはやクルマというよりアウトドア用具のひとつといえなくもない。では実際にはどのような用具として、どのように使用されているのだろうか。ボストニアンたちが週末に出かけるというふたつのフィールドへと走る。

ニューイングランドの週末

ニューイングランドのアウトドア事情を探る

アメリカという国は、その広大さゆえに、共通する風景をイメージしづらい。カリフォルニアの青い空も、ヨセミテの険しい渓谷も、ナイアガラの大滝布も、マイアミの白い浜もひとつの風景ではあるが、アメリカのごく一部でしかない。この国のすべてを知ろうとするならば、ジグソーパズルのようにさまざまな風景を組み合せるという、大変骨の折れる作業が必要となってしまう。しかしひとつひとつのピースをよく見ると、どれも実に個性的で、美しい自然にあふれているのが分かる。

そんなピースのひとつに、ニューイングランドと呼ばれる地方がある。もしこの地方の風景をイメージしたいならば、映画「マジソン郡の橋」で見た、あの川と森を思い浮かべてみるのも悪くない。カバード・ブリッジと呼ばれる屋根つきの橋は、アメリカ北東部の

海に面するニューイングランドの海岸では、ウインドサーフィンが盛んである

このフリーウエイとクルマがあれば、アメリカはどこへでも行くことができる

山あいには水量豊富な川が多く、カヌーイングやラフティングが盛んだ

途中で出会ったたくさんのアウトドア仲間。クルマとの付き合い方もさまざまだ

メイン、バーモント、ニューハンプシャーの3州に多く、これにマサチューセッツ、コネチカット、ロードアイランドの3州を加えた地域が、ニューイングランドと呼ばれている。

この地方は、いわばアメリカの黎明期を飾ったところで、美しい自然の中に、古き良きヨーロッパの薫りを漂わせている。開放的なカリフォルニアとは対照的に伝統や文化を重んじ、その中にも進取の気風を兼ね備えているという、アメリカの精神的ふるさとである。それは1620年、ピルグリム・ファーザーズと呼ばれた一団が、マサチューセッツのプリマスへ入植して以来、連綿と受け継がれてきた歴史によるものである。

そんなニューイングランドのアウトドア事情を探る今回の旅。今までアメリカのアウトドアといえば、カリフォルニアがその主な舞台だった。しかし風景がそうであるように、西海岸のアウトドアはジグソーパズルのピースにすぎない。この国のアウトドアシーンを知るには、他のピースも見る必要があるのである。風景、文化ともカリフォルニアと好対照を見せる地域として、ニューイングランドは格好のフィールドだ。

そこで、海のフィールドの代表を、ケープコッドの南に浮かぶマーサズ・ヴィニヤードという島に選んだ。山のフィールドは、アパラチア山脈の麓に広がるバークシャー高原。ともにボストニアン憧れのリゾート地であり、マサチューセッツ州に所在する。

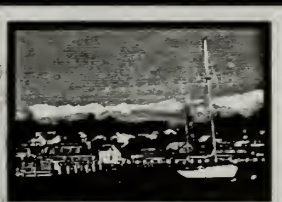
さらに今回は、アウトドアユースとしてのクルマとの付き合い方を通じて、ニューイングランドスタイルのアウトドアを探ってみることにした。したがって我々の移動もすべてクルマだ。機会があれば、同じテーマでカリフォルニアを取材してみたい。その対比がおもしろいかもしれないからだ。

取材の起点となるボストンまでは、シカゴ経由の飛行機で日本から約15時間。上空から見るニューイングランドはなだらかな起伏の大地と、無数の池や湖、蛇行する大小の川で構成されていた。アメリカの一部でしかないのに、それでも広大な広がりを見せている。

ボストンからの足となってくれるのが、レガシィの新型ワゴン・アウトバック(グランドワゴン)。車窓から見るニューイングランドは、大きな空に下にのびやかに広がっており、心なしか時計の進みが遅くなっていくような気がした。

自然の中へ出かけることは決して特別なことじゃない。日常生活の延長なのだ。

MARTHA'S VINEYARD



島へ渡る、というのは何か特別なことのように思えてしまう。胸がはずむし、何かを期待してしまう。どこの国でも、島って不思議な存在だ。

ボストンの南に位置するケープコッド。その南端の町・ウッズホールから、マーサズ・ヴィニヤード行きのフェリーが出ている。大西洋に浮かぶ周囲48kmほどの三角形をした小さな島だ。

沖合いから眺めるマーサズ・ヴィニヤードは、マツとオークの森に囲まれた平坦な島で、海にやっと浮かんでいるような感じは、どこか曖昧そしている。

しかしフェリーが島に近づくと、緑の森を背景にした瀟洒な民家が岸づたいに現われ、その美しさに乗船している誰もが言葉少なになってしまうのである。

マーサズ・ヴィニヤードは、ボストニアンやニューヨーカーが憧れるリゾートアイランドだ。有名人の別荘も多く、クリントン大統領もその就任1年目の夏休みをこの島で過ごしたという。白い外壁の家が立ち並ぶエドガータウン、カラフルなジンジャーブレッド・ハウスが美しいオーク・ブラフなどの小さな町が点在し、青い空と緑の島にアクセントを付けている。

また、複雑に入り組んだ海岸線の沖は強い潮流が流れているため、

庭に置かれたカヤック。FRPのフネと、フォールディングタイプのフネを使いわけている

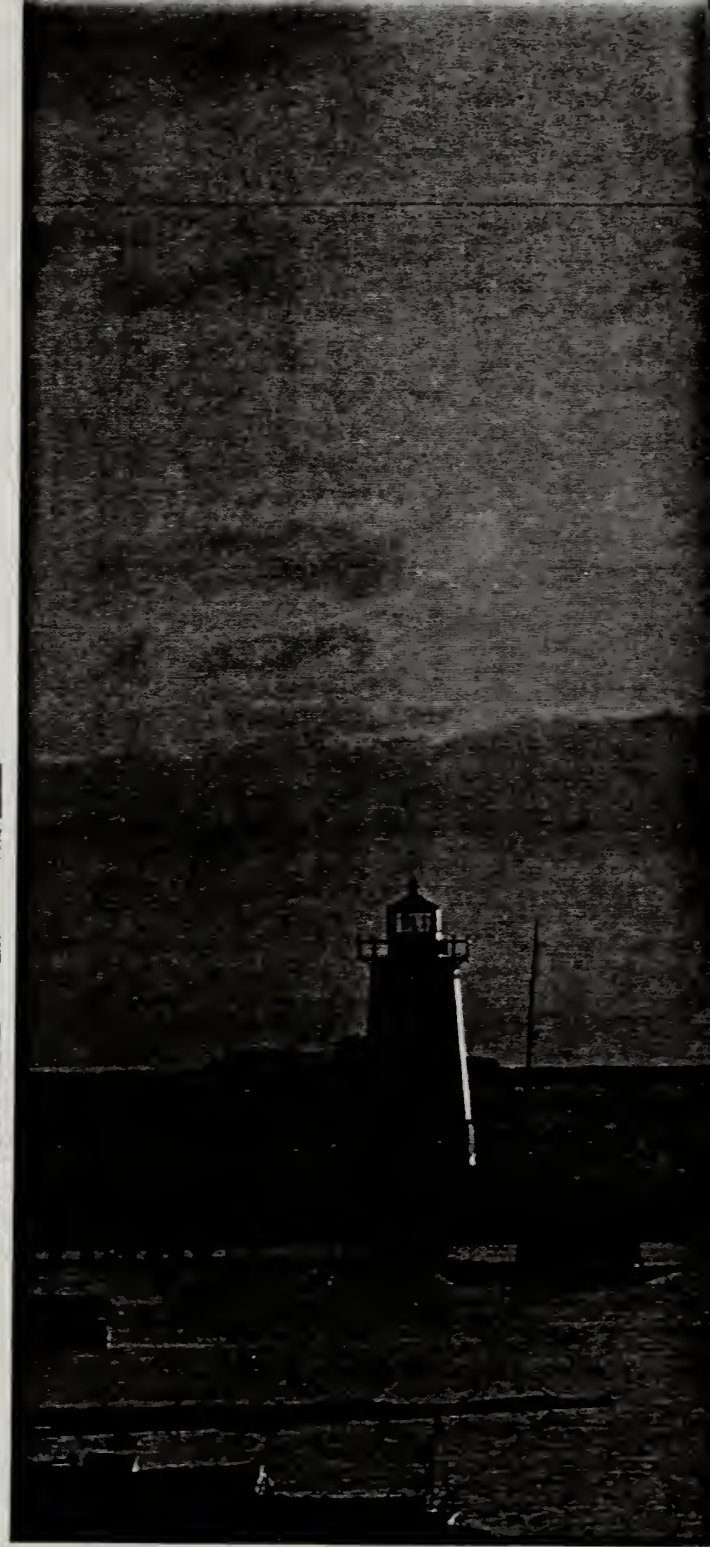
J.W.モアーの森の中の家。スギの素材を活かしたシェダーシングルの外壁が美しい

ミュージシャンである友人（右）と近くの湖で。「日本の読者によろしく」と言っていた

自然の中で遊べる道具がぎっしり詰まった小屋。いずれこんな小屋を持ってみたいものだ

クルマは日本製4WD。4WDで、この広さがあれば、たいていのことは用が済むとか

エスキモーロールなどのハイテクニックを披露してくれた。キャリア10年の技である



船の航行を見守る灯台が岬の先端に建っている。白い漆喰の灯台がある風景は、ニューイングランド独特のもので、マーサズ・ヴィニヤードでも、いくつもの灯台を目にする。この灯台をシルエットに、朝日や夕日が織りなす自然の色合いは、まさにその島の魅力のひとつである。

この美しい島の住人である、J・W・モアーの家を訪ねてみた。うっそうとしたオークの森を分け入って行くと、こじんまりとした彼の家が現われた。シーカヤックのレッスンやツアーを行なっていると聞いていたため、海沿いに住んでいるのかと想像したが、荒れたダートが終点となる、森のいちばん奥に住んでいた。

木々が自然のタープのように庭を覆い、木もれ陽の中に白いテーブルとイスが気持ちよさげにセットされている。その横に、彼が道具置場としている小屋がある。中を見せてもらうと、カヤックの用具以外に、ロードレーサータイプとマウンテンタイプの自転車3台をはじめ、さまざまなアウトドアギアが詰まっていた。仕事も兼ねているとはいえ、こんな小屋をもっているとはうらやましい限りだ。

この国では、アウトドアに関する個人のビジネスが、きちんと自立できるだけのベースがある。彼のように、自然あふれる広い敷地を所有し、3台のクルマを使い分け、ゆったりとしたスケジュールでビジネスを行なう。それを支えているのはまぎれもなくアメリカのアウトドアの底辺の広さだ。

「そんなの普通のことさ」

という彼が、近くの湖へ行こうと言う。さっそく出かけることになった。4輪積載できるルーフキャリアに2輪乗せ、ラゲッジスペースに用具を積み込む。積み込むといっても、ポンポン放りこむだけである。

森の中の家からわずか5分ほど走ると、湖がある。もう少し走ればすぐ海である。なるほどこれなら森に住んでいても、ビジネスができる環境だ。それを支えるクルマがあれば、彼はどこへでもカヤックを積んで走っていくのだろう。

「この島では、自然とクルマは特別なものじゃないんだ。みんなクルマで仕事に行くし、買物にも行き、週末はピクニックや釣りに行く。そんなの普通のことさ」

と彼が言う。この島という言葉は、そのままこの国というふうに置き換えられる。

日本のアウトドアシーンは、アメリカをお手本にしているが、日本では自然とクルマに対する価値観が、どちらもまだ特別なものであり、スタイルが大切にされている。普通の感覚まで至っていない。

マーサズ・ヴィニヤードで、そんなことを思った。

マーサズ・ヴィニヤードの玄関口として知られる〝オーク・ブラフ〟の町で会ったバリー。一瞬「リアリー?」と聞きなおしてしまったが、50歳だという。それでこのオジサン、2セットのウインドサーフィンと、ローラーブレード、水中メガネを小型の日本車に積み込んでいた。後部座席と助手席のシートを倒し、長尺物は対角線の最長スペースを利用している。無造作に積まれているが、各パーツはきれいに分類され、見た目以上に整理されている。

「風が吹けばウインドをやるけど、風がなければローラーブレードやシュノーケリングを楽しむんだ。これなら必ず遊べるじゃないか」ということらしい。

職業がメカニカル・エンジニアというだけあって、工具箱は必携品だ。スポーツギアの調整から、クルマの簡単な修理くらいならこの箱ひとつあればOK。

最後にもう一度50歳かと尋ねたが、そうだという。ニューイングランドのオジサンというのは、なかなかあなどれない。

風が吹こうが吹くまいが遊び方なんて自由自在

WIND SURFING
BARRY SIMON

これがバリーご自慢? の工具箱。意味不明な物も入っている不思議な箱である

カラフルなルアーが何種類も入ったバッグ。中にはお手製のものもあるとか

島の人とは、その雰囲気がどこか違ったマーク。年に4～5回、マーサズ・ヴィニヤードに釣りやってくるという彼は、予想どおりニューヨーカーだった。

ストライクバスやブルーフィッシュのポイントが多いこの島には、たくさんの釣り人がやってくるが、彼らの多くはロッドをクルマに積むというより、車内に放り込んでいるといった感じ。その中にあって、マークは愛用のロッドをワゴンのルーフキャリアにセットしていた。最近日本でもルーフに積んだクルマを見かけるようになったが、これはなかなかカッコいい積み方である。

ラゲッジルームには、大きなコールマンのクーラーボックスと、自慢のルアーを入れたバッグが積んであるだけ。

「クーラーボックスはちょうどいい高さの作業台になるし、リアハッチを上げれば、クルマがベンチ代わりにもなる。シンプルがいちばんいいのさ」

と、我々の目より海を見つめながらインタビューに答えるマーク。最後に、魚とのファイトが思う存分楽しめるといいねと言うと、親指をぐっと立て、無言のままボイントへ向かっていった。

FISHING
MARC BODDEWNY

肝心なのは豪華な道具仕立てより、思い立ったらスグ出かける気持ちの軽さ

COLONIAL INN　エドガータウンの中心に建つ、ビクトリア風建築のホテル。夏期は$140～、オフは$65～が宿泊料金の目安。ツインかダブルが基本だ。レストランのシーフードはなかなかイケル味だ。☎(508)627-4711

水上スポーツ：サイクリストの島として知られるマーサズ・ヴィニヤードだが、水上スポーツも盛んだ。ヨット、ウインドサーフィン、カヤック、カヌーとなんでも揃う。レンタルショップもあり、気軽に楽しむことができる

オーク・ブラフ　まるで日本のペンションのような建物が何百軒も建ち並ぶ町である。一見するとお店のようだが、すべてメソジスト派の人たちが住む、一般住居である。8月になるとここでメソジスト派のサマーキャンプが開かれる

SHIPS STORES：ヴィニヤードヘブンにあるスポーツ用品店。釣り用品から、カヌー、カヤックと何でも揃うので、重宝するお店だ。主人のおすすめはナイフ。それがなんと日本の関市の製品だった。☎(508)696-7502

CAPT PORKY'S BAIT & TACKLE　エドガータウンにある釣具店。リールやロッドなどが店内狭しと並んでいる。一概には言えないが、日本で販売されている物だと、約半額くらいの価格だ。☎(508)627-7117

BIPLANE RIDES：1941年製のWACOという複葉機で、島の空中散歩が楽しめる。ワンフライト20分、ふたりで$85。上空から見る島の美しさは絶品だが、サービス満点の宙返りはさらに圧巻である。☎(508)627-7677

マーサズ・ヴィニヤードとは、"マーサのブドウ畑"という意味。1602年、この島に上陸したゴスノルドが、野生のブドウが多いのをヒントに、彼の娘の名前マーサを島の名前に付けたことに由来する。

MARTHA'S VINEYARD

取材の時期が初秋だったためか、島はいたって静かな装いだった。しかし夏ともなると、ボストンやニューヨークから大勢の人がやってくる、人気の高いリゾート地である。南側を底辺にしたような三角形の島は、複雑な入江とたくさんの沼が点在し、松やオークの森が島全体を覆う、このうえなく美しい島だ。

映画「ジョーズ」のロケ地でもあり、故ジャクリーヌ・オナシス・ケネディの別荘があり、「ブルース・ブラザース」のジョン・ベルーシが眠る島でもある。

時間がゆっくりと流れるこの島の道路には信号が見当たらない。ファーストフードのお店もない。そんなことに気が付くと、大都会に暮らすボストニアンやニューヨーカーがよく訪れるというのも、うなずける。

まるで散歩に出かけるようなごくごく普通のアウトドアライフ

BERKSHIRES

おそらくそれは、移動という行為に対する日本とアメリカの認識の違いなのだろう。マーサズ・ヴィニヤードからルート495ノースという道を走り、マサチューセッツ・ターンパイクへと入った。この道は、ボストンのダウンタウンを起点に、州内を縦断する有料道路である。目指すバークシャー地方まで、ボストンからなら約3時間。およそ240kmの高速クルージングを楽しんで、その通行料金が約600円という安さである。ほぼ同じ距離の東京～浜松間を走って、5000円ほどの日本を考えると、うらやましい限りである。

それはともかく、バークシャー地方というのは、ボストニアンやニューヨーカーたちのリゾート地として知られる地域である。海のリゾートがマーサズ・ヴィニヤードなら、山のリゾートがバークシャーというわけだ。

このバークシャーのレノックスという町に住むスティーブン・ジグラー。真っ白な2階建ての民家をオフィスにもつ、ビジネスマンである。数年前に日本を訪れたことがあるそうで、彼のデスクのうしろには、墨絵が飾られていた。

アメリカ各地から寄せられる、さまざまなファックスに目を通した後の週末は、近くの湖にカヌーを楽しみに出かけるという、典型的なニューイングランド人である。

日本製セダンのトランクルームには、きれいに手入れされたライフジャケットや木製のパドルが整然と積み込まれている。そんなたたずまいから、彼が特別のアイテムとして見せてくれたのが、愛用のブランケット。季節が秋ということもあるが、アウトドアには欠くことのできないものだという。

荷物を満載するわけでもなく、ことさらカヌーに出かけるぞという気負いを見せるでもなく、まるで近くへ散歩に出かけるような雰囲気だ。彼に趣味はと聞くと、写真を撮ることだという。ではカヌーはと聞くと、

「それはごく普通のことだよ」

という答えだった。

町の裏通りに面した彼のオフィス。4 LDKのスペースに彼と2人のスタッフが働く

休日のオフィスを拝見。壁には、自ら撮影した自然がモチーフの写真数点が飾られていた

アメリカ初期の億万長者が好んで住んだというレノックス。絵はがきのような雰囲気の町だ

自然との付き合い方は様々。スタイルなんてありはしない

なぜそんなもの見たいんだいと言いつつも、気持ち良くカーゴスペースを見せてくれたブルース。コネチカット州から来たという彼のクルマには、キャリアに積まれた自転車のほか、キャンプ用品、登山靴が納まっていた。サイクリングが目的なのか、それとも登山が目的なのかと聞くと、

「旅さ」

という。そこに山があれば登るし、そこに快適な道があれば自転車に乗るというわけである。

道具箱の片隅には釣りのガイドブックも放り込まれている。釣りもやるのかと尋ねると、

「釣りはやらないが、やってみたいと思ったときのためさ」

なのだそうである。そう答えるときの笑顔から、きっと彼は川があればカヌーをやるし、海があれば潜るに違いないと勝手に想像した。彼にとってのアウトドアとは、ありのままの自然に親しむことなのだろう。そしてそれはごく普通のことなのだろう。

後部座席に、スケジュールの書き込まれたシステム手帳があった。職業はと聞くと、会計士だという。手帳が積んであるのも、おそらくこれも普通のことなのだろうと思って、それ以上は聞かなかった。

使い込んだ感じの登山靴。彼と出会ったのがグレイロック山麓だったことを思えばうなずける

TOURIST
BRUCE JANSEN

自慢のルーフボックスはハンドメイド。激流を下るカナダ人夫婦

KAYAKING

バークシャー地方とフランクリン地方の境界を流れるデイアフィールド川は、カヌーやラフティングのメッカだと聞いて、出かけてみた。

そこで出会ったのが、写真の夫婦。カナダからやってきたというカヌーのスラローマーだ。

比較的ラフな感じで、アウトドアギアを積んでいる人が多かったこの取材の中では、自作のルーフボックスを積んでいるという、貴重な？　存在だった。なにやら急いでいる様子の中で、ボックスの中を見せてもらった。今日は短い日程でやってきたため、中にはリペアーキット以外は入っていなかったが、これなら濡れた用具類を車内に持ち込まないで済むし、そのまま外せば家へ帰ってからの整理もラクという、すぐれモノである。空気抵抗を考えて、前方を鋭角にしてあるのもなかなかイイ。

ルーフに積まれたカヤックも、グラスファイバー製の本格的なレーシング仕様で、ただならぬ雰囲気だった。写真を撮りおわると、笑顔とともに、クルマを飛ばして行ってしまった。後で聞いて分かったことだが、この数十分後にダムの放流が始まり、川の水量が増えて、スラロームには最適の状態になるのだとか。この夫婦、間に合っただろうか？

カヤックを降ろす場所を探すためラフロードも走ることになる。クルマはやはり4WDになる

MT.GREYLOCK VISITORS CENTER：ここでは週末にグレイロック山までのトレイルを開催している。この日参加者は一名だったが、ちゃんと植物の解説をまじえながらガイドをしてくれる。こうしたシステムがアメリカの野外活動を支えている

THE ORCHARDS：ウイリアムズタウンにある、落ち着いた雰囲気のホテル。ヨーロッパ的な調度品で飾られたホテルだ。料金はスタンダード$155〜と、デラックス$220〜、その中間の$185〜。☎(413)458-9611

LAKE MAKEENACH：タングルウッド音楽祭の開催されるメイン会場から、山を分けいったところにある、インディアンネームの湖・マッキナック湖。湖上スポーツの楽しめる湖で、この日はスカルの練習をする学生の姿が見られた

MT.GREYLOCK：標高3491フィートの山で、山頂からはバークシャー地方の山並みや小さな町が一望できる。山頂近くにはバスカムロッジがあり、登山客たちで賑わう。今回の取材では、時間の関係でクルマで登ったが、やはりトレイルが正解だろう

フィッシング：バス釣り用のボートをクルマで牽引してやってくる、アメリカの優快な釣り。湖岸でボートを降ろすとき、クルマのタイヤがスタックしないように、コンクリートのスペースが設けてあった。このため、クルマが湖岸の自然にダメージを与えることが少ない

ZOAR：ラフティングをはじめカヤッキング、カヌーイング、ロッククライミングなどを体験させてくれる、アウトドアのツアー会社。特にラフティングは人気が高く、トップシーズンの夏には、毎日100名以上の参加者がアメリカ全土やカナダからやってくる。☎(800)532-7483

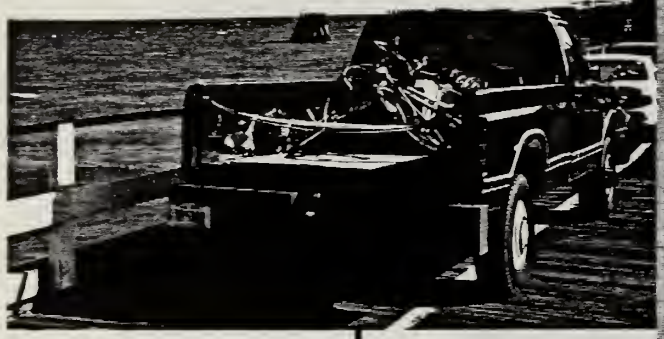
アパラチア山脈の山間に広がる高原リゾート地。ヨーロッパの田舎町を思わせるような、かわいらしい町が点在し、豊かな自然に満ちあふれている。

BERKSHIRES

バークシャー地方といっても、日本ではあまり馴染みがないように思えるが、クラシックファンの方ならご存じかもしれない。ボストン交響楽団を小澤征爾が指揮したことで知られるようになった、タングルウッド音楽祭が開催される地方である。

紅葉の名所としても有名で、盛秋の頃ともなると、アメリカ国内はもとより、ヨーロッパからのツーリストも訪れるほどだ。取材は紅葉の最盛期にはいくぶん早かったため、その圧倒的な自然美を見ることはできなかったが、多少色づいた山肌でも十分見応えのあるものだった。

ストックブリッジにある"ノーマン・ロックウェル美術館"、ウイリアムズタウンにある"スタンリー＆フランシーヌ・クラーク美術館"をはじめとする美術館も多く、絵画ファンにもおすすめだ。



アメリカはピックアップトラックの国だ。で、文句の付けようがないのがこのスタイル。要するに、荷台にむき出しの自転車を放りこんだだけというやつだ。荷物が落ちないようにロープを張ってはいるが、それとてアバウトこのうえない。でも盗難防止だけは万全だった。

アウトドアに適したクルマは、ワゴンと決まっているわけではない。クーペでも二質の通り。ウインドサーフィンと自転車の両方を楽しみにきた中年夫婦がオーナーだった。その積み方も実にしっかりしている。遊びがワンパターンじゃないというところがイイ。

全長5m以上のシーカヤック2艇に、それを余裕で積めるでっかいクルマ。いかにもアメリカ的である。でも車内にはパドルもなければライフジャケットもなし。ナンバーが地元っぽかったから、ひょっとしてこの人積みっぱなし？　これもアメリカ的か！

小型のセダンに2台の自転車と荷物を満載して、フェリーを待っていた3人組。中を見せてほしいと頼んだら「取り返しのつかない状態になるから、かんべんしてほしい」と言われた。それにしても、どうやってこのクルマに3人乗るのか不思議だった。

今回の取材で出会った典型的なパターンがコレ。つまり小型の日本車にアウトドアのギアを積んでいるというパターン。ニュージーランドの冬は雪も多いため、理想は4WD。それでいて安くて壊れない、というのが日本車を選ぶ理由らしい。

FREE STYLE

自分流の楽しみ方から生まれたフリースタイルのクルマ活用術

今回の取材中に出会った、たくさんの個性的な人たち。
その個性の数だけ、アウトドアにおけるクルマとの付き合い方も多彩だった。
そのスタイルを称するならば、まさにフリースタイル。
お気にいりのグッズを気ままに積んで、気ままに出かける。
総じて言えば、きれいにパッキングして積むなんてことはしない。
ともかく積めればいいじゃないか！　積んじゃえ積んじゃえ！　といったところか。

キャンプ場で出会ったカップル。キャンピングトレーラーが並ぶ中、クルマとテントの組み合せはこのカップルだけだった。質素な道具の中で異様に大きかったのがピロー。キャンプとは大地で心地よく寝ることなり。やがて彼らもキャンピングカーが買えるだろう。

マーサズ・ヴィニヤードはサイクリングの島である。よってタクシーもこのようになるというワケだ。車載用のキャリアに、大きな荷室。日本でもスキー場近くのタクシーはキャリアをセットしているが、他のアクティビティでもこうしたタクシーが現われないかな。

ロッドだろうが網だろうが、ポンポン投げ込んでいたオジサン。そしてハッチも閉めずにこのまま状態で走り去った。前の席には、オジサンが忘れていったロッドが一本。5分後にそのロッドを取りに帰ってきたオジサンは、やはりそのロッドを投げ込んだ。

ともかく汚くて、日本の読者には見せられないならば笑ってごまかしちゃおう、というマークとマイク。4枚のサーフボードとウエットスーツの他に、コーラの空き缶、大量の砂、哀愁漂う枯葉まで積んでいた？　「仲間のなかじゃきれいにしている方なんだけどな」

片側3車線のフリーウエイを60マイルで走っていると、身体にアメリカがしみ込んでくる気がする

LEGACY GRAND WAGON

街と自然、オンとオフをなめらかに調和させたスタイル

アメリカという国は、クルマで旅をしなくてはいけないのかもしれない。片側3車線のフリーウエイを60マイルで走り、セルフサービスのガソリンスタンドで燃料をガロンで補給し、コークとサンドウィッチをほおばりながら、旅をしなくてはいけないのかもしれない。そうすると、オドメーターが距離を刻むごとに、アメリカが身体に沁みてくるのである。

ボストンを起点に、ルート3サウスを南下してマーサズ・ヴィニヤードを訪ね、マサチューセッツ・ターンパイクを飛ばしてバークシャーを回ってきた、約600kmの旅。数えきれないほどの町を通りすぎ、飽きるほどの数のクルマとすれ違ってきた。ヒュンダイも走っていれば、サーブもマセラッティも走っている。

このニューイングランド地方でとりわけ多かったのが、日本車だ。特に4WDタイプの日本車は圧倒的な数だった。そんな国だけに、クルマ好きのアメリカ人も多い。真新しい我々のスバルに、「これはブランニューか」と聞いてくる。そのたびに、そうだ、アウトバックっていうんだと答える。

アウトバックとは、グランドワゴンのアメリカでのネーミング。当然アメリカ仕様になっているた

め、日本仕様とは多少異なる。

たとえば電動格納ミラーは、その必要性がないため装着していない。道もガレージも駐車場も広いアメリカでは、格納ミラーは不要というわけだ。いやむしろ、このクルマがアメリカでコンセプトメイクされたことを考えると、付いていないのが正統的。日本仕様のグランドワゴンは、アウトバックの日本向けバージョンなのだと考えてもおかしくはない。そのくらい、このクルマはアメリカに馴染んでいる。

雄大な大地をおおらかに走る、トルクフルなエンジン。フリーウエイのロングツーリングでもストレスを感じない走行フィーリング。そして本格的なラフロード走行に対応する200㎜のロードクリアランスは、そのまま日本仕様にも受け継がれている。

アウトドアユースとして見たときの、このクルマの出来もなかなかいい。荷物の積みやすい低い床面や、作業性のいいリヤハッチのサイズや形状は、どちらかといえば日本的な心遣いだろうか。細かさにおいてはやはり日本車だ。

ラゲッジルームの下に設定されているサブトランクや、DC120ボルトの電源がとれるカーゴソケットも気がきいている。

また、ペットなどを乗せた際の臭いを換気するカーゴファンは、犬と旅することの多いアメリカ人にはうってつけ。この便利さを知る日本人も少なくないはずだ。たとえば釣具の臭いを換気するのにも便利で、マーサズ・ヴィニヤードで出会ったニューヨーカーも感心していた。

リヤシートの座面を引き上げて、最大1691ℓの荷室容量を利用すれば、前輪をはずしたマウンテンバイクも積載可能で、そのスペースの応用価値は高い。

それにも増して、我々の新型スバルにアメリカ人が共感したのが、そのスタイリング。都会でも自然の中でも映えるこのスタイリングは、実はニューイングランドのライフスタイルをイメージしている。精力的に仕事をこなしたあとの週末は、自然の中でゆったりと過ごすという、ポストニアンのようなライフスタイルだ。つまり、今回の取材で出会った彼らのような生活である。前述した各種の機能も、そうした想定のもとに設定されているのである。

アメリカのアウトドアシーンをお手本にしてきた日本。最近スタイルに捕われず、普通に自然に触れ、気負うことなくクルマをアウトドアへ持ち出す人が増えてきた。その感覚は、今回乗ったアウトバックのような感覚だ。そのうち、アメリカ人が日本のアウトドアシーンをお手本にするときがくるかもしれない。クルマの世界は、もうそこまできているのだから。

ブライトンに比べて レガシィはタフガイになった。

グレイロック山の麓で出会った会計士のブルースは、レガシィのブライトンに乗っていた。スバリストとして、ブランニューなアウトバックは大変気になるらしく、あれやこれやといろんなことを聞いてきた。

彼いわく、ラゲッジルーム下に設定されたサブトランクは大変いいアイデアだという。「オレならいつでも釣りができるように、釣り道具をしまっておくな」。確かにこまごまとしたモノを収納するには便利なスペースである。

運転席に座った感じもなかなかイイという。ブライトンと比べてどっしりしている感じで、身体が大きめの彼には好感がもてるとか。ただしルックスはブライトンの方がハンサムで好きだそうだ。これは好みの分かれるところであろうか。

雪の多いバークシャーでは 信頼できる4WDがいちばん

イギリス紳士風のひげをたくわえたスティーブン・ジグラーは、レガシィのセダンを愛用している。4WDの信頼性でスバルを選んだそうだが、彼が住むレノックスの町は実にスバルが多い。とりわけレオーネのツーリングワゴンの出現率は、あきらかに日本より高いと言い切れる。

彼はワゴンよりセダン派だというが、試しに、彼のカヌー用具一式をアウトバックに積みかえてみた。すべての用具が、クルマのウエストラインより下に納まり、しかもまだ余裕がある状態だ。そのうえ後方視界もいい。なかなかワゴンもいいねと、気にいっていたようだ。

アウトバックは「アナタのような人のライフスタイルをイメージしている」と教えると、大変満足そうな笑顔を見せた。

レガシィ グランドワゴン（アメリカ名：アウトバック）

新たにレガシィ・ツーリングワゴン・シリーズに加わった新カテゴリーのワゴン。スバルタンな"GT"と、上質な走りの"250T"で知られるレガシィだが、このグランドワゴンは200ミリのロードクリアランスをもち、ラフロードでも高い走破性を発揮する。それでいて従来のワゴンとしての機能も充実させている。ワゴンとクロカンの魅力を両方備えた新カテゴリーのクルマだ。

全長：4720mm／全幅：1715mm／全高：1555mm／ホイールベース：2630mm／最低地上高：200mm／総排気量：2457cc／最高出力（ネット）ps／rpm：160／6000／最大トルクkg-m／rpm：21.5／2800／2.5ℓ 4カム16バルブ水平対向4気筒DOHC／燃料：無鉛プレミアムガソリン

CLIPPING VOUCHER

Medium: FIELD GEAR Date: December 1995

Subject: New England Weekend Life Ref. Press Release No.:

Work hard in weekdays and spend the relaxing weekend. Living in the city but never forget to be with the nature and enjoy outdoor life.
This kind of life style is here in New England.

The six states in New England is the spiritual home for American people. Since Pilgrim Fathers landed at Plymouth in 1620, many people came to this land to get the freedom. It has the rich nature, and beauty in each four seasons. This make the poeple's life style rich one.
Long long time ago, this land was covered by the ice. V shaped valleys, giant rocks, thousands of lakes, complicated sea shore make the ourdoor life rich enough.

The travel started from Boston. Boston, the capital of Massachusetts, was the central city of American Revolutionary War in 1700s. Harvard University and MIT are here.
If you drive two hours to the north, you will find out that you were surrounded by the beautiful nature of New England.
Our first destination was White Mountain National Forest in New Hampshire. This is the mountain outdoor field. Many camping cars drove into this forest through the most beautiful fall foliage road in America.
Maine, which is called "Vacation Land", has the large forest, 85% of its land is covered by the woods, more than 6000 lakes and 510 of rivers are there. People enjoy canoe and fishing there. In winter, there is the snow over 2m high.

L.L. Bean in Freeport opens for 24 hours without any closing day.
The fishing cornor of the shop was filled with the people who looked for the fly or fishing information.
You can enjoy every kind of outdoor sports in New England.

Driving spot-covered bridge
There are many covered bridges in New England, which became famous through the novel, "Bridge in Madison County". (4 of them are introduced with the photos.)

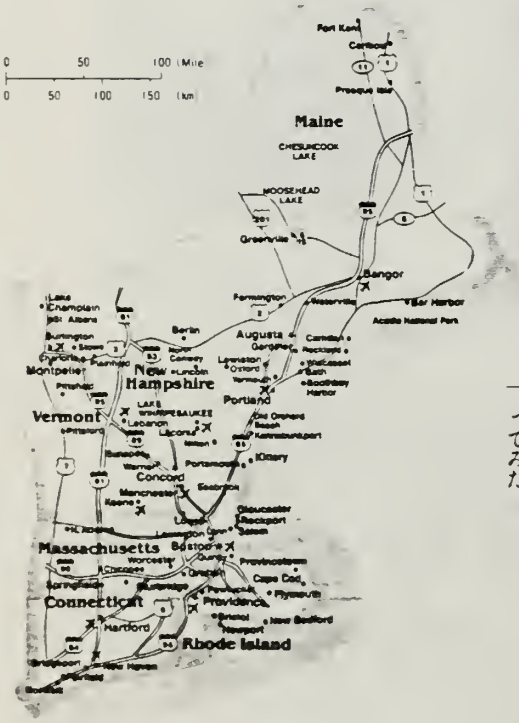
L.L. Bean is famous with the outdoor goods. Fishing,camping, hunting, kayaking, these are the popular outdoor sports people enjoy from their childhood. In this shop, more than 18,000 items are sold and 130 million copies of the catalogue are sent to over 140 countries.
The shop sells not only the outdoor goods, but propose the life style itself. Freeport is also the town with many outlet shops.

Last two pages introduce the Legacy Grand Wagon, with its detail description.

ウイークデーは仕事を精力的にこなし
週末にはゆったりとした時間を作る。
都市で暮らしながら自然との一体感を忘れず
アウトドアも十二分に楽しむ。
そんなライフスタイルが、現実にここにある。

こうありたい

レガシィ・グランドワゴンで、米国北東部・ニューイングランド地方のウイークエンド・ライフスタイルを知る旅



LEGACY
Grand Wagon Style
New England Weekend Life

アメリカ合衆国北東部、現在のマサチューセッツ、コネチカット、ロードアイランド、ニューハンプシャー、バーモント、メーンの6州から成るニューイングランド地方は、アメリカ人にとって心の故郷と言われる。1620年に"ピルグリム・ファーザーズ"と呼ばれる一団がマサチューセッツ州プリマスへ入植してきて以来、この地方には自由を求める人々がヨーロッパからこぞって渡ってきた。ちょうど日本の北海道と緯度を同じくする、豊かな、四季折々の自然の移ろいの美しさと、新天地を自ら切り開いてきた彼らの考え方や文化が、週末を大切にするというライフスタイルのバックボーンとなっている。

オフロードにも対応するロードクリアランスを身に付けたスバル・レガシィ「グランドワゴン」を旅の友として、ニューイングランド地方のライフスタイルとはいかなるものなのか、そして本当の意味での上質な遊び心とは、一体どんなものなのかを、じっくりと探ってみた。

週末は、

LEGACY
Grand Wagon Style
New England Weekend Life

いつもの場所へ、いつもより遠く……
ニューイングランドでの足
グランドワゴン

写真左 エリザベス岬にあるポートランド・ヘッドライトハウスは、ジョージ・ワシントンの命で1790年に建てられたものだ。写真下左から、旧型のフォードとグランドワゴン、どちらもニューイングランドにマッチする。ニューハンプシャー州ブレットン・ウッズには19世紀の雰囲気を今に残す数少ないホテル、マウント・ワシントン・リゾート・ホテルがある。アメリカらしいダイナミックなラフロードでもグランドワゴンは爽快と走り抜ける

IN NEW ENGLAND

なだらかな山脈、豊かな海。それはどこかで見たことのある風景だった

太古の昔、この地方は一面が大陸氷河に覆われ、いたる所に氷河によって浸食された地形が残っている。山間に深く刻み込まれた、たとえばニューハンプシャー州フランコニア・ノッチのようなV字形の渓谷や、巨大な奇岩。メーン州だけでも6000を越すという湖沼、カナダ国境まで続く入り組んだフィヨルドの海岸線などが、アウトドア・スポーツを楽しむための置き土産として形作られている。

旅のスタートはボストン。マサチューセッツ州の州都であるこの街は、1700年代の独立革命の思想の中心であった歴史の街であり、ハーバード大学(HU)、マサチューセッツ工科大学(MIT)のある学術都市としても知られる。この歴史の街の市街地を抜け、ひとたびインターステーツ・ハイウエイ(州間道)を北西の山間部へ、あるいは海岸線に沿ったルートをほんの1、2時間走ると、いつの間にか、様々な表情をもったニューイングランドの自然の中を疾走していることとなる。

最初の目的地は、州間道93号線を北西へ向かい、ニューハンプシャー州ホワイト山脈国定森林へ。13kmもの大渓谷フランコニア・ノッチが突き抜ける、ニューイングランドを代表するマウンテン・アウトドア・フィールドだ。山岳道路とアプト式鉄道はともにこの地方の最高峰・ワシントン山(1916m)へと続く。

一体、何台のキャンピングカーとすれ違ったことだろう。このフォレストを縫うように走るR112は、アメリカで最も美しいと言われる紅葉の道。キャンパー達は、このルート沿いのキャンプ場を週末の庭とするのだ。

ニューハンプシャー州の東隣り、"バケーションランド"というニックネームをもつメーン州は、広大な森林地帯が州の85%以上を覆い、6000以上の湖沼と5100以上の川が点在する。州最大の港湾都市・ポートランドへと至るR302沿いの湖岸近くには、レンタルカヌーのショップ、フィッシング・ショップが数多く見られる。ロブスターの一大産地としても知られる州の入り組んだ海岸には、建国以来の歴史をもつハーバーライト(灯台)が岬々にそびえ、静かな砂浜では、ソルトウオーターフィッシングを楽しんでいる風景が見られる。

カナダと国境を接するメーン州の奥地では平均2m前後の積雪があるという気候条件、そして週末を大切にする気質と、そうしたライフスタイルを満足させる自然環境に抱かれているという背景は、4WD、とくにワゴンのそれが支持される明確な理由だということも、この旅で十二分に理解できた。

機会があれば、ぜひこの米国北東部の地方を訪れてほしい。

荒々しい大西洋岸と、森林に覆われた山々。のどかな村と、賑やかな都市。そして四季折々の自然を楽しめる気候は、スケールの圧倒的な違いこそあれ、ニューイングランドは、どこか日本と相通じるものがある。ここを巡る旅は、我々のホームグラウンド、日本を再発見できる旅ともなる。

自分のために使う時間。これを満たすのがニューイングランドの自然

次のページで紹介するメーン州フリーポートのL.L.Beanは年中無休24時間営業のショップだ。深夜、早朝の賑わいはどんなものかと、早朝5時頃、店内を覗いてみた。驚いたことに、フィッシングコーナーがえらく賑わっているではないか。そう、彼らは出勤前にひと振り楽しむために、フライを手に入れようと、あるいは新鮮な情報を得ようとやって来ているのだ。

まさにこれは、ニューイングランドのライフスタイルを象徴する。自分が自由にできる時間は、自分のために使う。子供の頃から当たり前のように接してきたアウトドア・スポーツを楽しむことは、彼らにとって最も大切で、そして自然な時なのである。

何をしようとも構わない、とはおおげさな言い方かもしれないが、実際、ニューイングランドではあらゆるアウトドア・スポーツが楽しめる。何も遠くまで赴かなくても街の郊外のストリームでは、ブラウントラウトやピンクサーモンを釣り上げることができる。まるでカヌーを楽しむために創造されたと思うくらい、数えきることが不可能なほどの湖が点在する。針葉樹独特の甘い香りが漂う、山間部へと続く道はツーリングには最適だ。そしてその道は、冬にはスキーヤーをゲレンデへと導くルートとなる。豪華クルーザーが停泊する高級リゾート地から、ダイナミックなバドリングが楽しめる海岸線。こうした身近な自然と、ニューイングランドの人達のライフスタイルは、見事なまでに、シンクロナイズされている。●ニューイングランド地方についての詳しい情報は日本でも得られる。米国商務省観光局　日本・アジア地区支局　☎03-3212-2421まで。

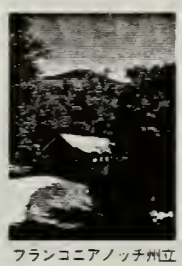
DRIVING SPOT

詩情漂うカバード・ブリッジを訪ねる

ロバート・ジェームス・ウォラーの「マディソン郡の橋」で、日本でもよく知られるようになった〝カバードブリッジ〟。メーン、バーモント、ニューハンプシャーの3州には、この屋根付き橋が数多く点在する。橋の誕生の理由は定かではなく、馬が橋を渡るのを怖がらないようにするためとか、この構造が最も橋が長持ちするからとも言われる。

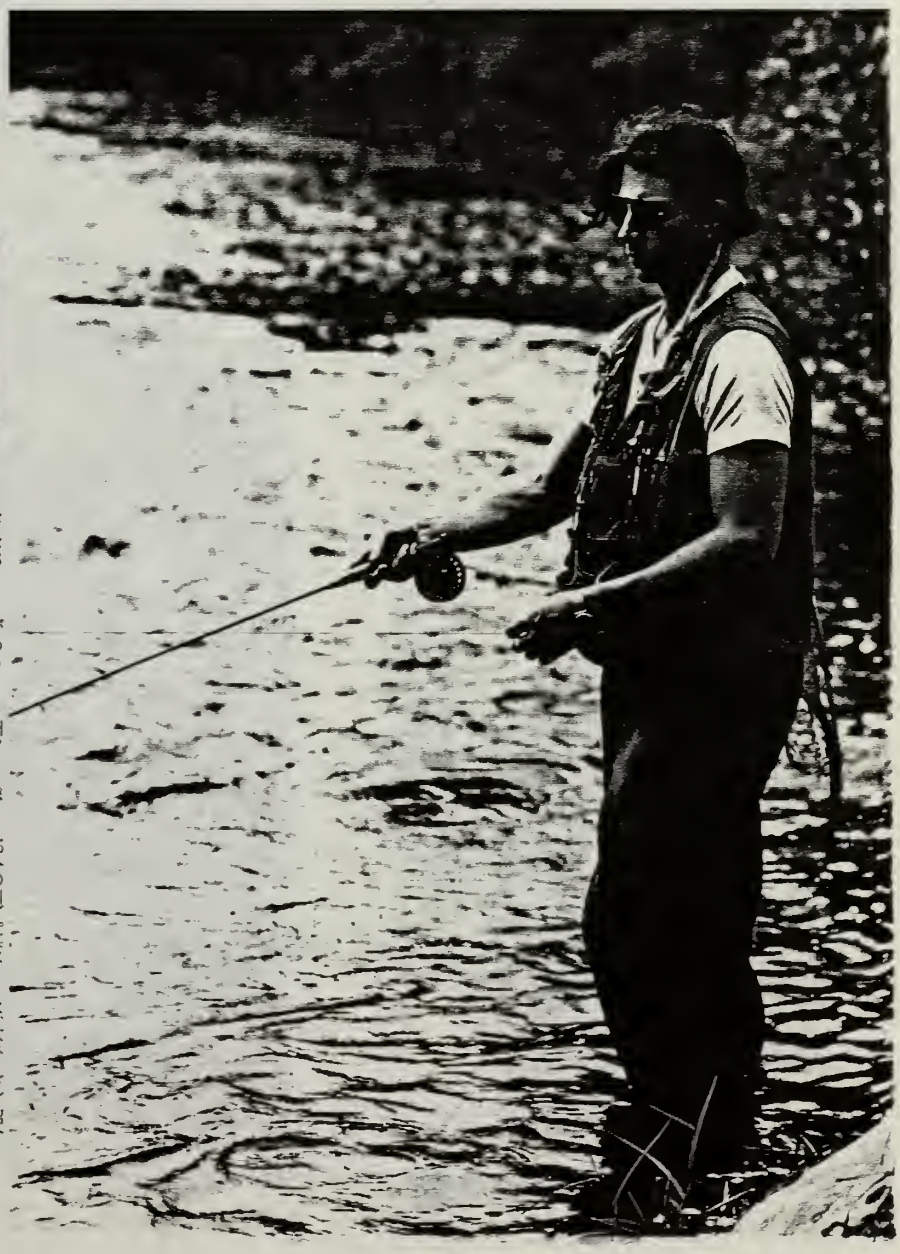
メーン州フライヤーバーグのR302近くのヘムロック・カバード。1857年に作られた橋

ヘムロック・カバードの中。作られた当時のままの独特なトラスト構造が分かる



フランコニアノッチ州立公園のフルーム・カバードブリッジ。1871年完成

通称「ハネムーン・ブリッジ」のR16近くのジャクソンのカバードブリッジ



L.L.Beanがあるメーン州フリーポート郊外の川で。実はここは、次ページで紹介するL.L.Beanの釣り担当、ステファン・ピート氏に教えてもらった場所

キャンピング途中の高校生達。ホワイト・マウンテン国定森林にて

6000以上の湖沼をもつメーン州では、カヌーはポピュラーな遊びだ

メーン州フライヤーバーグ近くの林道を走るサイクリスト。ツーリングは年齢を問わず楽しまれる

マサチューセッツ州南東の海岸は、人気の海浜リゾート・エリア

ニューイングランドのライフスタイルとは「L.L.Bean」そのものだと知る旅

LEGACY
Grand Wagon Style
New England Weekend Life

店内の「マス池」で行われるキャッチ&リリース・フィッシングのデモンストレーション。速い脈わいをみせていた

ニューシューズ・グッズの充実ぶりには驚いた

IN FREEPORT MAINE

ニューイングランドの自然環境が、L.L.Beanのバックボーン

カタログ通販の浸透率の高さとショップ展開の恩恵で、L.L.Beanは、アメリカそのもののアウトドア・ブランドとして日本でもよく知られている。今回の旅では、この認識を改めなければならないということを悟った。

つまりこういうことだ。L.L.Beanは、アメリカそのもの、ではなくて、ニューイングランドのライフスタイルそのものだということだ。フィッシング、キャンピング、ハンティング、カヤック、どれもニューイングランドで生活する人達が、子供の頃から親や学校から学び、当たり前のように接してきたアウトドア・スポーツなのだ。大人になっても、出勤前に近くの川でフライを楽しむ。そんな日常がごく普通にここでは営まれている。

現在、商品総アイテム数は1万8000点を越し、年に約30種類、約1億3000万冊のカタログを製作し、世界147カ国に通販顧客をもつまでになっているが、そもそもはハンティング時にシューズが水を含み足が凍えることに悩んでいたメーン州の起業家、レオン・レオンウッド・ビーン氏が、独自に考え出したハンティング・シューズのみの通販からスタートした。

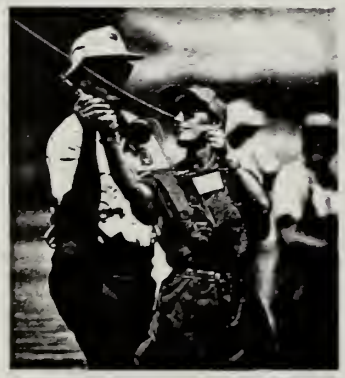
今では、ニューイングランドの通学途中の子供たちの背ではL.L.Beanのデイパックが元気よく踊り、早朝の川辺にはL.L.Beanのフィッシング・ロッドを握った大人たちがたたずむ。L.L.Beanそのものであるニューイングランドのライフスタイルを垣間見ようと、年間約350万人もの人達が、この年中無休・24時間営業のショップを訪れる。

フリーポートの中央通りに面するショップ。1951年以来、年中無休24時間営業の体制を敷く

ADVENTURE

魅力的な商品を販売するだけではなく、ライフスタイルそのものも提案する

15年以上の歴史をもつ、さまざまなアウトドア・デイスカバリー・プログラムを用意して、自然との正しくて安全な付き合い方を教えてくれるのもL.L.Beanのもうひとつの魅力だ。用意されるスクールは、フライ・フィッシング、シューティング、バイシクリング、パドリング、ウインタースポーツなど。詳細は、☎03-5350-8801へ。



フライ・フィッシング・スクールは、入門、中級、ソルトウォーター・コースに分かれており、魚の生息形態、フライ・タイイング、キャスティング・テクニックまでトータルに学べるものだ

フィッシング担当のステファン。元アラスカ釣りガイドだ

キャンピング担当のサンドラ。野外生活知識の豊富さに驚かされた

バイク&スキー担当のクリスティン。趣味は自転車でのツーリング

▶オールコンディションズ・ブーツ(ニュー・ゴアテックス／シンサレイト)
$150.00
ニュー・ゴアテックス／シンサレイトは、マイナス18℃でも快適に過ごせる、ゴアテックス・ブーティと400gのシンサレイト・インナーを採用のブーツ。カラーはダークブラウンのみ。オリジナルは、フリース素材のライナーを採用。カラー：ブラウン／ブラック、ラスト／グリーン

▶オールコンディションズ・ブーツ(オリジナル)
$110.00(7インチ)
$122.25(9インチ)

▼ライト・ロフト スリーピングバッグ(−15°F)
$216.50
マイナス26℃の環境でも快適に過ごせるスリーピングバッグ。他に封筒型、ロングタイプがあり、2つをつないでダブルサイズとして使用可。サイズ：208×79(収納時20×51)cm

▶スポートライト・アスレチックバッグ
$75.50
シューズがそのまま収納できるメッシュポケットが付いた便利なバッグ。両サイドの拡張ジッパーを開くと最大幅は56cmとなる。カラー：ネイビー、グリーン、ブラック、プラム。サイズ：H30.5×L40.5×D25cm

◀ニュー・トレイル・モデル スーパー・セーター
$86.50
約200gのグース・ダウンを封入したマイナス26℃の環境でも快適に過ごせる。カラー：ハンター、レッド、タン、ネイビー

◀スポートライト ガーメントバッグ
$109.00
濡れ物を収納するのに便利なメッシュポケットを始めとした使い勝手に優れる12のポケットを内蔵。カラー：ネイビー、グリーン、ブラック、プラム。サイズ：H97×W58×D8cm

◀クラシック・フィールド・ウォッチ
$94.50(ステンレススチール仕上げ)
第2次世界大戦で活躍したパイロット・ウォッチをイメージ。耐久性に優れる全天候型レザー、ナイロン製、布／革の3本のバンドが付属。フェイスカラーはタン、ブルー、ブラックの3色。ゴールドカラー仕上げは$105.50

WATCHING

フリーポートはアウトレット・タウン

メーン州フリーポートは、L.L.Beanだけが魅力の街ではない。L.L.Beanをほぼ中心にして、街の中央通り沿いには、パタゴニア、ティンバーランド、フィラ、リーボックなどのアウトドア・スポーツ、ラルフローレンなどのデザイナーズ・ブランドのアウトレット、メーン州の郷土土産を扱うショップが約110件立ち並ぶ。安くて賢いショッピングができる街だ。

＊価格はすべて日本向けのカタログのそれに準ずる。カタログ入手を希望する場合は、L.L.Beanカタログ顧客サービスセンター☎03-5350-8801へ

大地と調和する乗り味のグランドワゴン こんなレガシィを待ち焦がれていた……

LEGACY
Grand Wagon Style
New England Weekend Life

PROLOGUE

最低地上高200㎜。これはレガシィの新しいステージの始まり

街から大自然へ、スポーティで快適な走りを楽しみながらアウトドア・フィールドまでの確かな足となるべく誕生したのが、このレガシィ・グランドワゴン。そのためのメカニズムとして200㎜のロードクリアランスを確保するとともに、ブレーキ時にホイールロックを防ぎステアリング能力を損なわないためのABS（アンチロック・ブレーキング・システム）、後輪のより高いグリップ力を生むリヤLSD（リミテッド・スリップ・デフ）を標準装備。アウトドアで役立つ便利機能を充実させ、さらにスタイリングそのものも、自然の中で映えるものとなっているのが最大の特徴だ。

内装面で若干の違いはあるものの、米国で先行発売され好評を博している「アウトバック」の日本仕様車が、このグランドワゴン。より自然に近付きたいと願うワゴン・ファンには、待ち焦がれた1台と言える。

タウンにもマッチするレガシィならではのスタイリング、特徴であるスポーティなハンドリングと軽快な乗り心地を継承しつつ、十分なロードクリアランスの採用によりラフロードでの高い走破性も生み出す

MAN OF SUBARU

SUBARUを最も愛するアメリカン・ドリーマー

アーニ・ボック。マサチューセッツの自動車王とは彼のことだ。スバルは全米を直営の5テリトリーと2つの独立系テリトリーに分けているが、彼はその独立系のひとつ、スバル・オブ・ニューイングランドの社長である。全米平均の2倍以上というニューイングランドでのスバルのシェア率は、ニューイングランド独特の自然環境、ライフスタイルにスバルが合致しただけではなくて、彼の尽力も見逃せないと言われる。

高級別荘地、マーサズ・ビニヤード島の彼の別荘にて

STYLE

自然の中でも堂々と映える、逞しいスタイリングをワゴンで実現

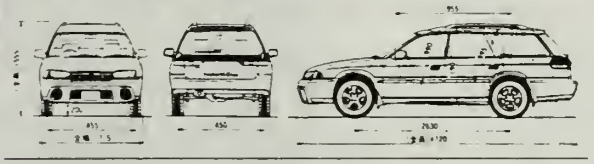
最低地上高が200㎜といえば、本格的クロカンモデルであるパジェロの205㎜のそれに近い数字だ。もちろん、ツーリングワゴンと2台並べれば65㎜という車高差は歴然としており、スタイリングの違いは実感できるが、グランドワゴンのみに接する限りでは、レガシィのスポーティかつ洗練された外観が見事に継承されているため、クロカン的な印象は微塵も受けない。

だがそうしたスタイリング・インパクトもフロントからサイドビューでは一変する。フロントグリルは、グランドワゴン専用とされ、クロームメタリックによる個性的なデザインがカジュアル感と力強さを強烈にアピール。大型のフロントバンパーにはストーンガード付きのフォグランプがビルトインされ、バンパーラインから下をミディアムグレーメタリックとしたツートーンを基調としたサイドには、大型サイドプロテクターが組み込まれ全体的に逞しいスタイリングに仕上がっている。

スポーティかつ高品質感あふれるインパネ。エアバッグ、木目調パネル、セレクトレバーはメーカー装着オプション

200㎜のロードクリアランスの確保が反映されるリヤビュー

●三面図（単位：㎜）



ワゴンは進化する。グランドワゴンの使い勝手のよさをカーゴルームに見る

UTILITY

グランドワゴンは、とくにアウトドアでの使い勝手に、より高いものを求め誕生したクルマだが、その意図は随所に反映されている。

ステーションワゴンのなかでもトップクラスの機能性を誇るカーゴルームで真っ先に目を引くのはカーゴファン。カーゴルームの左右リヤクォーター部にそれぞれ設けられた換気用のファンだ。フィッシング・ギアやペットなどを載せた際の気になる臭いを換気してくれるアイデア機能である。また、AV機器やポータブル冷蔵庫も野外で存分に使いこなすことができるよう、DC12V（最大120W）のカーゴソケットを備える。リヤシートフラット時の荷室長は1845㎜、荷室容量は488ℓを誇るこのカーゴルーム周辺には、巻き取り式のトノカバー、カーゴフックといった機能も当然装備される。

高い安全性の確保もこれからのワゴンには欠かせないものだ。グランドワゴンは、ABS（アンチロック・ブレーキング・システム）、リヤLSD（リミテッド・スリップ・デフ）を標準装備し、より幅広い走行条件での優れたアクティブセイフティを実現。ボディ側面からの衝撃を緩和するサイドドアビーム、万一の衝突時にステアリングの室内への突き出しを抑えるステアリングサポートビーム、雨粒や曇りを取り除きクリアな後方視界を確保するヒーテッドドアミラー、運転席・助手席デュアルSRSエアバッグ（メーカー装着オプション）などが、さらなる安全性の向上に貢献する。

リヤシートはバックレストも座面もこのように6：4分割にできる。乗員や荷物の量に合わせてフラットなスペースを自在に使い分けることが可能だ

リヤシートの座面をすべて引き上げ、バックレストを倒すとフルフラットなカーゴスペースが誕生する。セダンでは積むことができない大きな荷物も余裕で運べる

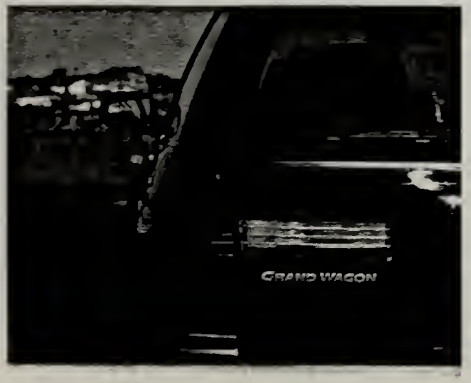
写真下左から、DC12V（最大120W）の電源が取れるカーゴソケット、荷物が走行中に崩れないようにストラップで固定するためのカーゴフック、左右リヤクォーター部に換気用のカーゴファンを装備

ABILITY

レガシィならではの基本性能を確保しさらにラフロードで優れた性能を発揮

オールラウンダー。グランドワゴンでのツーリングで得た印象はまさにこの言葉に尽きる。ツーリングワゴンに比べ、65㎜車高をアップした程度では、セダン以上ともいえるスポーティなハンドリングと快適な乗り心地という基本特性には変化はない。ボストンの狭い旧市街地での取り回しでは、車高をアップさせたデメリットは全く感じられず、ニューイングランド独特の入り組んだ海岸沿い道、ニューハンプシャー州ホワイトマウンテン周辺のワインディングでのハンドリングもスポーティそのもので、標準装備となるABSのブレーキバランスも良好であった。また、グランドワゴンの特徴であるラフロードでの走破性も、メーン州郊外のカバードブリッジへと至る未舗装路で満足のいくものが確認できた。

スタイル	★9	使い勝手	★10
機動力	★10	コストパフォーマンス	★8
機能性	★10	総合評価	★19



●主要諸元表

全　長(㎜)	4720
全　幅(㎜)	1715
ホイールベース(㎜)	1555
車両重量(kg)	1410
乗車定員(名)	5
総排気量(cc)	2457
最高出力(ps/rpm)	160/6000
最大トルク(kg-m/rpm)	21.5/2800

スバル・レガシィ・グランドワゴンの問い合わせ先／スバル・フリーダイヤル■0120-052215　東京地区車両本体価格　269万7000円

CLIPPING VOUCHER

Medium: GOODS PRESS Date: December 1995

Subject: Trad Wagon which matches to the life style of nature lovers Ref. Press Release No.:

New England area where American culture was established since the Puritans arrived there in 1620. The nature there is very severe, but rich. People in New England enjoy their outdoor life closely with its natural life. The new wagon, Legacy Outback, is the most suitable vehicle for their life.

Lots of lakes, rivers and the complicated seashore makes the New England rich with natural beauty. New England was first discovered by the immigrant from England. People who came to the new world to get the freedom of life, established their own culture here and it has been handed down to the present. Their houses, furnitures and even the spiritual things have been kept for the generations. There is the people who is called §establishment§. To be ccalled so, people has to know about their roots correctly. Their relationship between the families has been kept for more than 200 years.

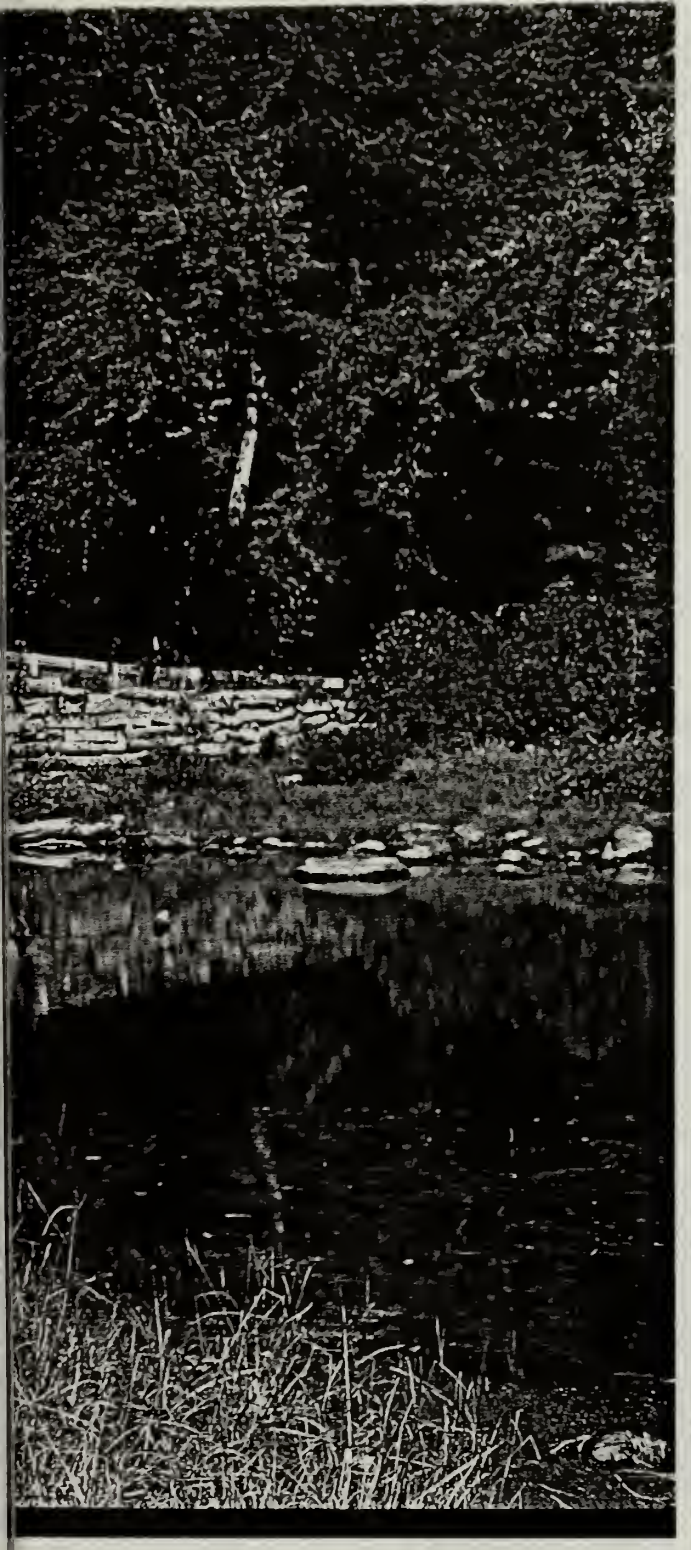
It is the same as their life. Children will know how to fish from their family. Next time, they will teach it to their friends. This is how the life style of the area has been kept.

The harmony with nature is not only about their life style. Take the sample with the covered bridge. There are 8 covered bridge in Maine, which you can see in the novel of "The bridge in Madison County". Roof and the wall of the bridge prevent it from the erosion by rain and winds. Also it protect the people from slipping down from the bridge with snow.

Boston, where Harvard and MIT locates, is the center city of New England. It is the active town, but at the same time it shows the life style of New Englander.Friday evening, after finishing their work, people go out of the town to enjoy their weekend life. Snow board, skiing equipment, camping goods are loaded in the back of the car.

The new wagon is suitable for this kind of life. It is suitable when you wear the suite for business and also with your outdoor style.

(Article explain about L.L. Bean shop in Freeport.
Introduces the inside of Legacy Outback.
Also about one of the Subaru dealers in New England. He has sold Subaru since 1971.
Explanation about the detail of the car follows.)

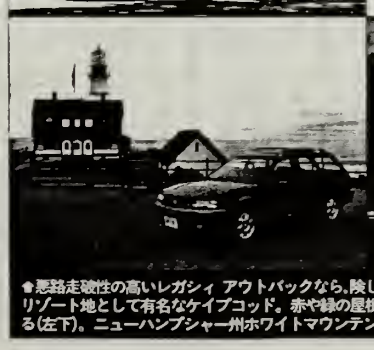


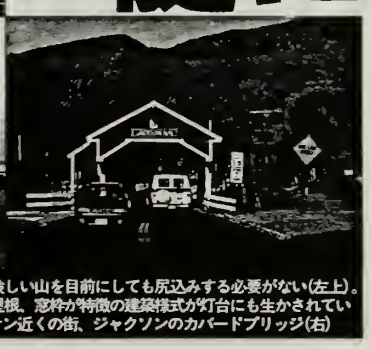
'95 ベストグッズ大研究
ニューワゴン

Photo/Ichikawa Yukio
Text/GoodsPress Staff

自然と調和するライフスタイルにマッチしたトラッド・ワゴンの真髄

アメリカ合衆国北東部のニューイングランド地方――1620年、メイフラワー号のピューリタン移住以来、アメリカ文化を築き上げてきた地域のひとつだ。厳しいながらも豊かな自然に恵まれ、人々の生活がアウトドアと密接した関係にある。そんな彼らのライフスタイルにとても似合ったクルマがデビューした。レガシィ アウトバック(日本名=グランドワゴン)――'90年代のライフスタイルを具現化するのにピッタリのニューワゴンである。





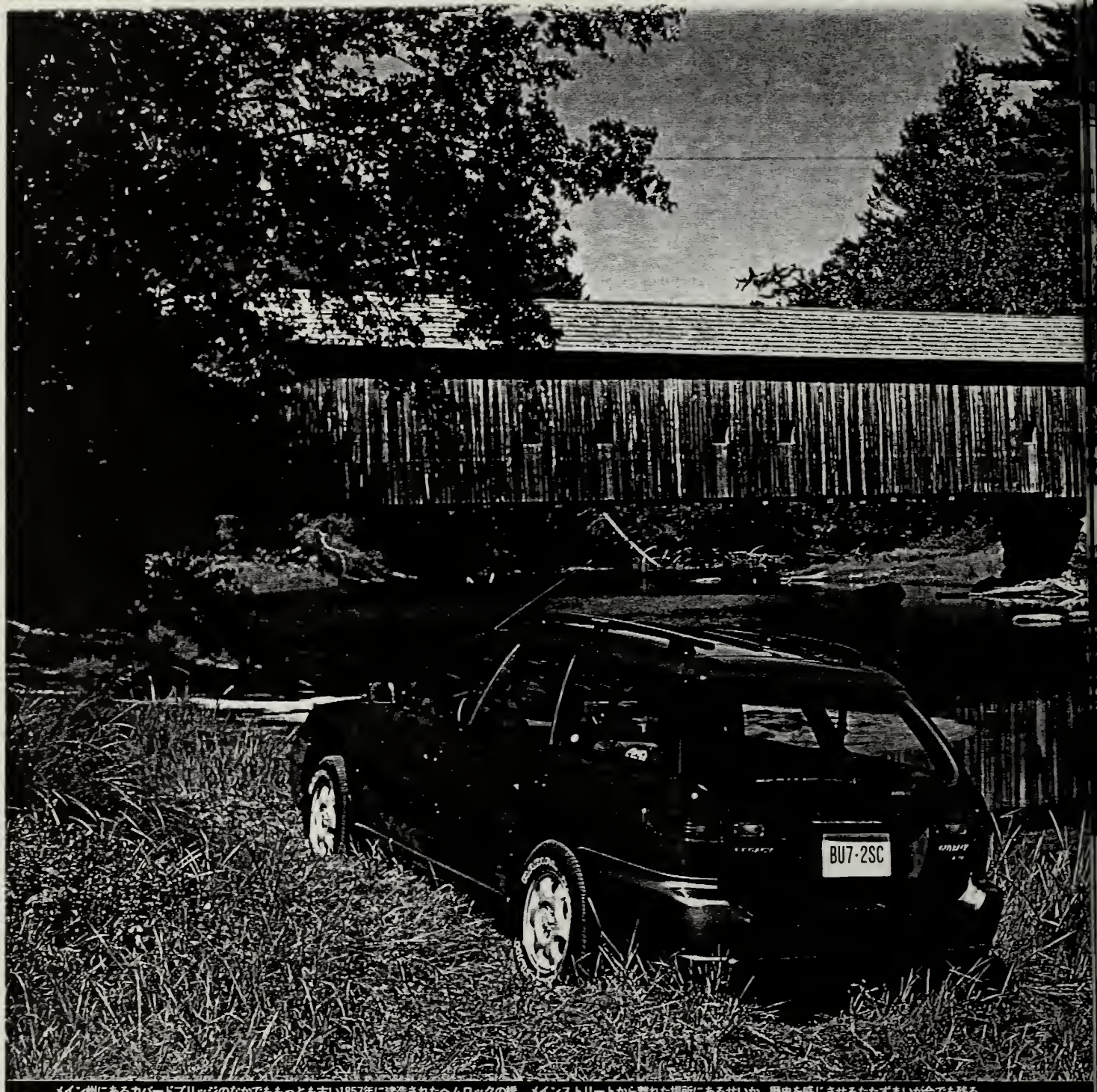
●悪路走破性の高いレガシィ アウトバックなら、険しい山を目前にしても尻込みする必要がない(左上)。リゾート地として有名なケイプコッド。赤や緑の屋根、窓枠が特徴の建築様式が灯台にも生かされている(左下)。ニューハンプシャー州ホワイトマウンテン近くの街、ジャクソンのカバードブリッジ(右)

数限りない湖、流れ込む河川、入り組んだ海岸線、険しい山々。豊かな自然が特長のニューイングランド地方は、もともとイギリスの新教徒たちが植民地を建設した場所である。

自由を求めてヨーロッパから渡ってきた人々は新しい文化を築き、現在まで受け継がれている。家や家具は何世代にわたっても継承され、同時に精神も伝えられる。歴史と伝統を重んじるニューイングランド人気質を表す代表的な例だ。

「エスタブリッシュメント」と呼ばれる人々がニューイングランドにいる。そう呼ばれるためには、自分の出生や祖先の名を語れなければならない。つまり、200年以上昔から友人だった人々の家族は、現在でもその関係が続いていることの証明だ。

しかし、伝統はかたくなものだけではない。子供のころに親に連れられていったキャンプの思い出。今度は自分が子供を連れてい



メイン州にあるカバードブリッジのなかでももっとも古い1857年に建造されたヘムロックの橋。メインストリートから離れた場所にあるせいか、歴史を感じさせるたたずまいが今でも残る

って遊ぶ。渓流でフライフィッシングを楽しみながら、キャッチ・アンド・リリースを教えてもらう。そして次に来たときには友人にそのことを教えてやる。自然と調和し家族や友人たちをも大切にしながら生きるスタイルは、別の意味での伝統としてニューイングランド地方に根付いた。新たな世代、周りの友人たちにひとつの文化が伝えられてきているのである。

自然との調和は、ライフスタイルだけの話ではない。たとえばカバードブリッジがある。屋根の付いた橋。「マディソン郡の橋」で有名になったスタイルだが、メイン州にも8つのカバードブリッジがあるという。屋根と壁は風雨から橋の腐食を防ぎ、降雪時に人が滑らないようにし、雪下の恐怖によって鳥が巣れるのを防ぐ3つの役割を果たしている。自然と調和することを、橋が自らのカタチで表しているのだ。

ハーバード、マサチューセッツ工科大などが集まり、ニューイングランドの中心ともなっているボストン。都会にありながらも、人人の生活はニューイングランドスタイルそのものだ。早朝、フライフィッシング・ギアをクルマに積み込んで小一時間楽しんだあと出社する。もちろん仕事用のスーツもわれない。金曜日の夕方、仕事を終えたらスキーやスノーボード、キャンプ用品などといった遊びのギアを搭載し、ウィークエンドを満喫する。それがごく当たり前のスタイルだ。

そんな生活には、トラッドなスタイルでありながら行動力もあるクルマが似合う。オフィスにスーツ姿で乗り付けても違和感なく、アウトドアに出かけても十分なパフォーマンスを発揮するワゴンが理想的だ。レガシィアウトバック。たっぷりのロードクリアランス（200㎜）を持ち、スムーズな水平対向4気筒エンジンを搭載した4WD。都会の喧騒の中にあっても大自然とも調和できるカタチを持ち、個性の主張もできるクルマこそ、ニューイングランドのライフスタイルにマッチするのである。

厳しい自然の中では信頼のおけるアウトドアグッズが必要とされる

アメリカン・アウトドア・スタイルの代表的存在がL.L.ビーン。そのスタートは、レオン・レオンウッド・ビーンが一足のブーツを製作したことによる。革ブーツの防水性に欠ける点をカバーするため、ボトム部をラバー製にしたこのブーツは、L.L.ビーン本人がハンティング用として履きたいがためであった。フィッシングと同様、ハンティングも日常のこととして行われていたニューイングランドならではの生い立ちだ。

ボストンから海岸線沿い北東約120マイルにある街フリーポート。L.L.ビーンはニューイングランドのほぼ中央に本拠地を持つ。ショップは24時間営業。深夜、早朝であっても、フィッシングやハンティングに出かけたい人のために店を開いている。事実、フライを手に取りそのままフィッシングに出かけようとする人などで、店内は人の動きが途絶えることがない。それほどまでに、生活とアウトドアが密接しているのだ。

厳しい寒さに見舞われるこの地域の人たちにとって、信頼性の高いアウトドア用品は必需品だ。同様に4WD車の需要も高い。アメリカ全体の人口に対し5%を占めるにすぎないニューイングランド地方で、スバル車の売上台数は全米の15%を誇る。その大半がレガシィ4WDだ。冬場におけるトラブル、故障は命にも直結するだけに、慎重にクルマ選びをした結果がこの数字に表れているともいえる。必要性によって進化してきた機能を持つクルマならではの結果だ。

レオーネ、レガシィが確立した"ツーリングワゴン"スタイル

レオーネ、レガシィの車名を聞くとツーリングワゴン（以下T/W）を連想する。それほどまでにイメージ付けられたモデルがこの2台だ。

レオーネのデビューは'71年。当時はクーペモデルのみで全車水平対向4気筒1400ccエンジンを搭載していた。セダン、エステートバンの追加やモデルチェンジを経て、T/Wが初めて登場したのは'10年後、'81年7月のことである。T/Wはすべて4WDと徹底的にセグメントされながらも、マルチパーパス4WDワゴンとして高い評価を受けた。

T/Wのモデルチェンジは'84年。エンジンは1800cc、ボディのサイズアップで居住性を高めた。ターボエンジン搭載車も登場。エレクトロ・ニューマチックサスペンション、4WD自動切り換え装置、4輪ディスクブレーキなど、先進技術を採用した4WDワゴンは、スキーを始めとするレジャー用マルチパーパスビークルとして人気を呼んだ。

10年以上も前から、独自の市場を築き上げ、評価されてきたT/Wはレオーネ以外に存在しない。これらの財産は、実質上の後継モデル、レガシィに引き継がれることになる。

レオーネ4WDツーリングワゴンは'81年に登場

'71年にデビューしたレオーネクーペ1400

サイズアップした1800ccモデルは'84年

技術とパフォーマンスに魅了されて25年以上もスバル車ファンであり続ける男

アーニーポック氏。ニューイングランド地方のスバルディーラー53社をまとめるほか、日本車2社とオールズモービルのディーラー、放送局のオーナーなど15社の社長を務める。多忙ななかでもマリンレジャーを始めとするアウトドア活動を欠かさない精力派人間でもある

アメリカでスバル車をもっとも愛し続けてきた男、アーニーポック氏。氏がスバル車のディーラーをとりまとめる「スバル・オブ・ニューイングランド」を設立したのは1971年のこと。以来、普段の足として乗るクルマは常にスバル車だという。

「FFのスバル1000のパフォーマンスに感銘したのがきっかけだね。スバルは水平対向エンジン、4輪駆動などに革新的で個性的な技術を取り込んできて、時代の先端を行っている。スバル車以外のディーラーも経営しているから、その3メーカーの車は仕事としてすべて乗ったよ。ランボルギーニやロールスロイスを買うことだってできる。だけど、スバル車に魅了されてしまっているんだ」

小型車ジャスティで会社に乗り付けることもしばしばという氏が乗り継いできたスバル車は、20台を下らない。なかでもレガシィとSVXには格別の思い入れを持つ。

「SVXはドライビングのスムーズさ、足回りの安定性、どれをとっても素晴らしいクルマなのに、人にあまり知られていないのが残念だ。もっと評価されていいはずなのに……」

レガシィについては一番乗る（運転する）機会の多いクルマだそうだ。そこで、アメリカでデビューしたばかりのアウトバックについて、感想を聞いてみた。

'66年5月に誕生したスバル初の小型車、スバル1000。氏が最初に触れたスバル車である

個性的なスタイルに4WDシステムなど高性能を盛り込んだアルシオーネSVX('91年デビュー)

「スバルの持つ技術のパフォーマンスに合ったスタイル、実力を引き出す究極のカタチとなったクルマだ。レガシィ・シリーズのなかでも、あらゆる目的に使えるという点でアウトバックがベストだ」

氏のスバル車ファンとしての歴史は、今後も途切れることはない——。

愛妻家でもあるアーニーポック氏は、パーティだけでなくレジャーに出かけるときには、夫婦そろってのことが多いという

●レガシィ アウトバックの室内はゆとりを感じさせる。シートも適度なホールド性で疲労感は少ない。LLビーンなどのアウトドア用品がこれほど似合うクルマも多くない。これらを積み込んで、レジャーに出掛けるのにうってつけだ。日本仕様にはない2200ccエンジンと5速マニュアルトランスミッションの組み合わせは、2500ccモデルと比べてもパワー不足は感じない

週に2度、LLビーンの店内に設けられた池で行われるフライフィッシングのデモンストレーション。インストラクターの軽妙なアナウンスとともにキャッチ・アンド・リリースの基本が解説される。まさにニューイングランドスタイルだ

スポーツ性が次第に高まる

「大いなる伝承物」。レガシィのネーミングの由来だ。その名のとおり、水平対向エンジン、乗用4WDシステムなど、スバルの伝統的技術を受け継いだ。

'89年、セダンとT／Wの2タイプでデビューしたレガシィは、1800ccと2000cc2種類の16バルブエンジンを搭載。前後輪に最適なトルク配分を行うアクティブトルクスプリット式4WD（AT車）、4チャンネルABSなど高性能システムを誇っていた。

後に250馬力のツインターボエンジンが搭載されるなど、スポーツワゴンとしての特性はさらに進化を続け、現在も実力を誇る。

モデルチェンジを受けたレガシィT／W

新型車レガシィは'89年1月にデビュー

'92年のターボモデル、GTは250馬力を誇った

数々の速度記録に挑戦したレガシィ。'89年1月、10万km走行で平均時速223・345kmと世界記録を更新した（上）。塩平原のボンネビルスピードウェイ（アメリカ）では時速249・981kmのワゴン世界最速を樹立（下、'93年10月）

使い勝手に優れたユーティリティビークルの究極型

行動派RVとしてのレガシィ アウトバックは海や山、高速道路や市街地とあらゆるシチュエーションでオールラウンドな実力を示してくれた。

ツーリングワゴンと比べて40㎜アップした200㎜のロードクリアランス（最低地上高）は、オフロードやワダチのついた雪道での走行に、より安心感をもたらす。行動範囲が一層広げられることになるのだ。

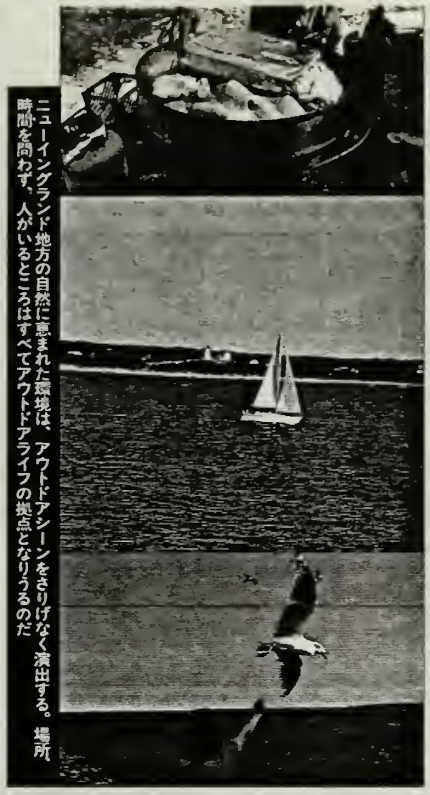
車高アップによる足回りの剛性不足はまったくない。リヤストラットと前後スタビライザーのサイズや取り付け剛性がアップされたおかげで、ゆったりしなやかな乗り心地のなかにも剛性感タップリ。

2500cc水平対向4気筒4カム16バルブエンジンはET-4AT（7ポジション電子制御4速フルオートマチック）との相性もよく、3名乗車の急激な登坂路でも思いどおりの加速力が得られる。上の写真は標高1916mのマウントワシントン山頂。ここに至る山岳路でも、実用域のトルクが太いため、スムーズなドライブだった。

高速道路も含め、取材で1日6時間以上の運転を何日も繰り返したが、疲労感はまったく残らなかった。それは、優れた足回りとストレスのないエンジン性能に負うところが大きいはずだ。

アウトバックには、2200ccの5速マニュアル仕様もある。数値上、パワーとトルクは劣るものの、ギアチェンジをこまめに行えば、十分なスポーティ感を味わえる。

ボストン北方約120マイルのMt. ワシントン山頂。周囲の山々を見下ろせる高度を持つ



ニューイングランド地方の自然に恵まれた環境は、アウトドアシーンをさりげなく演出する。場所、時間を問わず、人がいるところはすべてアウトドアライフの拠点となりうるのだ

日本仕様グランドワゴンの充実＆親切装備

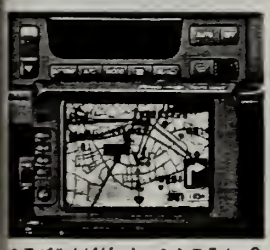
レガシィ グランドワゴンはアウトバック（アメリカ仕様）と異なり、2500ccのET-4AT車のみの設定だ。装備は単に充実しているにとどまらず、ドライバーや同乗者にとって、優しくて気の利いたものとなっている。

4WDシステムは定評あるアクティブトルクスプリット方式。4WDの特性に合わせた4センサー4チャンネルABS、4輪ベンチレーテッドディスクブレーキ、リヤビスカスLSDを標準装備。運転席／助手席デュアルSRSエアバッグはメーカーオプションで選べる。安全装備は万全だ。

オーディオは100Wパワーアンプ内蔵CDプレーヤー、AM／FMマルチ電子チューナーと8スピーカーが加わった豪華仕様。メーカーオプションでDSP内蔵レガシィリアルフォーカスサウンドシステムやインダッシュタイプの液晶TV（エクセーヌシート、デュアルSRSエアバッグ、タンデムサンルーフとセット）が設定されており、ナビゲーションもディーラーオプションで2タイプ選べるなど、選択肢が多い。

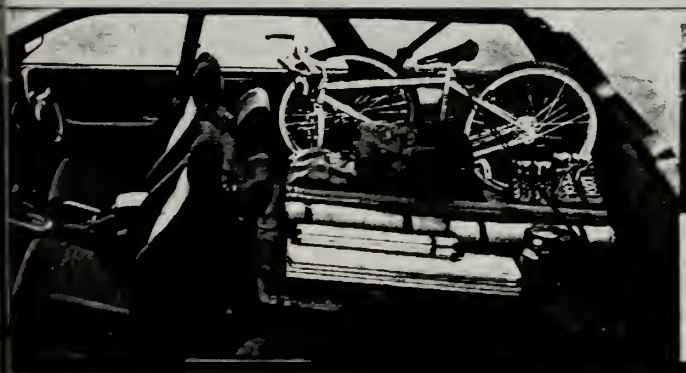
ボディカラーは、ボトムがミディアムグレー・メタリックと組み合わせられた2トーンが4タイプ。コスミックブルーマイカ（写真左）、クリムソンマイカ（67ページ）、フォレストグリーンマイカ（68ページ）、鮮やかなパッションブルーマイカと、それぞれ個性を主張する。

さまざまな風景に似合い、広い行動範囲と高い安全性を約束してくれるレガシィグランドワゴン。ライフスタイルまで提案してくれるクルマだ。



◆スバルナビゲーションシステム。GPS方式のパイオニア製とGPS、自律航法併用のADDZEST製（写真）のどちらかを選ぶことができる。ディーラーオプション

◆質感の高いインストゥルメントパネル。エクセーヌシート、デュアルSRSエアバッグ、レガシィリアルフォーカスサウンドシステム、木目調パネル、本革巻セレクトレバー＆ハンドブレーキレバー、運転席パワーシートはメーカーオプション



◆6：4分割可倒式リヤシート。3名乗車の場合、乗員のスペースと荷物の積載の両方で最大効率を発揮。シート座面を引き起こし、バックレストを倒す方式のためスペースはフラットで使いやすい
◆フルフラットカーゴスペースはリヤシート全体を倒すと生まれる。1691ℓという広いスペースは、遊びのギアを搭載するのに十分

ドレスアップ姿にも カジュアルな服装にも似合う ユーティリティ性の高さが魅力

「コンサートやディナーパーティのドレスアップ姿にも違和感なく、ウィークエンドにはいろいろな道具を積み込んで出かけられる。シチュエーションに応じて使える点がアウトバックの魅力ですね」

自分ではインプレッサワゴン、奥さんがレガシィ ツーリングワゴンに乗っているというリチャードは、新型のアウトバックについてこう語ってくれた。

「妻は通勤だけでなく、取引先のお客さんを送迎するときにもレガシィを使います。こんなオンタイムが終わると、服を着替えて遊びのギアを積み込み、CDもオフの音楽にして出掛ける。1台のクルマですべてできるわけです。アウトバックなら車高も上がっていますから、悪路走破性も向上している。オンとオフで、最高の機能性を提供してくれるスポーツユーティリティビークルといえます」

リチャード・S・マーシャル。スバル・オブ・アメリカ勤務。奥さんと2歳のお嬢さんの3人家族。バスケットボール、ゴルフと趣味は多彩

「広いカーゴスペースは家族で使用するときに使いやすいね」とリチャード

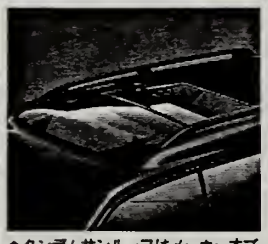
自然の中でアウトドアライフを楽しむ人たち。スタイルこそ人それぞれだが、わずかの時間であってもレジャーを精一杯楽しもうという雰囲気は共通している。夫婦、友人、ひとりでと組み合わせもさまざまだ

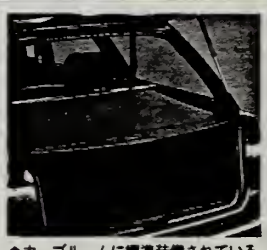
日本仕様にはないボディカラーのアウトバック。グレイサーホワイトとグレイの2トーン仕様が美しい

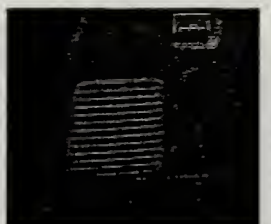
ツーリングワゴンよりトラッドで視線高いフロントグリルを持つアウトバック。フォーマルな使い方にも、休日のレジャーなどにも対応できるユーティリティ性が魅力だ。

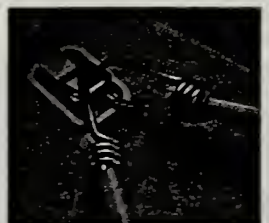
自然が身近にあるニューイングランド地方では、キャリアを加えれば、さらに使い勝手が向上する。湖畔や渓流ならカヌーやフィッシング、山ならサイクリングやスキー、キャンプ……。アメリカ人の多くは、セダンにキャリアを装着し（平日は取り外した状態でセダンをフォーマルに使う）なんとか荷物を積んでレジャーに出かけている。アウトバックならそんな苦労の必要がない。1台でどちらの使い方もこなせるのだから。

ニューイングランドのライフスタイルにマッチしたレガシィ アウトバックは、まさにベストグッズと呼べるクルマだ。









スバル レガシィ グランドワゴン 主要諸元

寸法・重量	全長／全幅／全高（mm）	4720／1715／1555
	室内長／室内幅／室内高（mm）	1955／1415／1190
	ホイールベース（mm）	2630
	トレッド前／後（mm）	1455／1450
	最低地上高（mm）	200
	車両重量（kg）	1410
	乗車定員（名）	5
エンジン	型式	EJ25
	種類	2.5ℓ 4カム16バルブ 水平対向4気筒DOHC
	総排気量（cc）	2457
	最高出力（ネット）（ps／r.p.m.）	160／6000
	最大トルク（kg-m／r.p.m.）	21.5／2800
	燃料タンク容量（ℓ）	60
	燃料種類	無鉛プレミアムガソリン
足回り	サスペンション（前後）	ストラット式独立懸架
	ブレーキ（前後）	ベンチレーテッドディスク
価格（東京地区・車両本体価格）		269万7000円

●グランドワゴンはアメリカ仕様と外観上の相違点はない。リヤバンパーは大型で樹脂製のプロテクターが装着され、荷物の積載時の傷に対処する

●タンデムサンルーフはメーカーオプション。フロント側はガラスルーフ、リヤは電動チルト＆スライドガラスルーフのふたつがセットとなったもの。サンシェードも装備する

●カーゴルームに標準装備されている巻き取り式トノカバー。アタッシェケースやハンドバッグなど重要な荷物を他人の視線から守る。巻き取り式のため、使い勝手も問題ない

●カーゴルームの左右リヤクォーター部に標準装備されたカーゴファン。ペットを乗せたとき、フィッシング帰りの魚など匂いのキツいものを搭載しているときにありがたい装備だ

●カーゴルーム4カ所にフックが標準装備。走行中に荷物が動いたりするのを、ネットやストラップで防ぐことができる。特にかさばるものを積載しているときには役に立つ

●DC12Vの電源をとることができるカーゴソケットは標準装備されている。AV機器や冷蔵庫を始めとする電気製品をアウトドアフィールドで使用するのに便利だ

レガシィ グランドワゴンの問い合わせ先／富士重工業■(0120)052215

CLIPPING VOUCHER

Medium: BE-PAL Date: December 1995

Subject: Weekend Outdoor Style in New England with Legacy Grand Wagon

Ref. Press Release No.:

New England has the oldest history and rich nature in America. It is also the good place for outdoor life. To enjoy it, Legacy Grand Wagon is the most powerful and confortable vehicle.

We went to L.L. Bean in Freeport to buy some fishing equipment. It also issue the fishing lisence for those who want to go out for fishing. After getting the information about the fishing spot, we went there.

Bethel Inn in Maine is introduces as the good place to stay for those who enjoy the sports in this area.

'95-'96 THE NEWEST RV COMPLETE GUIDE

達人に聞いて体験した

ニューイングランド流 ウィークエンド・アウトドア・スタイル

with LEGACY GRAND WAGON

OUTBACK

テントにタープ、テーブル&チェア、ツーバーナー……。そんなキャンプもいいが、準備が煩わしいと思うこともときどきある。それだけ用意しながら1泊2日というのも悲しいし、のんびり気軽なアウトドアを楽しみたい……。

そんなとき、スバルの新型車、レガシィ・グランドワゴンをアメリカ・ニューイングランドで試乗する話が持ちあがった。これぞ、渡りに船！

ニューイングランドは、アメリカでももっとも古い歴史と豊かな自然を持つ地域。終夜営業のアウトドアショップまである、アウトドア先進地だ。深夜のアウトドアショップなんて、どんな雰囲気なのだろう。週末の過ごし方は……と、心は早くもアメリカへ飛ぶ。

グランドワゴンは、定評あるレガシィの乗りやすさはそのままに、パジェロなみの200㎜の最低地上高を持つ、新しいタイプのRVとして注目したいクルマ。2・5ℓフラットフォーのエンジンも静かで軽快だし、これならアメリカ自慢のハイウェイはもちろん、未舗装路も安心して走れる。実際に乗るのは、アメリカ仕様の〝アウトバック〟。左ハンドルで、細部が若干異なるほかは、日本仕様と変わらない。

さて、始めたばかりの釣り三昧か、はたまたカヌーか。ニューイングランドのアウトドア・スタイルをたっぷり楽しもう。おっと、その前に、現地の情報収集もしなくては。

旅の友はアメリカ版 レガシィ・グランドワゴン

ABS、リアLSDを装備し、確かな走行性能と乗用車的乗り心地を備えた新しいRV。全高が1,555㎜あるのでヘッドクリアランスもよく、4名までなら長距離走行も全員が快適だ。

舗道路状態のいいアメリカでも、幹線から離れると未舗装路が多い。最低地上高の高いアウトバックなら、そんな道もラクにクリアする。

⬇取材時は少し早かったが、ニューイングランドのメイン州は紅葉の名所。アメリカ人も紅葉を楽しみにしていると聞き、急に親近感が湧いた。

達人のアドバイス 1

金曜の夜に出発すれば、翌日のんびり過ごせる 足りないグッズは終夜営業のアウトドア・ショップで

↑L.L.ビーンのあるフリーポートは、アウトレットの店が並ぶ町としても有名。週末の賑わいは大変なもの。

↑ダラス・パイル氏。アウトドアグッズなどを日本に輸出する会社を経営しており、アメリカはもちろん日本のアウトドア事情にも詳しい。週末は郊外の湖畔にある別荘で過ごす。

右のアドバイスをくれたのは、ポートランドでアウトドアグッズのコンサルタントをしているダラス・パイル氏。とりあえずニューイングランドに行ったはいいが、初めての土地で戸惑っているボクをいろいろ助けてくれた。

「アメリカ人は残業なんかしないからね、金曜の仕事が終わってから遊びに行けるんですよ（笑）。ロッドを持ってこなかった？　じゃあ、L.L.ビーンに寄って買っていけばいい。24時間やってるから遅くなっても大丈夫」

ということで、ポートランドからクルマで20分ほどのL.L.ビーンの本店に向かう。あいにくの雨だが、レガシィの4WDは、濡れた路面でも状況に合わせて前後輪へのトルク配分を制御するアクティブトルクスプリット方式を採用しており、安定感が高い。

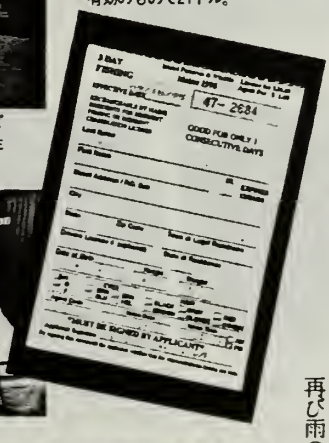
雨の夜でも店内は結構込んでいるが、これでも昼よりはずっと少ないとか。釣りコーナーのボランドさんにロッドを選んでもらう。初心者のボクは、彼のいうことにうなずくばかりだった。

「夜は、旅の途中の人や、趣味の道具をじっくり選びたいという人が多いですね」（マネージャーのヒル氏）

なるほど、旅の途中で寄るのもいいけど、夜に来て趣味の道具をじっくり見るのも楽しそうだ。日本にもこんな店ができないだろうか、と思いつつ、仕入れた5番ロッドをレガシィに入れ、再び雨のハイウェイに乗り込んだ。

↑店内は3つの棟に分かれており、フィッシング、キャンピングなどのコーナー別に構成されている。受付で陽気な女性が親切に案内してくれるが、さすがに日本語は通じない。

↓L.L.ビーンではフィッシング・ライセンスも発行してくれる。身長、体重から髪や目の色まで申告する。さすが多民族国家。3日間有効のもので21ドル。



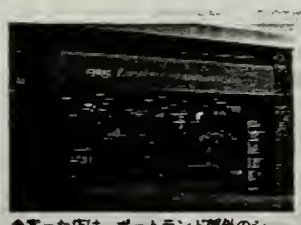
➡「日本の狭い川でも使いたい？じゃあ、5番のこのロッドあたりがいいね」と、フィッシング・アドバイザーのボランドさん。

↑アウトバックの荷室。タイヤハウスの出っ張りが気になるが、容量的には十分。シートの下に三角表示板などが入る小物入れがある。

↑日本仕様はインパネまわりにウッドパネルを使い、高級感をもたせている。。エアバッグがメーカーオプションなのが残念。

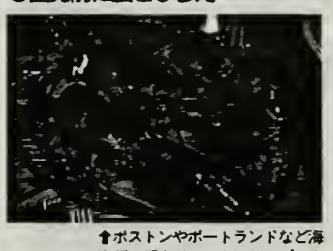
アメリカでは有名なEMSにもちょっと寄り道

EMSは、東海岸のREI、と呼ばれるアメリカでは有名なアウトドアショップチェーン。各種ブランドもののほか、オリジナル商品もザックやウエアなどを中心に充実している。ザックは体の構造をよく考えて作ってあり、背負いやすい。通販をしていないので日本ではあまり知られていないが、東京・大阪のミズノでは購入可能。新しもの好きの人は要チェック！



↑寄った店は、ポートランド郊外のショッピング・モールの中にあった。ショッピング・モールにこれだけのちゃんとした店があるのも頼もしい。

●出発前に腹ごしらえ



↑ボストンやポートランドなど海岸部の都市では、やはりロブスターは欠かせない。市内のレストランで1匹12〜13ドル

好きなことをしてゆっくり滞在してください
日本の方は遊ぶにも疲れるくらい頑張るようです

⬅事前にL.L.ビーンで聞いておいたポイントで、新品のロッドをさっそく置おろし。新米フィッシャーも、場所がよければサマになる？　釣果は秘密…。

⬆「ベセル・イン」のマネージャー、グレッチェン・デビッドソンさん。「通常シーズンの週末は3日間くらい滞在される方が多いです」

⬆質素で落ちつける室内。バスルームはさすがに広い。パブリック・スペースには読書室やギフトショップ、一年中入れる温水プールもある。

⬆「ベセル・イン」は80年の歴史を持つ、この地方では有名な宿泊施設。「Bethel Inn, Bethel, MAINE 04217 USA ☎(207)824-2175

アメリカの道を走っていると、どのクルマもメリハリのきいた運転をしていることに気付く。見晴らしのいい道ではそこそこスピードを出すが、人家が見えると必ずスピードダウンする。当然のことなのだが、日本ではあまり見られない〝余裕〟を感じるのだ。

「ここにも時々日本の人がいらっしゃいますが、遊び方も忙しそうですね」

と微笑むのは、ポートランドから北東へ3時間ほど走った町ベセルにある「ベセル・イン」のグレッチェンさん。ここに来たのは、前出バイル氏の、

「どうせなら、外国人がよく行く観光地ではなく、地元の人間が愛用するリゾートに行くといいよ。気軽にインに泊まってゆっくり遊びなさい」

というアドバイスがあったから。ここは人口2千人ほどの小さな町だが、ゴルフ、釣り、スキーと四季を通じてスポーツが楽しめる。この町にはネオンがきらめく酒場などはほとんどない。来訪者は思い思いの一日を楽しんだ後、インのレストランでゆっくり食事をしワインを味わう。〝めしのあとは場所を変えて一杯〟がないだけで、こんなにゆっくりできるものなのか…。クルマの運転と同じ〝余裕〟を感じさせられたニューイングランドの旅だった。

⬆近くの湖にはボートハウスがあり、「ベセル・イン」の宿泊者は無料でカヌーを楽しめる。ボートハウスは無人で、各自が自分の責任で遊ぶシステム。

快適な室内と信頼の走破性能
レガシィ・グランドワゴン

(日本仕様) ●全長／全幅／全高：4,720／1,715／1,555㎜●ホイールベース：2,630㎜●車両重量：1,410kg●エンジン：水平対向4気筒DOHC●最高出力：160ps／6,000rpm●最大トルク：21.5kg-m／2,800rpm●10-15モード燃費：9.8㎞／ℓ●乗車定員：5名●東京地区車両本体価格：¥2,697,000

超達人のスーパーアドバイス
ハイキング程度と甘くみて遭難する人はアメリカでも多いんだよ

➡アメリカ初のヒマラヤ遠征隊のメンバーだったというベツオルトさん(75歳)は「気軽にアウトドアを楽しむのはいいが、カヌーにはライフジャケットを着けるなど、必要最低限の装備と知識は持ちなさい」と、ひと言。

⬆ベセルの町並みに、アウトバックはよく似合った。ホテルに乗り付けても、自然の中でもしっくりする、独特の〝雰囲気〟を持ったスタイリングだ。

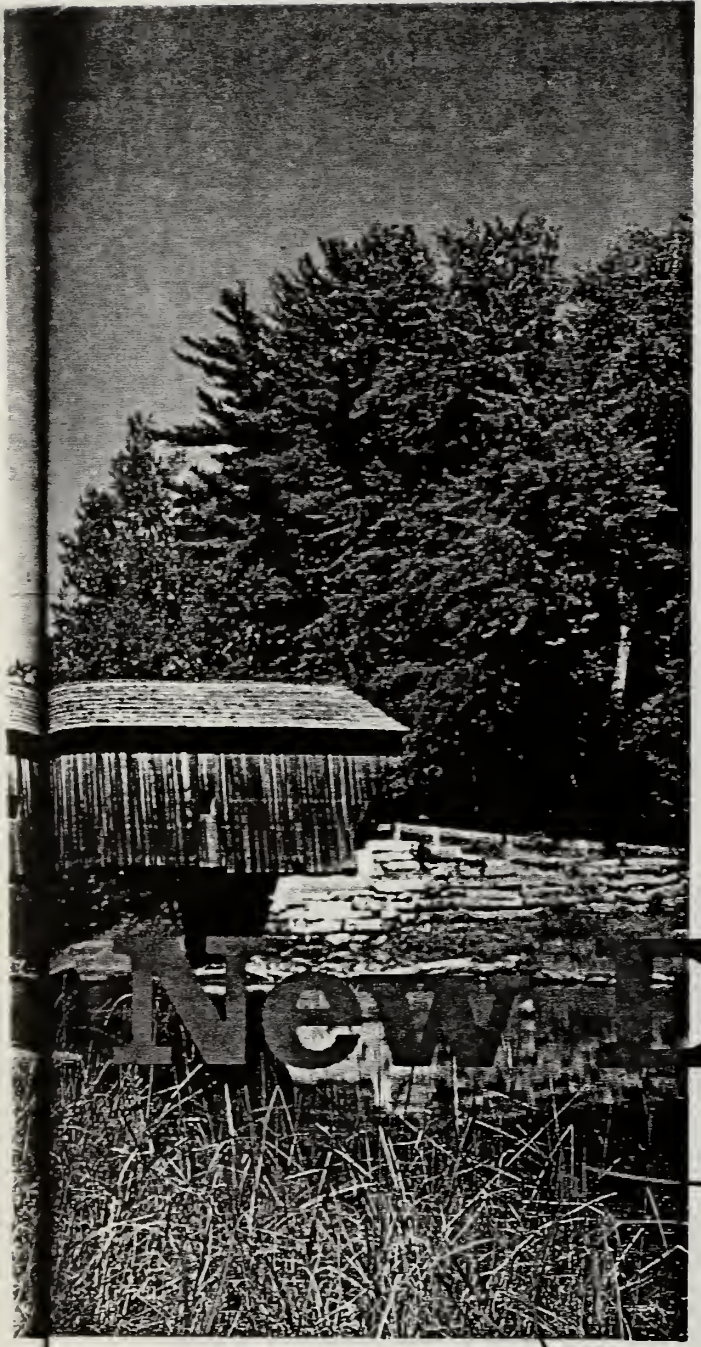
■P.65～P.67 STAFFS■Direct／榊田一也(編集部) Photo／奥田高文

CLIPPING VOUCHER

Medium: GQ Date: December 1995

Subject: New England, people and nature Ref. Press Release No.:

The six states in north east part of USA is called New England as a whole. Among others, Maine is known as its most beautiful lakes, mountains and valleys. Many people from other part of USA and Canada visit this area. If you go up to the north for 30 minutes from Boston, you can see the rich forest besides highways..
Maine is called "Vacation Land". American people enjoy their vacation with their families. Many families visit this place with their camping cars with the foods, chairs, mats. Or some with the BBQ sets.
Legacy is suitable for this type of life style.



レガシィ・グランドワゴンで行く

ニューイングランドの人と自然

メインの人々はお互いを知ること、森を知ることの名人だ

text：香咲弥須子 Yasuko Kasaki
photo：熊谷嘉尚 Kasho Kumagai

New England

VACANCY

ニューイングランドとは、アメリカ北東部、ニューヨークの北からカナダにわたる6つの州の総称である。アメリカ人、カナダ人のみならず、各国から人々の訪れの絶えないこの一帯の山と渓谷、海岸線と島のたたずまいは、ほぼ1万年前に形づくられたそうだ。

なかでも大西洋とカナダに隣接するメイン州は、アメリカ最大のロブスターの産地であると同時に、湖と山と渓谷のもっとも美しい州として知られている。

ボストンから車で30分ほども北上すれば、もうその違いに目を見張る。ハイウエイの両側に広がる森の、なんと豊かなこと。その繁りのなんと堂々たる様。楡やオーク、ポプラやブナは50メートルに及ぶ高さを誇り、そのまっすぐにそびえ立つ幹を囲むように、米松やメイプル、樺やくるみ、いちょうの葉が重なり合ってさざめき、そしてスゲや蘭、ツツジやクランベリーで覆われた足元からは、シマリスやスカンク、アライグマ、時には鹿が飛び出して、アスファルトの道路をすばしこく横切っていく。

道路はまっすぐに森の間を貫き、光る帯となって上下にうねる。標高が上がり、樹木の切れ目に水面の透明な輝きが見えてくる。川、池、湖。こんもりと浮かぶ小島や陽射しを浴びてオレンジに色づく渓谷。そこかしこに釣り人の姿がある。でも、それは次々と、どこまでも続くのだから、あわてて車を停める必要はない。ブレーキランプを灯して減速し、森の中の小道にと逸れていく車は、あたりに点在する家々の正面に滑り込むのである。遠目にも手入れの行き届いた、森のなかの瀟洒な家。それがニューイングランドに暮らす人々の住まいだ。B&B(Bed&

140年も前に作られ、修理補強を続けて今も健在のカヴァード・ブリッジは、いかにもこの地方の自然に馴染む

Breakfast）もある。モーテルもある。別荘ももちろん少なくない。ビジターも住人も、夏の間は釣りやカヌーを楽しみ、9月の半ばを過ぎた頃には、世界一の美しさと謳われる紅葉を愛で、冬はスキーを満喫し、そして春には、新緑のなかに花開くシャクナゲや月桂樹を鑑賞する。

この壮大な自然に育まれたメイン州を、人々は「バケイション・ランド」と呼ぶ。バケイションとは、自分をVACANCYする、つまり空白、空にすること、という意味の言葉だ。おそらく、わたしたちがもっとも苦手とすること、もっとも憧れること、あるいはいつかはたどり着きたいと願っている夢のようなものでもあるだろう。そして、新しく、清々しく、気持ちのよいものが代わりに流れ込んでくるのでなければ、心を空にするのは誰にとっても至難の業に違いない。

バケイションに理想の地と呼ばれ、世界中から集まってくる人々のために、メインの山間にも、確かにさまざまなアトラクションが用意されてはいる。けれどもほんとうにバケイションの目的を知る人たちは、ただそこにステイし、静謐な空間に穏やかに身をおき、森の精気がひたひたと体内を満たしていくのを味わうのだ。

旅人も住人も、老若男女、山間で時を過ごす大勢の人々は、いつも穏やかに静かだ。大地と、静謐な空気に包み込まれて音がかき消されるからなのかもしれないが、彼らのたたずまいからは、なにより、森の一員としてひっそりと身をおいているというような、凛とした姿勢が感じられる。

INTIMACY

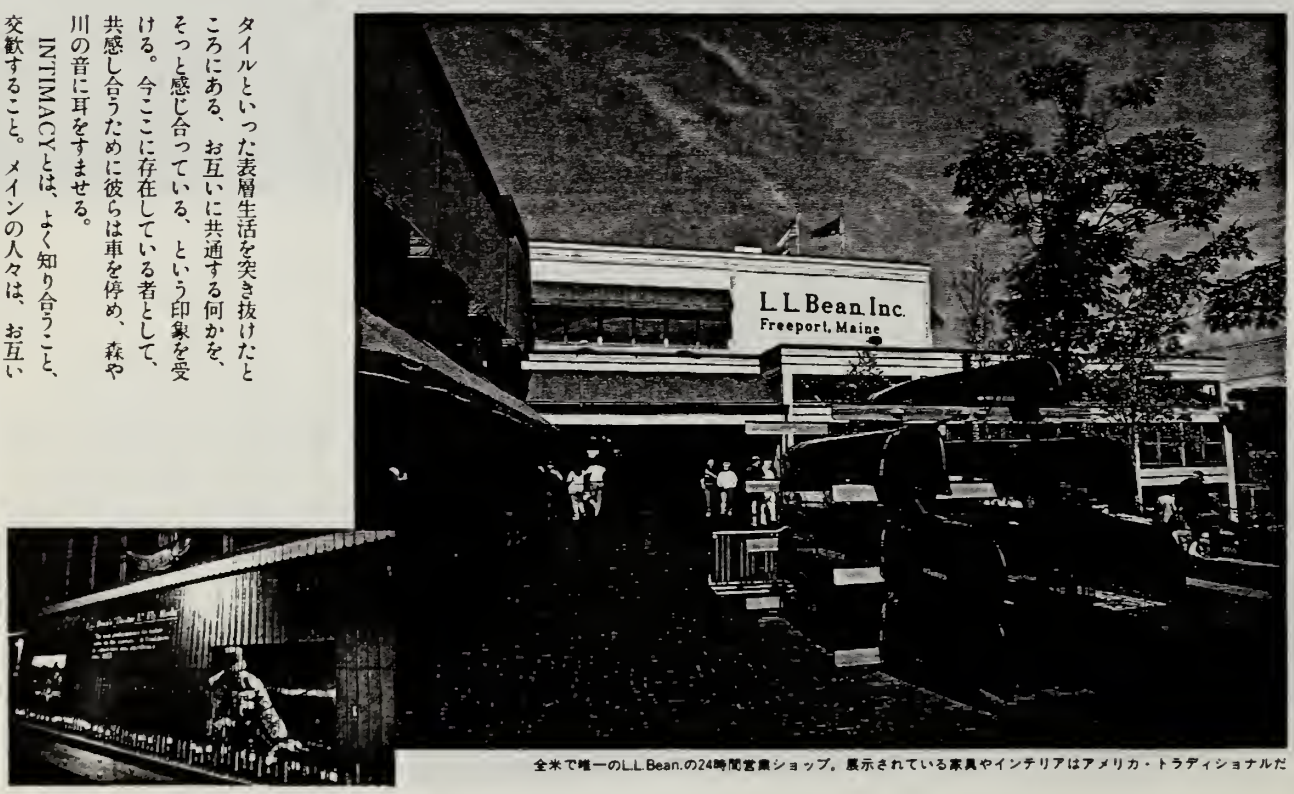
老若男女がともにバケイションを楽しむ。それがアメリカの基本だ。そしてその老若男女とは、ほかならぬ家族のことだ。おじいちゃんおばあちゃん、子ども夫婦、孫たち、そのボーイフレンド、ガールフレンド、時にはおじさんおばさん、いとこたちも加わって、バケイションする。

ドライヴしていると、大勢の家族に行き会う。ある夫婦は、ひとり暮らしのお母さんを誘って釣りの週末を楽しんでいた。釣り糸を垂れながらの会話は、今年の紅葉の色づきについて、息子は、ごく幼い頃に、同じ森のなかで、木の葉はなぜ、どのように色を変えていくのかということを、母親に教わったのだった。キャンピング・カーに椅子やマットや食料を積んだ、4代にわたる10人家族は、カヴァード・ブリッジ（雪除けのための屋根つきの橋）のたもとに場所を定めていた。140年前に建てられ、修理補強を続けながらなお健在のその橋を、一家の先祖の誰もがよく知っている。働き盛りの孫夫婦たちは、週日は町に暮らし、土曜になると、この橋を渡って実家に集まってくる。川岸に腰を降ろしたおじいちゃんは、生まれたばかりの曾孫を抱き、橋の屋根に居並んで身を休めている鳥の名を、指さしながら教えていた。湖上を旋回する観光セスナのパイロットは、毎年初夏に、奥さんと2人、フロリダからそのセスナでメインを訪れる。夏中湖と渓谷を毎日飛んで、秋になると、渡り鳥よろしく、再びフロリダにゆっくり戻っていく。

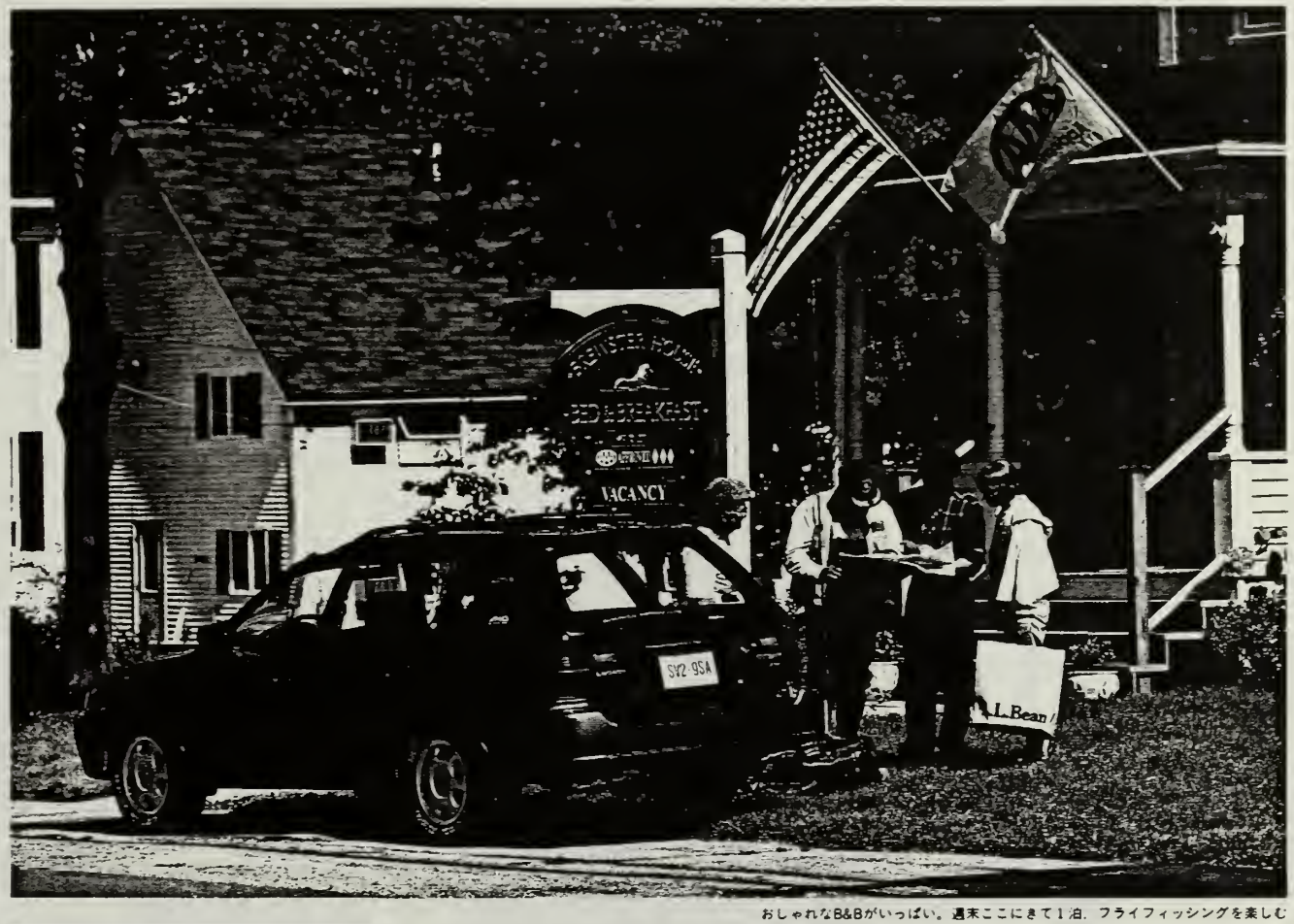
「バケイション・ランド」で休日をともにする彼らには、しかし家族の絆、と名付けられるような重みとか、タイトさといったようなものは窺えない。彼らの間に漂うのは、緩く軽く行き交う親密さといったようなものだ。たぶん、心を空にした時に通い合う何か、年齢やライフスタイルといった表層生活を突き抜けたところにある、お互いに共通する何かを、そっと感じ合っている、という印象を受ける。今ここに存在している者として、共感し合うために彼らは車を停め、森や川の音に耳をすませる。

INTIMACYとは、よく知り合うこと、交歓すること。メインの人々は、お互いを知ること、森を知ることの名人だ。親

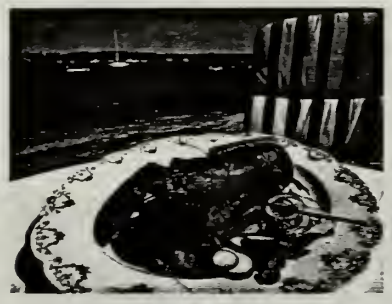
New England



全米で唯一のL.L.Bean.の24時間営業ショップ。展示されている家具やインテリアはアメリカ・トラディショナルだ



おしゃれなB&Bがいっぱい。週末ここにきて1泊、フライフィッシングを楽しむ



密さは、人を大地につなげるのである。

人々に欠かせないのは、車、それもオンロード、オフロードを選ばない4WDワゴンやジープ、あるいはキャンピングカーである。自転車をくくりつけたり、バーベキューセットを積んだりして、彼らはさっそうと森のなかを走っていく。日本車では、レガシィをよく見かけた。見かけるたびに、思ったものだ。なんてこの地に似合う車なんだろう。まさにグランドワゴン・スタイルそのものだ。

LEGACY
——受け継いでいくもの

過去、幾多の人々がこの地を愛した。ソローの暮らしたウォールデンの森はもちろん、メルヴィルはここで『白鯨』を執筆し、マーク・トウエインのミシシッピの物語も、メインの樹々の息吹に育まれたものである。またエミリー・ディキンソンの詩のすべてもここで生まれた。かつて人々が愛しんだメインのたたずまいを、今を生きる人々はそのままの姿で保つことを願い、彼らの想いをそのまま自分の想いとして抱きしめようとしている。そうでなければ、大地がこれほど清潔で端正に保たれているわけがない。

車を停め、森のなかに分け入ってみる。木の実や、赤く染まったもみじを踏みしめ、また手にとってみる。風向きにしなった幹に触れてみる。それらは、決して完全な形を成していない。虫に食われ、動物たちに踏み荒らされている。そう、きっとそういうことなのだ。真に自然を継承するとは、すべてを共存させておくこと、共存による無秩序を、そのままむき出しにしておくこと、むき出しのまま、大事に育てることだ。

それは同時に、わたしたち人間の不完全さを丸ごと抱きしめることに違いない。ニューヨークの友人たちが、暇を作っては車を駆ってこの森を目指す理由が、よくわかった。スピルバーグが頻繁にこの故郷に戻ってくるという話も頷けた。大都会の日常に、自分という存在の不完全さを思い知らされるのに疲れた時、メインの森と人々の有りように触れるだけで、やさしい癒しを受けとめることができるからなのだ。

レガシィ・グランドワゴン（米国名・アウトバック）
全長×全幅×全高　4,720mm×1,715mm×1,555mm、ホイールベース　2,630mm、エンジン　水平対向　4気筒DOHC、総排気量　2,475cc、最大出力　160/6,000rpm、最大トルク　21 5/2,800rpm、乗員定員　5名、価格　¥2,697,000〜（東京地区希望小売価格）
問い合わせ先　スバル・フリーダイヤル■0120-052215

CLIPPING VOUCHER

Medium: PENTHOUSE Date: December 1995

Subject: NEW ENGLAND VACATION BY LEGACY GRAND WAGON Ref. Press Release No.:

I went to Boston via Chicago. There is no direct flight to Boston which is the largest city in New England.
The next morning, I could see the old buildings were shining with the bright sunshire. I put my luggage into Grand Wagon and left for New Hampshire.

The nature there were left untouched. I went to New England B&B and opened my books about New England. Paper backs by Robert B. Parker, essays by John Muir, and A. A. Ruth. John Muir's essay made me happy to be there.

I drove around and found out the covered bridge. I met the old man traveling there. He took the photos of the covered bridge all over America.

In the evening, I arrived at White Mountain National Forest and stayed overnight at one of the old resort hotels there.
Next morning, I drove to the east and went into Maine. There was the old but beautiful light house at the sea shore. It was very much impressive and I thought about the severe winter there.
After eating the famous Maine lobster, I continued driving to the south. It was late at night when I arrived at Freeport. In the daytime, the town is croweded with the shopping people, but at night it was so quite.

The owner of the inn in Freeport talked to me next morning. He has some huts in the mountain side and goes for hunting or fishing very often. He loved the beaauty of nature by the sea and also in the mountains. Maine is the country with woods and lakes. He was pleased to hear it.

In these years, I like fishing.
The best target of fishing in New England will be the Black Trout. I was thinking of them when I drove through Maine

(Last page is used to publicize Legacy grand Wagon.)

まずは100年前の自然派エッセーを読んでみよう。

東京からシカゴを経て、僕はボストンに入った。ニューイングランド最大の都市であるその街へアクセスするのに、不思議なことに直行便はないのだ。

12時間以上も飛行機の旅をしたので、神経がかなりまいっていた。おまけに時差で昼と夜がほとんど逆転してしまっていた。けれど、港に近いホテルの部屋に着くと、すぐに泥のような眠りに落ちた。

目が覚めると、胃がザラついたような感じはすっかり消えていた。14階の部屋から街を見ると、古いビルや建物が朝の陽光を浴びていた。その光の重さと街の古さが、いい感じでバランスしている。旅への期待で胸が高鳴る。

朝食の後、グランドワゴンと対面。凝縮された力感のあるボディーと、静かに威厳をたたえた顔つきに頼もしさを感じる。リアゲートを開き、荷物を無造作にほうりこんだ。

なんだかんだと言って、僕は旅の荷物がついつい多くなってしまう人だが、大型のトランクケースと遊び道具を仕込んだスタッフバッグ、それにカメラバッグや身の回りの物を入れたデイパックなどが、あっけないくらい簡単に収まってしまった。

ホールド感のあるドライバーズシートに体を預け、インターステートハイウエー93号線を一路北へ走りはじめた。

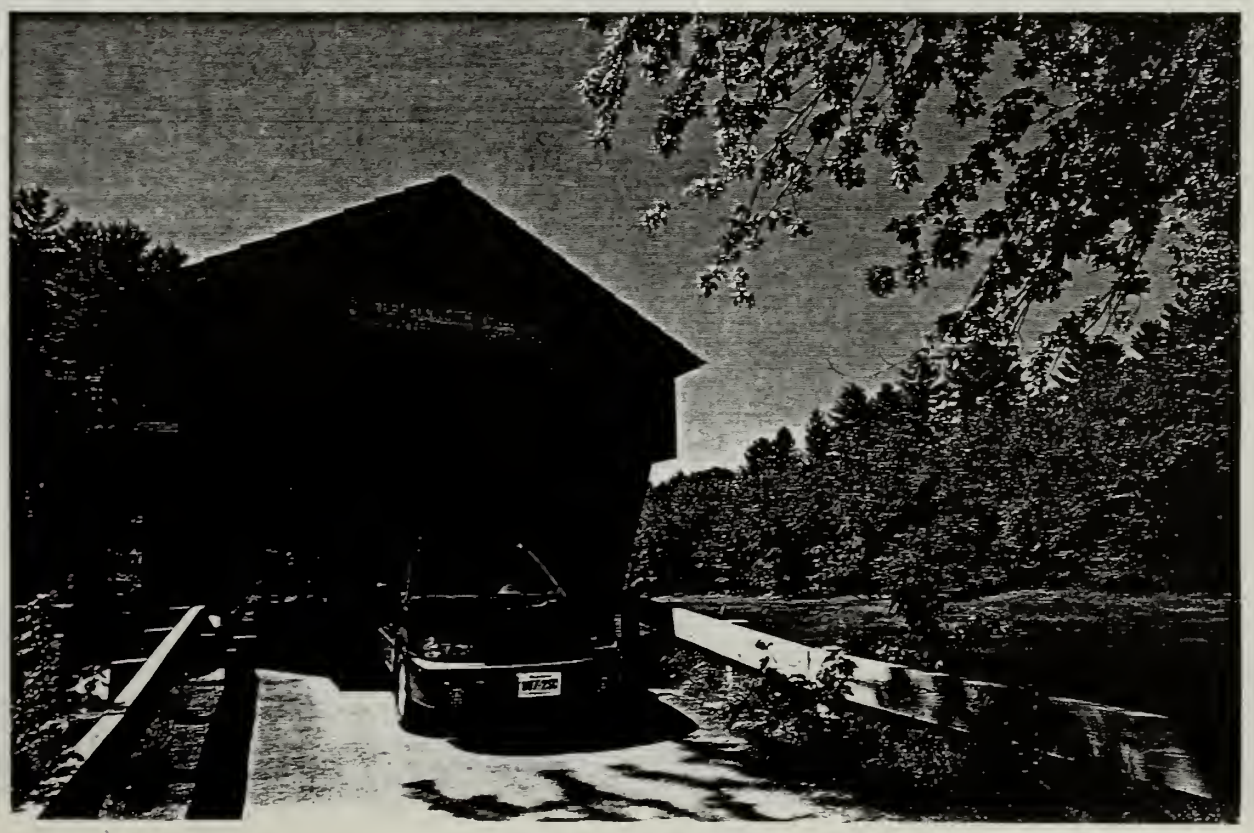
アメリカのハイウエーは日本の高速道路と比べると格段に走りやすい。いつもとは違う空間に飛び込んだのだという軽い違和感は、30分も走るときれいに消えてしまい、気持ちはとてもフラットになり、グレーの路面になじんでいく。

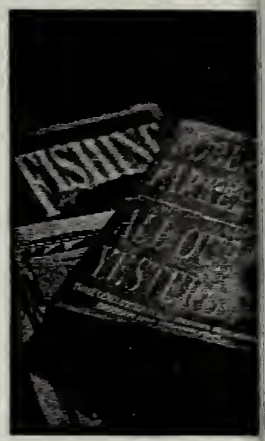
水平対向の4気筒2・5リッターエンジンの太いトルク感と、ボディーの剛性感がよく合っている。

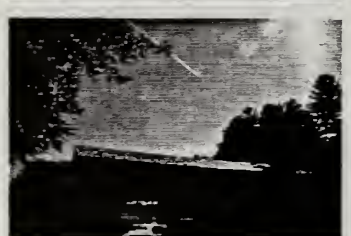
日は昇ってきているのだが、光にはまだ独特の重さがあった。「どこかで感じたことがある重さだな、どこでだったのだろう?」とずっと思っていて、ヨーロッパの光と同質なのだと気がついた。

かつてこの大陸に初めて足を踏み入れたヨーロッパの人たちは、この柔らかく重い光のなかに祖国を懐かしく思い出したのだろうか?

いつの間にかマサチューセッツを出て、ニューハンプシャーに入っていた。もう100マイル以上走ったのだ。







空気がしっとりとして濃い。まだ手つかずの部分も多い、広大な自然のふところに迷い込んでしまったという感じが、なんともいえない。自分が通りすがりの旅人にすぎないことを強く感じる。

古い小さな街のなかを一周し、ニューイングランド・スタイルのB&Bのカフェで休憩をした。

カフェのテーブルの上に、僕は本を出した。この旅の間に拾い読みしようと思って日本から持ってきた3冊の本だ。ロバート・B・パーカーのペーパーバック、アメリカの自然保護の父とでも言うべきジョン・ミューア（100年ほど前を生きた人）のエッセー集、そして、A・A・ルースという釣り人の、やはり古いエッセー集だ。

東京にいるときにはバーカーから読むつもりでいたのだが、どうやらそれは誤りだと気がついた。

ここにはまだ、200年くらい前の時間の流れがそのままあるように、僕は感じた。そうなると、バーカーの作品の出来栄えがどれほどであるにせよ、やっぱり違うだろう。

僕はジョン・ミューアのエッセーを少

のする文章に触れていると、自分の内側にも、彼が感じていた時間の流れがまだ残っているように感じられた。付け焼き刃的な錯覚なのだろう。けれど、それでも十分にうれしい。

本を読んで、この地の息吹を感じ取ることができるような景色にもっと合いたくなった僕は、さらにグランドワゴンで走り回った。

やがて、リビルドされたカバードブリッジを見つけた。そこで旅の途中の老人と出会った。彼はカバードブリッジの写真を撮るためにアメリカ中を旅しているのだという。

「こういう橋は、どこか森のなかの大樹に似ているんだよ」と彼は言っていた。風雪に耐え、じっと人を見守っているよ

ナショナル・フォレストに入り、その夜はマウント・ワシントンのふもとの古い大きなリゾートホテルに泊まった。

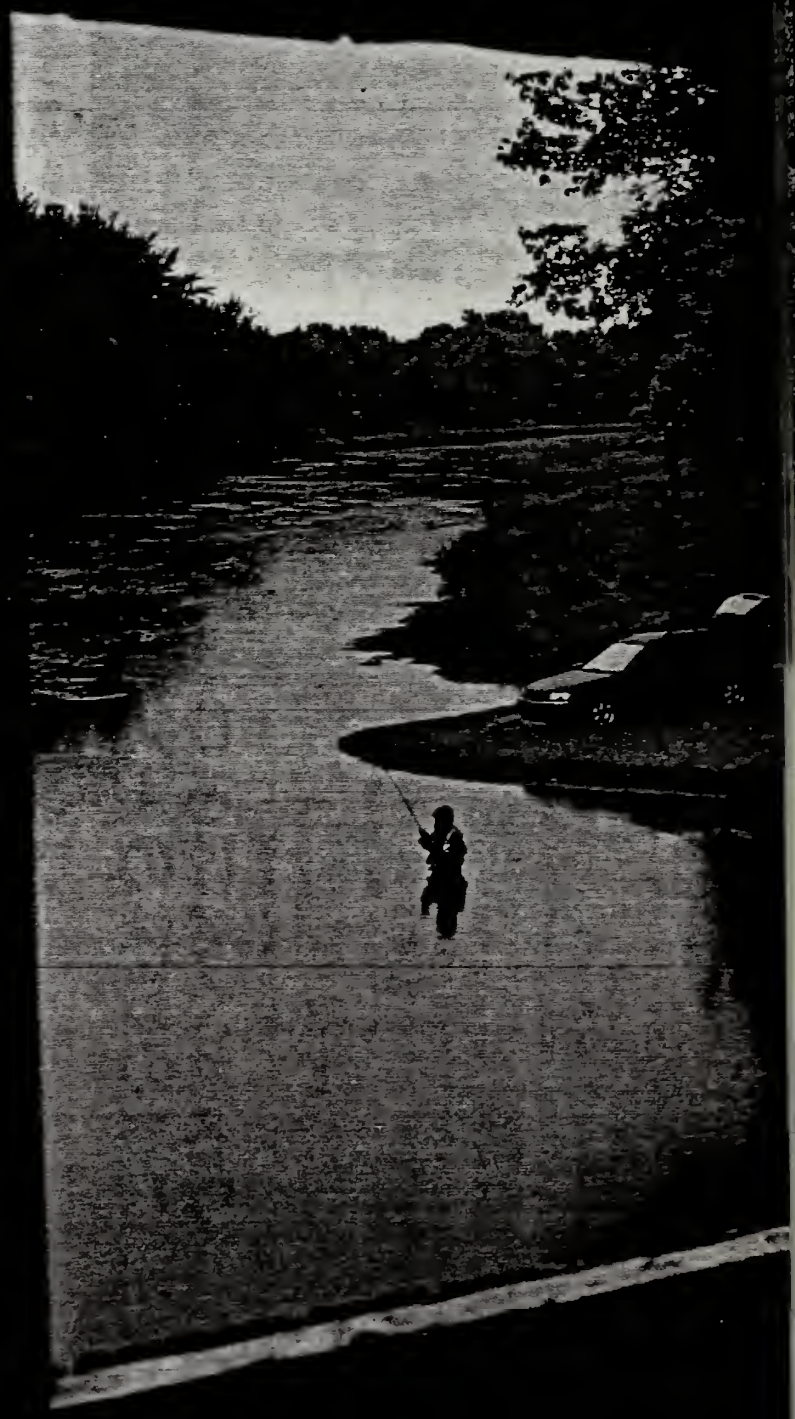
翌朝はゆっくり起き、東に向かって走りはじめた。間もなくメーンに入った。一気に海に抜け、灯台に出合った。深い海の色と古く美しい殺然とした灯台に、冬の厳しさを思わずにいられない。

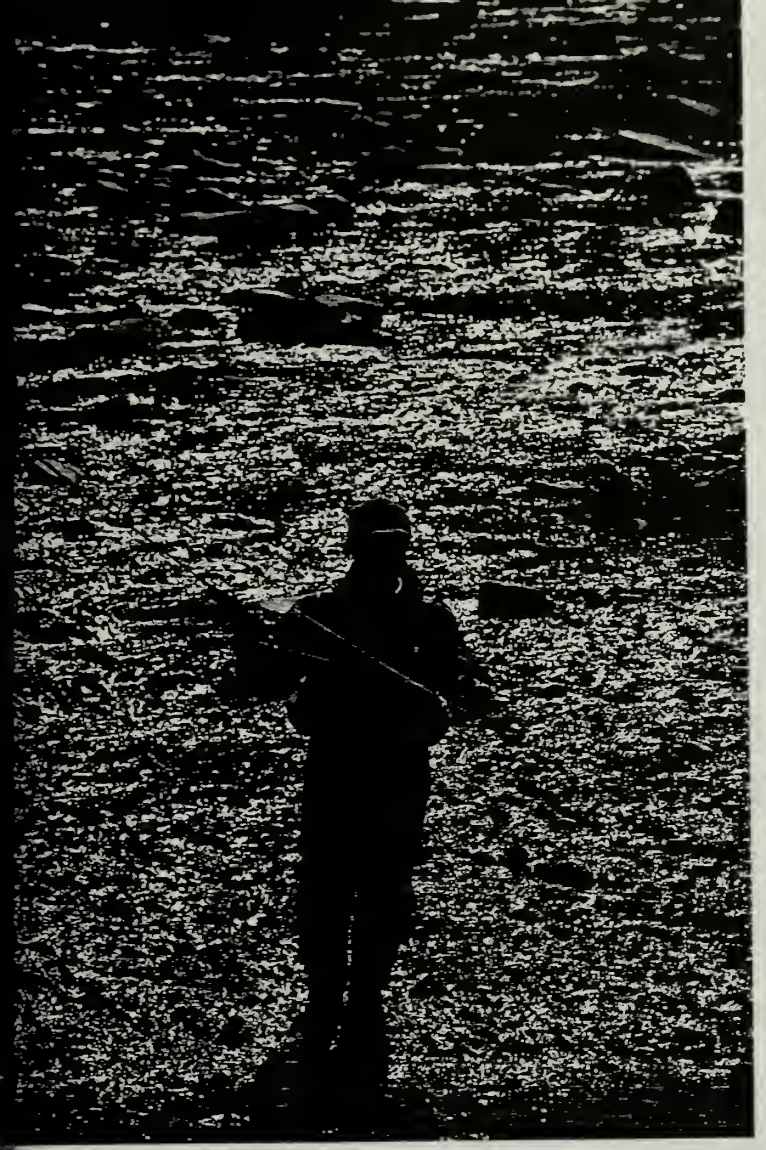
有名なメーンロブスターを食べたりしてたっぷりと寄り道をしながら、海岸線を南下した。フリーポートの街に入ったのは、すっかり夜だった。昼間は、アウトレットで買い物をする人でごった返す街も、夜はひっそりとしている。

イン（宿）の部屋で頭から熱いシャワーを浴びると、体の芯からジーンとしびれているような心地いい疲労感があった。

フリーホートで泊まった翌朝、ラウンジでコーヒーを飲みながらぼんやりしていると、中年の男性に話しかけられた
その人はインのオーナーだった
彼はメーンの山に小屋をいくつか持っていて、ハンティングや釣りによく出かけるのだという。
昨日、僕か山のほうから海岸へ抜けてきたと話すと、海岸はもちろんのこと、メーンの内陸も素晴らしいでしょう、と目を輝かせながら彼は言う
まったく同感だからそのように言うと、森もいいけれど、なんといっても川と湖　北へ行くほどいいんですよ　と熱っぽく彼は語った
たしかに、メーンは森と水の国ですねと僕が言うと、彼は自分のことを褒められたかのように喜んでいた
故郷への深い愛着を持った人が、特別に帰るべき故郷という場所のない僕にはとてもうらやましい
インのオーナーから、僕はメーンの川や湖の話をさらに聞いた　そして、チェックアウトするときには、僕の心は水辺へと飛んでいた
2日間、ニューイングランドを走っていて、木々や山々とともに、僕はたくさんの水に出合った　海も素晴らしかったけれど、僕は川や湖のフレッシュウオーターに強く強くひかれた
走っていてふと横を見ると湖が広がっているのを発見する　うぁー湖だ　と単純に感激して反対側を見ると、そちらにも湖かあったりするのだ　そんな水に満ちた景色のなかを、僕はグランドワゴンとともに通り抜けてきたのだ
実はそういう水の近くで止まってみたい衝動に幾度も駆られたのだけれど、気持ちか最高潮に達するまで直接水に触れるのを我慢していたのだ
今、まさに機は熟した、と僕は感じた
実は、ここ数年、僕はフライフィッシングにはまっている　どっぷりつかりこんでいると言っていい状態なのだ
そんなことになったのは、きっと少年時代に川での遊びを徹底的にやって、少しだけフライフィッシングも体験したことか強く影響しているのだろう
フライフィッシングを通して自分の好きな水や魚たちにふれることは、僕にとって至福の時だ
釣りのためだけに外国へ出かける人もいるか、僕は極力そういう旅はしないようにしている　何気なく寄った場所の名も知らぬ流れで、気か向けばそっと竿を出してみる　そんな釣りのほうが自分の性に合っていると思うのだ
今回の旅でも、スタッフバッグのなかに、必要最低限のフライフィッシングの道具をちゃっかり仕込んできていた
水のなかへ入ろう　一度そう思いはじめるともうたまらなくなり、僕はグランドワゴンのステアリングを握って、フリーホートの街を後にしていた
ニューイングランドでのフライフィッシングの最高のターゲットは、やはりブルックトラウトだろう　ブルッキィという愛称でも呼ばれるその美しい鱒か生息する水について、僕は東京のフライフィッシングの師匠から、旅に出る前にちょっとしたアドバイスをもらっていた　清列な流れのなかにもいるんだけれど、大型のは、意外に、停滞してよどんでいるような流れのなかに潜んでいるんだ
フライフィッシングはイメージのスポーツとよく言われる　まあそう言うとひどく格好いいのだけれど、見方を変えると、妄想のスポーツ　と言えなくもない
釣り人の頭のなかで、都合のいいようにイメージだけか広かり、たいていは現実との落差にガックリとなるのだ
僕も師匠の言葉に触発されて、大きなブルッキィのいる流れを勝手に想像してイメージをふくらませながら、メーンを走り回っていた
なかなか思っているような流れには、出合えないものなのだか、その日は、心臓か止まりそうになる流れを見つけた
メーンのはすれの田舎町をうろうろとしているうちに迷ってしまい、細い道に入った　すると、古い橋か現れた　近くに車を止めて、橋から下をのぞくと、ほとんど止まりかけたゆっくりとした流れがあった　底にはたくさんの根があり、いかにも魚かついていそうだ
ここだ！　と僕は心のなかで叫んだ
想像していた流れとドンピシャなのだ
あたりには、誰もいない　その川が自分のためにあるような、とてもいい気分だ
僕は、ハックからウエイターを出して震いた　慌ただしくロットを継き、リールを取り付けた　ガイドにラインを通したベストをはおり、流れに立った
水は思いのほか冷たく、深い緑色を呈している　屈光クラスを介して見てみるか魚の姿はない
リーダー　約1.5m　の先端にストリーマー　沈める毛針　を結んだ　リールからラインを引き出した　クリック音か静まり返った空間のなかて異常に大きい
十分にラインか出るとロッドを立てて振りはじめた　何度かフォルスキャストしてラインの形かきれいに整うと放したひたひたひたと静かな水面を割るようにラインか伸びていき、リーダーかターンしてフライか落ちた　ラインをゆっくりたぐりはじめると、フライか静かに水中に没した
頭のなかは空白のまま、ラインを半分ほどたぐったとき、突然、グンという重みかロッドにのった　合わせようとすると、そいつは突然スピードを速めて水のなかを猛然と疾走していった
なすすべもなくラインか出ていく　しはらく水に突き刺さったラインか右往左往し、リールのドラクか鳴った　しかし、やがてロッドからフワリと重さか消え、張っていたラインか中空を舞った
魚か根に入り、リーダーか擦れてフレイクしたのだ　そのリーダーか、陽光を受けて、銀色に輝いていた
夢のような一瞬はこうして終わった

釣り人にとって、夢のような水の世界が、まだまだここにはあった。





こなしてきた距離を反芻しつつ、やがてくる旅の終わりを感じていた。

未知の大物にリーダーを切られた流れで、その後、イエローパーチとホワイトフィッシュという魚が釣れた。しかし、鱒は釣れずじまい。

場所を移動することにした。2時間ほど走り、いい川を発見。渇水気味であるが、大きな岩が入って流れに変化がある。ドライフライ(浮く毛針)を使ってここはと思うポイントを攻めた。

すると、ビシャッ! と威勢よく魚が飛び出してきた。アメリカ的な尺度では小さいかもしれないが、僕にとっては十分に満足のいくブルッキィが、飛沫を上げながら寄ってきた。魚影はとても濃いようで、1度や2度合わせをしくじっても魚は次々に出てくれる。時間を忘れて夢中で釣った。

流れのなかを歩いていると、とたんに疲労してくる。しかし、不思議なことにその疲れはやがて、ぼんやりとした心地よさのなかへ昇華して消えてしまう。感覚が解き放たれて、川の流れの上を自由に飛び回っているような錯覚があった。

日が傾くころ、車に戻った。ウエイダーを脱ぎ、ドライバーズシートに座るといい釣りができたという満足感があった。

ふと見ると、オドメーターはもう10000マイルに達しようとしていた。

大人の休日の楽しみをひろげてくれるワゴン。

今回の旅で、勝手気ままな僕の行動に、グチひとつこぼさず付き合ってくれたのが、レガシィ・グランドワゴン。

もはや熟成の域に達している2・5リッターの水平対向エンジンは、アメリカのハイウエーのロングランも楽にこなす。

そして、ついつい川の流れにつられてダートに入り込んでしまったりしても、ロードクリアランスが200ミリあるし、4WDとLSDという心強いメカが、強力にサポートしてくれる。(もちろん、無理な運転や自然を壊すような行為は禁物だけれど)

アメリカで練られたスタイリングは、ニューイングランドのしっとりとした風景のなかに無理なく溶け込む。いかにも「四駆」というケバケバしさや下品さはまったくない代わりに、とても静かな存在感とゆとりを感じさせてくれるのがうれしい、大人のワゴンだ。

休日の行動範囲を無理なく広げてくれる道具として、環境問題をも含めたアウトドアをこなすことのできるセンスのある人たちに、街ではもちろん、ぜひ自然のなかで上手に乗りこなしてほしい。

僕自身、ニューイングランドの旅ですっかりこのグランドワゴンの虜となってしまい、日本に戻ってからさっそくオーダーしてみた次第です。

釣行取材で長い距離を走る僕にとっては長くいい相棒となってくれるものと、確信している。

LEGACY GRAND WAGON

2.5リッター4カム16バルブ水平対向4気筒DOHCエンジン。最高出力(ネット)(ps/rpm)160/6000最大トルク(kg-m/rpm)21.5/2800。変速機=E-4AT。フルタイム4WD。リアビスカスLSD(リミテッド・スリップ・デフ)。ブレーキ=前、後輪ともベンチレーテッドディスク。ABS(アンチロック・ブレーキ・システム)。懸架装置=前、後輪ともストラット式独立懸架。全長(mm)4720。全幅(mm)1715。全高(mm)1555。大型フロントグリル、大型バンパー、大型サイドプロテクター、15インチアルミホイール。大径フォグランプ、カーゴファン等を標準装備。東京地区車両本体価格=269万7000円。

問い合わせ先:富士重工業株式会社 フリーダイヤル0120-052215

CLIPPING VOUCHER

Medium: VACATION Date: DECEMBER 1995

Subject: LEISURE LIFE WITH LEGACY GRAND WAGON Ref. Press Release No.:

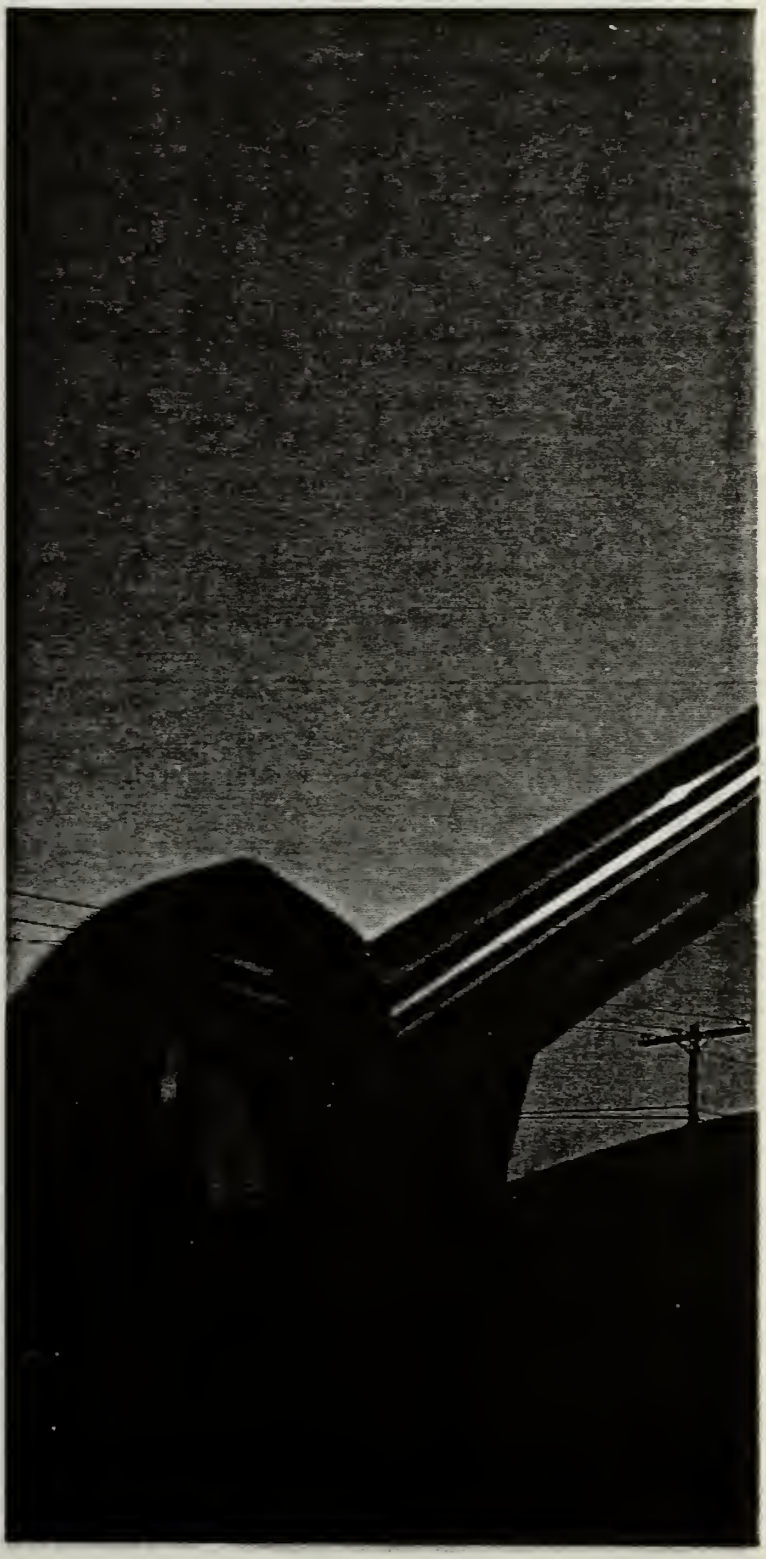
Since I came to Boston, one year has passed, and my life cannot be told without Legacy Grand Wagon. It is not only for my family but same to many Japanese and American families here.
New England has the great and beautiful nature with woods, sea shores, islands and mountains. There are many summer or winter houses, resorts in New England..
I enjoy the life to go to the beautiful spots with my family.
My wife got many informations about the places to go.
"There is the famous covered bridge in Maine which has more than 100 years of history", or "it is only one hour to the orchard in Vermont".
"Wonderful inn in New Hampshire:,"small village with antique furniture shop", etc, etc.
So every weekend, my wife led me to these places.
In summer we enjoyed camping. In fall, we followed the fall foliage pathes. To enjoy the great nature, 4WD car is inevitable.
Fall foliage in Maine is very famous. Not only Americans but poeple from all over the world visit there.
People in New England know how to relax. I knew it for the first time in my life here in New England.
This winter, I am looking forward to driving around with my children. We will go to the icy cold lake, and see the sining water with the red, winter sunsets.

現在、日本人の余暇の過ごし方は徐々にではあるが豊かになりつつある。
しかし、諸外国の余暇の過ごし方と比較すると、
まだまだ時間的にも質的にも潤いに欠けている部分が多いことも事実。
そこで潤いのある人生にする方法を、日本のツーリングワゴンの雄スバル
レガシィ・グランドワゴン(米国名:アウトバック)とともに探す旅に出た。

LEGACY GRAND WAGON

大陸的余暇の勧め

写真・熊谷嘉尚



初めにレガシィあり

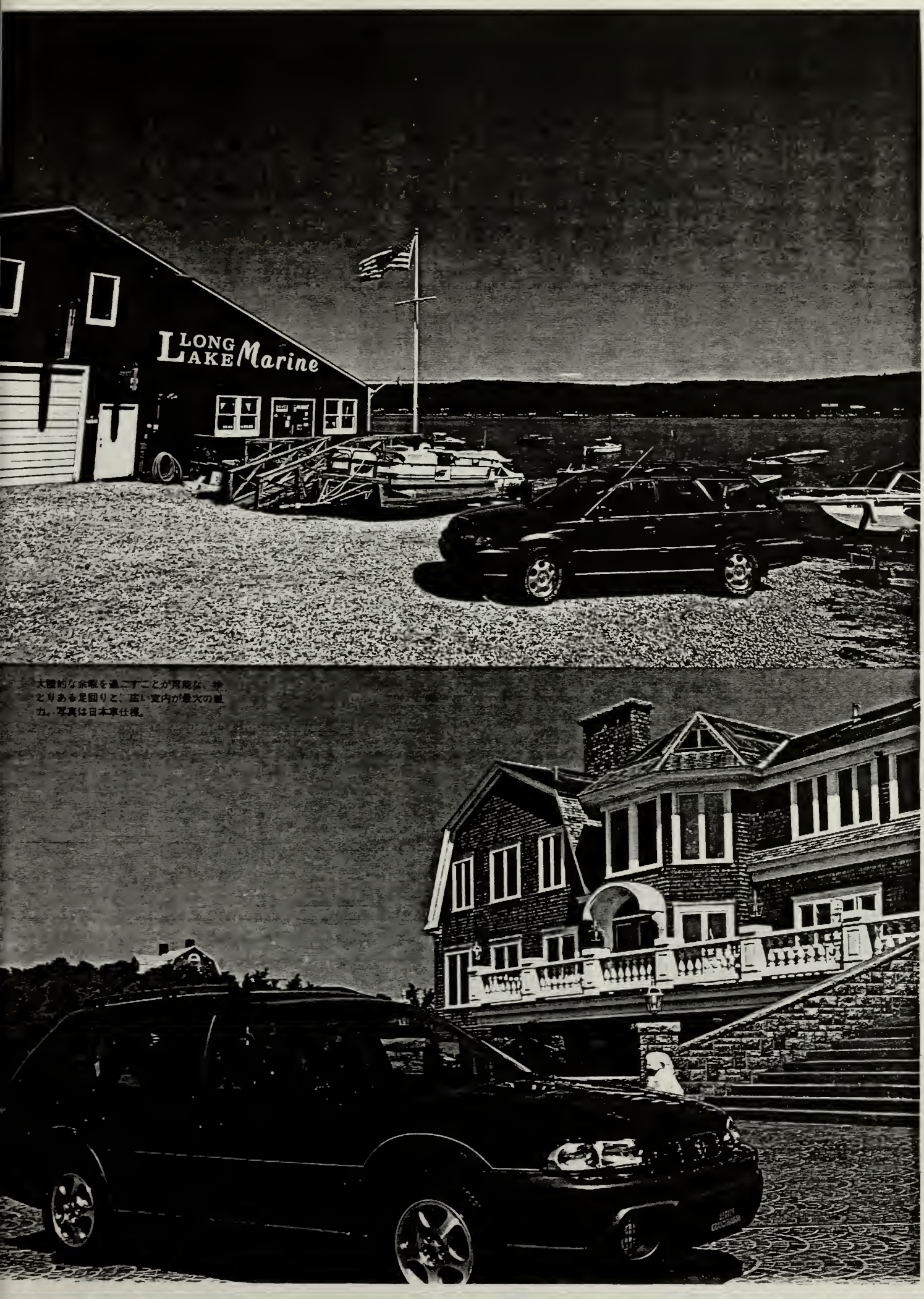
レガシィ・グランドワゴンとともに過ごすニューイングランドでの生活を書くようにという依頼である。はてと困った。ボストンに赴任して一年、確かにレガシィ・グランドワゴンが日常に欠かせない車となってはいるが、それはとくにわが家に限ったことではなく、赴任中の日本人家庭のみならず、地元アメリカ人の面々もまた揃ってレガシィ・ファンなのであって、それにわが家は、レガシィ・グランドワゴンを最大限に利用する暮らしの、まだほんのビギナーなのである。車をまず一台持つなら4WDのステーションワゴンにすべし、町での足に、また休暇の友に使うのであるから操作性、デザイン性、またアフターケアの行き届いたレガシィ・グランドワゴンが良し、と自動車の本場でもあり、地元の生活に精通したアメリカ人に言われるままに購入し、先輩諸氏の見よう見真似で車生活を過ごしてきた一年間である。さもすればここでは、そのビギナーならではの驚きや発見をいくつか書かせていただくことでお許し願うとしよう。

時間感覚の違い

ニューイングランドは、山と渓谷の閑静なたたずまい、森の壮大さに加え、大西洋に面する海岸線や港の美しさで知られ、幾多の島々や山間の湖畔には、住人たちの瀟洒な家々に混じって、別荘やホテルが点在し、一年中手入れの行き届いた清潔な趣を見せている。

そんな恵まれた土地ではあるが、レガシィ・グランドワゴンを駆っての私の生活は、まず、週日の妻の買い物の足、そして週末の私のゴルフ場通いから始まった。ここニューイングランドには、快適

ニューイングランドの大自然を、新しいレガシィ・グランドワゴンで走り抜ける。すると、大陸的な景色は、時には悠然と、時には優しく迎え入れてくれる。アメリカが始まった地、ニューイングランドにて。



大陸的な余暇を過ごすことが可能な、ゆとりある足回りと、広い室内が最大の魅力。写真は日本車仕様。

で便利なゴルフ場がいくらでもある。しかし同時に、その道中には、ちょっと足を止めずにいられない風光明媚なスポットがそこかしこにあって、山間や海辺の気のきいたレストランに立ち寄るのもまた楽しみのひとつになった。さらには、こちらでは日本のように男ばかりが寄り固まって週末の日を過ごす無粋な風景はどこにも見あたらず、まもなくレガシィ・グランドワゴンにはつねに家族が同乗することになった。そんなわけで、走行範囲も距離も目的もバラエティに富むようになるまで、さして時間はかからなかった。

赴任前と赴任後の生活の最大の違いは、時間感覚だ。同じ二十四時間であり基本的に同じ職場に違いないのであるけれども、ここでは時間がたっぷりあるように感じられる。仕事以外の場で、せわしなさとか、忙しさ、疲れなどをもたらすものが何もないのである。子どもたちを連れていかなければならない大がかりなイベントも、混雑を極めた遊園地もなく、あるのはどっしりと構えた壮大な自然ばかりなのだ。レガシィ・グランドワゴンがなかったら、このような生活に慣れていない私などは、すぐさま暇を持て余していただろう。

妻は私より早く環境に適応し、また、幾多の情報を仕入れていた。「メイン州に百年前のカヴァード・ブリッジがあるそうよ」「バーモンドの林檎園までたった一時間」「ニューハンプシャーの渓谷に素晴らしい宿があると聞いたわ」「アンティーク家具のいいのがある小さい村を見つけたけれど」等々、リクエストも多彩なら、いつのまにか釣り具やらキャンプ用具やらのカタログを取り寄せ、それらの質の良さと値段の手頃さに感嘆してみせたりするのだった。

かくして私は、遅れて渡米してきた妻に導かれ、週末のたびに、ニューイングランドならではの休日生活を、〝習って〟いくようになったのである。

リラクセーションの達人

夏。私たちは釣りやキャンプ、バーベキューを楽しんだ。秋は紅葉を愛でながらひたすら走った。いつでも、ハイウエイを逸れてダートを走った。そう、大自然を満喫するには、確かに4WDでなければどうしようもないのだ。メイン州の紅葉の美しさはつとに有名で、アメリカ人のみならず、世界各国から人々が訪れるが、わたしが驚いたのは、妻が実によく樹木の名前を知っていることだった。メイプルや樺、オーク、ヒッコリー、湖のほとりに花開くスゲや蘭、ヒースの種類も、わたしは妻に教えられた。珍しい鳥を見かけたときなどは、子どもたちも一緒になって図鑑などを繙き、川縁に腰を下ろしてその名の解明にあたることもしばしばだった。家族とともに過ごす週末、その話題の中心に樹木や花、鳥たちの名がくるなど、今までは考えられないことだった。

私たちは、湖畔にレガシィ・グランドワゴンを止め、椅子を持ち出し、揃って釣り糸を垂れる。妻手作りの弁当ではなく、全員でその場で食事を作り、ビールを飲む。アメリカ人の家族に付き合うことがあれば、自然にお互いに招待し合って焼きたての肉や魚を賞味する。アメリカの家庭とは、おそらくそういうものなのだろう。つまり、真の意味でこのスタイルはアメリカ生活の基本の単位であり、同じ時を過ごし、もっともリラックスした時間を分かち合うもの。

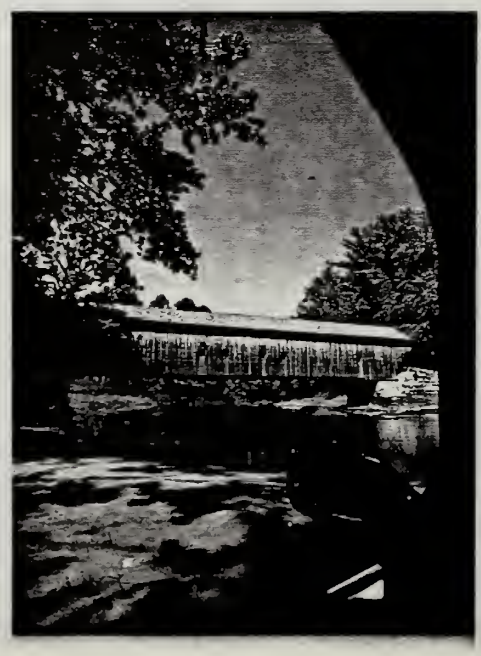
そう、彼らはリラックスのしかたを実によく心得ているようである。「リラクセーション」という言葉を体で理解しているようである。リラクセーションとは、緩み、という意味だ。たとえば凝り固まった筋肉や頭や心を緩ませてやること、あるいは、日々、なんとか統合し運営していかなければならない自分自身の人生、さらには家族の生活や関係をゆったり弛緩させてやることでもあるだろう。

驚いたことに、苦手なはずのリラックスは、私にとって難しいことではなかった。樹木のざわめきや森の静けさ、川のほとりの静謐な空気が体の中に流れ満ちるとき、長い間ため込んできたさまざまな凝りや垢は自然に、容易に、どこかへ消え去っていくものなのだった。ここニューイングランドの人々は、そのことをずっと昔から熟知していたに違いない。そしてリラックスしているときにこそ、本当の意味での人生を味わうことができ、またお互いの関係がやさしく深まるということも。

リラクセーション。それは家族と、また大地とつながるための基本の時間なのである。私はこの一年で、ニューイングランドから、アメリカ人から、そしてレガシィ・グランドワゴンからそういうことを学んだ気がしている。

この冬の子どもたちのいちばんの楽しみは、一面凍った広大な湖をレガシィ・グランドワゴンで走り回ることだ。いや正直に言えば、それはわたし自身のいちばんの楽しみでもある。夕日に染まった氷の上を自在に走り回る。かけがえのない体験になるだろう。一年間の〝学びの時〟は、いつのまにか家族間の、性や年齢の垣根を取り払ってしまったようだ。

レガシィ・グランドワゴン
全長×全幅×全高:4,720mm×1,715mm×1,555mm、ホイールベース:2,630mm、エンジン:水平対向4気筒DOHC、総排気量:2,475cc、最大出力:160/6,000rpm、最大トルク:21.5/2,800rpm、乗員定員:5名、
価格:¥2,697,000〜(東京地区希望小売価格)
●レガシィ・グランドワゴンに関する問い合わせ先
スバル・フリーダイヤル
☎0120-052215



静かな川の流れと木漏れ日の中、のんびりと過ごす休日。そんな時間を持つことの大切さを知る。

CLIPPING VOUCHER

Medium: LIGHTNING Date: December 1995

Subject: REPUBLIC OF IVY Ref. Press Release No.:

The 35th president of USA, John F. Kennedy was born in Boston, studied at Harvard, went to service at Navy, married to the beautiful journalist.. it is very American. Drive by Legacy and find his way to get to know about Ivy.

Cape Cod is the most exclusive resort in east coast of USA. It has the rich nature and loved by JFK. JFK spend his young life in Hyannis doing yachting and touch-football. Cape Cod Water taught him the various things. Those are what man should remember to survive.

John F. Kennedy Museum opened three years ago in Hyannis. About 40,000 people visited there in a few months after its open. It means that JFK was so popular among American. JFK shown in the 10 minutes film there smiled all the time.

(Historic photos of JFK with his friends, family and himself were shown in one page.)

Baxter's Boathouse Club is the place where JFK ordered seafoods. Now it is changed into restaurant, and you can have clam chowder which JFK liked.

Kennedy's summer house in Hyannis is not open to the public, usually. But we succeeded to get into there. This will be the first time for Japanese magazine. We saw Rose Kennedy's house, Robert Kennedy's house and the ground where JFK enjoyed playing touch foolball.

Post office in Hyannis is famous too. The Kennedys had the private post office box there.

Puritan Clothes was the shop located in front of the museum and was the place where JFK enjoyed shopping. You can find the traditional fashion goods there.

Hyannisport Club is the private golf course where JFK played . JFK loved yachting here. We could see the blue yackt "Maya" which Kennedy family owns.

Rose garden by Mrs. Rose Kennedy can be seen in the cornor of the Kennedy land.

(Books to know Cape Cod are listed.)

Lightning NO. 2

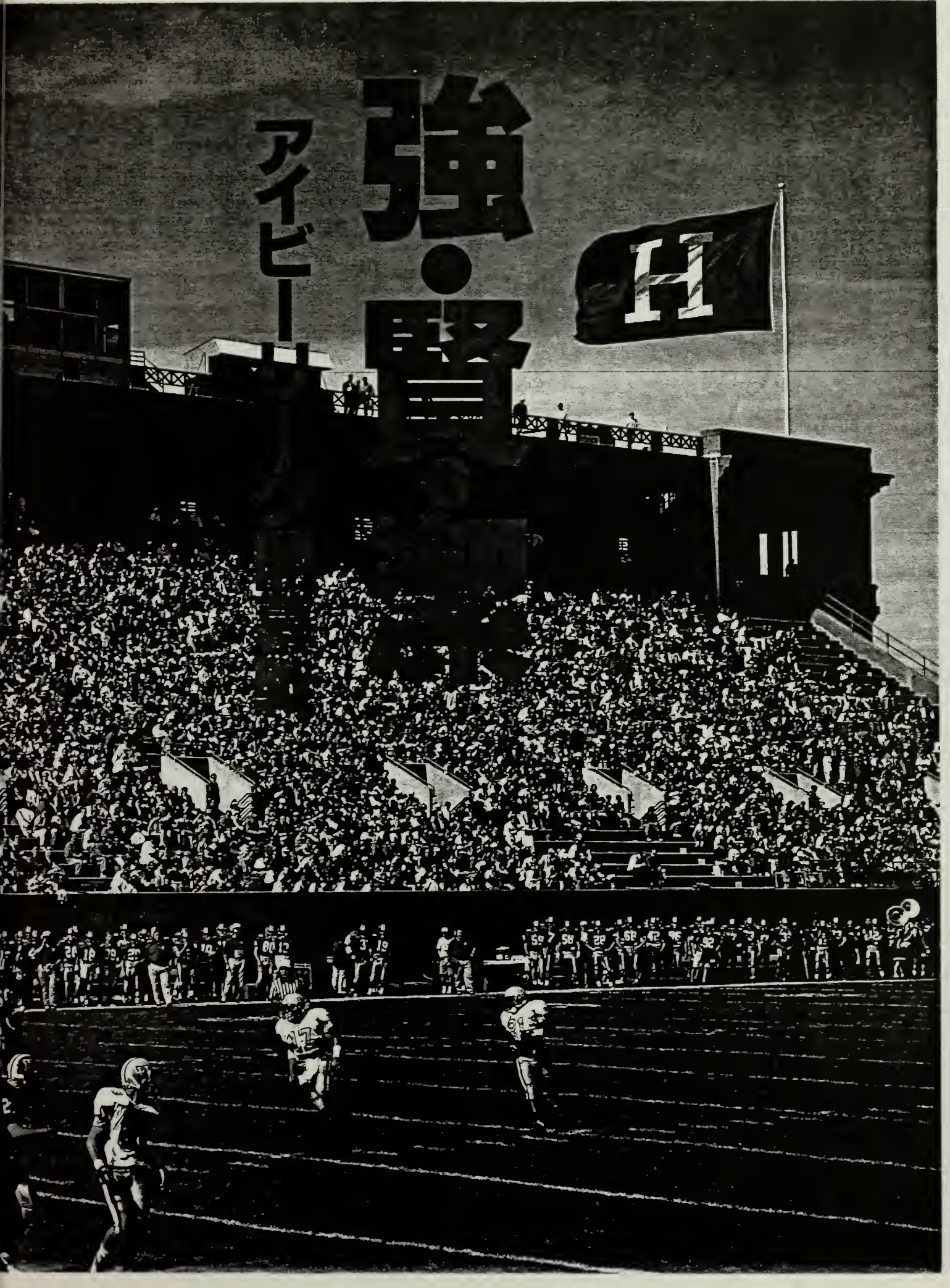
Kennedy years were the time of American light and shadow. Cuban crisis, civil rights movement, south east Asian problem.. these matters made USA tired. Hyannis is the place where JFK psent his private life. On the other hand, JFK Library and Museum in Boston shows his life as the president. It was open in 1979 and was completely renewed in this year.
In 25 booths, we can see the major things happened to President Kennedy, from the elections to the happenings in White House for three years of his president life. (Photos of inside the Library were shown in the page.)

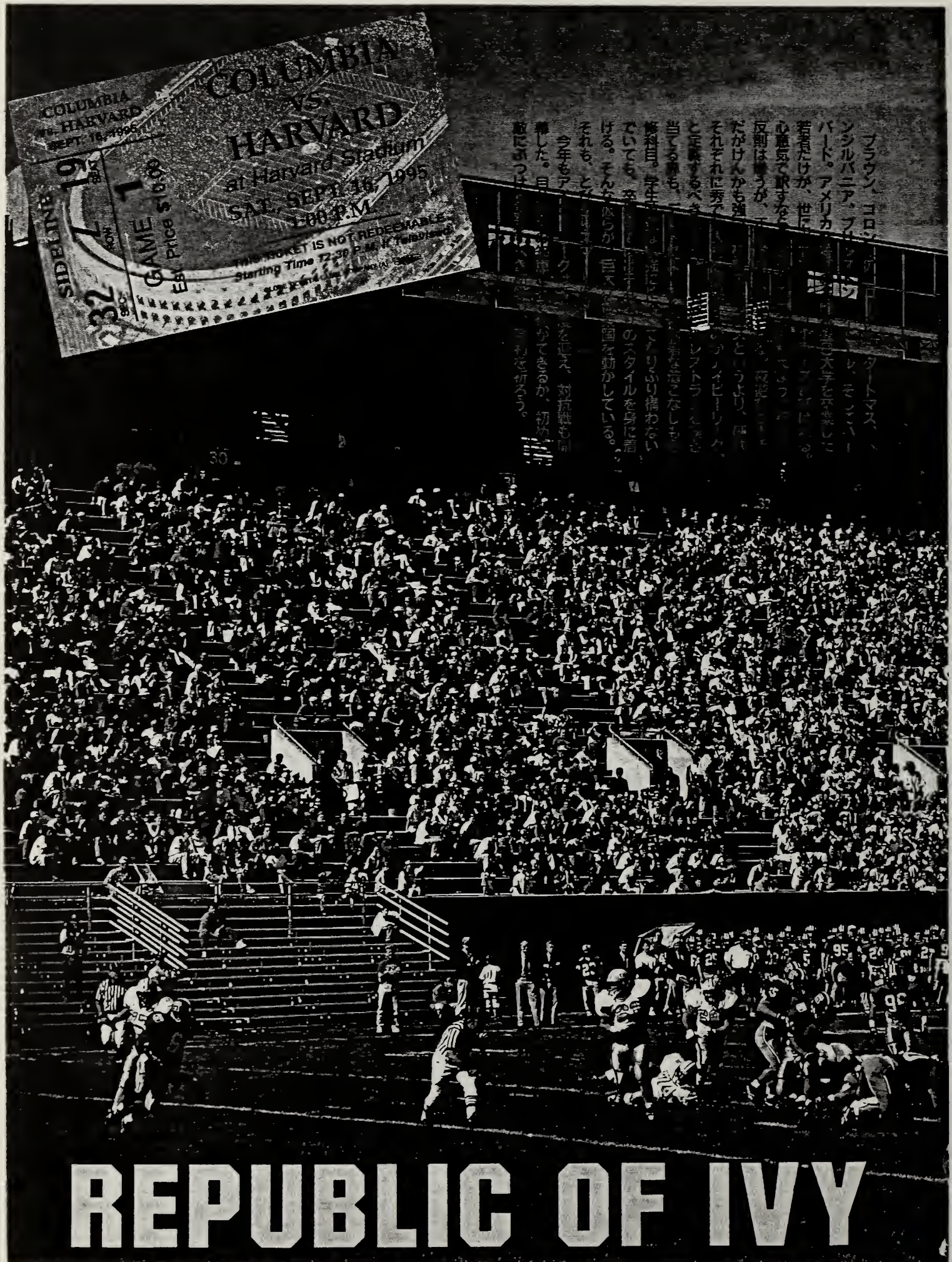
Sunday at 1:00pm, JFK showed his smile in his usual seat.
The oldest restaurant in Boston, Union Oyster House has been servicing the fresh seafoods since 1826. When JFK was the senator, he visited this restaurant on Sunday afternoon. He read 5 newspapers, ate lobster stew. After the coffee, he left for his home in the evening.
The reataurant is still in the same place and it is worth visiting there. (How to eat lobster is shown by photos and explanation.)

Museum goods sold at JFK Library and JFK Hyannis Museum are intorduced.

In the last part of the article, JFK Jr. was introduced as the editor of "George" magazine.

The second part of the article is written about Ivy football game between Harvard and University of Columbia.
Also about Harvard University. Its history, campus, Cambridge City. Student's favorite barber shop, clothes, fashion, hotels such as Charles Hotel, Harvard Inn etc.etc.


アイビー
強豪


COLUMBIA
VS.
HARVARD
at Harvard Stadium
SAT., SEPT. 16, 1995
1:00 P.M.
GAME $8.00
SIDELINE $10.00
COLUMBIA
VS. HARVARD
SEPT. 16, 1995
REPUBLIC OF IVY

➡卒業生かと思ったら、フットボール部の選手を子供に持つ親たちであった
↑脚に貼られたステッカーに子供の名前と背番号が誇らしげに書かれていた

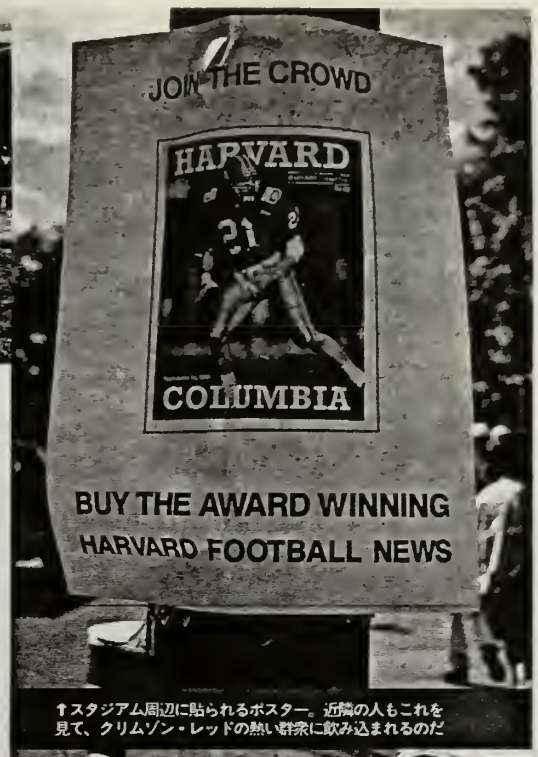
オールド・ボーイの熱波を受けて。

深いエンジと明るい水色。これは東京六大学、早稲田×東大戦ではない。アイビーリーグの両勇によるフットボールの開幕戦、コロンビア大学をば迎え撃つハーバード大学のホームゲームだ。

この記念すべきオープニング・マッチには、在校生だけでなく幅広い年代の卒業生たちが、卒業年度を刺繍したキャップやレタードのニットを身に着けて、夫婦や家族で詰めかける。それも朝から。年に一度、自分たちの誇りを確かめるこの日、スタジアムではキックオフのはるか前から歓談が始まっている。アメリカで最も古く格式のあるOB会だ。

さて、キックオフ。在校生は友人の活躍に興奮し、フレッシュマンたちは初めてハーバーディアンとして振る舞うことに、少しばかりの気恥ずかしさを隠せない。そしてオールド・ボーイズの血圧はますます上がり、スタジアムは熱気に包まれ、老紳士は5つほど若返る。それは老いて盛んな先輩が現役組に喝を入れる儀式であり、幼い息子に誇りのかけらを味わわせる場でもある。この受け継がれていく気骨こそが、アイビーだ。

そして今年も、篤の歴史は紡がれた。

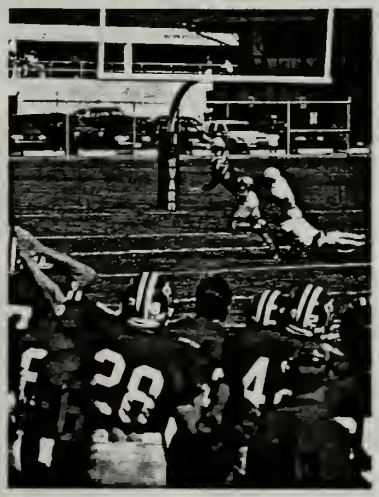


↑スタジアム周辺に貼られるポスター。近隣の人もこれを見て、クリムゾン・レッドの熱い群衆に飲み込まれるのだ

↑1939年卒業の御大2人は、左野球部、右水泳部のOB。でも毎年この開幕戦にはここで顔を合わせる。ダンディ！

↑試合中の作戦ボードをスクープ。浅学にして不明だがやっぱり知的に高度な作戦を選択しているのでしょうね

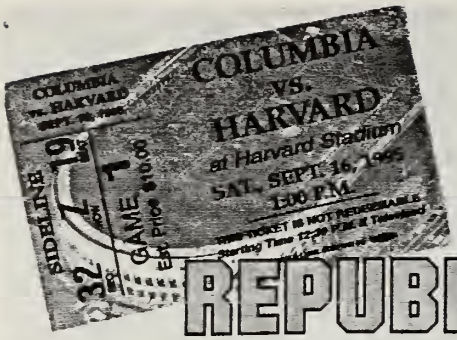
↑クリムゾンがついにタッチダウン！　この時ばかりは盛大なOB会場も無礼講だ。オヤジたちも叫ぶ叫ぶ



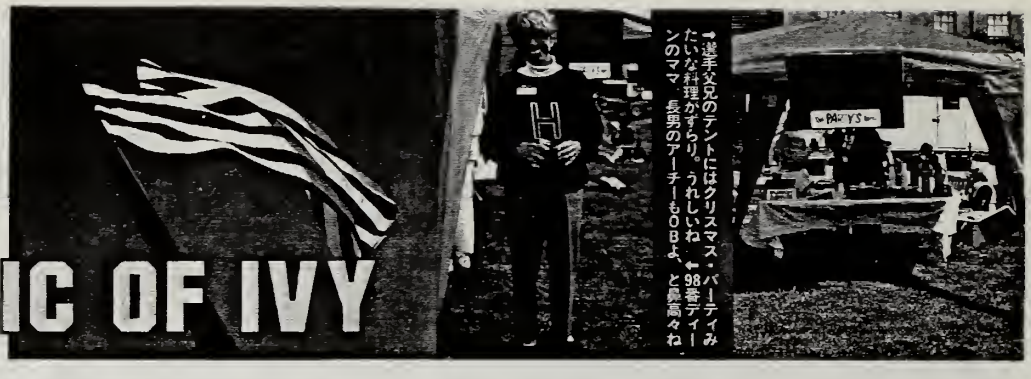
↑ナイスなパスキャッチだったが、タッチダウンには一歩足りなかった。残念！　次のドライブに期待だ

えらくごきげんな熟年のご夫婦。トランクリッドにかけたHマークの布、汚れはないか年期は相当に入っていたのだ

↓「ウチは熱い飲み物だけだけど、でも毎年会えるのが楽しみで、テーブルや椅子は置いてこられんのだよなあ」



REPUBLIC OF IVY

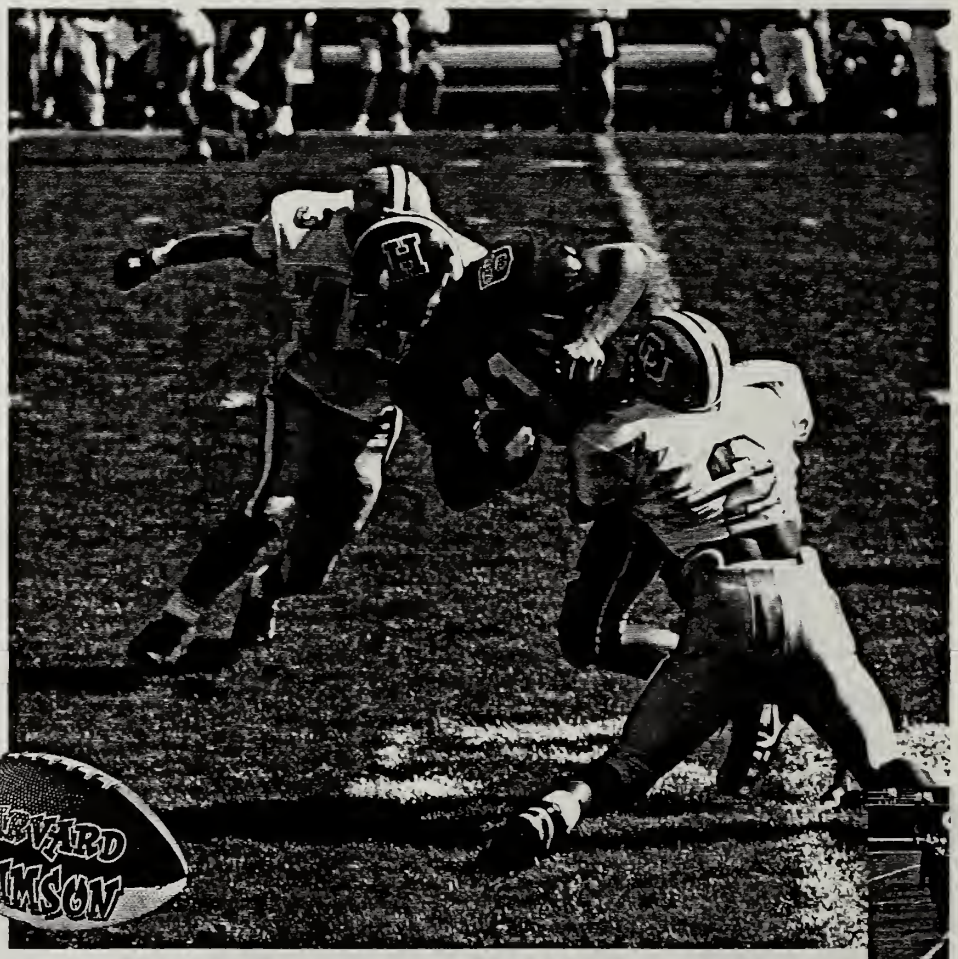


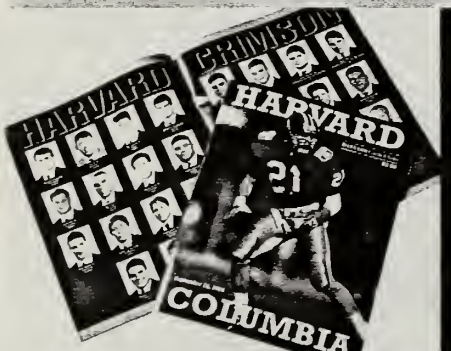
→選手父兄のテントにはクリスマス・パーティみたいな料理がずらり。うれしいね。←98番ティーンのママ、長男のアーチーもOBよ、と豊高々ね。

↑ニューイングランド地区のOB会の勧誘も行われていた。アイビーリーガーたちの結束の固さを見ることができる

↑コロンビア大学のOBたちの歓談の図。↑卒業生のジョンは、夫婦で母校の応援に来ていた。彼は生粋のボストニアンだが、シートはもちろんコロンビアサイドであった

↓次から次へと襲ってくるタックルを振り切りながら走るハッスルプレーで、ファーストダウンをゲット！

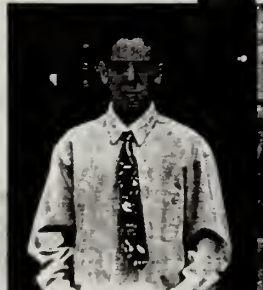




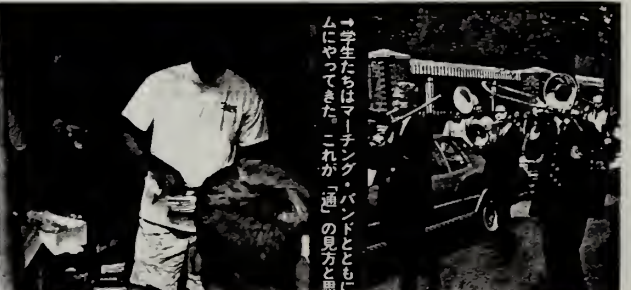
←3ドルのプログラムは観戦の虎の巻ョンは冬の必需品。5ドル ←子供用マスコットボールは10ドル ←ハーバード印のクッシ

→ホームゲームでは、チアリーダーたちもいつもに増して高く飛んでいた。観衆はさらにエキサイトするのだ ←クリムゾンの活躍にはスタンディングオベーションと黄色い声援が飛ぶ

→ブラスバンドに合わせての国歌斉唱には全員が星条旗に注目する



↑ビジターチームを称えて校旗を掲揚。誇り高きアイビーリーグのフラッグもはためいていた →チケット係を勤めてい



→学生たちはマーチング・バンドとともにムにやってきた。これが「通」の見方と思い

CLASS of 1999
クリムゾン・レッドの誇りは、いま。

text/T.Ohmori 大森達生 T.Shimizu 清水貴和 photo/M.Kano 加納満 S.Kawasaki 川崎真開 map/S.Tsukahara 塚原周三

1636年マサチューセッツ州ケンブリッジに創設された、アメリカで最古の伝統と、最高の学問水準を誇る総合私立大学。それが百科事典の記すハーバード大学だ。例えば春先の東京、目黒区駒場あたりで学生をつかまえて「どこに行ってるの?」とたずねたら、恥ずかしそうに小さな声で「東大です」と言うのかもしれない。でも9月のケンブリッジで声をかければ、顔は照れくさそうでも堂々とハーバードの新入生であることを主張する。さらに続けて「ここは世界でいちばん優秀な学校だからね、来たんだよ」と。ハーバードは、そんな学校だ。学生は様変りして国籍も肌の色もまちまちな連中が集まって来るけど、彼らの胸の張り方は、たぶん三百年以上変わってない。なにせアメリカより古いのだ。建国史より長い校史が編める大学なんてめったにないのだから、面と向かって自慢されても素直に兜を脱ごうじゃないの。

今年入学のフレッシュマンたちは「1995年入学組」とは呼ばれず、入学と同時に「クラス・オブ・1999」すなわち「1999年卒業組」となる。それはアイビーリーガーズは死ぬまでアイビーだということでもあり、選ばれた若者たちだけが抱く、強い自意識でもある。学閥はなにも日本の特産品ではない。その少数派の誇りが、政治や経済の分野で「強いアメリカ」を支えてきた。頭がいいだけじゃ勤まらない。力が奮えなければ、アイビーリーグも名折れなのだ。スクールカラーは深紅色。思慮も深いが熱くもなるぞ、のクリムゾン・レッドは、決して従順で勤勉なだけのおとなしい色ではない。着ればウラナリ君も元気に見えるし、血気盛んでも似合うはず。

もう一つ、ケンカの後で鼻血を拭いてもみじめにならない、バンカラな色だ。

↑宣教師ジョン・ハーバードの遺産と蔵書で設立された牧師養成機関がこの学校のルーツだ。実に17世紀、寛永十三年のこと ↓外壁には小さな門があちらこちらに。頭を垂れてくぐるべし

↑この手の建物がこのキャンパスだけで20棟ほど。ほとんどは校舎だが、教派ごとの教会も数が多い ➡その一つ、蔦の絡まるアップルトン・チャペル。沈黙黙考にも良

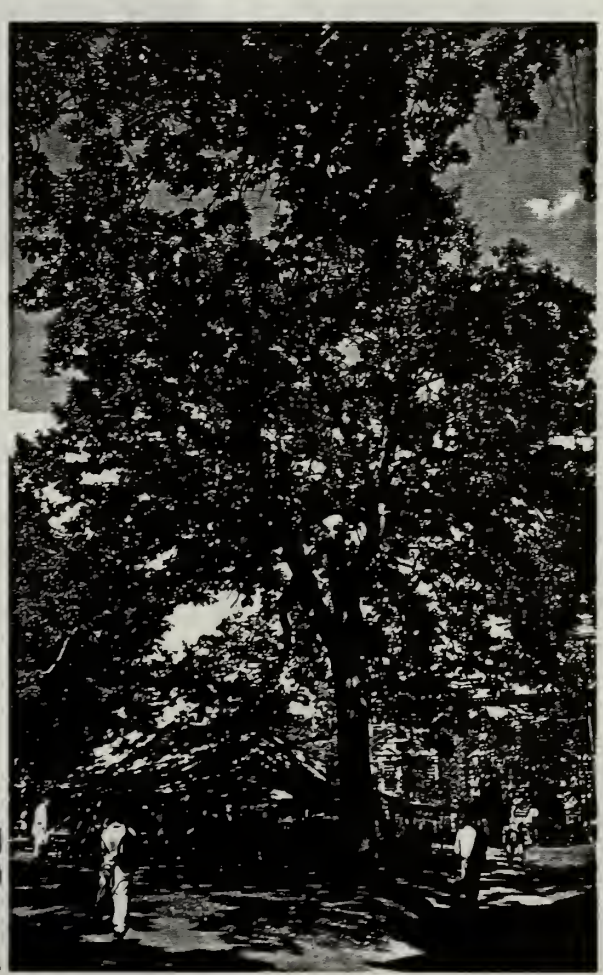
1 HARVARD YARD
ここが大学一丁目。

↑VE・RI・TASとあるのは建学のモットーで、誠実であれとの教え。クワンティコのFBIの養成所にも掲げてあった、と沈黙の羊

ハーバード大学は広大だ。それがケンブリッジ市の中心街にデンとある。街中にこれほど大きな学校があるのは圧巻だし、そのキャンパスが公道に分断されて点在しているのも、また圧巻。講義の後の昼メシに、学食までバス通りを渡らなければならないのだからね。

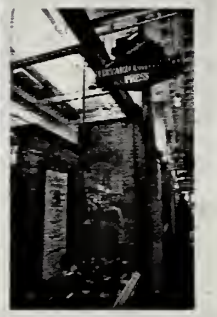
そのキャンバス群の中心にあるのがハーバード・ヤード。大学心臓部、と考えてもいいのだろうが、広い正門があるわけでもなく、巨大な校舎があるわけでもない。せいぜい三、四階建てのレンガ作りが、一面の芝に並んでいる。万事が控えめで、厳粛だ。樹々は繁り、木漏れ日は柔らかい。気分はまさしく森林公園。だが学生たちは芝生の中の道を、前を見据え、速足だ。みんな勉強で忙しいからおめかしはしていなくとも、許そう。リスたちはどこ吹く風、と笑っていたけど。

➡リスが多い。しかも逃げない。見慣れた学生は誰もかまわない。でもかわいい ↑レポートで徹夜でもしたのか、歩道に足向け大胆にも熟睡の二人。あんまり良く眠っているので声はかけず、静かに撮らせてもらう ←蔦の下生えなんて日本では見ない。さすがアイビー



④HARVARD SQUARE

↑ケンブリッジの書店でもやっぱり硬派ナンバーワンだろうね。堅い学術書だけでなく、図版の美麗な本もあり



その名に恥じぬ大学出版部。

ハーバード・ヤードの角、マサチューセッツ・アベニューとJFK通りの交差点を中心とする一面をハーバード・スクエアという。つまりこの大学の門前町ですね。ま、学生街ですからカジュアルなカフェやレストランなどあるのでしょうが、この界隈は優れた本屋が多いことでも有名で、大人の散策にも心遊べる街なのだ。フラリとのぞいたタバコとチェスの専門店で、地元メイドのパイプに大枚をはたいてしまう。そんな気分。

大学の目の前にある「ショップス・バイ・ハーバード・ヤード」には、大学のインフォメーションセンターがある。この場合の「バイ」は「〜の近く」の意ね。ここへキャンバスの地図をもらいに行ったら、隣にシブイ本屋があった。これがなんと大学の出版部。つまり全部オリジナル書籍。いい本屋です。

③SCIENCE CENTER

最古の学府の最新講義。

いわゆる理工系のこのキャンバス、ハーバード・ヤードとは大きく趣を変え、健全な近代建築の見本のようにビルが建つ。キャンバスも開放的で明るいぞ。ただし色使いは白を基調にシンプルで、デザインがちっともエルゴじゃないのはハーバード流だ。安心できます。学生もネクラの眼鏡族ではなく、何だか腕力ありそうな元気者多し。それでいて「将来は研究者として生きたいね」なんてさらりと発言。とりあえず、単なる本の虫には似合わないキャンバスだ。アメリカの得意技に「産学一致」というのがあるけれど、たしかにコイツら、バイタリティある。

サイエンス・センターにも専用のカフェテリアがあり、メニューはぐっとファストフード風。エスプレッソ・スタンドは17号シアトル編でご紹介の「SBC」だ。

↑右手の奥にバーガー・ショップ。見える？（ゴメン）。フレッシュマン・ユニオンとはまた違って良
→昼休みのバレーは楽しい。しかし日本の学生のほうが上手かもね

走る人、流れる水。

↓優雅なチャールズ川の、向こうがボストン、手前ケンブリッジ。ヨットも走る

ボストン／ケンブリッジはアメリカの「歩きたい街」第1位として、つとに有名。景色がいいだけでなく、街が小ぢんまりしてるこ ともあってね。さらに最近「走りたい街」第1位にもなった、かどうかは知らないが、みな走る。走っている。川面の光を受けて。

↑おかっぱ揺らしてハーバードのバスは走る。息子は少しだけ起きている。でも景色には似合っている
→同じFM、たぶん人気のクラシック・ロック曲を聴きながらの熟年ペア。そこそこ本気のランニング

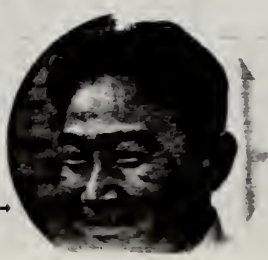
ハーバード風にしてもらえます？

→シェイビングの有資格者は、この主人の他に一人。ワタシを担当
↓オーセンティックなバーバーだがシステムは「新幹線ステーションバーバー」式。指名も可だが、普通は空いた席に。☎617・354・8377

旅先で髪を切るのが好きだ。それも、できれば初日に切るといい。頭が少し軽くなり、ついでに日常の生活の何かがふっと消えて、旅人の心は新しい刺激に対して繊細になる。とはいっても言葉の通じない外国で床屋さんに行くのは少しばかり勇気がいる、とカズも発言していた。それならば読者のために（拍手）トライしてみましょう、と。この「ラ・フラム」なら安心おすすめ、と報告しておきます。あーさっぱり。

→当店はメンズ・オンリーではありません

←ネイビーはイエール大学の色。ブルドッグもいる。クリムゾン・レッドがハーバードで、これはピューリタンの怒り入れのカラーだ
↓スクール・マフラーは母校を観戦するための必需品



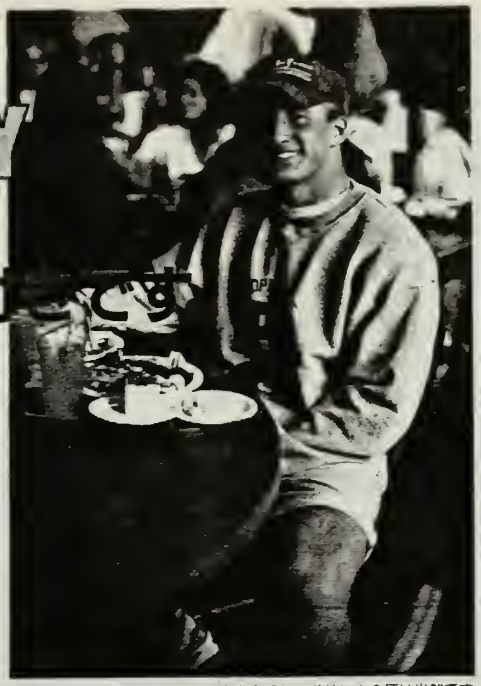
これでハーバーディアン、かな？→

99 REPUBLIC OF IVY

② FRESHMAN UNION
もれなく3食、プライド付きです

異国の文化は食事の席で実感するもの。ならば、と学食にトライした。まずはフレッシュマン・ユニオンの新入生専用カフェテリアだ。システムは簡単。まず入口でIDカードを提示。学生はみな持ってるワケね。その後はトレイを手に、好きなものを好きなだけとって、大ホールで食す。料金は年間前納制で、食べても食べなくても同じ。だから3食ここで済ませるヤツが多いのだけれど、お味の方は……。

→こんな大部屋がもう一つ。おかわりをしに戻るのも遠いので、同じドリンクを2杯、3杯と持って来るのが食いしん坊の基本的スタイルだ



↑フットボール部のマットは3食学食派だ。ドリンク2杯は当然です

↓どうしてそんなに小食なの、と問えば「だってマズいもん」と答える正直クリス。ま、あえて否定はしませんが

↓定番のパスタや肉料理だけでなく冷菜やサラダも種類が多く、メニューの充実は立派。ツーリストはランチ7ドル。それにしても自分で作りながら進むサンドイッチ、あれは慣れがいるね

REPUBLIC OF IVY

5 WELD BOAT HOUSE
水もしたたる好漢ぞろい。

↓マジもマジ、大マジなクルー。朝から元気だ。ウエアはバラバラだけどチームワークは息ぴったり。国旗付きのウエアを着用の若者が多いのも、すごいね

文武両道の鑑がいるとすれば、まずはこのハーバードのボートマンたちを推薦したい。よく知られている「ロー・アウト」という言葉、いかにもアイビー的だと思うのです。とにかく朝も早くから漕ぎ出して8時には切り上げ、へとへとになってるはずなのにキャンバスへ急ぐ。そう、ここはハーバード大学のボートハウスの一つなのだ。学生も来るしOBも来る。過去オリンピックにも選手を輩出している。明るく楽しく、だが真剣だ。おじさんもマッスルを保っているが、女子だって負けず劣らずたくましい。時差ボケで5時前の散歩としゃれこんでいたら、ボートハウスに向かう女子が「モーニン」と声をかけて行った。

なんでボートマンって、みんな爽やかなんだろうな。モーニン！

↑早朝から艇の数は多い。だからすれ違いにも神経を使います。女子クルーも相当速いぞ

↑ジョージ・ウォーカー・ウェルドが1860年に寄贈した立派です

→表からは見えないが艇庫は広く、艇数もかなりのもの。工房では新艇を製作中

↑ベアのローイング・マシンは年代物。隣には最新のマシン設備もあるけど、これも現役

↓ID カードに加え、水泳テストの合格証を毎回提示しないとデッキに出られない。このあたり、ナアナアにしないのがアイビーです

プレイメイトに会っちゃった。

↑正しくは「アウト・オブ・タウン・ニューズ&チケッツ」という店。長いので学生はスタンドと通称

10月号「プレイボーイ」誌の目玉は「アイビーリーグの女の子」特集。本当はプレイメイトとは呼べないんだけど、もちろんネイキッド。その女の子たちがサイン会する、と聞きつけて色めき立った取材班は、会場のニュースタンドに並んだ。2冊購入して。アイビーリーグも変わったね、と後ろの学生はつぶやく。並んでるくせに。

あ、これ日本版じゃなくてオリジナルの方ね。だから中ページはお見せできません。

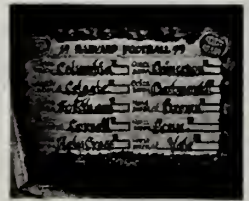
↑列に並んで名前も入れてもらったのに、残念ながら本誌ではそのサインをお見せできない。現役大学生の彼女たちはあっけらかんとフランクだった。日本版で会ってね

蔦の街のJ・プレス。

↑この街には1931年から。以来テイスト不変。10年前にも20年前にも訪ねたGTOも「変わんないねえ」と一言。☎617・547・9886

↓学生と共にスタートし、学生を忘れない店。そこがBBとの違い

1860年コネチカット州はニューヘブンに開いた店が、「J・プレス」となったのは1902年のこと。続いてニューヨーク店、そしてケンブリッジ。勘のいい読者にはお判りかな。それはイエール大学の街で創業し、卒業生が多く働くNYにも出店、そしてここハーバードの街へ来た、アイビー・ボーイズのための紳士服店の歴史なのだ。晴れてフレッシュマンとなった男子が両親を伴って初めてのブレザーを仕立てに来る店であり、ウォール街で仕事する卒業生が母校のカラーを使ったタイを求めに寄る店。もう60年、ここで学生の味方を続けているんだね。



→元気な学生は大好きだから試合結果も気になる。フットボールの結戦は落としたけどね。ボートも寄贈しています

↑いかにもJプレ的アイビー。似合うのは男前のみ

1999年の卒業生たち。

ボタンダウンシャツにブラックウォッチのパンツのアイビーファッションに身をつつんだ学生ばかりがいると、勝手に想像していた取材班は、今のアイビーリーガーたちを見てあ然とした。

BDシャツを来ている学生を見つけることすら困難であった。学生たちのほとんどがTシャツにジーンズといったラフな格好だったからである。勉学に励む彼らは、ファッションなどはどうでもよいのだ。それよりもライフスタイルを重んじ、ハーバードの学生であることを誇りにしている。

現代のハーバード大学では、ファッションとしてのアイビーこそ失われたかもしれないが、そのスピリットは伝統として受け継がれているのだ。

↑イタリアからやってきたばかりの留学生のパウロ・ヴェチュラ。ラテン語を極めるために、はるばるケンブリッジまで飛んできた

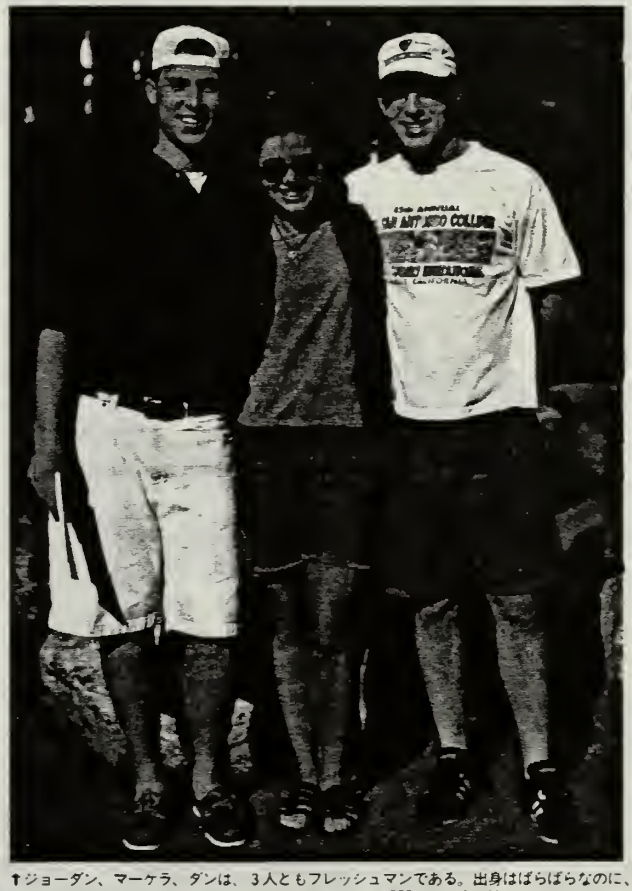
↑史学博士になるために、マスターコースに進んでいるエドワード・ジョーンズ。トロントの大学を卒業してからやってきた留学生

↑イタリア系アメリカ人のマーク・デ・ギラーミは母国の言葉を勉強する。英語の苦手なパウロの親友であり通訳でもあるのだ

↑ロケッツのTシャツを着ているブラディ・ヘウィットは2年生。「世界で一番スマートな大学だからここを選んだのさ」と鼻が高い

↑日本にも来たことがあるクリス・ハートウエルは「コンニチハ」と挨拶。「卒業したら外交官になりたいんだ」と大志を抱いている

↑ビシッとジャケットを着て、いかにも真面目そうなエリック・オーエンス24歳。キリスト教と倫理学を専攻している。見てのとおり



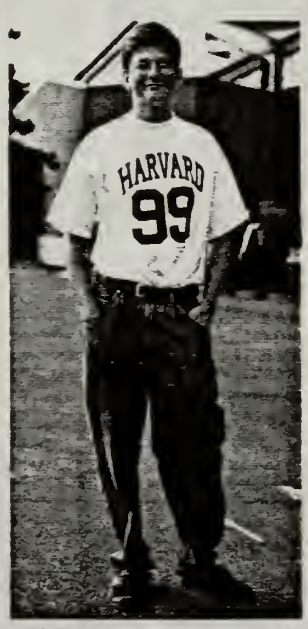
↑ジョーダン、マーケラ、ダンは、3人ともフレッシュマンである。出身はばらばらなのに、まるで幼なじみのようだった。アメリカ人は知り合った瞬間からもう友達なのだ

➡やっとハーバードらしい学生をみつけた。と、思ったらクリスチャン・パトリック18歳はイギリスからの留学生であったのだ

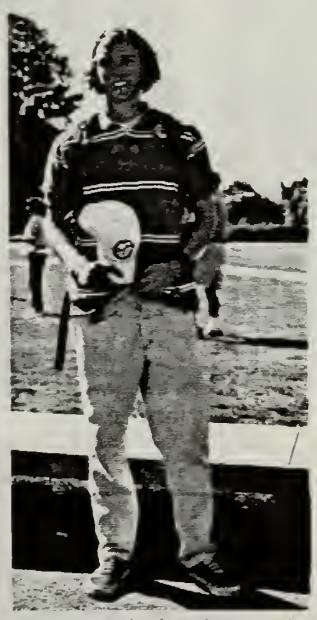
↓フリスビーチームのキャプテンのアレックス・ベルゾフスキー21歳は下級生たちを上手く仕切っていた。後ろ姿でゴメンなさい

↑インタビューした学生の中でもいちばんキレイな英語を話していたアダム・ビッグスは、コーネル大学からの転校生だ

←全米トップ20にランクされている水泳部の強者たち。バンバシフィックやユニバーシアードに出場経験のある選手もいるのである



↑政治学を勉強するためにハーバードを選んだアダム・リロイ。18歳なんだからもう少し若々しい着こなしをしたほうがもてるよ



↑ベン・コリンズはプレップスクール出身の生粋のアイビーリーガー。「将来は大統領を目指してるんだ」と自身満々に語った

REPUBLIC OF IVY

6 SOLDIERS FIELD ATHLETIC AREA

文武両道、無我夢中、いいね。

ハーバードは全米で最古の大学だ。だからフットボール・スタジアムも、大学施設としては全米最古。そのスタジアムを中心に広がる競技施設、強烈に広い。東京ドームで数えたくなるほど広い。インドア・トラックも、プールも、野球場も、公認基準をたっぷりと満たす充実ぶり。日々ここで練習に励む学生たち、気合いも誇りも全米最高だと言ってあげたい。決して強くないかもしれない。だがその練習はハードかつクレバー、本番の試合ではエンジョイすることを知っているはずだから。こうじゃなくちゃね。

サッカー場も立派だが、そこで試合していた女子サッカー部も元気ハツラツ。敬意を表して、正式に「ビッチ」と地図には書いた。

↑ルックスだけじゃなくプレー水準も高かった女子サッカー部。このウエア、真似したくなるほどカッコいいね

↑フットボール開幕戦の日に集合していた水泳部。短パンボーイもシェイプダウンは当然ね。それにしてもみないいカラダをしてるのが悔しい。シーズン終わって少しだけのんびりムード
↓フィールドに入ってすぐのクラブハウス。チケットもあるぞ

↑試合後ここに発行の「フットボール・ニュース」も。開幕戦は気合いが入る。両校のスターターやプレイの予想と分析など、本格的だ
↑当日券カウンターもあり

8 THE INN AT HARVARD

OB、来賓御用達。

↓隣はバプティスト教会。窓からの眺めは決して絶景ではないが、それでも許したくなるね。☎617・491・2222

キャンバスを出るとハーバード印の宿あり。なんとCOOP直営のホテルだ。館内には卒業生の写真が飾られている。しかし「JFKは？」とたずねたら、ジョディはあっさり「ないわ」と即答。なんでもポートレイトは普通の卒業生ばかりだと。なるほど、それでノーベル賞やら（いました）ピューリッツァー賞やら（たぶん）いるわけだ。この大学のフツーは怖い。そんなOBや学校への来客をもてなす迎賓館だが、誰でも宿泊可能。天窓のアトリウムで読書にふけるのが気分だ。ただし書棚の本には難解なものがあることを覚悟しておこう。

↑4フロアの吹き抜けで、ディナーはキャンドル灯りが1本。腕時計外しちゃいました

←学術書ばかりなわけもないけど、一部を除いてはオーエ的純文学系統が多い（らしい）アトリウムの書棚

↑ケンブリッジ伝統の朝食。トゥー・マッチ！

7 CHARLES HOTEL

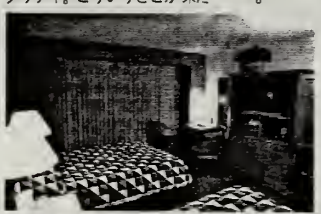
朝食に自信、あり。

↑JFKメモリアル・パークの横に建つスリースター級ホテル。いい感じです ☎617・864・1200

↑エッグズベネディクトはアスパラガスを道連れに登場。ハムはケンタッキー産だとか。12ドル95は高いが後悔はさせないと報告する

↑朝、ジョギングから帰ってきたゲストのために用意のホスピタリティ。こういうとこが味だ

この界隈で最もジェントルマンな朝食を摂取したいと希望する者あれば、西に向かって『チャールズ・ホテル』へ行けと答える。ホテルの名物は『ヘンリエッタズ・テーブル』というレストラン。入り口には新鮮そうな（実際に鮮度は高い！）野菜や果物が並び、ここは市場ですかと首を傾けすぎて倒れる男はいないけど、そういうギミックを持っている。だからアイオープナーとしてのジュースをゴックンすると、オレンジの本当の味を学習することになる。シェフが全米各地から集めた食材は、そういうのばかり。ついつい食べ過ぎる。しかし、卵料理を3皿いってしまうのはジェントルマンではない。要注意。



↑部屋は清潔。キルティングのカバーに驚いた

変わる人、変わらない街。

学生の街ケンブリッジの住人の多くは、年ごとに入れ替わっていく。新しい若者が来て、新しい店が開き、新しいスタイルが歩き出す。だけど街は変わらない。ちっとも変わりゃしない。少なくとも本質の部分では。それがここ、東部の人々の気質なんだね。

だから老舗の看板は創業の古さを自慢し、品ぞろえも変えたり減らしたりはしない。レストランやカフェは改装なんて考えない。再訪する旅人が懐かしさを覚えることも、百年前から変わらない。

↑創業80年のクリーニング店、百余年のシャツ専門店。こんな看板があちらこちらに数多く見えるのも、イーストコーストの気分だな

↑ハーバード・スクエアの中心を走るJFK通り。ただし、公園はともかくJFK第4ビル、なんてのはどうかねえ。人気者はつらい

ハーバードの「鶏小屋」には、仕立屋さんまであった!!

ハーバードのコーポレイティブ・ストアには「ザ・クープ」という名が付けられている。この名前にはふたつの意味があり、ひとつは協力という意味。もうひとつが鶏小屋という意味である。社会に出て行く前の金の卵を育てる学校ということから、鶏小屋に敬意をはらってつけられた。そして「ザ・クープ」はハーバードだけのものだと思っていたら、ケンブリッジにあるMIT、ウェズリーの3校が利用できるそうだ。もちろんこれらの大学の生徒たちは、IDカードさえあれば、全てのものを15%のディスカウントで買える。

まず、一歩入るとその大きさにびっくりする。3階建てのビル2軒に、各セクションごとの売り場が設けられている。その規模は、デパートから生鮮食料品売り場をなくしただけの広さと品揃えだ。学生に必要な本やステイショナリー関係はもちろん、家電や家具まで売っている。しかも、どれもが専門店に匹敵するほどの品数がある。この近くに住んでいたら、ここ一か所だけで生活必需品のほとんどが揃ってしまう。ハーバードの学生たちが恨めしく思えるほど、何から何まである。

いかにもアイビーリーグらしいのは、オーダーメイドまで可能な本格的なテーラーがあることだ。鶏小屋は、確実に新しいアイビーリーガーたちを育てる場所だった。

REPUBLIC OF IVY

母校のキャップで愛校心をアピール

↑ベージュにクリムゾン・レッドのワンポイントのコンビネーションは、いかにもアイビーリーグしている色使いだ。シブめのOBがかぶるととってもカッコよさそうなバケットキャップは20ドル。ちょいと大人のプライスだ

↑壁一面にキャップがずらり。デザイン的には優秀なものも多いが、アレレもあるのだ。でも誇りを持てば似合うのです

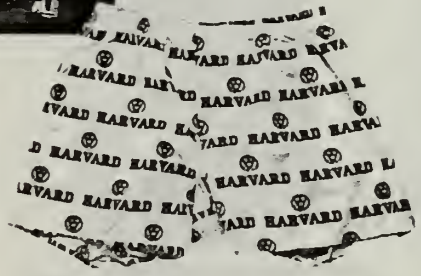
↑クラブや学部のロゴ入りキャップは、どこの大学にでもある。しかし、このヤードのものは、他ではちょっと見つからない代物だ。ここでのヤードの意味は、構内にある建物のことを指している。日本では相当にレアなキャップだ。20ドルの愛校心

↑このキャップに刺繍されている「MOM」とは、Motherの略ではない。大学に行くための資金を出してくれる人、つまりパトロンを意味している。このキャップをかぶれることが、アメリカ人の親たちにとってもステイタスであるのだ。20ドル

アイビーにもデザイナーの波が……

↓下着までクリムゾン・レッドで揃えられる。Tシャツ、キャップ、ステイショナリーの次に

↑カルバン・クラインのコーナーが立派なのもご時勢か。それだけでなく、取材班は!?なモノを発見。答は4インチ下に

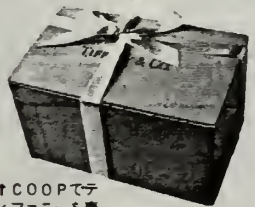


↑ハーバード印のトランクスは11ドル。日本の受験生が"必勝"なんて貼紙しているみたいに、アメリカの学生もこのトランクスを履いて受験勉強に励んでいるのかな？または、ただのスーベニールなのかもしれない

↑どこから見ても、某ブランドのネームタグを張り替えただけのコピー商品としか思えないこのトランクス。パッケージまでそっくりなのには脱帽。でも、学生たちの人気商品のひとつだ。13ドル

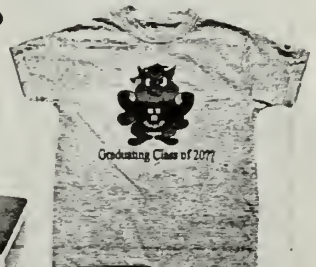
ハーバード予備軍のために……。

日本人の親が子供を有名私立大学に進学させたいという気持ちを持つように、アメリカでは子供をハーバード大学に進ませることがステイタスとなっているのだ。そんな、教育熱心な親たちのために売っているグッズが多かったのもこのCOOPの特徴であった。



↑COOPでティファニーを売っているのは、ハーバードだけ？なんと中味は右の貯金箱なのだ

→正真正銘のティファニーの貯金箱である。でも、これがいっぱいになっても学費にはちょっと足りないだろう。45ドルはお買得



↑ハーバードの卒業生じゃなくとも、かわいい子供にゃこんな学校に行かせてやりたいと思うもの。末は博士か大臣か、のアメリカ版Tシャツは21世紀の卒業生に。15ドル

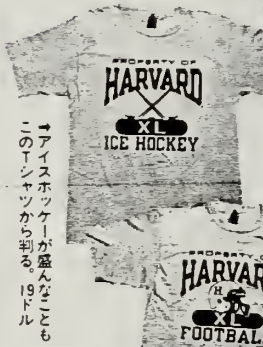
専門店より沢山あるよ！のTシャツ

↑ハーバードだけでなく、8大学のTが全部見つかるサービスの良さはエライぞ

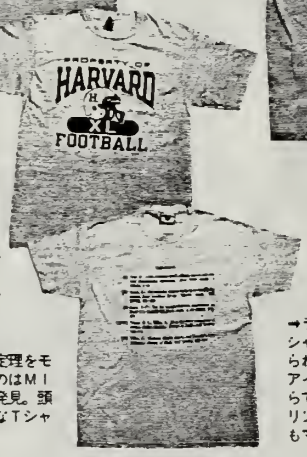
↑ワンポイントがアクセントのシンプルなTシャツは19ドル

↑誰もが憧れるボート部のTシャツは15ドル95

←これぞハーバードのデザイン。スーベニールにぴったりの19ドル

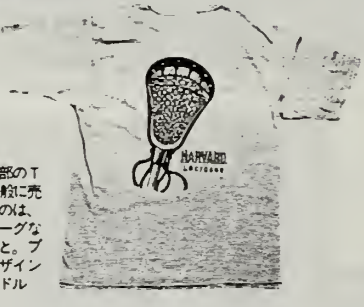


→アイスホッケーが盛んなこともこのTシャツから判る。19ドル



↑どこのアメリカの大学でも人気No.1スポーツはフットボール。その法則は、ここでも同じこと。19ドル

→フェルマーの定理をモチーフにしたものはMITのコーナーで発見。頭が良くなりそうなTシャツは17ドル95



→ラクロス部のTシャツが一般に売られているのは、アイビーリーグなではのこと。プリントのデザインもマルの24ドル

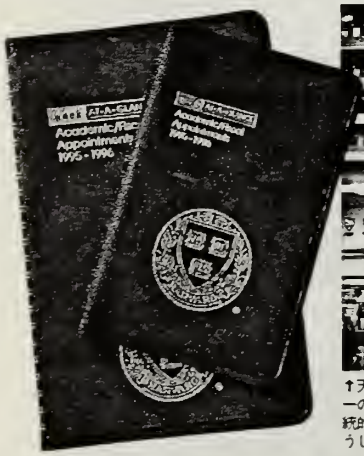
テーラーがあるのはアイビーリーグの証

→学生よりもOBたちに利用されているテーラー。スーツ類はそれを意識してか、大人っぽいものが目立った。レジメンタルタイが多く見られるのはアイビーリーグだから

←マネージャーのトムが持っているのがオーダーメイドに使う生地

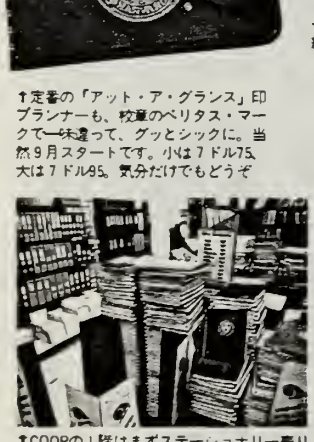
↓VERITASマークの入った椅子は卒業生が記念に買う。450ドル

質実剛健のスティショナリーグッズ



↑定番の「アット・ア・グランス」印プランナーも、校章のベリタス・マークで一味違って、グッとシックに。当然9月スタートです。小は7ドル75、大は7ドル95。気分だけでもどうぞ

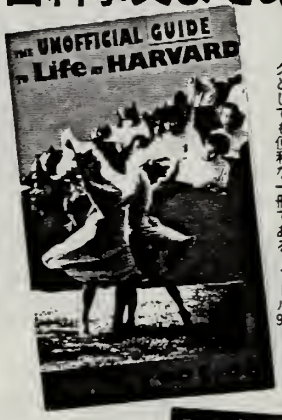
↑天井近く、奥の壁面に並ぶのは各ドミーの紋章。つまり学生寮ね。いずれも伝統的な格調高いモチーフである。学生どうしが張り合いたくなるのもよく判るね



↑COOPの1階はまずステーショナリー売り場。学生の本分ですからね。校章入りグッズはたくさんあれど、あまりに露骨じゃ気恥ずかしい、というのは日本人的発想だ。あちらは堂々と母校を主張することこそ粋なのだ

↑キャンパス内でハーバードグッズを身につけている学生は多かったが、これを付けて歩いている人は皆無であった。ピンバッジはスーベニールと見た。8ドル95

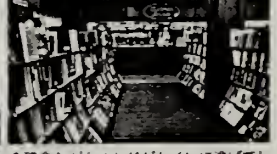
百科事典まであるブックストア



←フレッシュマンのためのこの本には、ハーバードでの楽しいキャンパスライフを送るためのイロハが載っている。ツアーガイドブックとしても便利な一冊である。7ドル95

→ハーバード大の出版部から出されている月刊誌にはイベント情報が満載の4ドル95

→自分の専攻学科以外の授業を自由に受けることのできるアメリカの大学では、課外授業のプログラムも必需品である



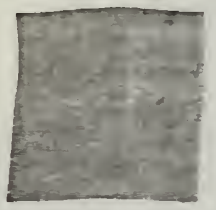
↑残念ながらオヤジがトイレに逃げてしまって撮影できなかったのだが、百科事典のコーナーの雰囲気が実にハーバードなのだ。Hキャップのオヤジもアイビー

→学者が来ても陣参して帰ってしまうほどに、ありとあらゆる学問の専門書の揃った教科書売り場。学生の数はここが一番多かった

ポケットチーフを正しく使えないと…。

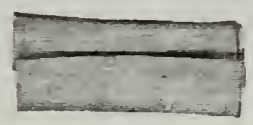
スーツの胸ポケットに入れていいものは、ひとりしかいない。ポケットチーフが、その人だ。この人がいるといないとでは、スーツの表情が大きくかわる。タイなんか曲がっていてもOKだが、誰もいない胸ポケットではKOされる。ここでは正しい運用法を伝授してしまう。これがないと、だって、アイビー特集ばくならないからね。

TVホールド



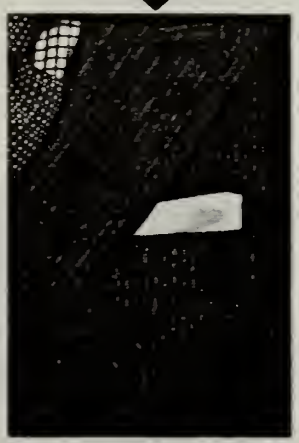
●ＴＶ映りのいいスタイルとして、キャスターとともに登場。当時の白黒テレビ、実は白よりも黄色がハッキリ見えた。だからレス・ポールJr.も黄色をＴＶカラーと呼ぶ

●ＴＶホールドもスリーピークスと同じように４つにたたむ。気をつけるべきことは、まったく同じ。最もポピュラーな使い方だけに、作業のキメ細かさが差をつけるのだ



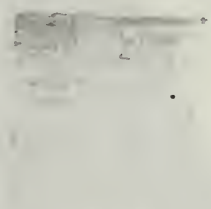
●ポケットの幅に合わせて折る。この面はウラ側になるので細かいことは気にせずに。ポケットチーフの使い方って難しそうだけど、実際にやってみると意外と易しいのだ

●ポケットの深さに合わせてタテ方向に折る。ここもウラ面になるパートだから、見せる部分をいかに美しく仕上げるかだけに集中しよう。これでアナタもＴＶキャスター

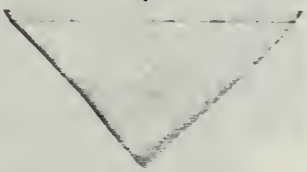


●ポケットチーフの最も一般的な飾り方だ。特にオジサン系に好まれる。ポケットハンカチーフとも呼ばれるからは、飾るだけではなく眼鏡を拭いたりにも使う、いい男は

スリーピークス



●スリーピークスは格式の高いスタイルだが、それだけにキザに見えなくもない。折り目の数も多く、陰影が強く出るので、まずは白無地からスタート。変化は織り柄で



●２つに折って正三角形を作る。ここでも角をキレイに作ることが、フィニッシュを美しくするためのコツ。堅苦しそうだが、いざ自分でやってみれば簡単なことが判る

●正三角形をさらに２つに折る。この時に２つの山を作る。これでポケットに突っ込んでしまえばツインピークス。ポイントは、山のずらしかげん。少しコツが必要です

●さらに折って３つの山を作ればでき上がり。山の間隔を平均にすること。ポケットに入れた時にバランスが同じにならないと見映えが悪くなってしまうことに注意しよう

●言葉そのもの、３つ山型。ちなみにツインピークスはデビッド・リンチのカルトＴＶ。今夜は決めてやる！　のアナタに最適の方法。ＮＧのときは、これで涙を拭くさ

トライアングラー

●トライアングラーは柄の出方が決め手となる。チーフ選びも全体の柄だけでなく、ふちの無地部分の分量が大切に。浅めに挿して柄をちょっとだけ見せる裏ワザもあり

●まずは、４つにたたむ。ここで、角をきっちりと合わせないとキレイに仕上がらないから注意すべし。シンプルなだけに、細かい気づかいが必要だ。アイビーしてるな

●たたんだ状態のものを、プリトーを巻くように巻く。気をつけなければならないことは、三角形の先の大きさをポケットに合わせること。えりの大きさにも注意したい

●プリトー状になったものを、今度はポケットの深さに合わせて２つ折りにする。ここでも見せる部分の山の角を美しく保つことが大切だ。ポケットに入れればおしまい

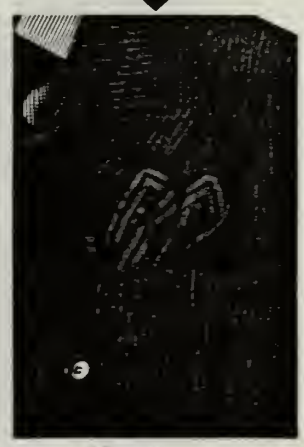
●トライアングルというグループがいた。３人組だったと思う。理科系のアイビーリーガーズ向きか。この三角型の面積をもっと小さくしたのがケネディ・フォールドだ

クラッシュドスタイル

●全体に均一な小紋を散らせた基本パターンのチーフは、たたみ方を選ばず便利。特にクラッシュドスタイルは柔らかさがポイントなので、強い柄を使うにはテクがいる

●最初は中心をつまみ、埃を払うようにして形を作る。この時には注意すべきこともないし、スカーフに多少のシワがあっても大丈夫。だが、アイビー的にはシワはダメ

●次にまん中をねじり、ポケットに突っ込めばでき上り。この方法はたたみ方というよりねじり方といった方が正しいのかも。モノごと何でも簡単な方が、より難かしい



●何となく無造作に突っ込みましたっていう感じだが、その通りである。この何気なさっていうのがアイビー＝バンカラの心。決まりすぎるカッコ悪さを知っているよね

REPUBLIC OF IVY

ジャケット4万6000円、パンツ1万800円（共にA）、ボタンダウンシャツ1万2000円B、タイ5800円、チーフ6800円（共にG）、Uチップシューズ2万8000円D

タキシード13万円、ウイングカラーシャツ1万5800円、カフス1500円、チーフ2600円、カマーセット1万6000円（以上全てC）、ウイングチップシューズ2万9800円D

スーツ7万5000円E、ワイドスプレッドシャツ1万3000円、チーフ2600円、タイ9500円（共にC）、ストレートチップシューズ2万8000円D

text/T.Goto 後藤健夫 T.Shimizu 清水貴和 photo/T.Narooka 奈良岡 忠 styling/K.Kuroiwa 黒岩公晴

ショップリストは39ページ

マフラーを正しく巻けないと…。

寒くなってくると恋しくなるのがオニオングラタンスープとマフラー。前者はダイナマイトクッキングに任せるとして、後者は種類も豊富な男の服飾関係では最も派手なアイテムだ。昔はシックスフッターなんていう長物もあったけど、最近は見かけない。マフラーにも流行ってあるのかしらん。ここでは正しい運用法を伝授してしまう。これがないと、だって、アイビー特集ぼくならないからね。

ハイラップ

●防寒、保温に最も効果のあるマフラーとしての機能性のみを考えた結び方。首をつつみ込むだけのいちばん簡単な方法。左右のバランスは首の太さに合わせてご自由に

●まず、首の長さに合わせてマフラーの幅を決めつつ、見てのとおりに2重に巻くだけ。次の行程のことを考えてあまり締め過ぎないことが、キレイに結ぶコツなのだ

●2重に巻いたマフラーの間に片方を通し、下方向に引く。そして先を上着の中に入れてしまえば寒さ知らずの巻き方が完成だ。しっかりと結んだ方がより効果的である

●襟元だけでなくえり回り全体から、体温は逃げていく。そこを押さえれば、体感温度は相当上昇する。つまり質実剛健なマフラー術だ。首の太いあなたはムダ汗に注意

クラブノット

●いちばん手のかかる結び方だがトラッドなスタイルで防寒性に優れている。この方法ではマフラーの先は、えりの中に入れてしまうので、バランスに気を使う必要なし

●左右どちらでもよいのだが、片方を表側が上になるように巻き込む。ここでしっかりと首をつつまないと、この巻き方の防寒効果が無くなってしまうから気をつけよう

●1回巻き込んだところで、次に固結びの要領で結ぶ。結んだ先をここで上の方向に引っぱり、結び目の大きさを決める。あとは、先を上着の中に入れればでき上がり

●屋内説幅が原則の男子、マフラーも外すしきたり。でもこれ、すぐ外せない結び方なのは母校フットボール部の観戦用ね。だから風が強くても、Vゾーンは安泰なのだ

フレンチノット

●この巻き方は、首をつつんで寒さをしのぐというよりも、マフラーのデザインや色を見せる方法。ここで大切なことは、マフラーを見せるということ。バランスに注意

●まず、長い方を短い側の下から巻きつける。この時に柄をキレイに見せるように、丁寧にすること。くどいようだが、この巻き方はマフラーを見せることに集中すべし

●今度は、短い方を巻きつける。そして上方向に引っぱる。ここで形を整えつつ締め上げればでき上がり。結び目の大きさは、柄やデザインに合わせて臨機応変にしよう

●パリっ子は伊達者だ。冬のパリは風弱くとも底冷えるのに、ガチガチの防寒スタイルはしたくない。だからコレ。でもえり元からの放熱は優しく防ぐ。オ・レもうまい

エスプリノット

●スカーフのラフな巻き方をちょいと厚めのマフラーに流用。名前のとおりパリジャンたちが好むスタイルである。左右のバランスは、だいたい20cmぐらい差をつける

●次に長い方を短い方の下から、ネクタイを結ぶように巻きつける。この時に注意しなくてはいけないことは、マフラーには芯がないのでソフトなタッチで巻くことだ

●結んだところで、短い方を横から巻きこむようにする。実質的な作業はここで終り。あとは、好みに合わせて結びめの大きさを決める。あまり強く結びすぎないこと

●これが似合うあなたなら、紙巻タバコよりもパイプをおすすめしたい。できればパリ左岸で、スケッチなどしながら。結んであるけど柔らかくほどけるのが上級者風ね

REPUBLIC OF IVY

ニット1万7800円Ⓗ、ボタンダウンシャツ8800円Ⓖ、パンツ1万9000円Ⓔ、マフラー6800円Ⓖ、サドルシューズ2万円Ⓓ

ハーフコート9800円Ⓔ、タートルニット1万8000円Ⓒ、パンツ8800円、マフラー3800円(共にⒺ)、デザートブーツ1万1000円Ⓓ

ダッフルコート2万4800円、ポロシャツ9800円（共にⒼ)、ニットベスト1万5000円Ⓔ、パンツ9800円Ⓗ、マフラー7800円Ⓔ、ヴァンプシューズ1万8000円Ⓓ

Ⓐチューブ☎03・3498・5178
Ⓑダニエル・クレミュ☎03・3486・7231
ⒸビームスF☎03・3470・3946
Ⓓリーガルコーポレーション☎03・3266・9191
Ⓔポールスミス／ジョイックスコーポレーション
☎03・3486・4687
Ⓕ原宿キャシディー☎03・3406・3070
Ⓖビームス原宿店☎03・3470・3947
Ⓗネペンテス☎03・3400・7227

JFKを巡る小さな冒険。

第35代、歴代で最も若い合衆国大統領、ジョン・フィッツジェラルド・ケネディ。ボストンで生まれ、ハーバード大学から海軍へ、そして美人ジャーナリストと結婚……アメリカ的だ！ だからアメリカ的なレガシィグランドワゴンを駆って冒険のドライブに出かける。JFKを巡れば、アイビーの答えが見つかるかもしれないから。

text/G.Okedo 桶戸豪太 photo/M.Kono 加納 満

1日目

ケープコッドのJFKは、いつも笑っていた…。

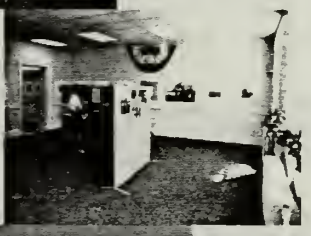
「アーノルド・シュワルツェネッガーの力こぶに似ている」と小説家が表現したケープコッドは東海岸で最も高級な避暑地であり、美しい自然に恵まれ、JFKの愛した土地としても知られている。決して健康ではなかった幼少期、ハイアニスにあるケネディ家のサマーホームをベースにヨットやタッチ・フットボールに汗を流した。特にケープコッド・ウォーターは数多くのことを教えた。それは男が覚えておかなくてはいけない大切な生きる術でもあった。

ハイアニスの『ジョン・F・ケネディ・ミュージアム』は3年前にオープン。最初の数ヵ月で4万の入館者を数えたことからも、JFKがカリスマ的な存在だったかが理解できる。いままで見たことのないスナップショットにも驚くが、10分ほどの映画のナレーションをウォルター・クロンカイトが担当していることが嬉しい。アメリカを代表するアンカーマンであり「大統領は信用できないが、クロンカイトは信用できる」とまでいわれている彼がナレーターを快諾したということは、そう、JFKは信じられる男だった。だから、いい笑顔を残している……。

↑冒険隊の足となったレガシィアウトバックはケープコッドと相性がピタリ

←ミュージアムの前にあったJFK。このヘアスタイルこそがケネディ・カットと呼ばれ、みゆき族のトレードマークともなった。バイタリスとヘアドライヤーは日本のアイビー史を語るときには欠かせない。別名・七三

←毎日、営業していますの証拠写真。午後4時休館というのがハイアニスらしいか。それにしても冬場のオフシーズンも民衆は集まるのか…… →学園祭における写真部のブースみたいだ。アイポイントが低いことが高得点



←もしかするとJFKはホワイトハウスよりもハイアニスの家を愛したかもしれない。それが、この中で確認できる。入館料3ドル ●397 Main St. Hyannis MAS ☎508・775・2201

↓子供好きのJFKを象徴する一葉。本来はエアバッグとして子供をステアリングとの間に座らせることは真似してはいかんが、許していただく

REPUBLIC OF IVY

➡トミー・フィルフィガーのADではない。ケネディ家勢揃いの図だ。ローズ夫人の左がRFK、ロバート・F・ケネディ。エドワードは、まだ生まれていない ↓ボールを手にするのがエドワード。Hとはハーバード大学であろう。みんな頭がよろしかったようだぞ

↑若き日のJFKが着ているTシャツはロングスリーブだ。日焼けしている様がモノクロからもわかる

↓出ました、ジャッキーだ。花柄のワンピースなんか着ちゃってJFKも嬉しそうだ。ボロシャツのボタンは全部留めるかはずすしかないという教えを守るあたり、さすがアイビーリーガーズ！ もちろんパンツの上に出す

↑ケネディ家のサマーホームでの集合写真。遠くにヨットの群が見える。このままラルフ・ローレンのブローシャーに使えそうではないか！ ↓ケネディ家の女性たち。みんなJFKに似ている。アイルランドを祖国とすることが額に出てる

↑とにかく大きい。サマーホームというよりもホテルと形容したほうが気分だ。ケープコッダー様式という日本のカワラみたいな板張り方式ではなく、ごく普通のニューイングランド様式、そこが豪邸には似合うのかしらん

↑テッドである。つまりエドワード・ケネディ上院議員。きっと大統領選に出てくる……と思われていたが火遊びは政治家の命取りとなる。しかし、この写真は裏焼きだ。理由は、わかる？

➡これがアメリカだ！ 自信と誇りを持って前に進む、アメリカ国民がJFKに期待したものの大きさが理解できる。前号でも触れたが、アメリカの子供はロングパンツをはくのだよ ↓ベスト・アメリカン・カップル……愛というものは偉大である

↑JFKとジャッキー、ロバートがビクトラ号で大西洋に遊ぶ報告写真。1959年というクレジットが記されていた。ちなみにこのヨットはボストンで見ることができる。それについては3日目を参照のこと。家族と海を愛す男は信用ができると誰かがいっていた（実は私ですけど）

←レガシィアウトバックは4WDの旦つ街＝ハイアニスでも注目を集めた。品と美しさの地域には当然かも……

↑裸足でローファー、ビーチでは当たり前 アイビー的な一着で、ポーズも決ま

↑JFKの写真には子供といっしょのときに撮影されたものが多い。戦略的などと考えることはいけない。JFKが最も大切にしていたものが家族だった証にほかならないから
←もちろんジャッキーも大切な宝物で、ダラスの日の彼女はアメリカ女

ケネディ家のサマーハウスたち

2日目

ツアーバスのコースにもなっているケネディ家のサマーハウス。しかし、敷地一帯はプライベート・プロパティとなっていて、その中には立ち入ることはできないし、近づくことさえ難しい。しかし、取材班はそのケネディ家のサマーハウスに入ることに成功した。これは、日本の雑誌としては初の大スクープだ（たぶん）。

敷地には、JFKをはじめとするケネディ一族のサマーハウス（どれも、別荘とは思えない大きさの家）が建ち並んでいる。その家は、ケネディ一族のいない時でも、大勢のハウスキーパーたちがいつ誰が来ても大丈夫なように完璧な状態に保っているのだ。

アメリカ人の憧れの避暑地であることをこの家が教えてくれる。

↑ローズ・ケネディの家はこの敷地の中でも海を一望できる一番のロケーションにあった。ちなみにJFKの家は最も奥にあり、直に見ることはできなかった

↖ロバート・ケネディの家。他と比べるとちょっと小ぢんまりした感じがする

←JFKをはじめケネディ一族はみな幼年期にここでタッチフットを楽しんだ

プリーズ・ミスター・ポストマン

ケネディ家が私書箱を持つポストオフィスとして、観光名所のひとつになっているのがここ。このエリアのほとんどの家がサマーハウスのため、つい最近まで郵便は配達されることはなく、私書箱に溜められたものを本人が取りに行くのが当り前だった。

そのためJFKも自ら郵便物を取りに行っていたという。これはVIPとしては異例のこと。JFKがこの街でリラックスできたことをここが語っている。

現在でもケネディ一族がこの街を訪れるとここには必ず顔を出すとのこと。

↑街全体の美観を損ねないように、ポストオフィスもニューイングランドスタイルの建築様式をとっているのだ

➡当然JFKともなればメモリアルスタンプも数多く出されている。こちらは月面着陸と一緒になった最もJFKを象徴するセットとなっているものだ

"I always go to Hyannisport to be revived, to know again the power of the sea and the master who rules over it and all of us."

John F. Kennedy

JFKの愛したシーフード・レストラン

ホワイトハウスのダイニングテーブルに並ぶ食材は、すべてFBIの厳しいチェックをパスしたものでなければならない。JFKが大統領を勤めていた時に唯一FBIからのお墨付をもらっていたシーフードの納入業者であったのが、バクスターズ・ボートハウスだ。現在では、レストランに様変りしてしまっているが、以前はフィッシュマーケットであった。その当時は、大統領から直々の注文を受け、ホワイトハウスに航空便で新鮮なシーフードを届けていた。また、ホワイトハウスのシェフにシーフードチャウダーのレシピを教えていたことでも有名である。

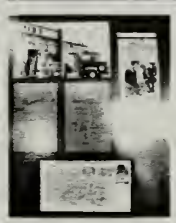
JFKが暗殺された当日にロブスターが1ケースオーダーされていた。翌日、ジャクリーン・ケネディが注文の品を取りに来て、曇り空をボーと眺めていたことをこの店のオーナーは、いまだに鮮明に覚えているという。

この店では、現在でもJFKが好んだものと同じシーフードチャウダーを味わえるのだ。

↑ボブはここのオーナーでこのレストランの2代目である。彼の母親のシーフードチャウダーのレシピがホワイトハウスにまで伝ったのだ ↓1995年創業の歴史を語る品々たち

↑マイク・バクスターはハイアニスの街でもJFKのことをよく知る数少ない生証人のひとり。彼の漁ってきたシーフードが、ホワイトハウスの食卓を飾っていたのである。

●Pleasent St.Hyannis,MA ☎508・775・4490

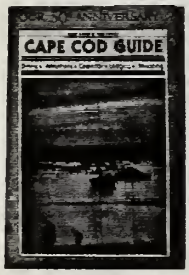


↑ウエイティングバーからの眺めも港を望むなかなかのものだ

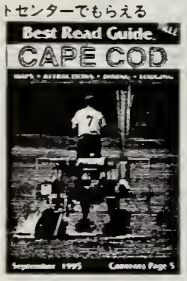
←JFK御用達であったことを証明する手書きのオーダーシート。今ではこの店の宝物

ケープコッドを知りたければ

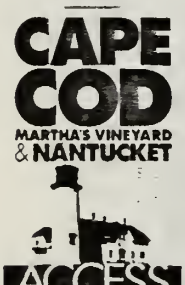
↑タダでもらえるハイアニスのツアーガイドブック。ホテル、レストランなど詳しく載っていてとても便利



↑観光案内よりもディスカウントクーポンの方が多いアメリカにありがちなガイドブック。これもツーリストセンターでもらえる



↑エリアや目的ごとに分けられたこの本は、ケープコッドでの楽しみ方を中心にしたもの。これもタダ



↑アメリカ人なら誰もが憧れるリゾートのケープコッドなら「ACCESS」も出ているのだ。18ドル

↑リゾート地に月刊誌まであるのに感心。ニューヨークマガジンのケープコッド版は、3ドル75

REPUBLIC OF IVY

大統領のメンズ・ショップ

→ケープコッドでいちばんの老舗のメンズショップの創業は1920年。現在ではこの街だけで8軒の支店がある
←シューズコーナーには、コール・ハーン、セバゴ、クラークスなどメジャーなブランドはひと通り揃っている

↑コンサバティブなスタイルに人気があるのは、東海岸のショップならではだ
↓当然、ラルフ・ローレンの人気は高い

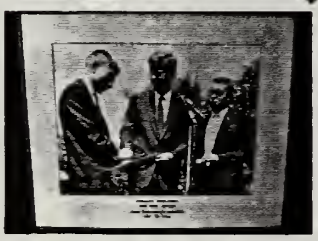
↑人気ブランドのノーチカのコーナーもしっかりと設けてある●408Main St.,Hyannis,MA ☎508・775・2400

「ジョン・F・ケネディ・ミュージアム」の真向かいになんの変哲もない一軒のメンズショップがある。ところが、ここはケネディ家の人々がサマーハウスを訪れた時に利用するメンズショップ。JFKも大統領就任前は、よくここでショッピングを楽しんだという。就任後も執事の人が代わりによく来ていた。この店のオーナー一家とケネディ家とは、今でも親しい付き合いがある。最近でも、JFK・Jr.が自らショッピングに来るという。

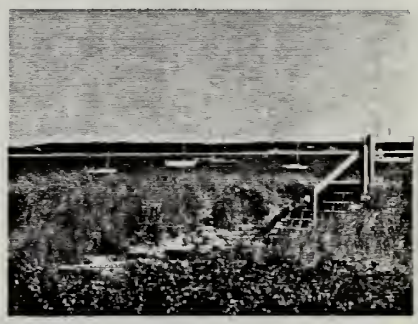
ケネディ家がこの店をよく利用する理由は、家族ぐるみの付き合いもあるが、本当はこの店のサービスのきめ細かさにあるのだ。たとえば一度来たお客さんのデータはコンピュータに保存される。その後は、電話一本でオーダーメイドのスーツまで注文できてしまうサービスは、さすが大統領のメンズショップだ。

この店に入ってみれば、なぜケネディ家がここを利用しているかが、スタッフのフレンドリーさから理解できる。

↘クジラとロブスターをモチーフにしたタイは、オリジナルで各15ドル ↙ケープコッド・タータンの香り袋は10ドルなり



→ケネディ一族とは、三代にわたって公私共につき合いのあるハワード・ベンはこの副社長である
←JFKと一緒に写っているのは、若かりし時のハワード副社長。1960年に撮影されたもの



↑沖に停泊している青いヨットがケネディ家が所有している「マヤ」である。ケネディ家の子供たちはこの船で男を学ぶ

ヨットが人生を教える

JFKがこの地で好んだことのひとつに、セーリングがある。それは、ケープコッドでの家族との写真などで、ヨットに乗ったものが多いことからも判る。

普段は多くの人に囲まれている大統領も、船の上なら家族とのプライベートな時間をゆっくりと過ごすことができたからだろう。また、広がる海原を見つめながら仕事のことを忘れることのできる数少ない空間のひとつであったのだ。ヨットとJFKは、切り離せない関係なのだ。

スーパーショットを、もう一球!!

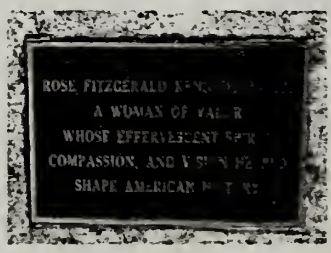
ボストン近郊の名士たちがメンバーとして名を連ねるVIP専用ゴルフクラブの「ハイアニスポートクラブ」のメンバーにJFKの名前もあった。このコースでJFKが、誰と、どんな話をしながらゴルフをしていたか非常に気になるところだ。きっと、ここでは政治の話など一切なしに、本当にゴルフを楽しんだのだろう。また、彼がどのくらいのスコアで廻っていたかは、ゴルファーなら是非とも知りたいことだ。

↑素人目に見ても風格を感じるゴルフコースだ。夏場は東部の名士たちのコミュニケーションの場となっている

↑とてもVIP専用のメンバー制ゴルフクラブに、見えない質素な看板に驚かされた

母の庭

ケネディ家の敷地のはずれの道路の角に、気を付けないと見逃してしまいそうな薔薇の庭が、ローズ・ケネディのローズガーデンである。記念碑がなければ絶対に地元の人間しか知らない場所だ。この庭は、彼女がまだ生きていたころのものをそのまま保存してある。ここが、敷地の境界線にもなっている。ケネディ家をひと目でも見たいという人は、ここでポストオフィスを目印にすると簡単に見つけることができる。



→ローズ・ケネディの福祉活動に対する功績を称えて建てられた記念碑
←当時のままに保存するために、しっかりと手入れがされているのだ

大統領のＪＦＫは、やっぱり笑っていた…。

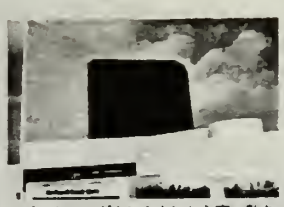
3日目

ケネディ・イヤーズ、それはアメリカの光と影の時代でもあった。キューバ危機、公民権運動、東南アジアでの紛争など、強いアメリカは苦悩・疲弊していたのかもしれない。人類最初のアストロノーツの栄冠を旧・ソ連に持っていかれた大統領は、しかし、間違いなく1960年代中には月に、もちろんアメリカ国民の代表を立たせることを公約する。しかし、その快挙を大統領は見ることはできなかった……。

ハイアニスはＪＦＫのプライベート・タイムを中心としているが、ローガン国際空港の南にボストン湾を挟んで位置する「ジョン・Ｆ・ケネディ・ライブラリー&ミュージアム」は、大統領時代の記録が中心。つまり、ケネディ・イヤーズそのものをスクラップしている。1979年に開館、今年になって展示品やショーイングが大幅にリニューアルされた。25にわかれたブースには大統領選挙から（伝説となった）TV討論会も見ることができる）3年間のホワイトハウスでの出来事（執務室まで見事に再現）までが展開する。

シリアスな場面が多かったＪＦＫ、だからこそ笑顔が印象的だ。ここに来れば、それに接することができる……。

↓ミュージアムの外には愛艇のビクトラ号が置かれている。もう、誰も乗ることはない。泣けるな

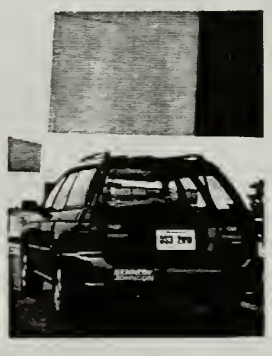


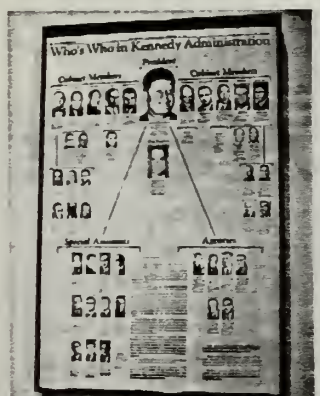
↑ボストンのダウンタウンから南へ数キロのところでＪＦＫは笑っている。入館料は2ドル　●Columbia Point Boston ☎617・929・4500 ↓ここが入口。スタッフは清らかで知的だった。会社みたいね

→アメリカの美術館で用いられる入館者の証。お金を払うとステッカーをいただき目立つところにペタリする。お土産と記念にもなるな

text/G.Okeda 桶戸豪太 photo/S.Kawasaki 川崎真嗣

↑ＪＦＫがホワイトハウスで使っていたデスク。カーテンが開くとＴＶカメラが出る演出だ





↑ＪＦＫのオールスターズ。弟のロバートは司法長官であった。アイビーリーガーズが周囲を固めるのはいつの時代も同じ。それがアメリカ

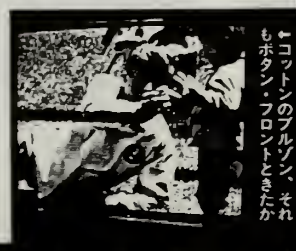
↑大統領時代に各国から贈られた美術工芸品なども陳列されている。日本からの「いいでしょ、これ」もあった。ＪＦＫは来日しなかったけど

HIS PRIVATE DAYS

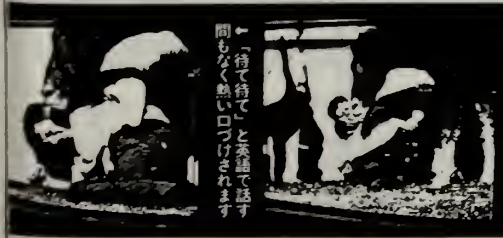
←泳ぐＪＦＫ　コーディネイションは不明だが、海パンか

←キャロラインを抱く　白いコットンハンツが眩しすぎる

←グレーのスーツにサンクラスに銀　アイビー的なシーン



←コットンのブルゾン、それもボタン・フロントときたか



←「待て待て」と英語で話す間もなく動いロづけされます

←すると馬は急接近　ポケットから出るのはニンジンか？

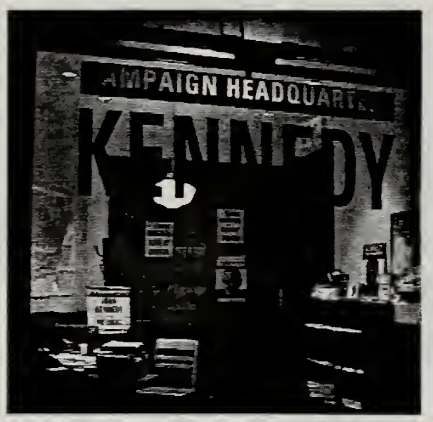
←馬は最もアイビー的なヘット　スウェットシャツも気分

←写真きはアイビーだ　詳しくはP58へ急げ　電話中だね

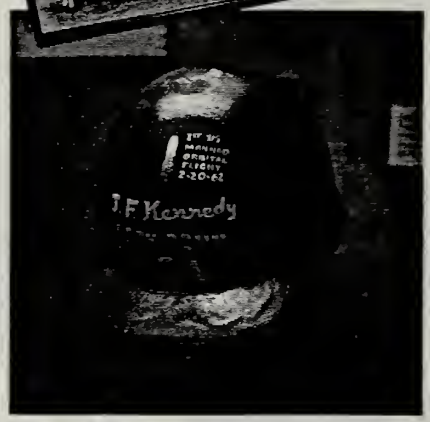
大統領のＪＦＫは、生粋のアイビーリーガーなのに公務でＢＤシャツを着ていない。しかし、館内に設置されたモニターに映るプライベート・ショットは、自由と規律を両立させたアイビー的なスタイルで満ちていた。

REPUBLIC OF IVY

↑苦悩する兄弟。ホワイトハウスのＪＦＫとＲＦＫは数多くの功績を残したが、こういう場面も少なくなかった。壁一面使用

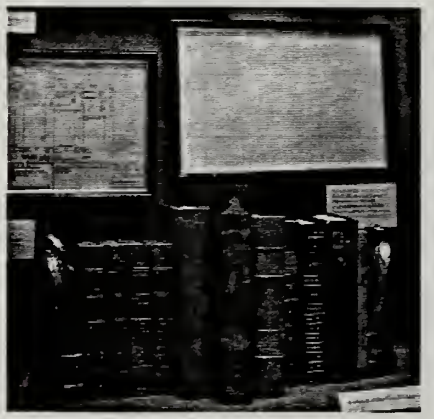


↑大統領選挙のときの選挙本部の様子。副大統領候補はテキサス出身のＬ・Ｂ・ジョンソン。ピンが甘いのは暗かったからだ



↑1962年２月20日、ジョン・グレン中佐がアメリカで初めての宇宙飛行に成功した。当時の打ち上げ基地はケープカナベラル

↑スローシャッターなのでブレた。大統領就任時の雑誌のカバーを飾ったＪＦＫ、やっぱり「ライフ」が最もアイビー的だな

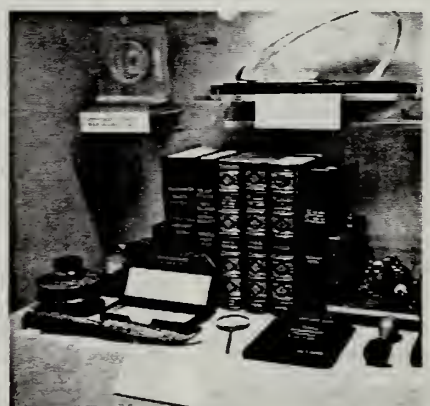


↑ＪＦＫの愛蔵書だ。虫眼鏡を使って調べていただこう。後ろにもおなじみの写真が並ぶが露出不足でピンが来ていない……

↑展示の最初は1960年代の電化製品であった。あのときアメリカでは……をコンセプトにしている。ＴＶの画面に留意すべし

↑ケネディ家の男子はフットボール選手だったことを示すパネル　➡それと同時にスポーツが大好きだった。野球選手の左端はテッド・ウイリアムズ。アイビーだ

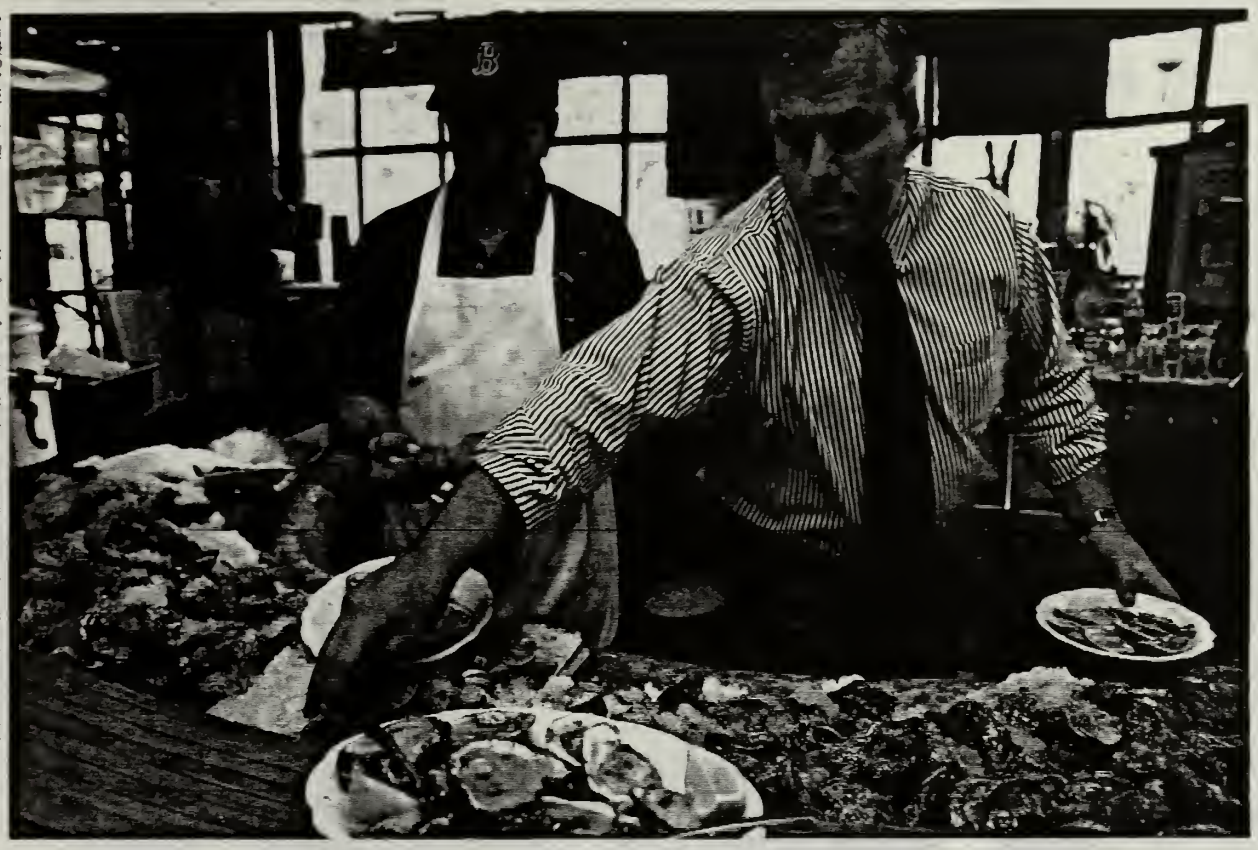
↑ＪＦＫのキャンペーンにはカンカン帽も使われた。前はそのレプリカが売られていたのに、今回は姿なし。アイビーなのに



↑ここまでブレるとボツにしたくなるが、大統領時代の愛用品なので勇気を持って掲載する。メンズショップの小道具みたい

日曜の午後1時、JFKはいつもの席で笑っていた…。

4日目

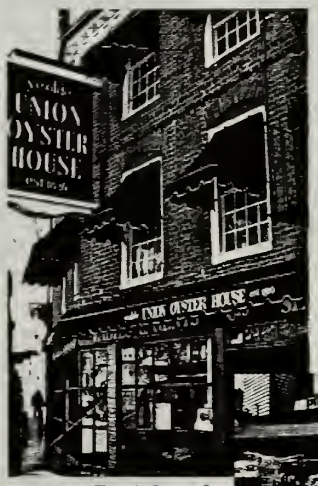


↑自慢のマホガニー製オイスター・バー。トップは直したが土台は創業当時のままだ。毎朝の入荷後は、戦地の忙しさになる

アメリカの古い街の多くがそうであるように、ボストンも昔の街並みを残しながらビジネス・ディストリクトを発展させてきた。だから高層ビルや巨大なモールから少し走ると、突然露天の市場があったりする。そんな街には必ず古いレストランがあって、決まって古い人がいて、風化していない昔話をいつも聞かせてくれる。

この国で最古のレストラン、とうたう「ユニオン・オイスター・ハウス」は、1826年から新鮮なシーフードを出している。上院議員時代のJFKも、日曜日の昼過ぎには必ず一人で訪れていた。日曜版の分厚い新聞を5紙、ロブスター・シチューを食べながらゆっくりと読み、コーヒーで仕上げて夕方家路に。すでに多忙だった彼には、ちょっぴり贅沢で気楽な、公務を離れた日曜の午後の日課だった。

そんなことを懐かしそうに話してくれた、85歳のエミリーおばあちゃん。オフのJFKを知るのも、この店ではもう彼女一人になった。



←繁華街ではないがツーリストにも人気だ。足を伸ばしてみる価値あり。
41 Union st., Boston
☎617・227・2750

→一筋裏に回ればご覧の市場。海産物だけでなく野菜や果物も豊富だ。写真の右上に店のサインが見えるけど、わかるかな？

→テニスは毎朝ロブスターを200ポンド運んでくる。今朝の帳簿は約3ポンド

↑マネージャーのジムも昔はオイスター・バーにいた。腕前は衰えず、ナイフさばきの速いこと
→いずれも6個で、オイスター7ドル25。大ハマグリのチェリーストーンと小ハマグリのリトルネックはいずれも6ドル95。お値段が同じなのは　リ

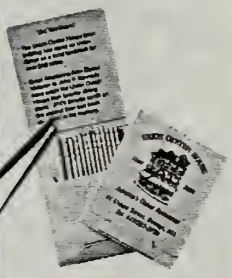
REPUBLIC OF IVY

text/T. Ohmori 大森遼生 photo/M. Kano 加納 篤

➡店内にはみやげものコーナーあり。しゃれた色使いの16ドル95

➡↓おみやげTも硬軟取り混ぜて用意。じんわり笑えます

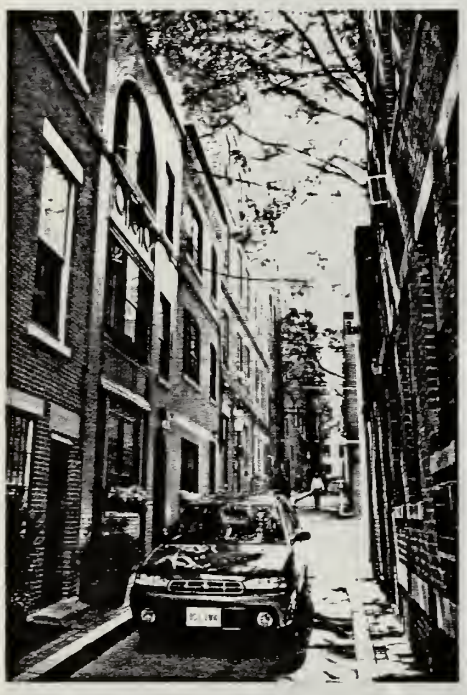
↓最古のレストランの創業時から、つまり全米最古のつまようじだ



↑ムードの違ういくつかの部屋に分かれた古い作りに、歴史を感じる。カウンターもあり

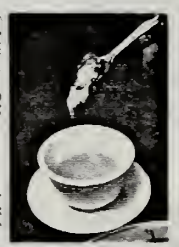
↑今でも週2日は店に出る、35年目の元気なエミリー。あの頃は確か3ドル50だったロブスター・シチューも、今は3倍くらいになったわねね、と。もの静かに微笑む青年だったJFKのお気に入り、いつもの18番テーブルで

➡キャッシャーのベテラン2人。アットホームがうれしい←代々ファミリー経営で、今はミラノ裏。右が母親、左は息子のジョセフ。中央はベンジャミン・フランクリンに扮するこの街の名物男ディック



正調、ロブスターの正しい食べ方。

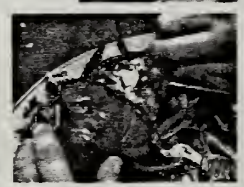
①ロブスターは豪快に食すのが美味、とジム。正しい食べ散らかし方はまずエプロンで身を守ること



⑤定番はこのバターソースだが、伊勢エビの国の我々にはちときつい。ソイ・ソースなど所望しよう

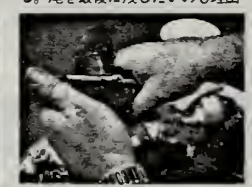
⑨じゃーん、見よこの美しい姿。この尾の身は切ったりせず、当然バクリといっちゃうのが気分です

②はさみ、尾、脚の3パート、ジムはまず食べやすいはさみを攻める。尾を最後に残したいのも理由



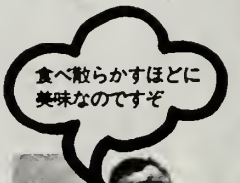
⑥脚は間接でねじり取り、チュッと吸い込む。残す人もいるが、意外に甘みが強くておいしい部分だ

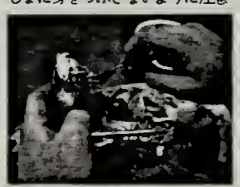
⑩忘れちゃいけないミソは、ロブスターにもちゃんとある。アメリカ人には食べない人も多いけどね



③外したはさみの小爪を抜き、大爪をクラッカーで割る。殻といっしょに身をつぶさないように注意

⑦主役の尾は胸から引き抜き、ダイナミックに食したい。まず全体を背中側に曲げる。つまり逆エビ





④割った爪には身がぎっしり。小さなフォークを刺してするりと抜く。手のベタベタには構わないで

⑧次に真ん中を左右にひねると、ごそりと身が抜けるはず。逆エビを忘れるとここで身が千切れるぞ

⑪頼めば切ってもくれるけど、自分の手で食べるのがなおウマイ！とジム。ミソも卵も残さないのだ

ニューイングランド流ライフスタイルの提案。

ニューイングランド地方と呼ばれている地域には、アメリカでもかなり古いといわれている建物が数多く残っている。ここボストンも例外ではなく、その古い街並みを見るために世界中から多くの観光客が訪れる。

この古風な街にフィットするツーリングワゴンが、「グランドワゴン・スタイル」という新しいコンセプトのもとに作られたスバル・レガシィグランドワゴン。日本にツーリングワゴンという新しいカテゴリーを作り、常に市場をリードし続けてきたレガシィがさらにソフィスティケートされてリニューアルした。

定番のツーリングワゴンから生まれた新定番が「レガシィグランドワゴン」なのである。

スバル レガシィグランドワゴン　東京地区車輌本体価格269万7000円　富士重工業株 0120-052215

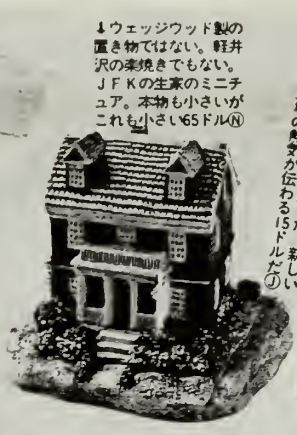
そして、JFKのミュージアム・グッズに、私たちも笑っている…。

最終日

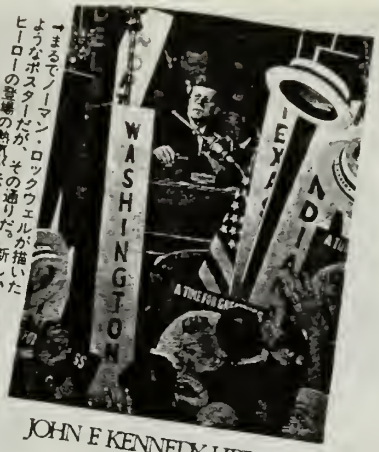
『石原裕次郎記念館』であれもこれもと買い漁るオバサマを、私は笑えない。竹下通りでアイドルの生写真に群がる若人（あきらではない）を、私は怒れない。その理由は、この見開きに展開される様を見ていただきたい。これは、JFKに恋した男のラブレターだったりもする。

text/G Okedo 桶戸豪太
photo/M.Kono 加納 満 S.Kowasaki 川崎真嗣

↖とってもリゾートっぽい布製コースター・セット。普通のお土産屋さんだったら買わないのになあと思う。上の行のロゴがあるばっかりに……の10ドル24であった(H)
↗ボストン美術館には浮世絵のコレクションが多い。版画好きな市民性はTシャツにも。13ドル60(H)



↓ウェッジウッド製の置き物ではない。軽井沢の楽焼きでもない。JFKの生家のミニチュア。本物も小さいがこれも小さい65ドル(N)



→まるでノーマン・ロックウェルが描いたようなポスターだが、その通りだ。新しいヒーローの登場の熱気が伝わる15ドルだ(J)

JOHN F KENNEDY LIBRARY

REPUBLIC OF IVY

↖さて問題。このポスターにはJFKが何人いるでしょうか？ 正解は時間もないことなので……。有名な「国に何を求めるかではなく、国のために何ができるかが大切」の言葉もある15ドル(J) ←小さくて見えないが歴代大統領ジグソーパズル、秋の夜長に15ドル(H)

↑トートバッグときたか。いかにも東部のリゾート感覚だ。来年の夏はこいつで湘南に行けば、ウフフ、アイビーはもてる12ドル60(H)

↑「ピープル」の別冊的存在の「イン・スタイル」でもジャッキー特集。アメリカで最も美しいファーストレディだった。2ドル95(J)

↑JFKはなぜかモノクロが似合う。だからポストカードのセットもある。誰に送るのか迷うけどの10ドル95(J)

↑ジャッキーが亡くなると「ライフ」も特集号を出す。やっぱりモノクロだった。台詞も泣かせる2ドル95(J)

→ここでローズ・ケネディはポークチョップなんかを調理したのだろうか。左のオーブンに注目してほしいな
↓ピアノは結婚祝いにローズ夫人が贈られた

↑テディベアと鉄道模型。いかにもアイビー的な子供部屋。貴出オーバーだ

↑ライティングビューローの置かれているスタディルーム。写真は誰なのか

1917年5月19日に生まれて…。

←古い家との相性も見事にハマるレガシィアウトバック●83 Beals ST. Brookline MA ☎617・566・7937

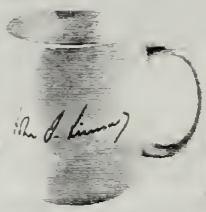
資家ではあるが威厳がある家だった。ボストン郊外のブルックリンにあるJFKの生家は「ジョン・F・ケネディ・ナショナル・ヒストリック・サイト」として一般公開されている。ツアーは1日に数回。ガイドに連れられて2階からスタートだ。英国式に2階はファースト・フロアと表現していた。ダイニング・ルームではJFKの母親＝ローズ・ケネディのテープが流れる。彼女もジャクリーンより少し早く、JFKの元へと旅立った。思い出を語るローズの声は力強い。3階はマスター・ベッドルーム（JFKはここで生まれた）とナースリー（育児室）に関心が集まる。1921年にケネディ家はここを引っ越すのだが、ここでの4年間に男が覚えなくてはならないこと例えば歩き話し笑い祈ることを学んだ。「三つ子の魂百まで」はアメリカにもあると、ここに来れば納得できる。

→ゲストルームはB&Bの部屋みたい。花柄のイスがニューイングランドしてる
←ここでJFKは生まれたのかと思うと身体が震える

←ガイドさんがツアー前に生いたちなんかを解説。ジッちゃんも真剣な表情で首を振るの

KENNEDY JOHNSON

➡バンパーステッカーとバッジ類もリプロダクトで大量販売中。オリジナルは何ドルかは知らん。ステッカーもバッジも35セント㋙



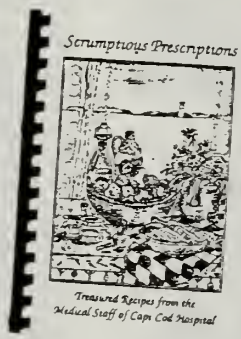
➡ＪＦＫのオートグラフ入りマグカップ（もちろん印刷だぜ）。署名はシグネチャーという。勉強になるページでもある。６ドル20㋒

↓ただのソルト＆ペッパーのスエットシャツではない。胸に小さなレターが入っている。それがなけりゃ意味がない20ドルであった㋒

JFKジュニアは編集長。

彼の幼い頃の記録は一般市民の家庭よりも多く残っている。それらは雑誌に載った。それらはミュージアムに展示されている。だって大統領の息子だったんだから。いちばん若い大統領であることは、２人の子供が幼いことでも証明されていた。ホワイトハウスの執務室ですら２人にとってはプレイグラウンドでしかなかった。机の下にもぐっているイタズラっ子の写真は記憶に残っているはずだ。しかし、彼の最も印象的な一葉は、葬儀のときの棺に向かっての敬礼だろう。アメリカ国民に限らず、写真は世界中の涙を誘った。

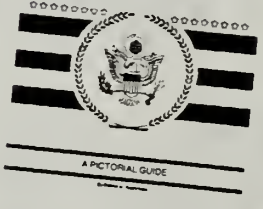
その彼もブラウン大学を卒業。政治家を目指すのかと思っていたら編集長になってしまった。雑誌の名前は「ジョージ」、やっぱりポリティカルな香りが漂うぞ。この雑誌がどれほど注目されているかは「ニューヨーク・マガジン」のカバーストーリーになったことからも説明できる。彼の名前は、そう、ＪＦＫジュニアという……。



↑ＪＦＫのパーソナル・フォトグラファーであったジャック・ロウイの写真集。まるで映画のシーンみたいだ。映画スターが大統領になるより、こっちのほうがクールだねの37ドル50㋙　←なぜか病院の食事レシピ本まで売られていた。不思議だ。10ドル50も不思議㋒

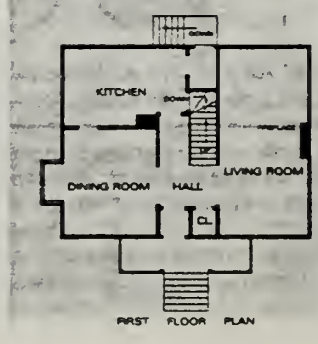
➡切手集めは男子にとってハシカみたいなもの。アメリカでも同じこと。ＪＦＫも見事なセット販売。そういえばマリリン・モンローの切手も発行されたっけね、６月に。12ドル㋙
↑ＪＦＫの生まれた家と育った部屋のポストカードは各50セントです㋓

➡ＪＦＫの演説は英文学科の学生でなくても理解できる。コンサイス片手に挑戦してもらいたい。なぜなら、挑戦こそがニューフロンティアの心だったから。このポスターは20ドルと高い㋙　↓アメリカの大統領たちの故郷紹介本。すごくミュージアム的な12ドル95㋒



➡ガリ版印刷の同人誌みたいな小冊子。署名のオートグラフ入りだった。私も好きだと思う。５ドル95でした㋒

←やっぱりＪＦＫの面影があるジュニア。この雑誌は将来の希石か、それとも雑誌好きかも。



↓夕食の時刻は決められていた。しかし、ＪＦＫはちょくちょく遅れたそう

†文＝ジョンディ・クロフォード

ATTENTION
No.97

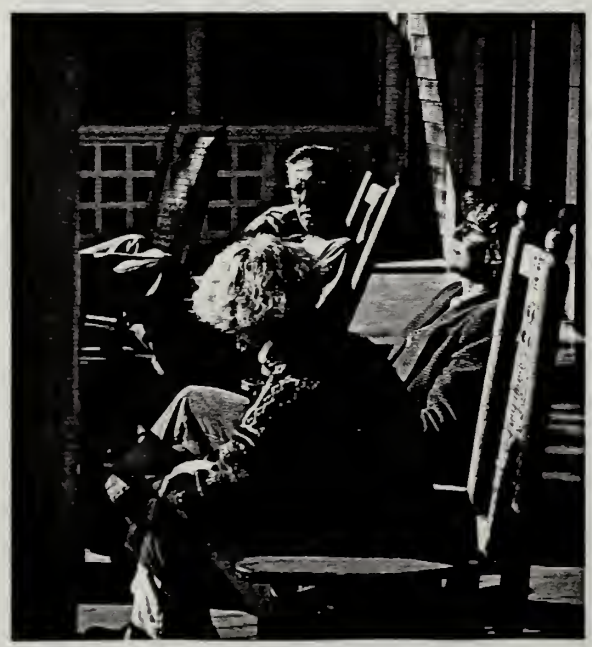
世界の街角から

ニューヨーカーの好きなバカンス。

ロングアイランド、コネティカット、マーサスヴィニヤード。の旅。

1954年、ジョン・スタインベックはニューヨークについてこんなことを書いている。—
“ニューヨークは醜悪な街、きたない街だ。気候はスキャンダルだし、政治は子供たちを怖がらせているし、交通は狂気の沙汰、競争は殺人的だ。しかし、ニューヨークにはあることがある。一度ニューヨークに住めば、それは故郷になり、これほど良いところはほかになくなる”。
そして1995年現在、スタインベックが言ったようにニューヨーカーたちは相変わらずこの街にうんざりしながらも、決してここを離れようとしない。月曜日になると颯爽とオフィスに向かい、猛烈に働く。なぜなら、彼らにはウイークエンドを心静かに過ごすとっておきの場所があるからだ。

ニューヨーカーにとって、もっともポピュラーなウイークエンド・バカンスといえばロングアイランドへ行くこと。マンハッタンから車で約2時間。白砂のビーチが延々と続くアメリカ名門階級の香り漂うリゾート地だ。特にイーストハンプトンやサウスハンプトンは19世紀頃からアーティストや実業家、医師や弁護士などサクセスしたニューヨーカーたちの別荘地として栄えた。この地にセカンドハウスを持っている有名人といえば、ラルフ・ローレン、ダナ・キャラン、スティーブン・スピルバーグ、ローレン・バコール・・・と大物ばかり。けれど別荘を持てないニューヨーカーたちにとってもここは現代最高のヘブン。ロングアイランドの東の先端にあるモントークには夢のように美しい「Gurney's Inn Resort & Spa」がある。バンガロー風の客室はテラスの前がすぐビーチ。朝6時。日の出とともに白砂のビーチを散歩するニューヨーカーたち。マンハッタンの喧噪を離れて、空気の一粒々を胸いっぱいに吸っている。



海の見えるスパには海水を利用したプール、ロマンバスなどがあり、ハーブや海藻を使ったボディートリートメント、リラクセーションのためのオイルマーサッージなどが受けられる。エグゼクティブのためのストレスマネジメントやダ

イエットを目的にしたメニューも組んでくれる。ここから車で30分も走れば、ニューヨークのアッパー・イースト・サイド以上に洗練された街、イーストハンプトンがある。スコッチテリアをを連れたお洒落なカップル、往年のハリウッドスター、今をときめくスーパーモデルたちがエスプレッソバーでくつろぐ姿などに出くわす。レストランの水準も高い。『メイド・ストーン・アーム』のブランチはベイ・スキャロップや子牛を使ったメニューが新鮮で、デザートのクリームブリュレは素晴らしいのひとこと。

ロングアイランドからフェリーでさらに1時間、コネティカット州まで足を伸ばすといま、アメリカで最も話題のカジノ『フォックス・ウッズ』がある。ラスベガスやアトランティックシティーと違って、緑の原野が続くインディアン居留地の中に突如巨大なカジノリゾートが建っているのがユニーク。経営するのは、アメリカ政府から〝インディアン賭博法〟で特別の公認と保護を受けたマーシャンタケット・ピーコット族。その規模は世界一。年間1千万人が訪れる。広大な敷地内にはホテル、劇場、ボクシング会場、子供たちが遊べるアミューズメント施設が揃っている。フランク・シナトラやパバロッティーなど大物スターのショーも売り物。周辺にはミスティックという19世紀から造船で栄えた港町があり、当時のニューイングランドの人々の暮らしを伝えるミュージアム、『ミスティック・シーポート』やアクアリウムはぜひのぞいてみたい。コネティカットから約1時

間半、マサチューセッツのウッズホールまでドライブし、そこからさらに45分フェリーに揺られると、アメリカ東海岸一の人気を誇るリゾートアイランド、マーサスヴィニヤードに着く。ケネディーやジャクリーンはじめ、ブッシュやクリントンがオフを過ごす場所として、また映画『ジョーズ』のロケ地としてつとに有名。中心地エドガータウンには絵本から抜け出たようなチャーミングなインが並ぶ。「コロニアル・イン」はニューイングランドスタイルのぬくもりあるインテリアで都会のストレスを解消してくれる。島のいちばん人気は『ブラック・ドッグ』というレストランとそのキャラクターグッズ。マーサスヴィニヤードを訪れた人の99%がここのTシャツなどを買って帰る。

そんなに時間を取れないという人にはマンハッタンから車でわずか30分。ハドソン川沿いに走ったところにあるウエストチェスターカウンティーもいい。中心地ホワイトプレーンには、マンハッタンから移り住んだニューヨーカーも多い。最近はビジネスマンやツーリストたちもここに泊まり、マンハッタンまでレンタカーで通うという人が増えている。『ストファー・ルネッサンス・ウェストチェスター・ホテル』は特に人気の高いホテル。インドアのテニスコートや温水プールもあり、週末のエスケープには持って来い。ウエイクアップコールを頼むと無料のコーヒーか紅茶を持参でホテルマンがドアをノックしてくれる。日本人には緑茶といったキメの細かいサービスもあり、最近日本人ビジネスマンにも評判になっているホテルだ。マンハッタンの西、ニュージャージーシティーに入るとホテルもぐんと安くなる。たとえば「クオリティー・イン」ならひとり70ドルから泊まれ、付近には今話題のファクトリーアウトレットもある。マンハッタンの雑踏を抜け出してこんな郊外のホテルに泊まったり、ときにはニューヨーカーを気取ってレンタカーでちょっと遠出をしてみては。

INFORMATION

◆ストファー・ルネッサンス・ウエストチェスター・ホテル
STOUFFER RENAISSANCE WESTCHESTER HOTEL

日本での問い合わせ
ルネッサンス・ホテルズ・
インターナショナル・
インク
03-3239-6824

◆ガーニーズ・イン・リゾート&スパ
GURNEY'S INN RESORT & SPA

OLD MONTAUK
HIGHWAY,MONTAUK,
LI,NEW YORK 11954
call 1ー(516)668-2995

◆FOXWOODS RESORT & CASINO

ROUTE 2 P,O,BOX 410
LEDYARD,CT 06339
call 1-(203)885-3000

◆COLONIAL INN

P,O,BOX 68
EDGARTOWN,MA 02539
call 1-(508)627-4711

◆QUALITY INN JERSEY CITY

HOLLAND TUNNEL
PLAZA JERSEY
CITY,NJ 07302
call 1-(201)653-0300

◆ダラーレンタカー
日本での予約問い合わせ
フリーダイヤル
0120-117801

ATTENTION NO.95

世界中のアウトドアファンが訪れるメイン州では、渓流釣りをする人なら一度はお目にかかりたいと思うランドロック・サーモンが釣れたり、森の奥ではディア（鹿）やムース（大鹿）にも出会える。他にもカヌー、トレッキング、ロッククライミング・・・とありとあらゆるスポーツが楽しめるのだ。そんなアウトドアファンが真っ先に目指すのがフリーポート。ここにはアウトドアブランドの王様L.L.ビーンの本店がある。

アメリカ人が子供の頃から一度は行きたいと憧れる場所だ。東京にもブランチがあるが、やはり本店の扉をくぐるとアウトドアの総本山にやってきたという気持ちになる。小さな子供から80代ぐらいのおじいさん、おばあさんまでが名物の大きなトートバッグにハンティングシューズやリュック、ありとあらゆる品物を入れて広い店内にまず2時間はいる。とにかくみんな良く買う。世界各国から年間約400万人近くの人が訪れるという。

L.L.ビーンは早朝や深夜、フィッシングやハンティングに出掛ける人のために1951年にオープンして以来24時間営業、無休を貫いている。買った品物が気に入らなければ、たとえ使用済みであろうと、無条件で返品、交換をしてくれる。このL.L.ビーンに多くの人達が集まることから次々とショップが開き、いつのまにかフリーポートはファクトリーアウトレットの本場になった。ファクトリーアウトレットとは工場直販や在庫処分、キズものなどを扱うショップのことで通常の約2～7割引きで買える。日本でもおなじみだが価格も品質もフリーポートとは雲泥の差。ここは町全体が一大ショッピングエリアになっていて、大きな敷地内に約150店舗が集まってい

CLIPPING VOUCHER

Medium: WINDS Date: December, 1995

Subject: My stomach stop working at "NEW WORDS"
Visiting Ms.Susan in Bosotn / by Keiko Ochiai

Ref. Press Release No.:

There is an air-mail on my desk from Ms.Susan who works as a counselor in Boston. Attached to the letter, there was a picture of relaxing Ms.Susan on the terrace and her dog Tuesday. When I was in Boston six years ago, Tuesday was a puppy and I went walking together with her mother "Sunday "to the beach. There was one more picture in the envelope. A picture of "NEW WORDS", a special bookstore for women. That was almost ten years ago, I was on the air-shuttle grasping a copy of a map and on the way to "NEW WORDS" in Boston from New York. At that time, I was running a bookstore for children and was eager to open an individual store for women's books and went to the States for data-gathering. I guess this "NEW WORDS" means a space connecting past,present and future. Many attractive books were displayed inside of the store. I bought "HERS" which was written by Mary Sarton. They also had CD, cassettes of female artists and hand-made accessories. The dusk gathered already when Susan came to pick me up to the bookstore. I always have bottomless appetite, however I almost forgot about my empty stomach at "NEW WORDS" in Boston. When I had Lobster which was cooked using only pepper and natural salt, vegetables, fruit and nuts on the Susan's terrace, I found myself was very hungry. Every time I visit "NEW WORDS", my stomach stop working. I am planning to visit Boston early this winter to meet Susan, Tuesday and her puppies and "NEW WORDS" again.

Keiko Ochiai - An opinion leading writer. Plays an active parts in human & women's rights. Keeps "Clayon House", a bookstore for children in Harajyuku, Tokyo

CLIPPING VOUCHER

Medium: The Hotel

Date: December 1995

Subject: Christmas at Neport Mansions

Ref. Press Release No.:

Not so many Japanese people know about Newport Mansions in Rhoad Island in U.S.A. These mansions were built by American billionaires in 18th to early 20th century and used as summer houses . Presently, Kingscote, Chateau-Sur-Mer, Green Animals, Marble House, The Breakers, The Breakers Stable and Carriage House, The Elms and Rosecliff are preserved by The Preservation Society of Newport County and are scenic spots where 800,000 tourists visit in a year. This year, three of them are going to be decorated for Christmas. An Italian Renaissance style palace, "The Breakers" are going to be titled "Vanderbilt Christmas" because this was built in 1895 for Correlic Vanderbilt. The Elms which was built modeling after the 18th century Chateau in France will be titled "Noel". "Chateau-Sur-Mer" will be titled "Victorian Christmas at Home". One more good thing for the tourists is tea and sweets service after the tour. You also can enjoy Christmas shopping at each mansions. This events starts from Dec 2- Jan 1, everyday from 10 a.m. to 4 p.m. except Dec 24 and 25. It is a good idea to enjoy nostalgic Christmas in the old mansions in Newport.

CLIPPING VOUCHER

Medium: DANCYU Date: December 1995

Subject: New England taste is gorgeous and primitive Ref. Press Release No.:

In thebeginning of September, we drove through New England by Legacy Grand Wagon.
This is the land where American history started. In 1620, the immigrants came to the new world with Mayflower and landed on the east coast of Massachusetts. Amercan Revolutionary War began from Boston. Boston has been the center of American history for the long time. American foods also started from Boston It is the place where you can find the traditional foods culture. We looked for this "New England taste" through this travel.

Matha's Vineyard
The island where President Clinton stayed. Outdoor cooking in the Vineyard:

Matha's Vineyard is 45 ferry ride from Woods Hole. This island was prosperous with whaling in 19th Century, but it is the summer house resort for the rich people. Kennedy family has their summer homes, and President Clinton visited this island to spend his vacation.

We were invited by Mr. Arny Bock, the distributer of Subaru cars. He has his summer house in the island and spends his weekend here. He showed us the gorgeous cooking in his garden. Put the big pan at the cornor of the garden, and he put lots of lobsters, chicken, mussels, vegitables into it. The cooking was powerful and the taste was great.

New Hampshire:
We drove back to Boston and went up to the north for 2.5 hours. It was 11pm when we arrived at Mount Washington Resort Hotel in Bretonwoods. The front staff of the hotel advised us to go to Scotish Lion to eat the traditional New England foods. Next morning, we left the hotel to Noth Conway. The fall foliage started there. The nature was wonderful. At lunch, we ordered sandwich. It is not the usual one, but turkey meat and cheese were put inside the bread and was grilled. It was very nice. We found the auto camping ground near North Conway. And met the middle aged couple from New York. They enjoyed outdoor life with their camping car. Next restaurant we visited was "Chaka Country Town House". It was the oldest restaurant here.

Freeport, Maine;
The owner of Harasket Inn where we stayed in Freeport was kind enough to show us the places of lobsters. At the harbour, we saw many lobsters were landed from the ship. Harasket Inn showed us how to cook them.
The Waterfront Restaurant in Camden was very good to have sword fish and lobsters.

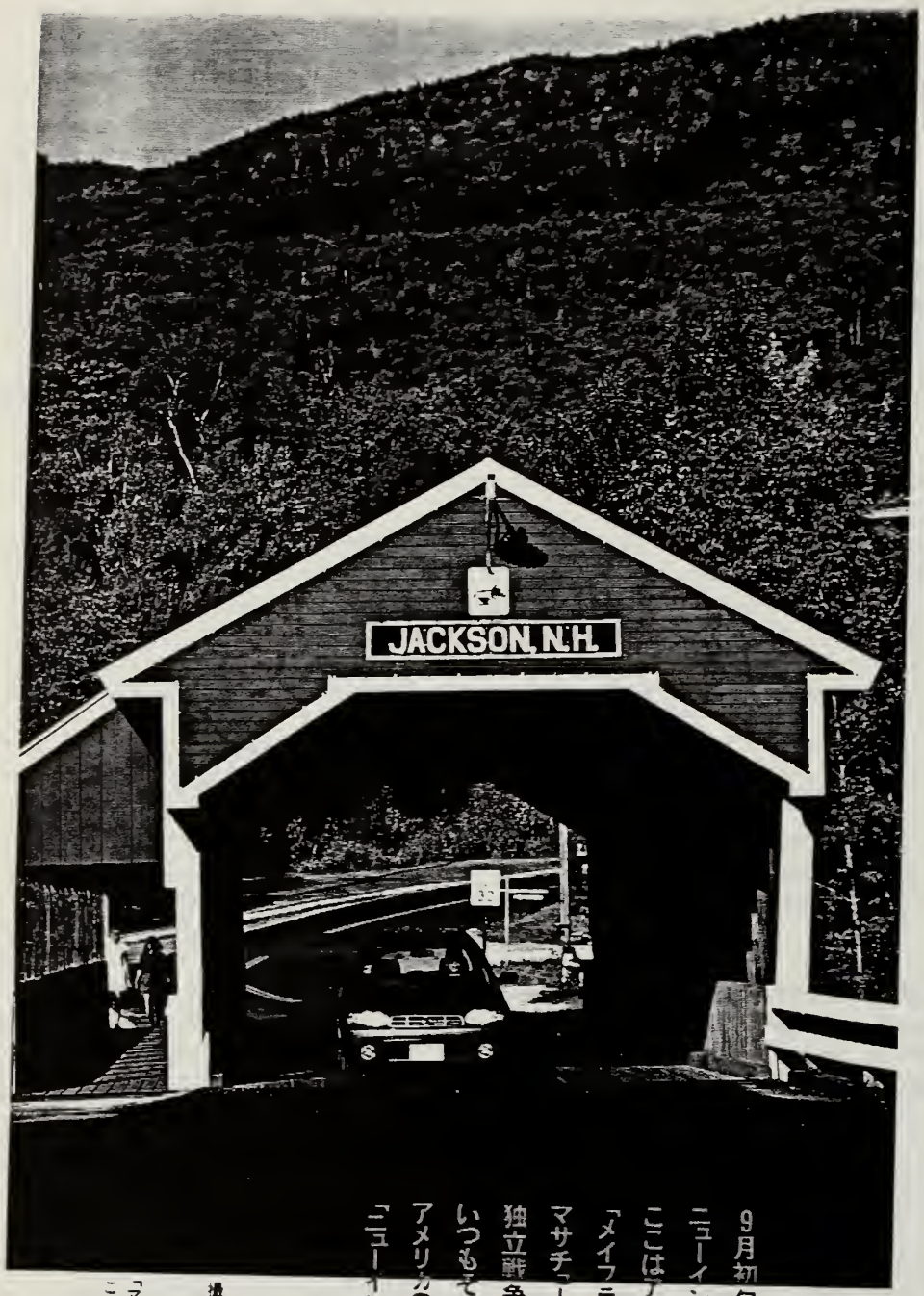
DANCYU - NO.2

The last day of our trip, we drove back to Boston by route 95. We went to York Beach and saw the beautiful light house there. In front of it, there is the restaurant called "Lighthouse Restaurant". It was selected one of the top 10 seafoods restaurants in USA. Lobster dinner there was especially good.

(Last page is used to write about Legacy Grand Wagon.)

レガシィグランドワゴンで駆け巡った5日間

発見！巨大ロブスター ニューイングランドの味は 素朴で豪快

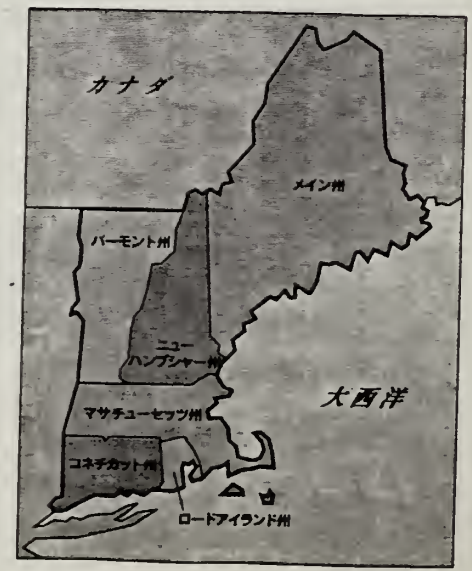


9月初旬、日本の半分にも相当する広さのアメリカ・ニューイングランド地方をレガシィグランドワゴンで駆け巡った。ここはアメリカが始まった土地だ。1620年に「メイフラワー号」に乗った移民が初めて上陸したのはマサチューセッツ州の東海岸だった。

独立戦争はボストンから始まった。アメリカの歴史では、いつもその中心にあった地方である。食もまた然り。アメリカの最も伝統的な食文化が残っているところである。「ニューイングランドの味」を求めての5日間。いざ、出発。

撮影　勝山泰祐

「マディソン郡の橋」ですっかりお馴染みになったカバードブリッジ。これはニューハンプシャー州ジャクソンでのもの。



1日目

マサチューセッツ州マーサスビニヤード島

ザッツ グレイト！ クリントンも滞在した 超高級別荘の〝仰天〟野外料理

アーニーボックさんと248の天窓のある彼の別荘。建物が完成するのに5年かかったという。

ボストンからヴッズホールに出て、カーフェリーで45分。マーサスビニヤード島に渡る。この島は19世紀には捕鯨基地として栄えたが、現在はアメリカ随一の超高級別荘地だ。ケネディ家の広大な別荘などがあり、クリントン大統領もバカンスに訪れたことがある。

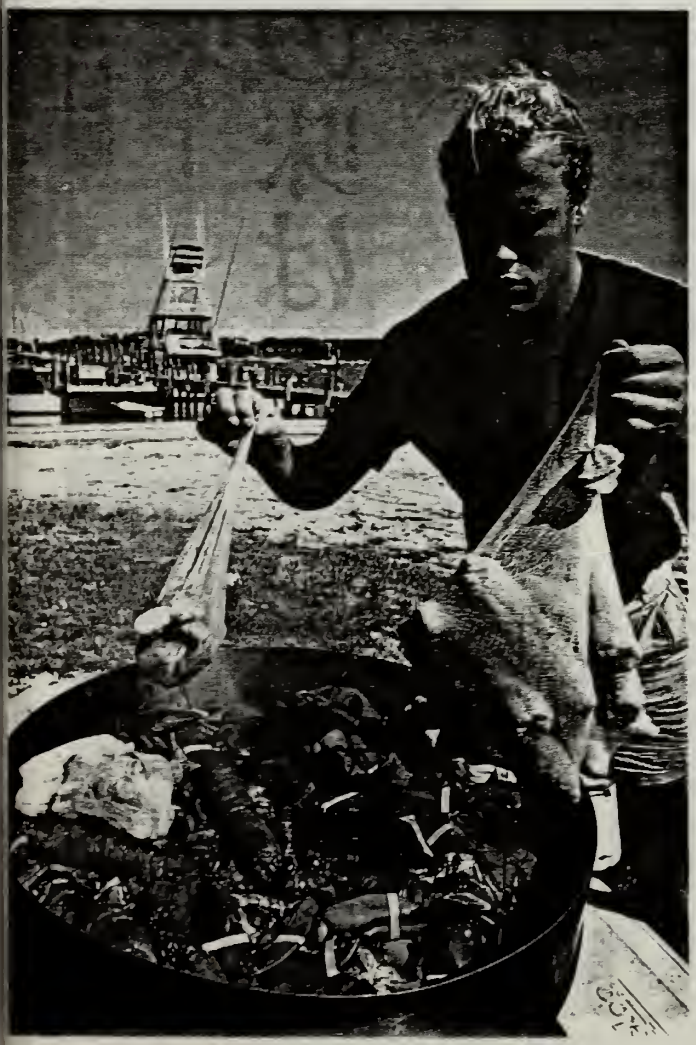
招待してくれたのはアーニーボックさん。スバルのディストリビューターのほか、ラジオ局経営など15以上のビジネスに関わる大富豪。週末、そして夏の間は自然に囲まれたこの別荘で暮らし、ボストンへは自家用機で通勤している。自然とともに暮らすというまさにグランドワゴンのコンセプトであるニューイングランドスタイルをこよなく愛するエグゼクティブである。

この島は魚介類が豊富。釣るもよし、潜ってロブスターを捕まえるもまたよしである。

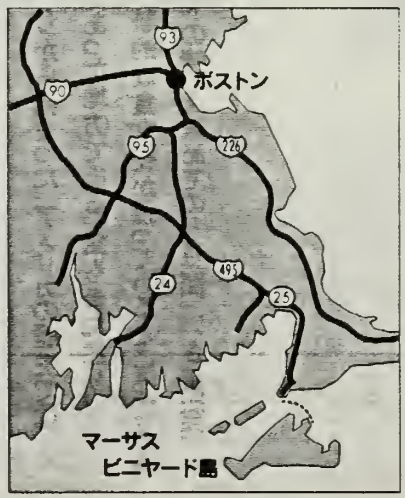
ラマが草を食む15エーカー（約1万8000坪）の敷地には248の天窓のある3階建ての豪邸。その庭にテントを張って料理が供された。庭の隅に直径が1メートル以上ある大鍋が据えられた。何事が始まるのかと注目していると、アーニーボック家の書生が大鍋に大量のロブスター、鶏肉、カラス貝、ソーセージ、ジャガイモ、トウモロコシ、タマネギ等々を次々に投げ込み、ガスバーナーで火をガンガン焚きだした。水を加えず、素材自体が含んでいる水分だけで蒸すのだという。しばらくすると、大鍋が今にも爆発しそうに蒸気を噴きだした。

こんな迫力満点の調理法は初めてだ。味もまた豪華にして美味。素材の持つ味が見事に調和し、巨大ロブスターの甘味が何ともいえずうまかった。

「ニューイングランドスタイルは、ダイナミックでしょう」とアーニーボックさん。思わず「ザッツ グレイト！」と叫んでしまったのであった。



大鍋で蒸されたロブスターは別荘前の海で捕れたもの。タコツボのようなロブスターポットで捕る。



2・3日目

ニューハンプシャー州ブレトンウッズ、ノースコンウェイ、メレディシュ
懐かしきかな質実剛健 アーリーアメリカンを味わう

1902年創業のマウント・ワシントンリゾートホテル。アメリカ上流階級が夏、長期に滞在し、ゴルフに乗馬にパーティに時を過ごすリゾートホテルである。

マウント・ワシントンリゾートホテルの朝食。バイキング形式だが、新鮮な果物とパンの種類が豊富。

「スコテッシュライオン」の七面鳥とチーズのパフィサンドイッチ(6.5ドル)。これがスコットランド風サンドイッチだそうだ。

伝統的なスコットランド料理の「スコティシュライオン」 ☎603-356-6381

マーサスビニヤード島からボストンに戻り、そこから93号線を2時間30分北上し、ブレトンウッズにある「マウント・ワシントンリゾートホテル」に着いたのは夜の11時だった。

荷物をレガシィグランドワゴンの広いカーゴから降ろす。急いでチェック・イン。次いでフロントにいた小柄な女性に、近くでニューイングランドの伝統的な食事のできる店はないかを尋ねる。彼女は同じフロントの2人の女性としばらく相談していたが「車で1時間半ほどいったところにあるノースコンウェイの『スコテッシュライオン』がいい」と紹介してくれる。ニューイングランドでスコットランド料理か。これはいい。

2日目。朝7時に起床。果物とパンとコーヒーで朝食をすます。今日は目指せノースコンウェイだ。

紅葉がはじまっている高原をレガシィグランドワゴンで走る。山道をただ1台、ひたすら走る。空と山並みと木々のざわめき。澄明な空気。永久に自然のなかを走り続けるかのような気分。

滅多に車にも合わない道を1時間30分ほど走って、やがてノースコンウェイの町。「スコテッシュライオン」を見つける。11時30分だった。

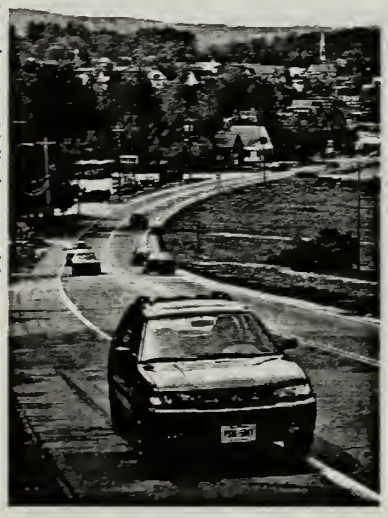
ここのランチの名物はサンドイッチだという。早速注文すると、サンドイッチ伯爵が考え出したパンの間に肉や野菜を挟むのではなく、七面鳥の肉とチーズをパン粉でふわっと包み焼きしたものが出てきた。これがスコットラ

ノースコンウェイのサラダ料理で有名な「レッド・ジャケット」の鶏肉の炭火焼きシーザーサラダ(6.75ドル)。ボリューム満点。 FAX 603-356-3842

オートキャンプ場は秋になっても結構賑わっている。キャンパーはNYあたりからもやって来る。(使用料1日19.50ドル)

ノースコンウェイの町を一周する観光列車。食堂車がついていてフルコースディナーも楽しめる。

25号線のメレディシュの町が見える高台で。



「チャス・カントリー・タウンハウス」のハンバーグステーキ(4.50ドル)。その名は「ダイエットの喜び」☎800-279-4890

ンド風なのだという。サンドイッチの既成概念をひっくりかえしてしまう食べ物だ。七面鳥の肉はあっさり味で食べやすかった。

ノースコンウェイの郊外で、オートキャンプ場を見つけた。見ていると、キャンピングカーが後ろに乗用車を引っ張ってやってきた。テント組もいる。ニューヨークから来たという中年のカップルがいた。休日を過ごしにここを訪れ、1泊したあと他のキャンプ場へ移っていくという。ここは都会で暮らしながらも自然との一体感を求める人にはうってつけの土地なのだ。

翌朝、ガイドブックを入手。パラパラとめくっていると、この地方で最古のレストランが出ている。「チャス・カントリー・タウンハウス」という店だ。この情報に小躍りし、早速出かけることにする。302号線から16号線、25号線とたどったメレディシュの町にこの店はあった。朝9時にホテルを出発して到着が12時だった。

いかにも昔のアメリカの田舎町を舞台にした映画に出てきそうな店だった。店の中は薄暗く、それでいて部屋はいくつもあって、客は地元の老人たちばかり。その老人たちが、昔話や孫の話に花を咲かせながら、ゆったりと食事をしていた。そこだけは時間が100年も止まったままのようにみえた。

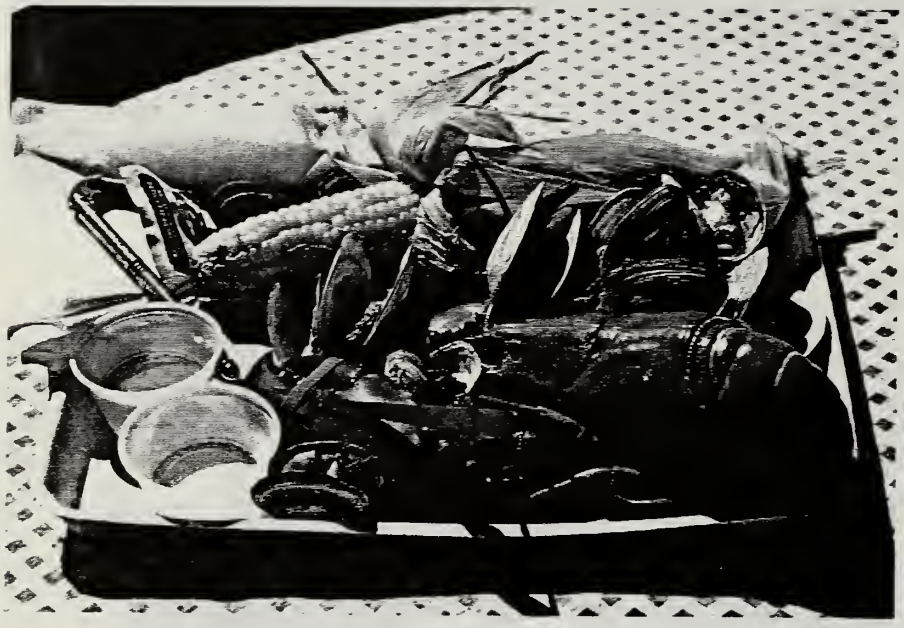
このあとレガシィグランドワゴンは、25号線から95号線に出て、メイン州ポートランドの北にある小さな町フリーポートに向かった。本日の走行距離120マイル。時間にして7時間。

4・5日目

メイン州フリーポート、カムデン、ヨークビーチ

蒸してよし、焼いてよし、茹でてよし本場の巨大ロブスターを堪能する

「ハラスケット・イン」の朝食と、夕食のフランス風ロブスター料理(左)。☎207-865-9377



「ハラスケット・ランチ&ロブスター」のロブスター・デライト(12・95ドル)。蒸しロブスターだった。☎207-865-4888

陸揚げされた箱には1~3ポンドのロブスターがぎっしり詰め込まれていた。

フリーポートで泊まった「ハラスケット・イン」のオーナーのチップ・グレーさんは親切な人で、ロブスターにまつわる場所をいろいろと案内してくれた。

まず波止場へ行った。そこでロブスターの陸揚げを見た。大量に仕入れている人がいる。聞けば「ハラスケット・ランチ&ロブスター」のシェフ。早速レストランまでついて行き、捕れたてのロブスターを料理してもらった。ここもアーニーボックさんのところと同じ茶ずだけ。これがこの地方の最も一般的なロブスター調理法らしい。

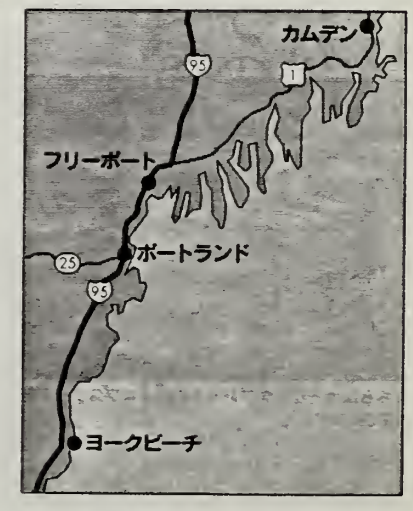
その席でグレーさんからカムデンにおいしいレストランがある、という話を聞いた。早速出発する。

店の名は「ザ・ウォーターフロント・レストラン」。到着したのは夕方の6時。夕食の時間と重なったせいか、待つこと30分、ようやく店に入れた。

撮影させてほしいと厨房を覗くと、壁に「NO CRYBABIES!(泣き虫はいらない!)」の貼り紙。確かに6人のコックが悲鳴を上げるくらい忙しいレストランだった。

注文したのはメカジキのバター焼きとロブスターのサラダ。新鮮なサラダ菜の上にロブスターの身がどっさり。あっという間に平らげた。客が立て込んできたので、早々と引き揚げる。

快調に、海岸線をひた走るレガシィグランドワゴン。



CLIPPING VOUCHER

Medium: SEVEN SEAS Date: DECEMBER 1995

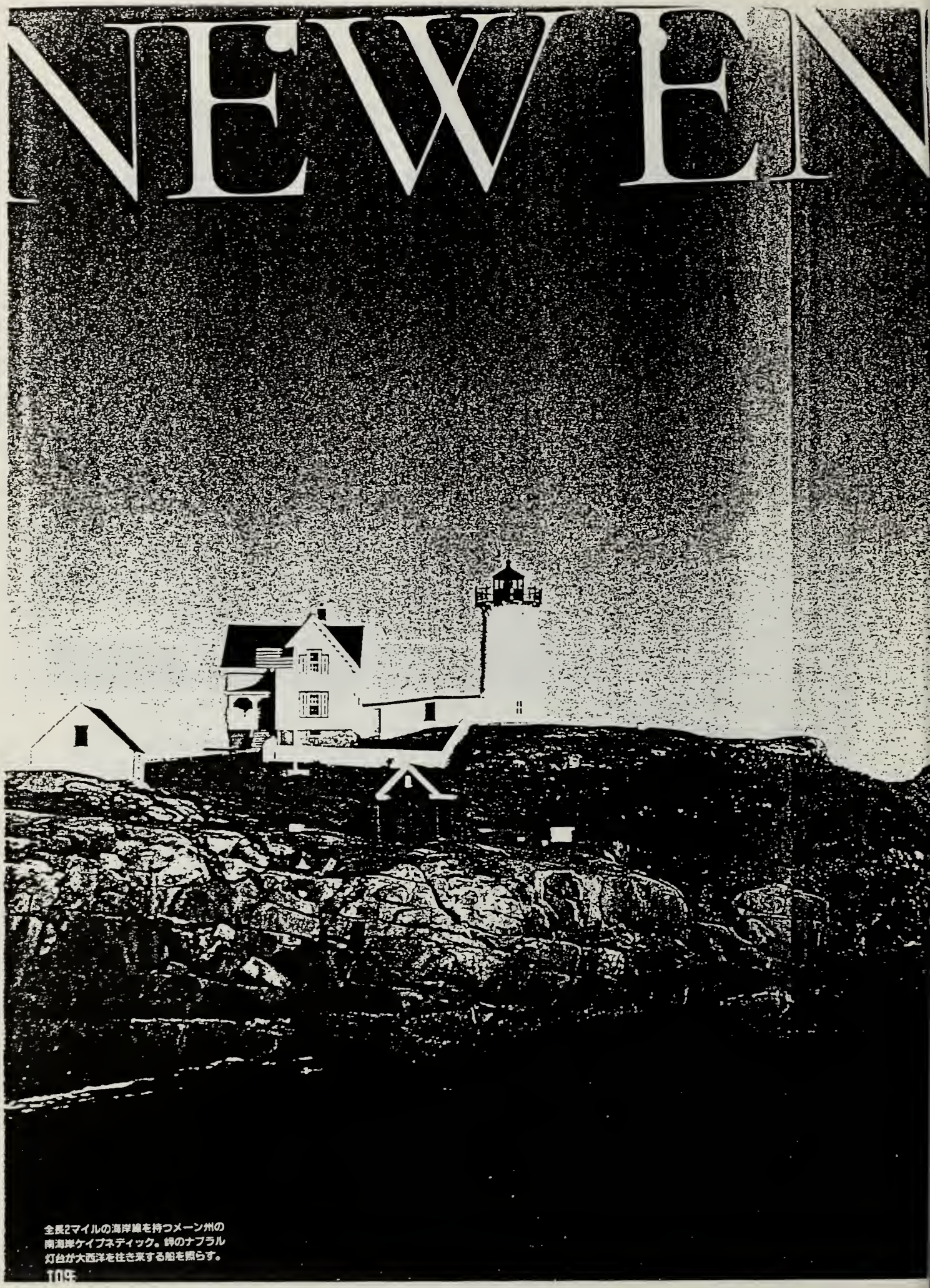
Subject: NEW ENGLAND Ref. Press Release No.:

AMERICA started from Cape Cod. In 1620, 102 people arrived at Cape Cod after the hard 65 days of travel. Those immigrant people from England formed United States of America after the independent war with English people. New England has such briliant and traditional history.
New England consists of 6 state in northeast part of America. They are Main, New Hampshire, Vermont, Connecticut, Rhode Island and Massachusetts. This area has lead the development of USA.
Many American leaders were born in New England and the famous universities such as Harvard and Brown, who brought up these leaders, are there in New England.
In Boston, there is BSO whose music director is Seiji Ozawa. In Newport, Newport Jazz Festival is held in every summer. American football and Basket ball were born in this area. Also Ms Louis Tiffany, the founder of Tiffany, Mrs Stow, who wrote 'Uncle Tom's Cabin" were born here, too. New England has acted the important role not only politics but also culture and sports field. People there must have the creativity to bear these things and have a influential environment in their life.

To be called as an establishment in New England, people have their own anncester to talk about and know from where they come.
New England has the great nature surrounded by the various mountains and vast sea. People there live very closely with this nature.
For example, you will find many families who enjoy painting the favorate nature and at the same time, they are enjoying the time with nature.

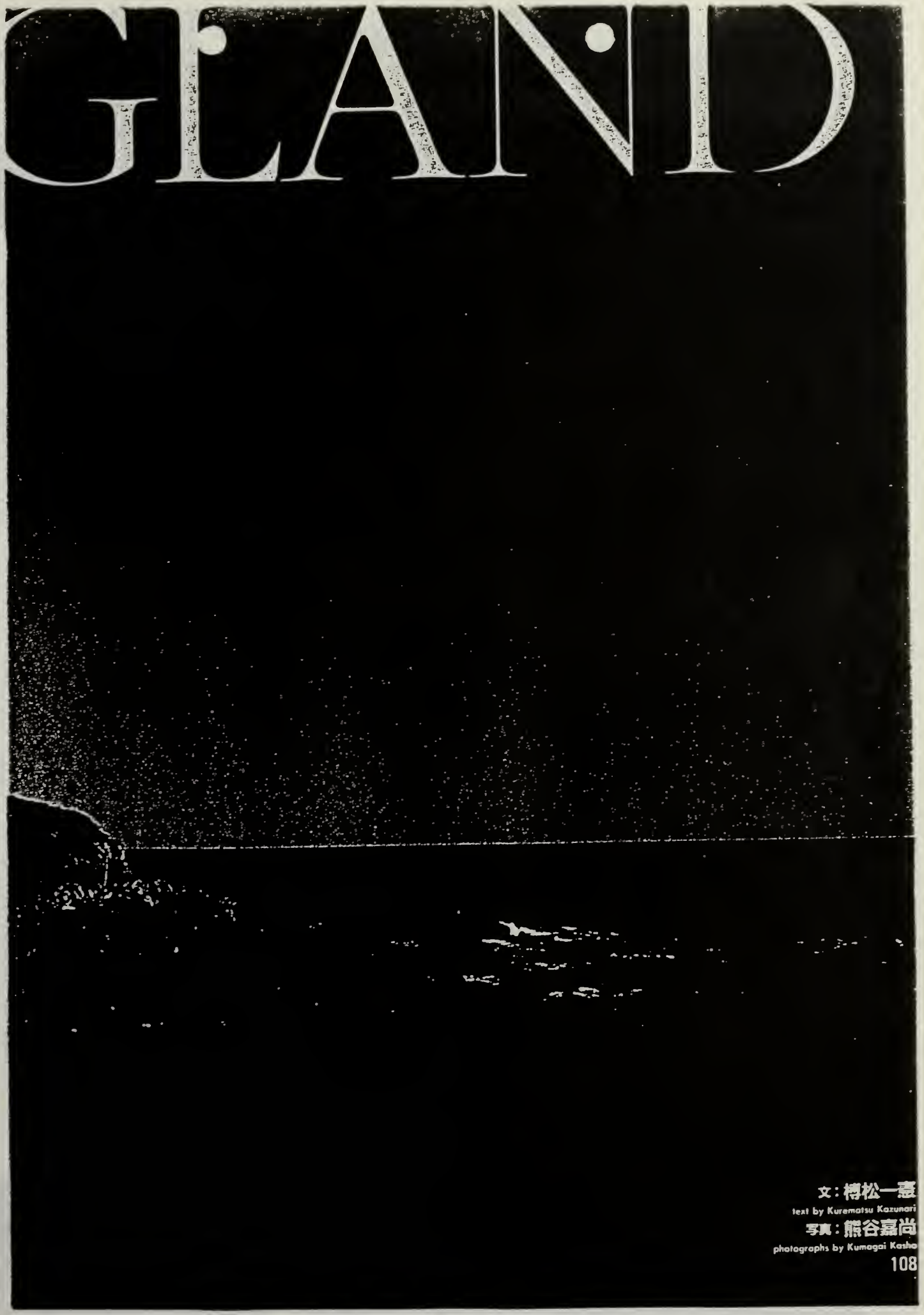
To enjoy these kind of life with nature, it is necessary to have 4WD cars. Every weekend, they go out of their city life into nature by driving these types of cars. Life in America cannot be thought without car. It has been with it more than 80 years since Ford established the company.
4WD cars are suitable for New England people who live closely with the nature. Especially the severe coldness in winter season needs them.
In these days, we can see many 4WD cars in Japan. This is the car who like to have outdoor life on weekends.
Legacy is suitable for such life.

NEW EN



全長2マイルの海岸線を持つメーン州の
南海岸ケイプネディック。岬のナブラル
灯台が大西洋を往き来する船を照らす。

GLAND



文：椹松一憲
text by Kurematsu Kazunari
写真：熊谷嘉尚
photographs by Kumagai Kasho

左：ケイプコットの風光満ち続く道。中：メイフラワー号が到着したプロヴィンスタウンには光が溢れる。右：広大な森林に取り囲まれた田舎あるザ・マウント・ワシントン・ホテル。

ケイプコッドから始まったアメリカ

一六二〇年の秋、日本ではまだ江戸時代が産声を上げてまもない頃。六十五日間にも及ぶ苦難の航海の末、彼ら百二人が初めてアメリカを目にしたのがケイプコッドである。彼らとは言うまでもなく、あのメイフラワー号に乗り、イギリスでの迫害を逃れてきたピルグリムファーザーたち。その新天地への上陸時に、ケイプコッドの先端は不思議に光り、暗い波間に漂う彼らをガイドしたのだという。その光りをケイプコッドライトと呼んだことが、この美しい岬の名の始まりだ。

そんなイギリス人たちによる植民は、のちにイギリスとの独立戦争を生み、現在のアメリカ合衆国をかたちづくっていった。だが、同時にそれは、ヨーロッパの国々に比べれば歴史の浅いアメリカにおいて、ニューイングランドという最も輝かしい伝統と歴史を誇る地方が、第一歩を踏み出した時でもある。

ニューイングランドと言えばアメリカ北東部にある六つの州を指す。メーン州、ニューハンプシャー州、バーモント州、コネチカット州、ロードアイランド州、そして、ケイプコッドが大西洋に突き出たマサチューセッツ州だ。アメリカ全五十州から見れば、面積的にはどれも広いとは言えない。すべてを合わせても、南部のテキサス州に遠く及ばないのである。しかし、この限られた地域がアメリカの成長をリードしてきた、もちろんそれは、独立戦争を戦ったアメリカ合衆国創成期の十三州の中にニューイングランド地方が含まれているという歴史的事実が、大きな意味を持っている。

たとえば、古くは第二代大統領のジョン・アダムス、新しくはケネディやキッシンジャー、ブッシュといった多くのアメリカのリーダーを輩出してきたし、そんな彼らを育てたハーバードやプラウンといったアイビーリーグの大学が点在するのである。だが、政治的なイニシアチブだけが目立つわけではない。古都ボストンには、我らが小沢征爾が音楽監督として活躍するボストン交響楽団がある。また、ロードアイランドの避暑地ニューポートは、国際的にも有名なニューポート・ジャズ・フェスティバルの舞台だ。スポーツではバスケットボールが生まれたのも、アメリカンフットボールが現在の形を完成させたのも、この地である。そう言えば、ティファニーを隆盛させたルイス・ティファニーや「アンクル・トムの小屋」の作者ストウ夫人、そして、あのスティーブン・スピルバーグを育みもしている。

典型的WASPのシルバーマン氏一家はホエールウォッチも楽しむ。

政治のみならず、文化とスポーツの分野においても、アメリカにとって重要な役割を果たしてきた、ニューイングランド。このことは、単なる歴史的な事実だけに左右されたとは、とうていおもえられない。そこには、優れたクリエイティビティを創り出し、影響を与えるような環境と生活があるに違いないのだ。

自然との共生が、知性を育む

ニューイングランドでエスタブリッシュメントと呼ばれるためには、語ることのできる出自や先祖がなくてはならない、と言われている。家や家具は何代にも渡って受け継ぎ、二百年前に友であった家族の末裔を今も友として、または親戚として紹介できなければならないのである。つまり、長年、この地に住み続けていなければならないわけだが、逆に言えば、それを可能としてくれるだけの暮らしやすさに根付いた、心温まる生活がここにはあるのだろう。

北にカナダと国境を接し、東には洋々と広がる大西洋を見渡せるこのニューイングランドは、雄大な山々と広大な海という豊かな自然を数多く有することで知られている。そんな背景もあって、ここに住む人々は、この大自然と実に密接な暮らしをしている。

たとえば、海辺や森などで写生をしている家族がたびたび見かけられる。もちろん、彼らは自分が気に入った風景を描きに来ているのだが、また同時に自然と共に過ごす瞬間を楽しんでもいるのだなぜなら、彼らの絵の進み具合が、非常に悠々としているからだ。山々の緑を、噛みしめるようにじっくりと眺め、確かめるように筆を取り始めたかと思うと、連れ立ってきた家族との会話にしばし興を休める。そして、笑顔と共にまた自然を見つめ返している。彼らは単に絵を描いているのではない。穏やかに流れる時間と清々しい空気の中で、家族と共に自らの心を解放しているのだ。

休日ともなるとこのような人々が、あちらこちらに見られる。家族と共につねに自然をごくあたり前に受け入れ、日々を愉しんでいく暮らしぶりと精神が、この地方には脈々と受け継がれてきたのだ。そのことが、

左：ヒトカーフウンの遊船は海と人の往復が12ドル。中：名物のメイン・ロブスター。右：ケイプコッドの南に浮かぶ島マーサズ・ヴィニヤードは風光明媚な避暑地。

NEW ENGLAND

マーサズ・ヴィニヤードの西端の小さな港町メネムシャ。絶景の夕陽を眺められるポイント。

ニューイングランドに生活する人々の多様に渡る知性に、少なからず影響を与えてきたと言えるのではないだろうか

ニューイングランドのカーライフ

さて、そんな自然と触れ合い過ごすために、ニューイングランドの人々にとって欠かせない道具、それが4WDのクルマたちだ。ハフ・ア・ナイス・ウィークエンドという言葉が金曜日となるとあちこちで聞かれる。週末ともなると多くの家族が山へ、海へと出かけていく。若夫婦だけではない。老人のカップルもまた。画面の裏みを浮かべて、州境にあるウェルカムツリーを越えていく。そして、その時の足となるのが、荒れたオフロードをものともしない、いわゆる四輪駆動のクルマたちである。

真の意味でのアメリカの生活は、クルマなしには考えられない。T型フォードの時代から数えてすでに八十年を越えた現在、自動車は完全に生活の中に溶け込んでいるのだ。何をするにも無意識のうちにクルマに乗ることを前提にしてしまう、そんなスタイルが浸透しているといっても過言ではない。

もちろん、それはニューイングランドの人々にとっても同じこと。違いがあるのは、この地方特有の冬の厳しさを乗り越えられ、しかも大自然を友とするライフスタイルに適した、四輪駆動のクルマを見かけることが非常に多いということだ。釣りやカヤックを満喫に海や湖へ行くにも、森へ写生に出かけるためにも、この走破性に優れたクルマが重宝されている。自然と共生するうえで非常に重要なファクターとなっているのだ。

最近、日本でも4WDのクルマがアウトドアやRV（レクレーショナル・ビークル）という言葉の広がり共に、ずいぶんと目にするようになってきた。自然

カジキ、鯨、ヨット……港町メネムシャの風向計はどれも海に関係が深い。漁師町ならではの光景だ。

を楽しむ人が乗るクルマというポジションのようだ。たが、まだまだファッションの域を出ていないように思えてならない。たとえば、クルマのフロント部分に付けられたカンガルーバンパー。日本ではまったく必要のないものであるはずが、もし人をはねてしまった場合に、致命傷を与えかねないものだ。しかも、わざわざ道を外れ、平気で緑の木々を踏みにじり、喜々としている人々さえいる。

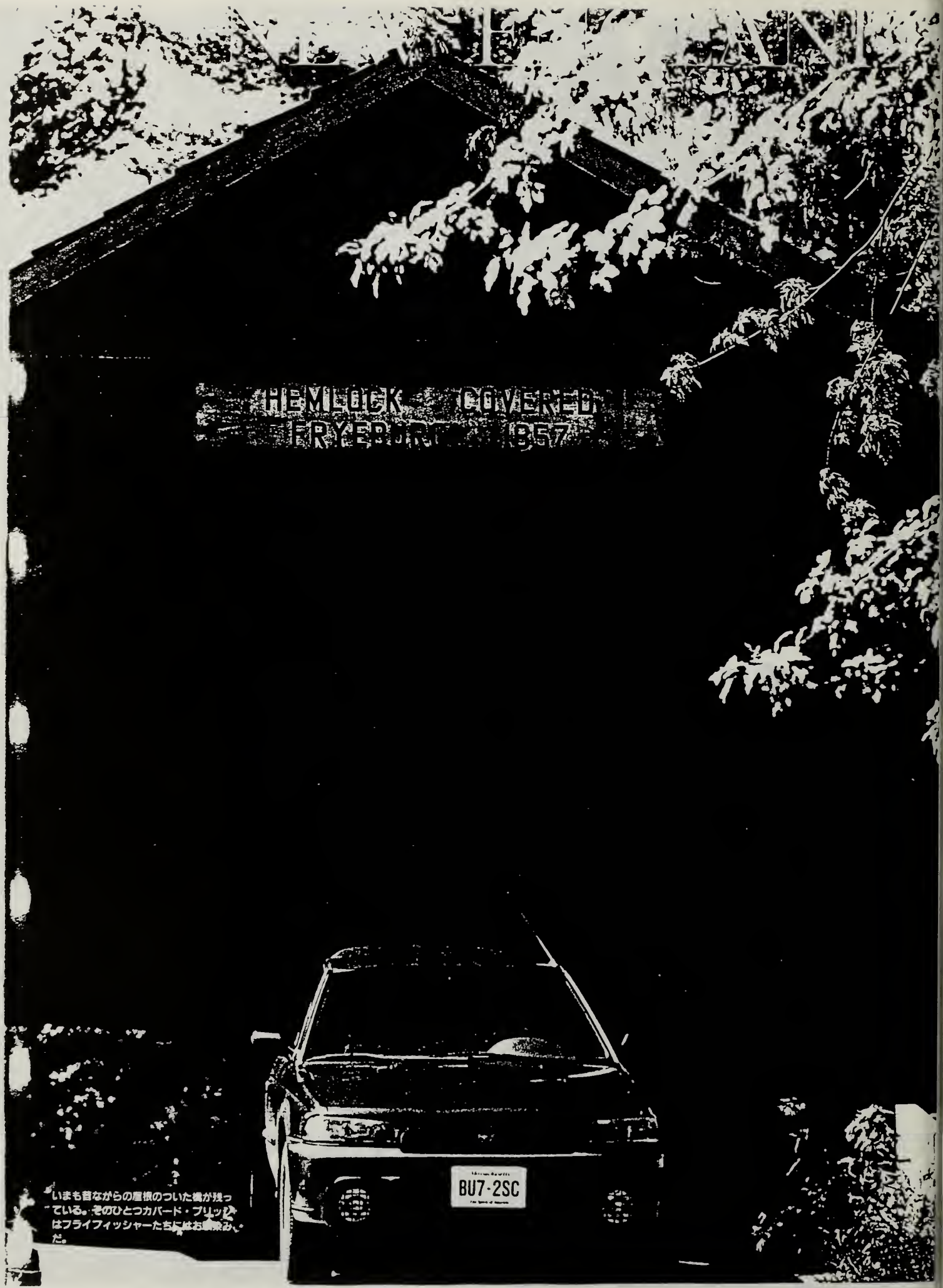
たとえ同じ四輪駆動車に乗っていようとも、自然を自分のものとしただけでなく、住民すべての大事な財産として親しむことなく愛するニューイングランドの人々からすれば、このようなレベルの低い意識は、まったく信じられないだろう。

それは心を豊かにさせる旅

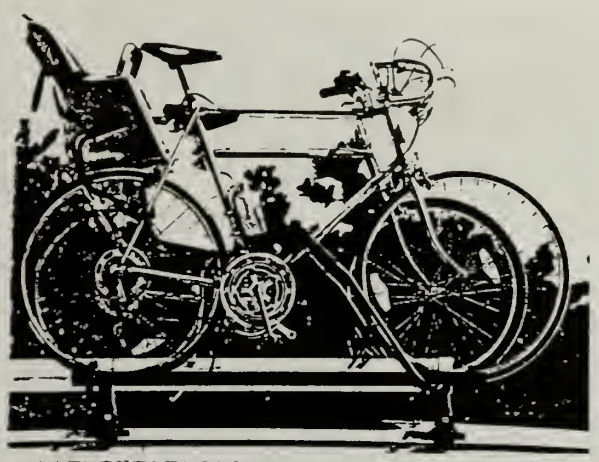
ニューイングランドを始め、自然と心地よい関係を築いているアメリカの人々にとって、ポピュラーなレジャーが、大自然へ向けて家族みんなで旅立つことである。しかも、その旅はクルマにとってなされることが多い。モータリゼーションが発達しているため、クルマにとって都合の良い設備が多いことも大きな理由だが、その行く土地ごとに接しつつ、ゆっくりと見て回ることを可能としてくれるためでもある。移りゆく景色と自然を肌で感じることが、何とも言えない旅情をかき立ててくれるのだ。さらにもうひとつ、自分自身や家族と一緒になって旅の計画を立てるなど、手作りの旅を創り上げることができることも挙げられる。飛行機や列車、船が受動的な交通手段であるならば、自転車を除いて自動車は自らが操ることのできる唯一の旅の手段と言えよう。誰かにせかされることもなく、家族とのコミュニケーションも十分に取れるし、さらに自然の美しさが会話に輝きを増してくれる。家族の絆を深めるうえ

NEW ENGLAND

レガシィの表情は岬によく似合う。ケイプネディックの潮風がボディの表面を滑るように流れていった。



いまも昔ながらの屋根のついた橋が残っている。そのひとつカバード・ブリッジはフライフィッシャーたちにはお馴染みだ。



クルマに自転車を積むのを忘れない。ニューイングランドらしいスタイル。

で、これほど効果的なことはない。

それは、ただキャンプという行為をするためだけにキャンプ場に赴き、翌日には異常なほどの渋滞に襲われた高速道路を眠い目をこすって帰って行く、あの目的地型の日本のアウトドアライフとは大違いである。周囲の自然の中に自分たちだけの発見や驚きを見いだし、ゆっくりと過ぎる時間を持つことこそ、望むべき豊かなアウトドアでのカーライフと言えよう。

確かに、日本にはニューイングランドのような雄大な自然が自分たちのごく近くにあるという人は少ないだろうし、なかなかビジネスの呪縛から逃れられることのできない人も多いことだろう。しかし、そういった本当の意味で自然を友とするスタイルこそ、人が成長する上で大きな力を与えてくれる。特に現代の社会生活の中で希薄になりつつある家族の絆を、より固く結んでくれるだろう。そろそろ、日本人も目的に終始するレジャーから、何かを生み出していく創造性の高い生活へと進んでいく時代を迎えているのではないだろうか。それこそ、人の数百倍もの長い年月を経て来た自然に対して払うべき敬意であろうし、きっとその愛すべき行為が、都市に住むことに馴れ過ぎた人間へ心の豊かさと共にオリジナリティ溢れる知性を育んでくれるはずだ。

ニューハンプシャー州には湖が点在し、ウォーターレジャーが盛んだ。

旅するクルマに求めるもの

人生をエンジョイし、自然と共に自分を、そして家族の在り方を見つめ直すには、ニューイングランドの人々に習うまでもなく、クルマによる旅がお薦めだ。できれば行楽地的な地域は避け、自分たち以外には誰も近づかないような、秘密の場所を探し出す旅でありたい。そこで重要になるのが信頼性の高いクルマを選ぶこと。今ではさまざまな通信手段が発達しているため、突発的な出来事が起きてもそれほど慌てふためくことはない。とは言え、行動範囲の広さを考えると、十分に安心できるクルマを確保したい。

都市では考えられない起伏の激しい山々がある。まだ舗装されていない道もある。しかも天候は変わりやすい。やはりアウトドアフィールドへ向かうには、四輪駆動のクルマが望ましいだろう。プームもあって、今年はさまざまな4WDのクルマたちが発表されたが、レガシィ・グランドワゴンもそのひとつ。レガシィと言えばステーションワゴンの名を日本に広めたクルマだが、その卓越した高速での走りと優れたスペースユーティリティはそのままに、リアにリミテッドスリップデフを装着したり、最低地上高を20センチメートルもとるなど、悪路での走破性能を高めている。まさに行動的なライフスタイルに合致したクルマと言えよう。あとはあなたと家族が、自然をこよなく愛するニューイングランドスタイルを実践するだけである。そう、より大らかで知性溢れる良質な未来へ向けて。Ⓢ

LEGACY GRAND WAGON SPECIFICATIONS

●スバル レガシィ グランドワゴン4WD
全長、全幅×全高：4720、1715、1555mm ホイールベース：2630mm 最低地上高：200mm 乗車定員：5名 車両重量：1410kg 最小回転半径：5.6m 燃費（10・15モード）：9.8km/ℓ 総排気量：2157cc（水平対向4気筒DOHCターボ） 最高出力：160ps/6000rpm 最大トルク：21.5kg-m/2800rpm サスペンション F：ストラット R：マルチリンク ブレーキ F：Rベンチレーテッドディスク R：ベンチレーテッドディスク タイヤ：195/60R15 車両本体価格：269.7万円（東京地区）

アーニー・ボック氏はニューイングランド・スバルの創設者。この地に4WD、ステーションワゴンを根付かせた立役者である。

Fuji Evening News

12/1

世界の街角から

ボストン編

米のファッションをリード

ニューベリー・ストリート

ボストンで最もおしゃれなニューベリー・ストリート

▲バーゲンなら、ダウンタウンにあるデパート「ファイリーン」の地下1、2階にある「ファイリーン・ベースメント」が、全米でももっとも有名なフロアだ。

男物では、ダンヒルやフェラガモ、アルマーニなどのシャツやネクタイが市価の4分の1。ブルックス・ブラザースやティオールのシックなビルに、世界の一流ブランドをはじめ、いま人気のギャップやバナナリパブリックなどのブティックが入っている。

マサチューセッツ州は衣類に関しては、1着につき175㌦までなら非課税。ニューヨークやロサンゼルスの8・25%の税金と比べると、ぜったいにお得だ。

▲全米で大人気のビール「サミュエル・アダムス」

「サミュエル・アダムス」を売る「ボストン・ビア・カンパニー」が必ず入っている。

しかも、同社の規模は世界的に有名な「バドワイザー」を売る「アナハイザー・ブッシュ」の約3000分の1というから、すごい。

社長であるジェームス・クック氏は、ハーバード大で法律学を学んだ超エリート。6代にわたるドイツからの移民だ。ホップの質にこだわり、それまで主流だったライトな味とは180度違う、深い味わいのビールにこだわった。

はじめは営業も社長自身が行い、ボストン市内のレストランやパブを一軒一軒たずねたという。その人生哲学は「なにごとも忍耐」という。

人気は全米にひろがり、CNNではもっとも成功した地ビール・カンパニーの社長として紹介された。秋に売り出される限定版「オクトーバー・フェスト」は、かの村上春樹氏も絶賛したという。

その社長によると、唯一の悩みのタネは上質のホップの仕入れ。日本のあるビールメーカーと競合しているためだという。

（山科百合子）

地ビールブームの火付け役

ボストンでいちばんお洒落な街角は、バック・ベイ地区にあるニューベリー・ストリートだ。

19世紀ヨーロピアン調のシックなビルに、世界の一流ブランドをはじめ、いま人気のギャップやバナナリパブリックなどのブティックが入っている。

マサチューセッツ州は衣類に関しては、1着につき175㌦までなら非課税。ニューヨークやロサンゼルスの8・25%の税金と比べると、ぜったいにお得だ。

男物では、ダンヒルやフェラガモ、アルマーニなどのシャツやネクタイが市価の4分の1。ブルックス・ブラザースやティオールのシックなビルに、世界の一流ブランドをはじめ、いま人気のギャップやバナナリパブリックなどのブティックが入っている。

マサチューセッツ州は衣類に関しては、1着につき175㌦までなら非課税。ニューヨークやロサンゼルスの8・25%の税金と比べると、ぜったいにお得だ。

スーツが3万円以下で手にはいる。英国製のトレンチコート、カシミヤのコートも探せば1万円代で買える。

衣類だけでなく、ビールも安い。とくに、いまや世界的なブームになっている地ビールは、ボストン産の「サミュエル・アダムス」が火付け役となった。

1984年に発売され、翌年には「アメリカでもっともうまいビール」に選ばれ、その栄光は今も続いている。全米には140社のビール会社があるが、売り上げのベスト10には、このエールスムス「サミュエル・アダムス」を売る「ボストン・ビア・カンパニー」が必ず入っている。

しかも、同社の規模は世界的に有名な「バドワイザー」を売る「アナハイザー・ブッシュ」の約3000分の1というから、すごい。

社長であるジェームス・クック氏は、ハーバード大で法律学を学んだ超エリート。6代にわたるドイツからの移民だ。ホップの質にこだわり、それまで主流だったライトな味とは180度違う、深い味わいのビールにこだわった。

はじめは営業も社長自身が行い、ボストン市内のレストランやパブを一軒一軒たずねたという。その人生哲学は「なにごとも忍耐」という。

人気は全米にひろがり、CNNではもっとも成功した地ビール・カンパニーの社長として紹介された。秋に売り出される限定版「オクトーバー・フェスト」は、かの村上春樹氏も絶賛したという。

その社長によると、唯一の悩みのタネは上質のホップの仕入れ。日本のあるビールメーカーと競合しているためだという。

（山科百合子）

世界の街角から

ボストン編

復元「メイフラワーII号」の船内遊泳

プリマス

ボストンの南東60キロ。プリマスという町まで出掛けた。人口1万人にも満たない小さな港町だ。

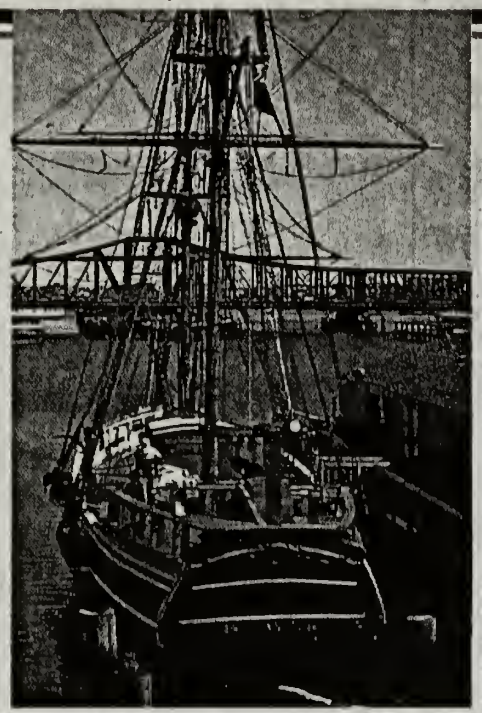
でも、アメリカ人なら一度はその足で踏み締めてみたい〝聖地〟である。今から375年前、102人の清教徒たちが、自由を求めて「メイフラワーII号」に乗り、イギリスから大西洋をわたって、はじめてこの地に降り立った。

彼らは「ピリグラム・ファーザー」と呼ばれ、プリマスに第一番目の植民地を開いた。

さっそく、海浴いを歩いて、原寸大に復元された「メイフラワーII号」を見に行った。

船内に入ると、とても102人が2カ月以上も航海したとは思えないほど小さい。

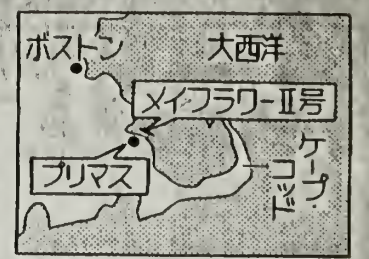
でも、まぎれもなくこのギリスから大西洋をわたって、はじめてこの地に降り立った。船はアメリカ移民の第一号を運んだ船である。いま、



▶ 原寸大に復元されたメイフラワーII号。意外と小さかった

◀ プリマスにある宿「ジョン・カーバー・イン」。メイフラワーII号まで歩いて行ける

船の中には16世紀頃の衣装を着たピリグラム・ファーザーたちがいて、当時の民歌を歌いながら、クイーンズ・イングリッシュで話し、ツーリストたちを喜ばせている。



近くには、ピリグラム・ファーザーらが初めてプリマスの地に足を降ろした岩〝プリマス・ロック〟も展示されている。タマゴ形のごくフツーの石にように見えるが、アメリカ人にとっては特別なもの。マッチ箱ほどの小型のプリマス・ロックは、人気の土産品になっている。

プリマスの町に宿泊するなら、歴史保存地区に建つ「ジョン・カーバー・イン」がおすすめ。プリマスは、トーストとタマゴ、ベーコン、それにコーヒーが付いて、わずか30円。しかも、うまい。

プリマスの人はとにかく親切だ。道で地図を広げているだけで、「どこへ行きたいんだ」と声を掛けてくる。しかも、行き先を告げると、「そこより、もっといいところがある」という風に、おすすめの店やミュージアム、観光スポットを教えてくれる。

ツーリストにはいい思い出を抱いて帰ってほしい、という彼らの気持ちが痛いほど伝わってくる。

（山科百合子）

朝食を食べようと、町いちばん賑やかな通りに出かけた。ニューイングランド・スタイルのおしゃれなレストランやカフェが並んでいる。どこに入ろうかと悩んでいると、「どうしたんだ」とオジさんが声をかけてきた。

「朝食を食べたいんですが…」と言うと、「それなら、あそこだ」と近くの食堂を指さした。朝食のメニューは、トーストとタマゴ、ベーコン、それにコーヒーが付いて、わずか300円。しかも、うまい。

プリマスの人はとにかく親切だ。道で地図を広げているだけで、「どこへ行きたいんだ」と声を掛けてくる。しかも、行き先を告げると、「そこより、もっといいところがある」という風に、おすすめの店やミュージアム、観光スポットを教えてくれる。

ツーリストにはいい思い出を抱いて帰ってほしい、という彼らの気持ちが痛いほど伝わってくる。

（山科百合子）

荒木と「妖怪は楽しいですよ」と
千重子さん（左）ら

境港に吹

店街、そ

ゲゲ、

歌が

れに。野

がら

ンサ

仕掛

くれ

いりまし

ネットなどを売っている。

店を切り盛りする荒木千鬼太郎重子さんは「もとは病院の

建物。診察室がグッズ工房に、薬局がお客さんの応対室に〝化け〟ました」と話す。

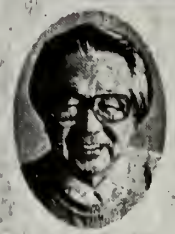
大山の銘水でたてたお抹茶でもてなしてくれた。

10月にグランドオープンしたばかりの「皆生つるや」が、今夜の宿。木の香り新しく、気持ちがいい。

温泉大浴場と露天風呂で〝お化け〟のつきものを洗い流したら、カニのフルコースが待っていた。

カニ刺し、焼きガニ、カニ鍋、カニ甲羅蒸し、カニ具足煮、カニてんぷら…。ボリュームたっぷり。

カニは、なりふりかまわずに食べるのが〝マナー〟。貝ガラにかぶりつき、甲羅をひっくりかえして割り、



植田正治さん

82歳の現役 植田正治さん 20代から撮り続けた鳥取砂丘

めて焼くカニは、香ばしい匂いとあいまって逸品中の逸品だ。食べおわると、部屋係の女性スタッフが「まだ、ボイルガニが残っていますよ」。うーん、もう食べられない。

翌朝は大山のふもと、岸本町に9月末開館した「植田正治写真美術館」へ足を延ばした。境港市出身の植田さんは、ことし82歳。現役最長老のプロカメラマンだ。20代から鳥取砂丘を舞台に撮影した作品1万2千点のうち200余点を展示。

モノクロ画面は外国人モデルを使っている関係もあり、とてもエキゾチック。被写体をオブジェのように配置するやり方は「UEDA—CHO（植田調）」として、西欧での評判も高い。

美術館は気鋭の建築家、高松伸氏の建築。建物全体がカメラになっている棟があり、レンズが大山を室内に逆さまに撮りこんだり、館内にいながら大山が逆さに映る水面があったりしてカメラマンだ。20代から鳥

る。

島の周囲には100余りの島があり、林さんの案内で島巡りに乗った。波約1時間、〝潜いわれるパヤー。国立海洋公園定されており、度も抜群だ。ここで潜水ガイドていたちに、人女を見つた。神出県出の伊藤さん22）「スーバンュノケルがぎる海暮らせ・毎日楽し」と笑た。肌小麦色焼け、笑顔がとて愛くるしかった。

その伊藤さんの案内で、さっそく潜ってみたが、最初に〝遭遇〟したのは、なんとサメ。思わず「ギョッ」となったが、ブラックチップという小型サメで、人に危害などを加えないと聞いてホッ。

熱帯だけに、泳いでいるナガツオなどを大きな金網

マラッカ海峡 シンガポール

海と暮らす邦人女性 笑顔がとても素敵

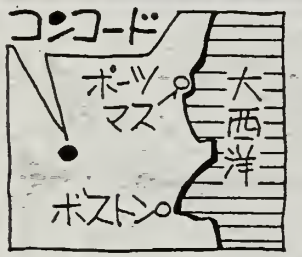
世界の街角から

ボストン編

ボストンから、コミューター・レイルという鉄道に揺られて45分。コンコード駅に着くと、空気の匂いがいっぺんにフレッシュになる。

コンコード川に小さくかかる橋「オールド・ノース・ブリッジ」まで行くと、人のアメリカ農民兵たちがはじめて衝突し、それが引き金となって独立戦争に発展した。

付近には、農民兵を意味するミニット・マンの銅像が建っている。その前では、当時をしのばせる軍服に身を包んだアメリカ人が、観光客たちとにこやかに記念撮影を楽しんでいた。



コンコードにはきれいな湖もある。のんびり湖をめぐるカヌーイストも…

ツーリストたちがたくさんに来ていた。

ここがアメリカ独立戦争の発祥の地である。イギリスの占領下だった1775年4月19日、100人の英国軍と400人のアメリカ農民兵たちがはじめて衝突し、それが引き金となって独立戦争に発展した。

付近には、農民兵を意味するミニット・マンの銅像が建っている。その前では、当時をしのばせる軍服に身を包んだアメリカ人が、観光客たちとにこやかに記念撮影を楽しんでいた。

文学の舞台生んだ街コンコード

ちなみに、ミニット・マンとはイギリス兵との戦いに備えて、わずか1分で戦闘態勢に入るため、この呼び名が生まれた。

春から夏にかけて、コンコード川ではボート遊びをする人でいっぱいとなる。車にカヌーを積んで来る人も多いが、川のほとりで貸しボートを頼んでみるのもいい。1時間約800円。

川の水は、とてもキレイ。さまざまな魚たちが泳いでいる。鮮やかなミドリ亀が川面に映り、その中をボートでゆっくり進んでいくと、ツメの先までエメラルドに染まってしまう…。

岸辺にはカモの親子やビーバーがたわむれ、ときどき人なつこい顔でボートのぞく。

『若草物語』の作者、オルコットが住んだ家

……

『若草物語』の作者、オルコットが住んだ家

上の私たちを見ている。都会から1時間も離れていないのに、ここにはすばらしい自然の営みがある。

いまから150年前、その美しい自然にひかれてコンコードのほとりに住み着いた文学者がいた。

日本でも有名なヘンリー・デイビッド・ソローである。ソローは1845年、ここに小屋を建て、自給自足で暮らした。その体験を綴ったのが『森の生活』である。日本でも最近、改訳版などが出版され、ちょっとしたソロー・ブームが起きており、日本人客も多いという。

ソローが建てた小屋は、建築費がわずか28ドルだった。その小屋はウオールデン湖のほとりに建てられたもの。

『若草物語』でいちやく有名になったルイザ・メイ・オルコットも、コンコードに住んでいた。彼女が『若草物語』を執筆した家、オーチャード・ハウスはいまも保存されている。入場料（約500円）を払えば自由に見学できる。

キチンには一家が使った食器、居間にはピアノが置かれ、簡素だが愛と平和に満ちた、小説そのままの4人姉妹の暮らしぶりが伝わってくる。（山科百合子）

みたいで、奇妙に〝郷愁〟をそそられた。

部屋の奥には、大理石の

焼きガニ、カニ酢、カニすき…と〝カニづくし〟の豪華料理

世界の街角から

ハイソなリゾート バークシャー地方

ボストンから西へ車で約3時間。バークシャー地方は古くからニューヨーク、ボストンの裕福な人々に愛されてきた高原のリゾート地である。

ここで毎夏、開催される「タングルウッド音楽祭」は、小澤征爾氏が率いるボストン交響楽団をはじめ、超一流のアーティストたちが集う世界有数の音楽祭として名高い。

会場は美しい森の中の野外音楽堂。ホールに入り切らない人は周辺の芝生の上に座り、流れてくる名演奏を楽しむ。シャンペンを飲み、サンドイッチを食べながら…。

昨年夏には、「セイジ・オザワ・コンサートホール」も完成。日本人ツーリストも増えてきた。

このタングルウッドから、さらに北へ30分。ウィリアムズタウンという小さな町を訪れた。山に囲まれた美しい自然もさることながら、軽井沢のような文化的雰囲気を持つ町だ。

町の中心には、アイビーリーグ（7校）のひとつで、創立200年余を誇るウィリアムズ・カレッジがあり、世界中から優秀な頭脳が集まってきている。学舎は茶褐色のシックな建物で、ツタがからまり、周囲の自然と溶け合っている。

「ジ・オーチャード」のシェフたち。本格的なアフタヌーンティーが自慢だ

カレッジ内には、質の高い美術館もあり、1ドル～2ドルの寄付だけで、ツーリストも自由に見学できる。

泊まるなら、カレッジの近くにあるホテル「ジ・オーチャード」がおすすめ。雑誌などで高い評価を受けており、家庭的でいながら気品にも満ちている。

オーナーのサレー氏は長年、ヨーロッパやアメリカでホテルビジネスに携わってきた。レストランのシェフや支配人も、ヨーロッパからやってきた。

英国のアンティークを配した客室には暖炉があり、客室からは、花と緑にあふれた中庭、コイが泳ぐ池が見下ろせる。

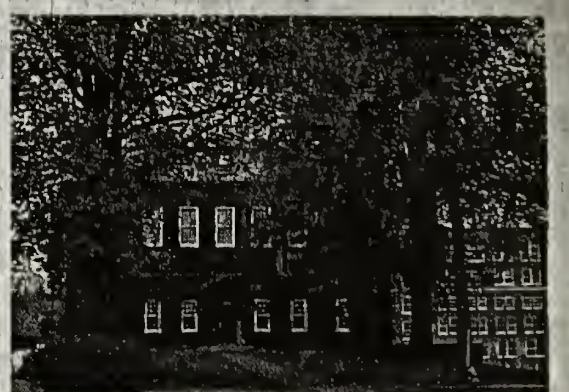
楽しみは午後4時にサービスされるアフタヌーンティー。シェフ自らが心をこめて作ったタルトやシュークリームなど色とりどりの菓子が、リビングルームに美しく飾られる。

都会のホテルのティールームでは、絶対に味わえない優雅な味だ。ストレスがたまったニューヨークなどのビジネスマンが、好んで滞在するのもうなずけた。

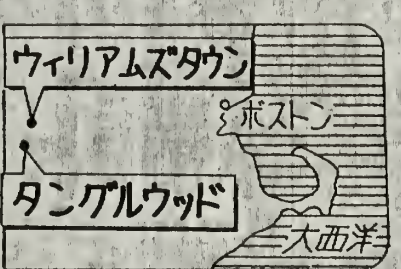
（山科百合子）

◇

「ボストン編」はこれで終わり。次回からは「ロサンゼルス編」です。



創立200年余のウィリアムズ・カレッジ。シックな建物がステキ…



造りはもう絶品

お肌つるつる 美人の湯

天然温泉

▲文字通りのカニづくし。プリプリとした身がおいしい！ ただし、活け造りは、足3本ほどが適量だとルっとして、いつまでもボか。食べすぎると、じんましんが出たりするらしい。

まで共和ならどこナルのカける。旅民宿など選んだのした「プ」。

ルコーら、カニ酢、カニすきと、

活け造りもと、うれまる焼きガニ、カニの天ぷへ。平成元年に町が掘削し

クア・ハウス「かんなべ湯の森ゆとろぎ」。子供たちがはしゃいでいた

た神鍋温泉が引かれている。アルカリ性単純泉で、地元では美人の湯とも呼ばれているそう。サラッとした無色の湯で、においもほとんどない。

湯から上がるとお肌がツは、足3本ほどが適量だとルっとして、いつまでもボか。食べすぎると、じんまカポカと温かかった。

翌日は、ホテルのすぐ前にあるクアハウス「かんなべ湯の森ゆとろぎ」で、温まあ、何事も腹八分目とい泉三昧。林のふろ、温室ぶろ、風穴ぶろなどユニークな施設を混浴で楽しめる。

残念ながら（？）水着着用でね。

囲んで、落花生の豆腐、山昼食には、地元の名物になっている床瀬（とこせ）そばを食べようと、車を10分ほど走らせた。囲炉裏を

イモ、炭で焼く地鶏なども。温泉につかって、海の幸、山の幸をたっぷり食べて大満足の旅だった。

1泊2食が1万3600円～

●メモ●

【あし】JR大阪駅から福知山線、または播但線経由で江原駅下車、バスで約25分。車では中国自動車道から播但、ハイウエイ、国道312、9号。

【ガイド】かんなべカニ共和国＝カニ料理と「かんなべ湯の森ゆとろぎ」を楽しめる。民宿、旅館などで1泊2日の宿泊プラン1人1万360円から。年末年始を除き3月末まで。

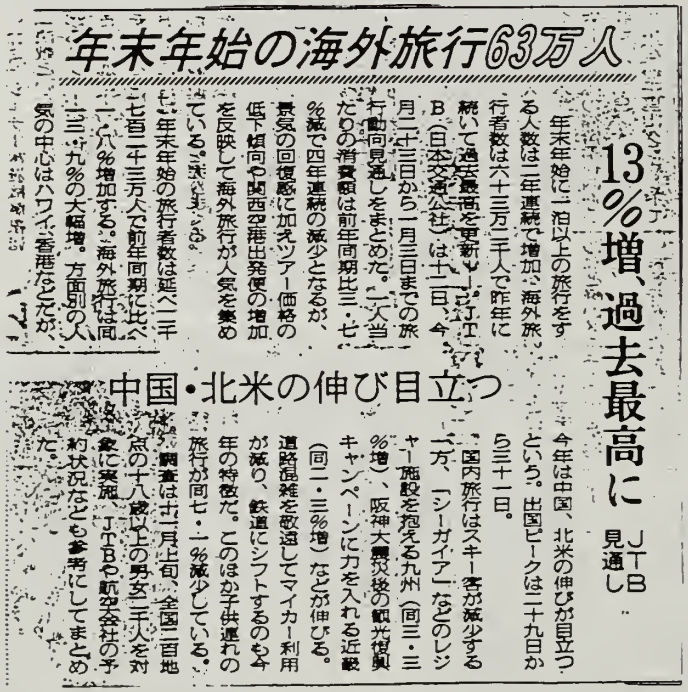
問い合わせは、神鍋観光協会☎0796・45局0800▽ブルーリッジホテル☎45局1200。

CLIPPING VOUCHER

Medium: Nihon Keizai Shimbun Date: Dec 13, 1995

Subject: Overseas travelers for New Year holidays will reach to 630,000 Ref. Press Release No.:

The number of the overseas travelers for this New Year holidays will be 632,000 and made a new record. According to JTB report, the total expenditure per person decreased 3.7 % from the previous year, however some symptoms of economic recovery, reduce of the package tour price and opening of KIX are making overseas travel boom. The total number of the travelers for this New Year holidays will be 27,230,000 and will be increased 1.8 % from the previous year. Overseas travelers will be 13.9% increase. Classifying by destination, Hawaii and Hong Kong are popular as usual, and China and Northern America are increasing its number. Peak of departure will be December 29 to 31.



年末年始の海外旅行63万人

13%増、過去最高に

JTB見通し

年末年始に二泊以上の旅行をする人数は二年連続で増加、海外旅行者数は六十三万二千人で昨年に続いて過去最高を更新…JTB（日本交通公社）は十二日、今月二十三日から一月三日までの旅行動向見通しをまとめた。一人当たりの消費額は前年同期比三・七%減で四年連続の減少となるが、景気の回復感に加えツアー価格の低下傾向や関西空港出発便の増加を反映して海外旅行が人気を集めている。

今年は中国、北米の伸びが目立つ、という。出国ピークは二十九日から三十一日。

国内旅行はスキー客が減少する一方、「シーガイア」などのレジャー施設を抱える九州（同三・三%増）、阪神大震災後の観光復興キャンペーンに力を入れる近畿（同一・三%増）などが伸びる。道路混雑を敬遠してマイカー利用が減り、鉄道にシフトするのも今年の特徴だ。このほか子供連れの旅行が同七・一%減少している。

中国・北米の伸び目立つ

調査は十二月上旬、全国二百地点の十八歳以上の男女二千人を対象に実施、JTBや航空会社の予約状況なども参考にしてまとめた。

七百二十三万人で前年同期に比べ一・八%増加する。海外旅行は同一三・九%の大幅増。方面別の人気の中心はハワイ、香港などだが、

TSURU ENTERPRISE Co.,LTD.

CLIPPING VOUCHER

Medium. Nikkei Sangyou Shimbun Date December 13, 1996

Subject. JTB was entrusted with inhouse travel business by three companies Ref. Press Release No.

JTB was entrusted with travel arrangement business by three inhouse agents as one of their business called Business Travel System (BTS). Inhouse agents mianly prepared for the business travels for their parents companies' employees, howevermany of them started to either close or reduce the business.

JTB started this BTS service in 1993. They make annual contract with the companies and take over all the arrangements for the business travels with some discount prices for the hotels and transportations. Many big companies established their own inhouse agents during the bubble economy period considering the growth of the travel business, however they have been suffering from the cost saving since the bubble economy collasped. JTB is planning to acc ept more of therequests, however not going to advertise oneself for this business.

BTS has been growing since many companies started the restracturing. The turnover of the first quarter of 1995 was 5 billion yen and will be 10 billion yen this year.

JTB、出張手配など受託

インハウスエージェント3社から

企業の業務縮小 増加

JTB（日本交通公社）は大企業の関連旅行会社（インハウスエージェント）三社の旅行業務を受託した。JTBは企業の出張事務を一括して代行するサービス（ビジネス・トラベル・システム（BTS）」の一環として、三社の業務を代行する。インハウスエージェントは社員の出張手配が主な業務。しかしバブル経済崩壊後に採算悪化から縮小・撤退を検討する企業が増えており、今後もJTBが業務を受託するケースが増えそうだ。

BTSは企業と年間契約し、出張用の航空券やホテル、レンタカーなどを手配するとともに、一括して精算するサービス。九三年末から営業を始めた。企業は出張手配業務を大幅に効率化できるうえ、JTBが鉄道・航空会社などから大量購入を前提に仕入れるため、航空券やホテルの部屋を割安で購入できる。

JTBが業務を受託したのは大手総合電気会社など三社の子会社。インハウスエージェントは、JTBに旅行業務を委託することで、自社で旅行業を手掛けるより効率化でき、旅行業務にかかわる要員を削減できるなどの利点がある。

大企業はバブル期に、旅行業の成長性に着目したり社員の出張の便宜を図っているという長所を前提として、インハウスエージェントを次々と設立した。特定の顧客を持っているという長所がある半面、バブル経済崩壊後は親会社の経営効率のあおりを受けて、採算が悪化している企業が多い。

JTBは業務委託の申し込みがあれば、今後も引き受ける。ただJTBがインハウスエージェントに対し業務受託を積極的に売り込むと、旅行業務の縮小・撤退を働き掛けることにもなるので、積極的な営業は行わない方針だ。

BTSは企業のリストラクチャリング（事業の再構築）を追い風に急成長を続けている。九三年三月期の年間契約額は五十億円だったが、九六年三月期は同百億円に達する見込みだ。

TSURU ENTERPRISE Co.,LTD.

CLIPPING VOUCHER

Medium: Asahi Shimbun Date: December 17, 1995

Subject: Popularity of characteristic tours. Ref. Press Release No.:

Individual characteristic tours such as "Gourmet tours in China" or "Experience aurora" are getting popular. Today, many people go abroad very easily and people prefer characteristic tours to stereotyped tours. Travel magazines which introduce Chinese medicines or beauty salons in Asian countries are also well received.

JTB produce many of these kind of characteristic tours and each has been very successful since it started. NTA is also producing unique theme tours such as "Holidays in Rome", visiting scenic spots from the famouse movies.

On the other hand, there are some mazagines introducing super characteristic information for the authorities on traveling. For example, "Asia de Kaikan" is introducing all the information regarding beauty, medicine, food, fortune-telling and more.

According to Ms. Reiko Ikeuchi; a travel commentator, characteristic tours are getting popular because many people want different kind of experience than the stereotyed tours and it means the maturity of Japanese travelers. Not only visiting the place, but also feel something from the place is what many people are seeking for the trip.

「こだわり」ツアー、人気

中国の一流「点心」巡り／オーロラ体験／映画の舞台訪問…

中国の一流シェフが作った点心を食べたり、世界の花を見たり……。物見遊山の「あれもこれも」型のツアーではなく、こだわりをもった目的別のツアーが最近、人気だ。海外経験が豊富になり、より個性的な旅を求める人が増えているためだ。アジア各国のエステガイドや漢方の店を紹介する「関心限定」型の旅行雑誌も好評だ。

日本交通公社（JTB）が十一月から始めた「点心を極める上海四日間」には、約千人の申し込みが殺到した。

同社の「こだわり」型パック旅行は四年前から増えはじめ、今年は主流になった。さらに目的を限定したのがこのほど始まった「極（きわめる）」シリーズ。ほかに「麺（めん）」「酒」「粟腸（やくぜん）」などがある。一流シェフらがつくる点心を四日間で二十種類以上食べられ、最低価格が五万九千円という「点心」コースが、若い女性の圧倒的な支持を得た。

今月からスタートした「世界花の旅」は、お花の先生と一緒に現地を訪れ、自然の花を見たりフラワーアレンジメントを習うという内容。国内での生け花や園芸ブームも反映して、一回目のツアーには、二十代を中心にOLや主婦らが参加。ドイツとオーストリアを訪ね、クリスマスの飾り付けなどを見学した。

日本旅行でも「目的別」ツアーに人気がある。ニュージーランドのトレッキングやカナダのオーロラを見るなど自然体験型の旅や、「ローマの休日」など映画の舞台を訪ねるツアーなどだ。

一方、ツアーでは得にくい情報を紹介する雑誌も出始めた。先月末に刊行された「アジアで快感」（トラベルジャーナル）は、若い女性に人気のインド式エステの体験ルポや香港のエステ・マッサージの徹底ガイド、香港・上海のお茶の菜ガイド、漢方薬を調合してくれる店や、インドの星占いやフィリピンの心霊療法が体験できる店の紹介など、「体」「食」「心」に関する情報を盛り込んでいる。

同社によると、読者は海外旅行の経験が豊富な男性が多く、「海外旅行へ百回行った」という〝つわもの〟も。同社出版事業部ムック企画編集室の飯田裕巳さんは「その土地の人々の暮らしを感じられる、生活に密着した情報が求められている」と指摘する。

〝通〟向け情報誌も　関心・目的別に細かく

来春までに、香港競馬やマカオ・カジノをガイドした「アジアでギャンブル」、歌やコンサート情報を満載した「アジアでポップ」、麺と、その文化を紹介した「アジアで麺」を出版する予定だ。

五月から刊行の「ホリデイワールド」シリーズ（三修社）は、現地の暮らしを知りたいという旅行通向けのガイドブックだ。「香港」一冊では、映画館の探し方や人気俳優の紹介、競馬観戦の仕方など。ベトナムではビジネスマン向けに商取引の慣習なども紹介している。読者は二十代の女性から六十代の男性と幅広く、今後、韓国、フィリピン、インドなども出版する。

旅の仕方が成熟

旅行評論家生内玲子さんの話　目的別のツアーに人気があるのは、何度も海外旅行をする時代になり、旅の仕方が成熟してきたことが理由でしょう。自分なりの個性的な旅が求められているのです。ただ眺めるだけでなく、香港で料理を食べたり、モンゴルで馬に乗ったり、ボランティアをしたり、「からだで感じる旅」が年齢に関係なく受け入れられています。

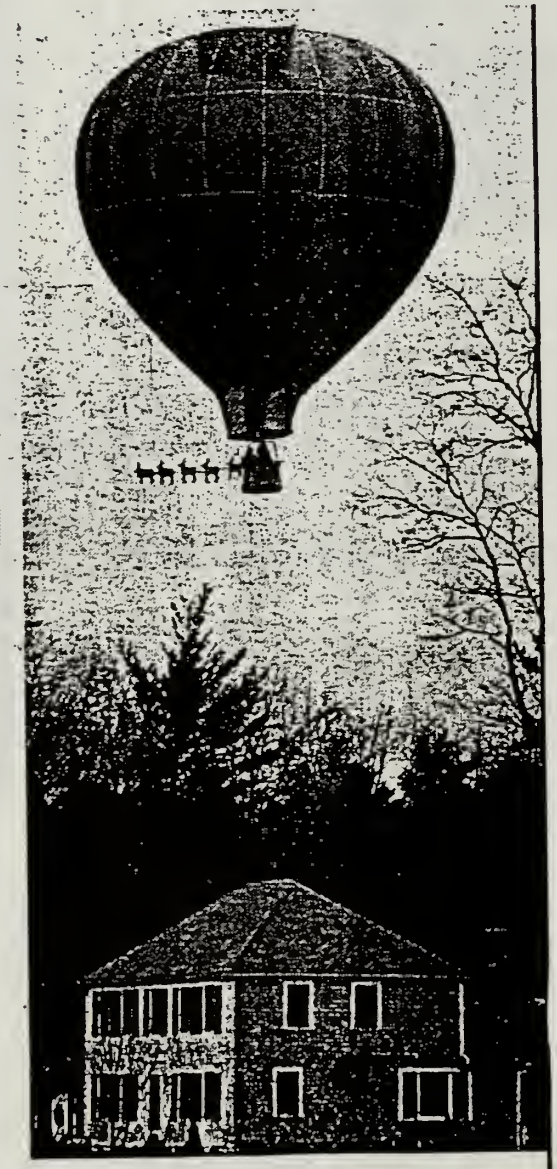
「世界花の旅」ツアーで、オーストリアのクリスマス飾りの店を訪ねる参加者

CLIPPING VOUCHER

Medium: Asahi Shimbun Date December 18, 1995

Subject: Santa Claus in a balloon Ref. Press Release No.

Santa Clause in a balloon appeared in the sky in Marshfield. Massachuesetts. The Santa Clause was Mr.Lowell. a baloon lover. The baloon was led by five reindeers and marched in the winter sky.



「5頭だて」の熱気球サンタ

熱気球で大空をのんびり飛ぶサンタクロースが、米マサチューセッツ州マーシュフィールドに現れた。乗っているのは気球愛好家のローウェルさん。風船で作った五頭だてのトナカイに引かせて、百五十mほどの高さを行くサンタに、通りかかった車のドライバーたちもクラクションを鳴らして声援した＝AP。

TSURU ENTERPRISE Co.,LTD.

CLIPPING VOUCHER

Medium Yomiuri Shimbun Date December 18, 1995

Subject: "Non-smoking flight" can not take off. Ref. Press Release No.

Comparing to the Japanese airlines, many of the airlines in overseas are eager to increase the non-smoking flights. ICAO proposed to make all the international flights non-smoking by next July. Northwest will make someof the international flights from/to Japan non-smoking from this February. On the other hand, a leading faction of Japanese airlines refuse to make allover non-smoking flights. However, this overall non-smoking policy circulate worldwide. In 1988, the state of California made all the domestic flights to/from California non-smoking. UK, Australia and China have already took this policy for the domestic flights. In addition, Delta Airline made some of the international flights non-smoking. Northwest has already made all of their Atlantic flights non-smoking and will increase non-smoking flightsfor its Pacific routes such as Tokyo-Guam/Saipan, Nagoya-Guam. Most offoreign airlines were hegitating to increase the non-smoking flights consideringthe high percentage of Japanese smokers. However, Northwest says that they decided to take this first step toward overall non-smoking policy based on the positive reaction from the customers including smokers.

On the other hand, JAL has been increasing the non-smoking seets year by yearfor its domestic flights. However they never had overall non-smoking international fligts due to the long traveling hours. ANA and JAS also offer 60% of non-smoking seats for their domestic flights, but never had non-smoking flihgts for both domestic and international flights. Comparing to Europe and USA, the percentage of Japanese smokers are high. Accoding to the Mininstry of Health and Welfare, 60.4 % of Japanese male adults smoke and it istwice of the numbers in Europe and USA. Both JAL and ANA say that it is difficult to ignore the smoking customers.

TSURU ENTERPRISE Co.,LTD.

国際線

「禁煙便」離陸できず

国内3社は依然「分煙」

海外の旅客機でスモーカーの締め出しが進み、日本の航空各社との差が際立ってきた。国際民間航空機関（ICAO）が「来年七月までに国際線を全面禁煙に」との決議案を採択、来年二月には米・ノースウエスト航空が日本発着の全席禁煙便を登場させる。一方、欧米より愛煙家の比率が高い日本の航空会社は、「愛煙、嫌煙双方の声を聞かないと……」と分煙策が主流だ。

旅客機の全面禁煙は世界的な流れ。八八年に米・カリフォルニア州が州内発着の国内線全便を禁煙にしたほか、英国や豪州、中国でもすでに国内線は全便禁煙だ。さらに、米・デルタ航空は今年から国際線を禁煙にした。

大西洋路線をすでに全席禁煙にしているノースウエスト航空も来年二月から太平洋路線でも禁煙便を増やす。禁煙便にするのは、東京―グアム、サイパン、名古屋―グアム便など。日本発着の国際便の全面禁煙化は進んでいなかったが、同社は「調査に基づいた措置。喫煙者も含めて多くの客が支持していると見る。

一方、国内の航空会社。日航は、七八年に国内線全席の二割を禁煙席として以来、年々禁煙席率を拡大。しかし、国際線は飛行時間が長いため禁煙便はなく、禁煙席も半分にとどまっている。全日空や日本エアシステムとも禁煙席は約六割。国内外線とも全席禁煙便はない。

日本は欧米に比べ喫煙率が高い。厚生省の九三年「たばこ白書」は、日本たばこ産業の調査を引用し、日本人男性の喫煙率は六〇・四％（九二年）で、欧米の倍近いとしている。全日空は、「客あっての商売。吸いたいというニーズは無視できない」。日航も「日本は喫煙率が高く、今後もカーテンで仕切るなど、実効性のある分煙でやっていきたい」と話している。

CLIPPING VOUCHER

Medium: Nihon Keizai Shimbun Date: December 19, 1995

Subject: Turnover of October increased 0.9% Ref. Press Release No.:

According to Nihon Keizai Shimbun research, the eight biggest travel companiesbusiness turnover of October 1995 was 386,453,000,000 yen. It increased 0.9 % comparing to same month in 1994. Especially, the turnover of overseas was increased 10.7%. JTB says that demand of overseas travel has been increasing constantly because of the economical recovery of the companies. On the other hand, domestic travel decreased 3.7% from the previous year. Although individual package tours have been satisfactory, corpoarte demand has been still in recession.

旅行取扱高0.9%増

大手8社10月 海外2ケタ増

日本経済新聞社が十八日まとめた「JTB（日本交通公社）ハ、近畿日本ツーリスト、日本旅行など大手旅行八社の十月の総取級高は前年同月比〇・九%増の三千八百六十四億五千三百万円となり、二カ月ぶりで前年実績を上回った。特に海外旅行が千二百五十一億七千四百万円で前年実績を一〇・七%上回り、五、八月に続いて今年三回目の二ケタ増となった。海外旅行は春から好調な個人需要に加え、法人を中心とする「団体需要が復調してきた」（JTB）のが寄与している。

一方、国内旅行は同三・七%減の二千五百五十一億九千四百万円にとどまった。国内旅行でもパック旅行など個人向け企画商品は好調だが、「団体が依然不振」（東急観光）のままで、全体としては前年実績を下回った。

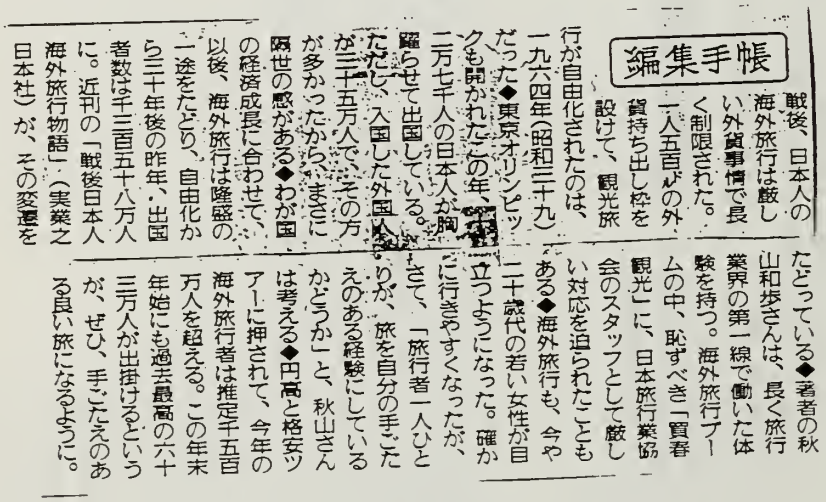
TSURU ENTERPRISE Co.,LTD.

CLIPPING VOUCHER

Medium: Yomiuri Shimbun Date: December 19, 1995

Subject: Editorial note Ref. Press Release No.:

After World War II, overseas travel for Japanese people had been kept under control for long time. It was opened to the public in 1964 when Tokyo Olympic was held. Although the government limited the amount of money to be taken from Japan to be $500 to take out from Japan, 127,000 people departured to the overseas. On the ther hand, 350,000 people visited Japan from overseas. As the Japanese economy grew, traveling overseas became popular among ordianaly people and the number reasched to 13,580,000 last year. Mr. Kazuho Akiyama had been working in the travel indutry for long time and wrote about its history in his book. He even experienced to cope with the "prostitution tours". After a long time, overseas travel has changed. It became much popular among young girls comparing to the past. However, he is still wondering that they really enjoy and make the trip satisfactory. Over 15,000,000 people visited overseas this year due to the high yen and inexpensive tours. Especially 630,000 people will visit overseas for this New Year's holiday. He hope that each taraveler will make a worthy trip.



編集手帳

戦後、日本人の海外旅行は厳しい外貨事情で長く制限された。一人五百㌦の外貨持ち出し枠を設けて、観光旅行が自由化されたのは、一九六四年(昭和三十九)だった◆東京オリンピックも開かれたこの年、二万七千人の日本人が胸躍らせて出国している。さて、「旅行者一人ひとりが、旅を自分の手でたどっている◆著者の秋山和歩さんは、長く旅行業界の第一線で働いた体験を持つ。海外旅行ブームの中、恥ずべき「買春観光」に、日本旅行業協会のスタッフとして厳しい対応を迫られたことも

ただし、入国した外国人が三千一万人で、その方が多かったから、まさに隔世の感がある◆わが国の経済成長に合わせて、以後、海外旅行は隆盛の一途をたどり、自由化から三十年後の昨年、出国者数は千三百五十八万人に。近刊の「戦後日本人海外旅行物語」(実業之日本社)が、その変遷を

ある◆海外旅行も、今や二十歳代の若い女性が目立つようになった。確かに行きやすくなったが、

かどうか」と、秋山さんは考える◆円高と格安ツアーに押されて、今年の海外旅行者は推定千五百万人を超える。この年末年始にも過去最高の六十三万人が出掛けるというが、ぜひ、手ごたえのある良い旅になるように。

TSURU ENTERPRISE Co.,LTD.

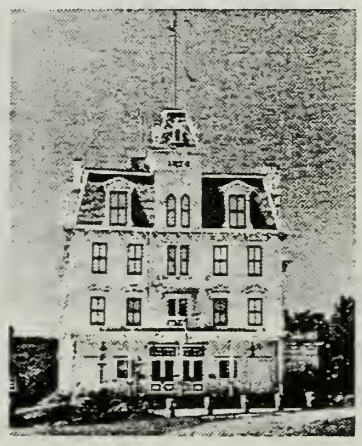
CLIPPING VOUCHER

Medium: Yomiuri Shimbun Date: December 21, 1995

Subject: Goodspeed Opera House Ref Press Release No.

There is a cute little white palace called "Goodspeed Opera House" by a lake in East Haddam, Connecticut. It was built in 1867 and had been closed since 1930, however opened again to play the musical shows. It received the second Tony Award this year. It has been producing a lot of great famouse musicals one after another, but also making good effort playing old works. In addtion, they keep great amount of records of the musicals in the past at the attached library. It costs 600 million yen to keep this opera house and is managed by local funs and cooperation fund from the companies and the State of Connecticut. They established one more little theater in Chester and played a musical named "Mr. Arthur, the musical". It was exported to Japan and was played for the opening anniversary for "Osaka Drama City". Mr. Michael Price, Exective Director of Goodspeed Opera House says that 96% of the seats in both theaters are occuppied most of the time and he wishes to exchange musicals with Japan in the future.

SHOW BIZ NOW



グッドスピード・オペラハウス（タイアン・ソボルースキー撮影）

米国北東部コネティカット河畔、古いニューイングランドの町イースト・ハダムにあるのが、グッドスピード・オペラハウス。さながら、おとぎの国のそれのような、かわいらしい、小さな白亜の殿堂である。

一八七六年に建てられ、一九三〇年代以後は休眠していただが、五九年以降、ミュージカルの発信地として再出発。ミュージカルへの貢献により、今年、二度目のトニー賞特別賞を受賞したのは、記憶に新しい。

ブロードウェー・ミュージカルの代表作「ラ・マンチャの男」（六五年）、「シェナンドー河」（七五年）、「アニー」（七七年）などの発生の地であり、今、ブロードウェーのミュージック・ボックス劇場で上演中の「星に唄えば」も、今夏、この劇場で生まれた。

新作ミュージカル次々発掘

グッドスピード・オペラハウス 試演場として高い評価

マイケル・プライス専務理事（大平和登撮影）

良い舞台を物色しているプロデューサーにとっては、願ってもない試演場として注目され、史上に残る傑作を輩出させてきた。

新作発掘だけでなく、過去のミュージカルの保存、再生に力を入れているのも特徴。「ハイ・ボタン・シューズ」「ベリー・グッド・エディ」などが再演されている。また、付属図書館には、貴重なジョージ・ガーシュインの資料を始め、ほかにない上演資料や楽譜が保管され、研究者や学生に欠かせぬ場所だ。

年間六億円相当の運営資金は、地元ファンの会員制度と、州や企業の援助で成立。年間、六舞台を提供している。近年は、近くのチェスターの町にもう一つの小劇場を造り、そこで初演された「ミスター・アーサー・ザ・ミュージカル」が、大阪ドラマシティ開場記念作品として日本へ輸出された。

私が、初めてこの地を訪れたのは六三年。七〇年代には、しばしば夏の公演を見た。劇場の副務理事を務めているマイケル・プライス氏とは、その時以来の知人。氏は「二劇場ともに、九六%の観客動員を誇っている」と誇らしい成果に目を細める。さらに「日本とのミュージカル交流が、本格的になることを希望する」と語った。

演劇評論家・大平和登

TSURU ENTERPRISE Co.,LTD.

CLIPPING VOUCHER

Medium: Nihon Keizai Shimbun Date: December 22, 1995

Subject: Fares of package tours will be rised Ref. Press Release No.:

Most of the main Japanese travel companies are planning approximately 4% rise in fares of the package tours for the first half of 1996 after five years. This rise is due to low yen and worldwide revival of tourist industry. Hawaii, Guam and Saipan which are the most polular destinations will be incresed near to 10%.

The main travel companies such as JTB, KNT and NTA are now making decision on the prices of the packge tours for 1996. In addition to the travel boom in Japan, the increase of the demand in Korea, Taiwan, and USA pile up this recovery of the tourists industry. Talking by destination, Hawaii,Gaum,Saipan, Hong Kong,Singapore and Italy have highest possibility of price rise. On the other hand, France and Australia will not be changed and China, Korea and Indonesia will be even reduced. Each company is trying to makeup less than 5% considering customers opposition.

The fares of overseas travel started to decrease after 1990. In 1995, the standard price of the overseas travel was decreased more than 20% from 1990. Therefore,each travel company is suffering from high expenditures and low profit.The number of departure will be reached to 15,000,000. However, the number of the individual traveler is also increasing and will be increased more after the rise of the price for the package tours in 1996.

96年度上期の海外パック旅行

5年ぶり値上げへ

需要増で平均4%

JTB（日本交通公社）や近畿日本ツーリストなど主要旅行会社が一月中旬から順次売り出す九六年度上期（四―九月）の海外パッケージ旅行は、全方面平均で九五年上期に比べて約四%値上がりする見通しだ。世界的な観光需要の復調でホテルの需給がひっぱくしているうえ、一年前より円安になっているのが値上げ圧力となっている。観光需要が高いハワイやグアム・サイパンなど、方面によっては一割近くも価格が引き上げられそうだ。九一年以降、一貫して下がり続けてきた海外旅行価格が五年ぶりに反転することになる。

JTB、近ツー、日本旅行、ジャルパックなど主要各社は現在、来年度のパッケージ旅行に使う海外ホテルなどと交渉を進めて、最終的な価格決定作業を進めている。日本人の海外旅行ブームに加えて韓国や台湾、米国などでも観光需要が急増しており、為替要因や、業績改善への期待感もあって値上げ断行の機運が盛り上がっている。

方面別では米国やハワイ、グアム・サイパン、香港、シンガポール、イタリアなどは値上げ圧力が強い。例えば人気のハワイ六日間旅行では九五年上期は十五万―二十五万円だったが、八%前後の値上げで一万二千―二万円高くなる。ヨーロッパ周遊型十日間旅行では同四十五万―六十五万円だったが、約五%程度の値上げで二万二千五百―三万二千五百円高くなる模様。

逆にフランスや豪州は横ばい基調で、中国、韓国、インドネシア・パリ島などは値下げも可能になりそうだ。各社は五%以上の値上げは消費者の心理的抵抗も大きいと判断、値上げ圧力が低い地域の〝組てん〟などにより、全方面の加重平均を四%台に抑える方針だ。

海外旅行の平均価格は、円高傾向などを背景に、九〇年をピークに下落。九五年の価格水準

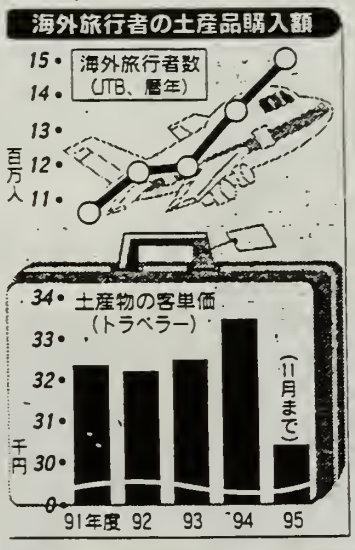
TSURU ENTERPRISE Co.,LTD.

CLIPPING VOUCHER

Medium: Nihon Keizai Shimbun Date December 23, 1995

Subject: Japanese travelers spend less money for souvenirs Ref. Press Release No.:

Everyone wants to enjoy the trip and spend less money. Accoding to Traveler; a company which deals souvenirs for overseas travelers, average amount per traveler spend for souvenirs decreased radically in 1995. The data by November 1995 tells that one traveler spend average 30,426 yen for one trip and it was the lowest price in past four years. The company started catalog sales years ago and had been very successful. However, it has been reminded at the same level although t the number of overseas travelers has been increasing. This decrease of sales turnover caused by the recession of Japanese economy, familiarity with overseas products. JTB estimates that the total number of the overseas travelers in 1995 will exceed 15,000,000 and will break the record in the past. This number could be due to the strong yen, however poeple spend less money for souvenirs than they used to.



街で実感
景気動向

海外旅行増えても伸びず

旅行を楽しんでも、出費はできるだけ抑えたい。海外旅行者の土産品購入に消費者心理が表れている。海外旅行者向け土産品販売のトラベラーによると、同社の顧客の平均購入額（客単価）は九五年度に入って急減。

十一月までのデータでは三万四百二十六円と集計を始めた九一年度以降、最低の水準に落ち込んでいる。

同社の商売はカタログをもとに旅行者からあらかじめ土産品の注文を受け、帰国後に宅配便で商品を送り届ける仕組み。旅行者の悩みを解消するニューサービスとして、着実に売り上げを伸ばしてきた。

ところが最近は「海外旅行者数が急増している割には、土産品の販売が伸びなくなってきた」（前員和夫取締役）。九四年度に金額が増えたのも酒類の集計方法を変更したのが主因だった。

土産品の販売低迷は①所得が増えず、旅行者の節約意識が一段と強まった②旅行なれした人が増え、土産品をあまり買わなくなった③国内の価格破壊が進み、海外製品のありがたみが薄れた――といった要因が複雑に絡み合っているようだ。

JTB（日本交通公社）の推計では、九五年の海外旅行者数は千五百万人にのぼり、四年連続で過去最高を更新する見通し。円高効果の大きさを象徴しているが、土産品購入の面からは消費の低迷が尾を引くことになる。

土産物

TSURU ENTERPRISE Co.,LTD.

CLIPPING VOUCHER

Medium: Nihon Keizai Shimbun Date: December 26, 1996

Subject: Honeymooners started to go abroad agian Ref. Press Release No.:

The number of the newly-married couples who visit overseas for honeymoon is increasing. It had been decreasing since the bubble economy collapsed, however it is increasing again for the strong yen. According to the "BB white paper" which was compleated by Saiken Corporation, one of the biggest rental dress firm in Japan, 84.5 % of honeymooners went to overseas in 1990. However it was decreased by 71.4% in next year and increased again by 73.9% in 1994. On the other hand, budget for honeymoon has been decreasing since 1993. The average amount of a honeymoon trip was 631,000 in 1994 and it was the three fourth of it in 1990. Because of the high yen, honeymooners can go overseas easily. Talking about the destination, Australia and Hawaii are the most popular places. The number of couples who have wedding ceremony and party in Hawaii is also increasing recently.

DATA アイ

安くなったから やはり海外

ハネムーンで海外に出掛ける新婚カップルの数が、再び上向いてきた。バブル崩壊後、海外ハネムーン客は減少していたが、円高によるツアー価格の下落で、「一生に一度なら、やっぱり海外で」という気持ちをかき立てているようだ。

貸衣装トップの斉惠（東京・新宿、斉藤進一社長）が毎年、その年に挙式したカップルにアンケートを実施してまとめている「BB白書」によると、九〇年に八四・五％だった海外ハネムーナーは翌九一年には七一・四％に後退。それが九四年では七三・九％にまで回復している。

一方、ハネムーン費用の方は九三年から大幅に下落している。その中心を占める旅行費用は、九四年が平均六十三万一千円（二人分）で、九〇年の四分の三程度まで下がっている。海外での土産物代も、九四年は二十七万円と、九〇年より三割減。円高のおかげで海外ハネムーンにかける費用は安上がりになり、気軽に出掛けられるようになった。

旅行先ではオーストラリアやハワイがやはり人気の的。最近はハワイで結婚式から披露宴まで行うカップルも増えており、海外旅行と構える意識は急速に薄れつつある。

TSURU ENTERPRISE Co.,LTD.

CLIPPING VOUCHER

Medium: Mainichi Shimbun Date: December 27, 1995

Subject: Overseas travelers was over 15,000,000 Ref. Press Release No.:

Japanese overseas travelers exceeded 15,000,000 due to the KIX opening and growth of economy in the South East Asia. The number of overseas travelers reached to 5,000,000 in 1986 and became triple in this year. JTB says that even yen dropped after the summer and package tours raised the price, overseas tours increased especially to Northern America such as Las Vegas, Florida and Caribbean islands and Asia including China and Taiwan. According to Garuda Indonesia, the travelers to Bali decreased caused by cholera this year, however all seats are reserved during the New Year's holiday season. Over 632,000 people will spend New Year's vacation in overseas. Hawaii, Asia and USA are the most popular destinations. On the other hand, Travelers to the Europe decreased 25% due to the long travel hours and 10%-20% increase of the fares.

海外渡航者1500万人を突破

年末年始は63万2000人見込む

北米、アジアが人気

今年の海外渡航者は史上初めて千五百万人を超えた。昨年比一〇%増で、日本交通公社（JTB）の調べによると先週末に突破した。

昨年九月に開港した関西国際空港の需要積み上げ効果が年間を通じて寄与したのに加え、東南アジア、中国などの経済成長の結果、ビジネス渡航者も増加。国内企業の生産拠点移転による需要増の手応えがエコノミークラスにも感じられた」（日本航空）という。

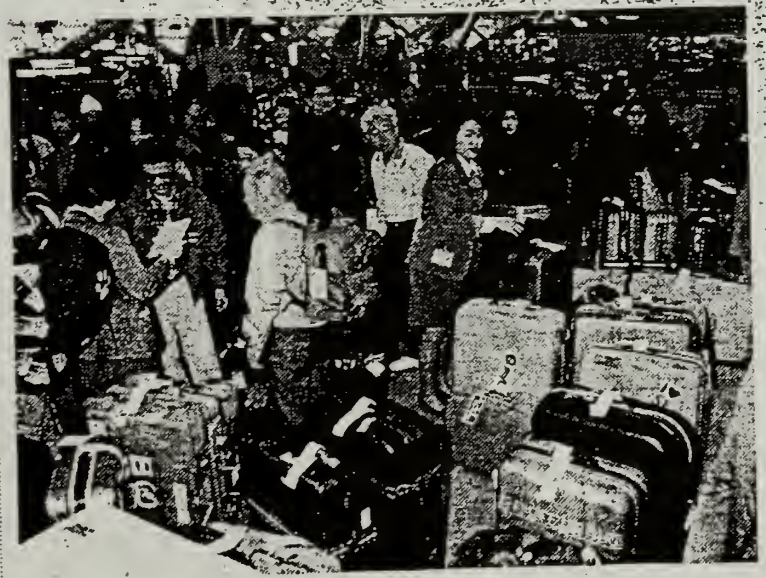
海外渡航者が五百万人を超えた一九八六年から、九年間で三倍に膨れ上がった計算。

今年は前半に一ドル＝七九円と超円高になったものの、夏ごろからは円安に転じた。年末に向けて海外での円の価値が下落、パック旅行は欧州を中心に昨年より割高となったが、まだまだ国内旅行に比べ内外格差があることが伸びにつながった（JTB）。

地域別で伸びが大きいのはラスベガス、フロリダ、カリブ海などの北米と、中国、台湾などの近場のアジア（JTB）。また「コレラ騒ぎ」のため、前年比三割の観光客減に悩まされたバリ島も「年末には全便キャンセル待ち」（ガルーダ・インドネシア航空）となるほど持ち直した。

この年末年始も史上最高の六十三万二千人（昨年比一四%増）が海外で過ごす。アジア、ハワイ、米本土が主流。

逆に往復だけで三日間かかる欧州は、この年末年始休暇が通常の職場で二十九日から一月三日までと六日間しかないことや、ツアー料金が昨年より一一二割上昇したことで二割五分ダウン（日本旅行）。イタリアやスペインが横ばいだが、公務員ストが続いたフランスは落ち込み、欧州観光人気の足を引っ張っている。



「関空効果」は、オープン2年目の今年も続いた＝関西国際空港で

:o.,LTD.